
ガールズカルテット

双色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガールズカルテット

【Nコード】

N3943F

【作者名】

双色

【あらすじ】

日常という不確かな境界。信じて疑わぬ平穏を彷徨う四人の少女。淋しき心を謳う孤独の歌姫。夢想に未来を予見する儂き少女。兄に焦がれる禁忌の恋慕を抱えた報われぬ妹。閉ざされた世界の中で永遠を求める哀しき絶望。物語の幕が上がれば、愉快、爽快、痛快、後悔。孤独、罪、禁忌、絶望の奏でる四重奏。少女は歌う。秘めたる想いの旋律を。

prologue: Girls Quartetto

プロローグ / Girls Quartetto

日常に紡がれた多重奏。
アンサンブル

誰かが奏でるその音色を聞けば。

日常は終焉し、非日常が邂逅す。

新たな物語の開演に、共に祝詞を謳う。

奏でられるは四つの旋律。

奏でられるは四つの想い。

誰かが誰かに歌った旋律。

誰かが誰かに謳った想い。

或いは孤独を謳い心を歌った。

或いは罪を背負い夢想を彷徨った。

或いは禁忌に焦がれ取り憑かれた。

或いは絶望を愛し永遠を望んだ。

儚い夢のような日常に幕を下ろし、

今ここに始まりを祝そう。

下ろした幕をもう一度開ければ、

愉快、爽快、痛快、後悔。

滑稽で喜樂で悲哀な物語の幕開けだ。

今こそ手を取り共に謳おう。

物語の始まりに捧ぐ、唯一無二のオープニング。

孤独、罪、禁忌、絶望。

報われぬ四つの旋律が奏でる

カルテット
四重奏。

永遠に傳き夢のような、少女達の物語に歌う。

私生活がやけに忙しかった初春、新学期の幕開けは思い起こせば曆上の数字を一つ遡った過去のものとなっていた。というのも特にこれといった感慨も無く高校生活の星霜を一つ見送り、恐らくは今年も去年同様の平穏な日々が繰り返されるであろうと思っていた矢先のこと。そんな俺の予想を一瞬で机上の空論と足らしめる事が起きてしまった。

まあ言ってしまうえばたいした事ではないのかもしれないが、四年ほど顔を合わせていなかった妹が突然実家に戻ってきたのだ。

妹といってもアレヤコレヤの事情で血が繋がっていない、俗に言う義妹という奴ではない。真正銘同じ血を分けた二親等血族の妹だ。ではその妹と何故四年も会っていないのかと言うと、それは諸々の事情があり話せば長くなるので割愛する。

……………いや、考えてみればそれほど長くはならない。

諸事情を説明するに俺に用意できる言葉は只一つだけだ。

実のところ俺も詳しいことを知らない。

七文節から成る実に短い説明文章。

仮に我が兄妹関係に興味を示した人物が居たとして、その人物を納得させるには如何せん言葉が足りなさ過ぎるという事は承知の上なのだが、事実に基づき率直に告白してしまえばつまりそういう事なのだ。

閑話休題。

話が深まりすぎて延々とそれを語ってしまうのは実に不毛であるので、この話題はこの辺りで終了しようと思う。

「今朝もお勤めご苦労様、空」

頭に血が上る。

俺は逆転した視界をゆつくりと元に戻し、視線を床と並行の状態に移行した。

「まったくですね。兄さん、わたしがいない間毎日きちんと朝を迎えられていましたか？」

憎々しく言い放ちながら俺を睥睨しているのは、四年の月日がすっかりと纏う空気を変化させてしまった妹。

艶やかなストレートの黒髪を背中に流し、凜とした立ち姿と強い意志を宿した鋭い眼光。非の打ち所の無い整った容姿を持つ彼女

我が妹はその名を遙瀬空^{はるせ}という。

空の長いストレート髪が僅かに揺れる。

「どういう意味だよ」

「起床時間が常日頃正午を回っていたのでは？」 という意味で

「す

……そりゃあ言い過ぎだ。

時というのは無情にも人を変えてしまうらしい。

俺の知っている妹はこんな毒舌ではない。

空が家を離れてまで通っていた学校は結構有名な私立校で、小中高等部の全てが一貫して全寮制であるらしい。という事はそれなりに金が掛かるのだがその点で問題が発生しなかった。

どうしても家を離れなければならない。そう言った彼女の意思に両親は遭えなく首を縦に振る事となった。おまけに自身も成績優秀と来ていたために、学費の殆どが公立校と変わらぬなどの優遇を受けられる、学園に一つだけ用意された特待生枠を我が物とする事で金銭的な問題を解決。

晴れて空は目的の学園へと編入する事が出来たのだった。

……というのが四年前の出来事である。

彼女が家を離れる前。最後に会話をしたのがまだ世の中の理を知らなさ過ぎる無垢な年頃であったから、この急変化にはなかなか慣れない。

学園は女子高だと聞いていたのだが……その為に男に対して厳しい性格になってしまったのだろうか。

「……いつも思うが、もう少しまともな起こし方は出来ないのか？」
痛む後頭部に手を置きながら苦情を投げ掛ける。

「部屋のドアをノックして、『兄さん、朝ですよ、起きてください』の三語を掛けても起きないので、この処置は妥当だと思うのですが？」

敬語。その中でも丁寧語と呼ばれる話し言葉を空は使う。

確かに丁寧ではあるが欠片も敬意を感じ取る事の出来ない空の言葉は、しかし邪気を感じないのだから不思議だ。

と、それとこれとは無関係だ。

「あのな……今の時代、人を起こす為にベッドから叩き落とすなんて方法は異常だと思わないか？」

そう。

今年の四月に実家へと帰ってきた空は遅刻時間をぎりぎり回避出来る時間まで寢床を出ようとしないうちを起すのが日課となっていた。

確かにその提案を飲んだのは俺である。誰かに朝起こしてもらえないのなら遅刻の可能性というのも格段に低下するだろうというのが肯定の理由だ。

だったのだが、まさか心地よく睡眠に堕ちている兄を頭から床に突き落とす。などと狂氣的な起こし方をすると、それこそ夢想だにしていなかった。

律儀なのかそうでないのか、空は俺諸共ベッドから引き摺り下ろした布団を整えていた。

優雅に右目に掛かる前髪を払って、空が対応する。

「異常でも何でも、結果として兄さんの遅刻はなくなりました。感謝されこそすれど、そのように苦情を投げられる筋合いは無いと思いますよ」

「……お前。もしも頭の打ち所が悪くて、俺がそのまま眼を覚まさ

なかったらどうするつもりだ？」

「その時はその時で、新しい強制覚醒の方法を考察しましょう」「死者を蘇生させる覚醒方法……というよりも、もはやそれは魔法の儀式だ。」

少し沈黙が流れて空は大きな瞳を瞬かせると、どっという心境からか大きな溜息を落とす。

どうも、この妹は俺の前で溜息を吐く事が多い。その意味を俺は一度だって理解した事が無いのだが。とりわけ気になるわけでもないのに、深く追求しようとは思わない。

何かを非難するような瞳で空が呟くように言う。

「さあ兄さん、早く着替えてください。朝食は既に用意してあります」

そうして部屋を出て行く背中を俺は見送る。

さあ、今日もここから日常が始まる。

代わり映えしない時の流れはそれこそ悠久を感じさせて、それは日常の中に生きる俺たちに安心と確信を与えるのだ。これは変わる事のない不動の世界なのだ、と。

悪意も善意もなく、ただ、世界と時間は誤認を刷り込んでしまうのだ。

手際よく朝食及びその他の行動を済ませ、まさに理想的な時間帯に俺が通学路を歩いているのはやはり空の管理のお陰なのだろう。

去年は週二回以上の割合でこの道を焦燥と駆け抜け、さらに二分の一の確立で閉ざされた門に慚然とさせられていた。

だというにこの生活の変化はどういった事だろう。

これ以上考えると自分の自立性の低さに、二度と立ち直れなくなってしまうそうなので思考を停止する。

見飽きた朝の通学路に刻まれる足跡の二重奏。

俺の足音と、空の足音によるユニゾン。

別に不満だというわけではないのだが、高校生にもなって兄妹が並んで登校するというのは世間的に見てどうなのだろう。

「どうかしましたか、兄さん」

俺の心の漣を読みきったように、見事なタイミングで空が疑問を発した。

「いや別に……。今更だけどお前、何でこっちの高校受験したんだ？ 中学での成績は悪くなかったんだろ？」

「成績は三年間通して学年トップでした。こちらの高校に進学したのは、偏に向こうにいる理由がなくなったからです」

空の言葉に過信は無い。

今年の四月。

桜の蕾が花開き、まだ少しだけ冷たい春の風がこの街に吹いていた頃のこと。

どの地域でも恐らくはこのくらいの時季に行われるであろうという、まあつまりそんな感じの四月某日に行われた入学式。

全校生徒出席の入学式には当然俺も赴いており、校長の無駄に長くて退屈な話を肌寒い体育館で聞き流していたあの日の事をまだ鮮明に思い出せる。

教頭の口からどっかで聞いた事のある名字と名前が告げられ、やはり見たことのある顔が壇上が上がって新入生代表の挨拶をしていたシーンは特に忘れられない。

その新入生代表が誰であるかは今更言うまでも無いだろう。

「理由ねえ」と俺は呟くように言って、「お前結局、何がしたかったんだ？」

「それは……」

ここで初めて空が言葉に詰まる。

かと思うと、思案顔もほんの数秒。空の表情はいつもの自信に溢れる面持ちへと回帰した。

「秘密です」

なんだそりゃ。

上手く笑顔で誤魔化された自分が情けない。

告白してしまうと四月に空が実家に帰ってきてから今日まで、俺はどうしても彼女を妹として意識できていない。

釈明に聞こえるかもしれないが、一応言っておく。別にやましい考えがあるわけではない。

四年も会っていない人物が突然目の前に現れたら、そいつを昔のそいつとして見るのは難しいだろう。加えて相手は言葉遣いから容姿　こっちはまだ昔の面影が残っているが　まで見事に変容しているのだから、四年間の空白を埋めるにはまだ少し時間が必要だ。

「おはようございます先輩！」

校門に至って、元気な声がそう告げた。

「……ああ、おはよう暦こよひ」

空を伴った俺に頭を下げて挨拶してきたのは妹の同級生にして俺の後輩となる御巫曆かんなぎ。ロングの髪をツインテールに結んだこの少女は、聞くところによると家が神社であるらしい。小柄なためかそれとも凛とした立ち姿の空と並んでいるせいか、その姿はとても華奢に見える。

元気一番と言わんばかりの大音量挨拶に対して、俺の返事は少し沈んだ音色だった。

朝から元気なのはいいが、少しは時と場合と場所を考えてはくれないだろうか。

朝っぱらから校門前でそんな大声で挨拶されては衆目を一気に集めてしまう。

「空さんも、おはようございます」

「おはよ、暦」

同級生用の笑顔を肯定した空が礼儀正しい姿勢で挨拶を返した。

「先輩！ お荷物お持ちいたしましたでしょうか！」

「いや、いいって。つか、お前毎朝そればかりだな」

「はい！ 目上の方にお仕えするのが、巫女の役目ですので！」

どんな巫女だよ。

つつこみは心中密かに済ませるのが暦への最善の対応である。

というのも新学期早々あまりにも大量のぼけをかます暦に苛立った俺がキツメのつつこみを入れたところ、三日ほどそれがトラウマになり暦は数日間自分を見失いかけていたのだとか。何でも『黄泉への階段がわたしを呼んでいる』とか擬人法なのかそうでないのかよく解らんことを繰り返すようになったらしい。

そんな危ない状況まで精神が陥るほどの一言を、俺は言い放ってしまったのだろうか
と真剣に　俺が　頭を抱える状況になってしまったことがある。

後で解った事だが、暦の天然キャラは紛れも無い先天的性質だっ

たそうだ。

とはいえ、流石に今のままでは俺の私生活に悪影響を及ぼしかねない。

多少のそれには目を瞑るにしても、チラ見程度に注意を促しておくべきだろう。

「なあ曆。元気満点なのはいいけどな、あまり元気すぎるのもどうかと思うぞ。いきなりキャラを変えろとは言わないから、取り合えず挨拶の音量を一オクターブほど落としてみる」

「ふあ……」

「いや聞けよ！」

……不承不承。また自我崩壊まで彼女を追い込むのはよくない。

怒鳴りたい気持ちを押さえ込み、俺は肺に溜まった空気を溜息として外に吐き出した。

「ごめんなさいです先輩！ わたし最近寝不足で！」

とすぐさま謝ってくれるのだから、まあ許すとしよう。

見ると空はそんなやり取りを妙な眼で見ている。

それが何を意味するものなのかと思考して、校舎の時計に目が止まる。なるほど、直に始業の鐘が響く時間を二本の針は示していた。

「そんじゃあな、曆」

校舎の違う後輩に別れを告げて、遠くでこちらを睨んでいる空に片手を挙げる。ってちよつと待て。何で俺が睨まれるんだ？

ついと俺から視線を逸らすと、空はまだ校門付近で立ち呆ける曆に呼びかけて校舎を目指した。その年下とは思えない威圧感を放つ背中を眺める事数秒。思い出したように行動を再開して俺も自分の校舎を目指す。

現時点での本日経過報告。現時点まで異常無し。

さてと。

今日がいい一日でありますように。

「おはよ、ダルメシアンダックスフロント」

始業の鐘の音と重なって俺に呼びかける声があった。

……多分俺の事だと思う。

百一匹くらい居そうな白黒モノクロ犬か、名前の通りちっこいスモールドッグか一体どちらを思い浮かべればいいのだろう。或いは新種のハーフ犬か。どちらにしろ俺はそこまで感受性豊かではない。それに自分像を犬に摩り替えて想像するのはいい趣味とは言えないだろう。

頭のネジが幾本かはずれているのではないかと疑うようなネーミングセンスを有し、その無意味ここに極まれりな才能を毎朝フルに発揮する御桜流深^{みぎくろのさや}。その容姿は整っていて、大きな瞳の色は肩口より少し下で切った髪と同じ深い黒。

「何度でも言ってるが、俺の名前はそんな意味不明じゃない」

「あはは、知ってるよそんな事」

「屈託無く……無邪気に笑いやがる。」

なんか今日は色んな奴が笑顔で事を誤魔化そうとしている気がするのだが、最近の流行りか何かなんだろうかね。だとしたらその発信源を突き止めて文句を突きつけてやりたい。……誤魔化される俺も俺なんだが。

自嘲気味に朝の出来事と今の事を思い出していると、自席までやってきた流深は吐息を吐き。

「今日もぎりぎりセーフ。よかった。これで連続無遅刻記録更新だよ」

「知ったことじゃない。」

俺は隣の席に腰を下ろした人類最悪のニツクネームメーカーを一瞥し、

「お前さ、俺の本名覚えてるか？」

つい出来心でそんな事を訊いてみる。

流深とは中学からの付き合いだ、高校に上がったから今の今まで一度も本名で呼ばれていない気がする。そういえば、最後にこいつが俺の名を呼んだのはいつの事になるだろう。

疑問を発してから答えが返ってくるまでにそれほどの時間は必要ない。かといって即答と言えるほど短時間ではない程度の間隔を置き、鞆を机に掛けた流深はその端整な顔を勢い良くこちらに向けて答えた。

「いやだな、覚えてるよ勿論」

「言ってみろ」

「ダルメシア」

「ストップ。もういい」

白と黒の生物が脳裏に浮上したところで、流深の発言を短い言葉で遮った。

ここまでくると名前を忘れられているのではないかという不安から、こいつの脳の機能が正常であるかどうかを心配してしまう。再認できる事柄がダルメシアンだけになってるんじゃないだろうか。「去年までは遅刻しても一人じゃなかったから良かったんだけどさ」遠回しに俺を責めているつもりなら、そいつはお門違いというものだ。

「妹さん、すつごいきつちりしてるよねー」

「まあな。有名私学の首席生徒とかいうくらいだから、しつちりしてて当然と言えば当然だ」

「お兄さんに似なくて良かったね」

「そうだな」

ぶつとばすぞ。同調しながら胸中で悪態を吐く。

「でも何で転校なんてしたんだろっね。こんな一般公立高校卒業す

るより、全然将来明るくなると思うけどな」

それは俺も今朝訊いた。これまでトータルで五回は訊いているが、その全てが曖昧な返事で返されている。よほど人に言いたくないのかそれとも何か陰謀的な考えがあつての行動か。常識的に考えて、答えは前者だろう。別に深く考える事ではない。

「それにしても本当に凄いやね、妹さん。噂だと入試も全部満点だったそうだよ」

「そうらしいな」

流深の言葉にややトラウマ的な出来事が俺の記憶ボックスから引き出される。

アレは今年の四月の事だった。

突然空が家に帰ってきたことでそれなりに慌しく落ち着かない日々を送っていた頃の事。俺の元にどうもこの学校の教諭らしき人物が我が家に電話を掛けてきたことが始まりである。その用件というのが空に生徒代表の挨拶をして欲しい、とかそんな無いようだった。しきりにその教諭が俺の名前を聞き返してきては、溜息のような吐息をこぼしていたのがトラウマだ。

妹と比べられて落胆する兄というのも、どうなんだろうね。

さっぱりと思考を切り替える。朝から憂鬱になるのは望まぬ所だ。

「お前は相変わらずだな。学年きつての遅刻魔」

「言わないでよ……結構気にしてるんだよ、その事」

代えたての電球のように眩しい笑顔が曇る。どうやら本当に気にしているらしい。

「そうか、悪かったな」

「いいよ、別に。気にしてないしっ」

からりとした笑顔。どうすればそこまで簡単に表情を切り替えられるのか、甚だしく疑問であるが。それよりも自分で気にしていると、か言っておいて早速前言撤回とは、もう少し自分の言葉に責任を持つべきだろう。仮にも高校生なんだから。

「でもいいよね。四年も家に居なかつた妹が帰ってきたら、家族が

増えたような気分になつてさ」

担任が入ってきてホームルームを始めているというのに、お構い無しに話をやめようとしない。席が一番後ろの列でなければ、間違はなく怒号を浴びるか冷たい視線で串刺しにされるに違いない。

俺は机に頬杖を突きながら、あくまで視線は黒板前の担任へ向けている。

新学期始まつて早々に教師から目をつけられるような面倒な学園生活は送りたくないのですね、俺は。

「そつでもねえよ」

ぶつきら棒に言つと、同じタイミングで担任の話が終了する。

「色々とうるせえし、何か生活のリズムが乱される感じだ」

その調子でアレやコレやと不満を溢していく。別に空に対して特別な怨恨があるわけではないし、口から飛び出す言葉も冷静に検分してみれば大袈裟な物。ふむ。こうして口にしてみると、俺は慌しいとはいえ実際は結構充実した毎日を送っているのかもしれない。それまでの倦怠期はどこへやら、てな感じだ。

次々に並べられていく俺の不平不満。心の内では上記のようなモノローグがありながら、口にする言葉はそれに反したものばかり。つくづく矛盾した言動だ。

「まあ、でもそれなりに楽しいのかもな」

最後は綺麗に纏める。やはり感情の伴わない言葉は無意味な音でしかない。

そんなものに人生の時間を割いたと思うと、あまりいい気はしないからな。

担任が教室を出て行ったことにより、一限目が始まるまでの室内は喧騒に満たされる。教師の居ない教室は生徒のもの、とはよくいったものだ。だというのに、その教師様が壇上で有り難い言葉を発している最中、休むことなく俺に話し掛けていた流深の声が今は無かった。

「どうした？」

別段気に掛けることではなかったのかもしれないが、この時俺は流深の沈黙を無視できずに訊いていた。

「うっん。別になんでもないよ」

「そうか？ それじゃ」

別にいいけど、と続けようとして俺は先の行動を後悔する。

この時、確かに、流深の瞳は濡れていた。

「あ……」

もしも少し前まで時間を遡る事が出来たなら、俺は俺の席に座って黒板を見ながらぼけっと小言呪文を詠唱している俺を殴り飛ばしてやりたい。

今からでも今の自分を殴る事は出来るが、それでは問題は何も解決しないのだ。

そんなものは自己満足で無意味な償いにしかならない。

「悪い、な。お前の事考えなくて勝手な事べらべらと」

教室の喧騒はやはり耳障りだ。こう、精神状態が落ち込んでいる時には特に。

流深は首を左右に振り、一度その目を窓の外へ投げ出して俺に振り向いた。

「いいよ。気にしないで」

朝から憂鬱になるのは望まぬところ。自分でそう思っておきながら、俺は自分から墓穴を掘ってしまった。一度世に放たれた言葉は決して撤回できないのだ。

二年前。御桜流深の家族は彼女を除き全員、この世を去っていた。

現国の授業なのに何故か教師の言葉は知らぬ異国の言葉としか聞こえない。

英語では言葉というよりも異界への門を開かんとする魔術師の呪文詠唱に聞こえた。

数学では白のチョークやら黄色やら赤やらで書かれたアラビア数字に眼を眩ませた。アルファベットや、その他の記号全てが幾何学文字かそれに近い正体不明の線にしか見えない。

俺は教室にいながら、突如としてメソポタミア文明全盛期時代のミシシッピ川流域にタイムスリップさせられたような気分を味わう事になったのである。

無論この仮想タイムトラベル、まるで楽しくもなんとも無い。

漫画なら机に平伏す俺の頭から蒸気が出ていることだろう。

アレよコレよと情報をインプットしてはアウトプット、ダウンロードしてはアップロードするという作業に酷使された脳。全身の司令塔はその疲弊を訴えるかの如く、業火にでも焼かれているような高温を帯びていた。

この瞬間こそ、俺がこれまでの人生をリセットしてやりたいと思う瞬間だ。

昔に戻り勉強という概念を窓の外に投げ捨て、俗世の戯れに惚けていた自分に活を入れてやりたい。

禁固刑にして二十四時間勉強付けにしてやれば、俺も少しはマシな学力を得ている事だろう。私立校の首席とまでは行かずとも、このくらいの授業でオーバーヒートしてしまわぬ程度には。

休息を強制する頭に逆らわずに時間を送るのが、俺の昼休みの始

まりである。

数分が経過。

完全とは言い切れない状態ではある。が、それでも空腹状態につき勢力二倍となる食欲には諸手を挙げて賛同し、行動できる程度には体力も回復した頃合だ。

食堂の人気メニューは完売になってしまっただろう時間帯。

現在昼休み開始より五分が経過した頃。

俺は学生靴からナプキンに包まれた弁当を取り出し、首の関節を二度左右に揺らして席を立った。何分昼休みという時間は教室で生徒達の騒ぎ声が最大ボリュームで響く時間である。

昼飯くらいは静かに済ませたいと考えるのは、特に変という事は無いだろう。

行動を起こしてから現状に至るまで、時計の秒針はそう何周もしていない。

現在地。校舎屋上に繋がる扉の前。

生徒立ち入り禁止などと張り紙がされているわけではないのだが、暗黙の了解の内に屋上という場所は立ち入り禁止区域だと生徒達の頭に刻まれているらしい。

ここにやってくる生徒は多くない。

それをいい事に、無人フィールドを我が物としているこの少ない常連客は俺の他に一人。それ以外は知らない、というよりもない。

扉一枚で隔てられた外の世界はまさに異界。

時折グラウンドからの声が届くものの、大抵の場合は風の音とそれにそよぐ木々の音しか聞こえない。小鳥の囀りこそ無いが、実にメ

ルヘンな場所だ。

……もつとも俺がメルヘンの類を嗜好している訳ではないのだが。言ってしまうえば静かに昼休みを過ごすに、ここが一番なのである。所々に錆が見られる扉に手を掛ける。その重量と長い年月により老朽化した立て付けの所為で、開いていく扉はぎしりぎしり耳障りな摩擦音を狭くて暗い踊り場に響かせた。

鼓膜を引き千切らんばかりの騒音が止んで、開いた扉の隙間から太陽の光と涼しい風が浸入する。

完全に扉を開くとそこには青い空に少しの白い雲。

そして、彼女だけがそこにいた。

短く切り揃えられ深い藍色を帯びた黒髪。少女は風に流れる短髪をまるで無関心のままにそうさせている。白い顔に備え付けられた眼、鼻、口、それら全てのパーツが僅かな無駄も無く整っていた。

例えるならば人形。古い日本の活き人形に西洋の妖精のような雰囲気を持たせたような、つまりそんな感じの人形。

名前は知らない。別に知る必要も無いだろうという事で、お互いに尋ねたりはしなかったからだ。ただ解るのは互いに静かな世界を求めてここにやってくるという、共通の目的だけ。それだけで人が打ち解けるには十分だと俺は思うね。

思っているのは俺だけなんだと思うが。

「よお」

気軽く声を掛けると、少女はトマトサンドを口に運ぶ作業を中断して俺に冷たい一瞥をくれた。

そのアクションに軽く肩を竦める。

今日もまた言葉での挨拶が頂けなかった事を悟る。まあ、彼女にすればこれが挨拶なのだ。しかしながら……悲しいっちゃあ悲しい。広いか広くないかで言えば前者な面積の屋上。俺は名前も知らない少女の対面に座って胡坐意を搔いた。

彼女と出会った　大袈裟かもしれないが、そうしておくことにする　のは今年の四月。新学期が始まって早速、倦怠的な教室

の雰囲気嫌になつた俺は一年からの習慣もあり昼休みに屋上にや
つてきた。普段通りの屋上。けれど一部分だけ違つたのは、普段は
誰も居ない貸しきり状態のそこには先客がいたことで、それがこ
の少女だつた。

「……………」

弁当を口に運びながら重くなつていく空気を感じ取る。

今日も素晴らしいまでに会話は無い。

沈黙、静寂、静謐、無音。

固体化した空気が喉に詰まつて、食等が胃に向かうのを妨害でも
しているようだ。

「な、なあ」

錘入りのリュックサックを背負つた気分、俺はどうにか場を盛
り上げようと声を出す。

苦し紛れにひねり出した短い言葉が、頭で思つたよりも随分低音
だつた事に驚く。

声は少女に届いたらしく、表情の無い白い顔がこちらを向いた。
遠くを見つめている瞳。

その視界に俺が居る事は出来ても、それは所詮彼女の瞳に映る景
色の一部でしかないのだ。と思わせるほどに圧倒的なまでの無関
心の色を帯びた瞳だつた。

俺はそんな眼に捉えられて、冰山の中で永年を過ごしたマンモス
のように硬直する。

話題。何か俺に話題を。

「えーと…………お前、名前なんていうんだ？」

やはり共通の目的だけでは人は打ち解ける事は出来ないらしい。
それを一ヶ月かけて自覚する事が出来たのだから、これまでに吸
い込んだ物質的気体は無駄ではなかったというものだ。そうでも思
わなければやってられん。

愛想笑いを表情いっぱいに咲かせた俺は、しかし内心では切腹を
命じられた武士の心境を味わっていた。この間は一体なんだろう。

異常に息苦しい。

がしやり。少女が背中を預けていたフェンスが揺れた音。見るからに細い華奢な身体は、それ相応の体重しか持たないらしかった。フェンスの揺れが生み出す大気の振動は小さな音しか生まない。

食べ終えたトマトサンドの袋をビニール袋に入れて、立ち上がる。……もしかして俺の事完全無視？

後ろ髪を揺らして、少女はさっさと立ち去ろうとする。

線の細い身体が鉄の扉の前まで来て、ようやく思い出したように彼女はこちらを振り向いた。

「楠涼音」

ぼつりと溢した言葉。

クスノキ、スズネ。

初めて語られる少女の名前。初めて交わった二人の言葉。

「あなたは？」

思えば彼女の声を聞いたのはこれが初めてだった。感情の浮かばない白い貌カオは玲瓏過ぎて、少女を人外の何かに思わせる。

黒真珠のような瞳に見据えられながら、俺はようやく言葉を紡いだ。

「遙瀬澄弥」

「そう。……それじゃあ澄弥、一つだけ忠告」

冷たい瞳はが語ったのは短い一文だった。

「私とは話さない方がいい。あなたにとっても、私にとっても」

忠告と称された言葉は、もしかしたら絶縁状なのかもしれない。

ものの数分で劇的なダイエットを成功させた中身空っぽの弁当箱を引っさげて、俺が重い扉を開くと闇の中に空が佇んでいた。

深すぎる闇はしかし、開いた扉の隙間から差し込む光でその勢力を減少させている。

故に俺はリノリウムの床を踏んだ際に胸板にぶつかった物が空の頭であると認識できたのだ。

今は昼休み。空がわざわざ俺に会いに来る理由とは、果たして一体何なのだろう。

「相変わらず校則を破って不良気取りですか。兄さん？」
ぎいぎい。錆びた摩擦音が闇に木霊する。

校則違反？ はて、何のことだろう。

「校則？」

「ええ、入学式の際に校長が言っていたでしょう？ 生徒は基本的に屋上へは立ち入り禁止だと。生徒手帳にも記されていますよ？…

…ほら」

制服の内ポケットから生徒手帳を取り出して、俺に見せ付けるように広げる。

残念ながらこのような暗がりでは黒字の文字を読み取れないのは至難の業だ。そんなのは作業員が持つスキルに他ならない。勿論俺はこの先そんな肩書きを手にする気は無いし、能力的に万が一にも有り得ない。そんな訳で、俺は初代校長だか教頭だか生徒会長だかが考案した校則を明記する文章を読み取れないでいる。

ていうか、実は屋上って立ち入り禁止だったんだ。

何とか眼を細めて単語の一つでも目視しようと努めていると、空

はあっさりと言帳を閉じてポケットに収納してしまう。

「そういう事です。柄にも無く悪ぶるのは無意味ですよ」

言ってくれる。俺も好きで校則に違反していたわけではないさ。それにワルを気取りたいなら屋上でなく、体育館裏にでも行くべきだろう。昼休みの体育館裏は不良の溜まり場、というのはどっかの定説だ。偏見かもしれんが。

深淵の中に開かれた手帳のページに、空が言うような校則が記されていたのかは定かではない。だがもし本当にそこに生徒の屋上立ち入り禁止を明らかとする文章があったとすると、空はこの場でそれをどのように知りえたのか。

飛び切りの夜目を得ていたのか。

或いはどこにどの校則が記されているのか記憶していたのか。

常識と我が妹の能力をトレースして考察するに、後者だろう。実に恐ろしい。

俺なんて校長の名前も覚えていないというのに。

「どうかしましたか？」

変に考え込んで黙ってしまった俺を空は平然とした面持ちで見上げていた。

隣に並んで歩いている分には雰囲気とその他幾つかの要因で伸長差を感じさせないが、こうしてみると結構な差だ。空の体は年齢相応の少女の物でしかない。

「いや別になんでもない。ところでお前がわざわざ俺の所に来るってことは、何か用があるんだろ？」

「何もわたしは、兄さんに用があつて来たとは言っていないませんよ？」

「……………」

なんと言い返していいのか、表情を瞬間冷凍されながらボキヤブラリーから言葉を模索している俺を尻目に、

「冗談です。ええ、兄さんに用事があつてきました」

それ以外に校舎を移動する理由は無いですよね？ と補足説明を行い、空はくすりと笑った。すまんが俺にはどの辺が笑いどころだ

ったのか解らない。それに加えて途中で吐いた溜息も。どうしてこの妹は実の兄と面を合わせて会話する際に、決まって溜息を吐くのだろう。

俺は他人が見た夢の話並みにどうでもいい疑問を首を振って忘却した。

「それで、学園きつての優等生がわざわざこんな所まで出向く用つてのはなんだ？ まさか校長から直属に兄の非行を咎める任務を与えられた訳じゃないだろ？」

「それはそれは。仮定にしても愉快的な学園の長ですね。兄さんの頭の中は年中ファンタジーで溢れかえっているようですが、学業に精が出ず、出たとしても結果も伴わないのはそれが原因なのでしょうね。早急に脳の手術を予定した方がいいと思います」

ぐさりぐさり。俺のメンタルがそんな擬音語を大声で叫んでいる。客観的事実であるとはいえ、そこまでストレートに言われると俺の精神的ヒットポイントも残りゲージが数ミリ程度になってしまふというものだ。うむ。空には精神攻撃の才能があるのかもしれないなどと妹の才能に嘆く場面ではないな。むしろここはその天賦の才を槍として矛先を実の兄に向ける妹を叱咤するか……自分の現状にこそ嘆するべきだ。

「……お前さ、もう少し俺に対する態度柔らかくしようとか思わないか？」

「それでは兄さん。昼休みも残り少ないでしょうから、端的に用件を述べます」

懇願するような俺の呟きは、無反応の元に一蹴された。

無視とは家庭崩壊の最たる要因として君臨しているというのに。

我が妹はいつからそんな恐ろしい行動を取るようになったのだろうか。

「今日の放課後ですが、わたしは用があつて帰宅が遅れます」
それだけ言つて空は俺に拳を突きつけて開いた。

暗闇で微かに鈍く輝く銀光。鍵と呼ばれる小さな鉄の塊がそこに

あつた。

空の手にある鍵を見て俺は、

「は？」

としか言いようが無い。厳密に言えば感動詞というより、呼吸と共に零れ出た心情吐露とでも言うべきだろう。ん？ 言い換えただけで変わっていないような……。

学年の高低も関係して基本的に帰宅は空の方が早い。

その為に俺は自宅の鍵を基本的に持ち歩かない。そしてまた今日も例外ではないのだが。そんな事なんかよりも気がかりなのは、

「それだけの為に、お前はわざわざここまで来たってのか？」

「ええそうですが、何か？」

自分の行動には一切目の前の相手に疑念を発生させる余地など無い。というようにはつきりとして強気な口調で言っ、空は俺の手を取り鍵を握らせた。ひんやりとした感覚。

鍵の受け渡しを終了して、空はさっさと階段を下りていこうとする。

空間に漂う黒の中でも存在を明確の物としている黒髪を見下ろしながら、

「お前つて案外兄貴想いなんだな」

呟いた言葉は兄妹の間を泳いで行き、妹の耳まで到着した。

……らしい。空の行動がそれを俺に教えていた。

びたり。揺れていた空の双肩が停止する。

「冗談は休み休み、寝言は永眠している間にどうぞ」

何故か逆上してしまった空はスタコラと階段を駆け下りて行った。さて、一体俺の言葉のどこに妹の神経を逆撫でする韻が含まれていただろう。

うつむ。実に解らない。

何故空が憤怒したのかも、軽く頬に朱が差した理由も。

まあ、怒気から血が上ったんだろう。

放課後。

静かな廊下に流れるBGMはランニング中の運動部が発する掛け声と、そこを歩く生徒達の足音のみ。前述では複数形としているが、現状は首をどの角度に捻つても廊下は閑散としている。人っ子一人いやしない。足音は独唱。観客は無し。

二重奏のユニゾンはそれを奏でる一人の人物にしか届かない。と、こんな陰気な独白に意味は無い。

そうと解つていながら頭の中で独り言を重ねる俺は、それ相応に暇を持て余し倦怠期に浸っていた。世はなべて事も無し。実につまらない午後下がり。

やがて足音は階段へ差し掛かる。けたたましい運動部の声も届かぬ領域に達して、

「きゃっ！」

新たな音がここに生まれた。

「す、すいませんです！」

華奢な身体が一度その場で飛び跳ねる。そこから流麗な動作でお辞儀へと移行した。

この行動に関してはエキスパートです、と少女の発する雰囲気か語っていた。欠片も自慢にならねえよ。

「ああ、気にするなっつていつもの事だし」

面を上げたその少女 曆に言つてやる。

「あわわ、先輩!？」

自分の衝突した相手が誰であるか、今正に知りえた曆は眼に見えて狼狽していた。

「よくもまあ……こうしょっちゅうぶつかれるな、お前。もしかしてわざとやってないか？」

「あわわ、どうして解ったんですか!？」

飛び方を知らない雛鳥のように両手をばたばたと動かし、暦の声は震えていた。

……え、マジ？

「暦、お前……」

「ご、ご、ご、ご、ご、ごめんなさいです！先輩をストーキングするような趣味を持つちゃってごめんなさいです！」

ぺこりぺこりぺこり。高速で上下する暦の頭に、俺は強烈な既視感を覚えながらも敢えて言ってやった。

「ストーキングしてんのか？」

「あわわ、何で知ってるんですか!？」

うん。この子は一度脳の検査をするべきだろう。

俺は携帯を取り出して三つの数字を打ち込む。ここが悩みどころだ。電話を掛けるべき先は病院か、それとも警察か。呼びべきは救急車か、それともパトカーか。彼女を送る先はベッドの上か、檻の中か。

「ダメです！警察はダメです先輩！」

「何で俺の心読んでんだよ!？」

小さな身体でダメージなど微塵も与える事の出来ない体当たりをかまし、しかし目的の獲物はしつかりと確保した暦。俺の携帯は今正に処刑される寸前。暦の瞳は狂気の色を帯び、獣のそれと化していた。……もしかしてこれ、誰かに仕込まれた事なんじゃないだろうか。

「冗談だから。通報とかしねえから。だから落ち着け。そんで携帯返せ」

「本当ですか……?」

折り畳み式の携帯電話端末。人類の技術進歩が可能としたスリムボディは、この状況に至っては命取りとなる。暦はその両手で握力

の限り携帯を握り、今にも握りつぶしてしまおうかとはかりに締め付ける。小柄な少女の握力で今時の電子機器が破壊出来るのかどうかは不明　　暦に関しては絶対的に不可能　　だが、それでも用心するに越した事は無い。

「ああ、絶対しない。約束する」

「でも……先輩嘘つきですから。……信用できません」

自分の素行を想起する。学年が違うという事もあって暦と会話した時間は長くない。

その短い時間のどこを探っても、俺が暦を欺いた事などは皆無。

再三嘘つき呼ばわりされる過去は断言してもいいが、一切無い。

「名誉毀損だな、そいつは」

短く言って僅かに緩んだ拘束から携帯を取り返す。どうやら無事であるらしい。

ディスプレイに暦の指紋がべつたりとついているが、こんなものは拭き取ってしまえばノープログラム。無事と称して問題ない姿だろう。

「ああ！先輩ダメです通報はー！」

「だからしないって。いい加減そこから離れる」

助走無しで猛然と突撃してくる暦。勿論威圧感や迫力といったものは無い。

暦の突進を闘牛士のように躲して、畳んだ携帯をポケットへしまふ。ここまで見事にやってくれると、それはそれで賞賛を送ってやりたい気分になる。その記憶力。そして演技力に対して。

「きゃわ！」

背後から声が聞こえた。

振り返ると、暦が悪代官と越後屋の密談を盗聴する屋根裏の忍者のような体制で廊下に伏していた。リノリウムの廊下。老朽化しているとはいえ、そこには一切といって差し支えないほど凹凸が無い。少なくとも人が躓いて転ぶほどのものは。

「痛いですう……」

続いて上靴の裏で廊下の表面を撫でてみた。

ゴム製の靴裏が摩擦の影響で僅かに動きを鈍くする。ワックスがけでもない限りは滑る事も無いだろう。再度確認するまでも無い事だというのに。

「早く助けてくださいよ先輩！」

膝を摩った曆が、雨の中のダンボールに入れられた捨て犬のような眼で俺を見ていた。

「ヘルプミイ！ ヘルプミイです先輩！」

「……やかましい。自分で立てるだろうが」

「助けてください先輩！ せんぱ……い」

芝居掛かっついて尚且つ大袈裟な仕草で、何故か患部である膝ではなく胸部を押さえて倒れこむ。突然の心臓麻痺に倒れる様子を表したつもりなのかもしれない。これは……見ちゃいられん。こう色々な意味で。

「解った。解ったから。ほら」

片方の手で後頭部を掻きながら、もう片方の手を悲劇のヒロインへ伸ばす。

窓の外の太陽は大きなオレンジ色のミラーボールとなって東の空に沈み行く途中。一般に夕日と呼ばれる姿へと状態変化を遂げていた。

一瞬顔を上げた曆は自分の伸ばされた手を見るや再び顔を伏せ、ゆっくりと表を上げて縋り付く。なんかもう、いちいち面倒くさい。差し伸べた手に他人の体温が触れて、曆は台本通りの台詞を発する。

「うう……流石はわたしの先輩です……！ わたし……感涙です！」

「いいからさっさと立て。誰か来たら俺がバカみたいに思われる」

「はう！？ ……そんな、酷いです」

「……お前の心不全かその類の病が仮病でなく。さらにこけた際本当に脚を負傷しているんだったら、この場は先輩を助ける優しい先輩で済む。だがそうでない場合は放課後の廊下で先輩と茶番を繰り返す」

広げる上級生。つまりはバカに成り下がる」

まだ膝を突いている曆を引き上げて、

「だいたいな、お前。このやり取りは昨日もしたたる」

まだ記憶に新しい放課後の廊下での記憶を呼び覚まし、決定的な事実を告げた。

先日。夕日が沈み行く時間の廊下。

俺は今日とまるで同じ体験をしていた。

「え……本当ですか、先輩？」

「嘘吐いてもしかたがないだろ。ほんとにもほんと。寸分の狂いも無く、昨日と全く同じ茶番をどうもありがとう　って拍手してやってもいいくらいだ」

「あれ、あれね？」

未体験のシーン。ここから先の台本は記憶の中のどこを探しても見当たらない。

曆の首を傾斜させ、その頭上にクエスチョンマークを浮かび上げらせる。これが演技からの惚けた体を装っているわけではないという事は、彼女と一ヶ月も付き合っていれば容易に理解できてしまう。生粋の天然。頭の爽やかな人と勘違いされかねない我が後輩。

何か声を掛けようかと頭の中で辞書を捲り始めた俺に、曆は呟くように言った。

「夢……じゃなかったんですか？」

この言葉で。

俺はこれまでで一番。

御巫曆という少女の頭を心配した。

「あー……」

なんとやってやるべきか。ここは優しい言葉で慰めてやるべきか。或いは優しく精神科医を紹介してやるべきか。どっちにしても優しさがポイントだ。

きょとんと俺を見上げる瞳を見据える。華奢な肩に手を載せて、「すまん」

としか言いようが無い。

曆を見習うように素早く一礼して、呆気に取られている姿に背を向ける。

そつとしておいてやろう。

これ以上俺が彼女の性癖に首を突っ込み事はよした方がいい。
もともと突っ込んでいない気もするが。

「え？ どこ行くんですか先輩！」

曆の叫び声を尻目に勢い良く階段を駆け下りる。振り返れば絶賛狼狽中の後輩を視る事が出来るだろうが、その姿は既に何度も見た。もう振り返る事は無い。

何度も自分を呼ぶ曆に罪悪感を覚えつつも、俺は足を止めず小さく謝罪の言葉だけをその場に残して走り去った。

廊下を全力で走り抜けて上がった息を整え、振り返ると当然の如くそこに曆の姿は無い。今更ながらこちらの校舎に曆が来た理由も気になるが、過ぎた事は忘れる事にしよう。

我関せず。明日から曆との接し方は慎重に選ぶ事にしよう、などと考える。

俺は下靴には着替えるべくして下駄箱を開けた。

そこには当然のように朝脱いだ下靴があり。

そこには何故か見知らぬ便箋が折り畳まれた状態で据え置かれていて。

そして何より。

俺を驚愕させたのは 黒い丁寧な文字で記された差出人の名前だった。

6 (後書き)

作者多忙により更新が送れ、楽しみにしてくださっている方、誠に申し訳ありません」(････)」

無駄だと解っていないながらも、俺は極力足音をなくして気配を消して歩いていった。

理由はもしかするとまだそこらに暦がいるのではないかという危惧があるからだ。先程の事も去ることながら、何よりも今暦と会ってしまう事が不味い理由は俺の制服のポケットにあった。

一度玄関まで行ってわざわざ教室に戻ってくる理由。

下靴と共に下駄箱に鎮座していたのは手紙の中身はごくシンプルで、そこには一つの文章が綴られていた。

『放課後の教室で待っています。必ず来てください』。

文章の最後に差出人を示す名前が記されており、その名前こそが何よりの問題だったりする。というよりそいつが俺を呼び出す理由が解らない。学校の教室。放課後。手紙を下駄箱に忍ばせるなんて手を使う事もそうだが、加えて教室に呼び出すなんて。

そいつにはそんな事をする意味なんて無いというのに。

現在の廊下。視界に納まる分には無人。

俺は一人分の足音を停止させ、教室の扉の前に立った。

この中で自分を待っている人物が誰であるか解っている所為もあり、こんな状況に至っても俺は何の緊張もしない。……経験は無いのか？ 不安と期待の入り混じった、表現するならば青春を感じさせるような……

「……アホらしい」

呪文のような一言を口切りに扉に手を掛け、迷い無くスライドさせた。

教室の中はそれこそ燃えるような真っ赤。机も床も黒板さえも夕日の赤に染め上げられた。

この光景も見る人物と状況によっては地獄絵図にも見えかねない。……ことも無いか。

首を捻ったりして人影を探すまでも無い。

その少女は、俺の予想通りの位置に立っていた。

教室最後列。俺の隣の席。

あたかも当然のように。少女はそこにいた。

「久しぶり。遙瀬くん」

先に口を開いたのは少女の方。

「久しぶりってお前」

その言葉を否定しようとして、ようやく気付く。

夕暮れ色の教室。いつかのことを思い出させられる。

記憶の回帰の方が思考よりも千倍早い。

彼女は今なんと言ったのか。久しぶり。そんな言葉を開口早々に言われるような相手ではない。それでも俺はその一言を否定できないのだ。

夕日の逆光で影に覆われたその表情を知ってしまったから。

「ああ　なるほどそういう事か」

この状況を把握するには、それだけで十分だった。

「確かに。久しぶりだな……えーと、何て呼べばいいのかな？　お前もやっぱり」

「わたしには名前なんて無い。それはあなたも知ってるはずだけど」

口籠る俺にすぐさま答える。軟らかい笑みを湛えた彼女の表情はしかし、どこまでも儂い。

さて、と一息吐くように彼女は息を吐く。少女は腰を下ろしていた机から立ち上がった。

「来てくれてありがとう。遙瀬くん。本当ならこんな回りくどい事しなくていいんだけど。でもこの方が落ち着いて話が出来ると思ってたから」

「そうかい。そいつはありがたい配慮だね。それで、お前が俺に何の用だ？ いやそれ以前に」

自分のシリアスな声に驚きつつ、俺は決定的な疑問を投げた。

「なんでお前が、ここにいるんだ？」

「ふふ。うん。そうだよ。やっぱり　そう思うのが当然だよ。何が愉快なのか。彼女は喉を鳴らして笑っていた。

決して笑う事のない表情。偽物の微笑みは仮面と何ら変わらない。彼女の笑顔には、何の感情も無い。ただ笑い方を知っているから、それを試してみただけ。それだけの事に過ぎないのだ。それはまるでスイッチ一つで表情を切り替える事の出来る、空っぽの人形。「わたしが笑うのがそんなに不思議？」

心を見透かした一言に、俺はなんと返答したらよいか。彼女はくすりと笑い、

「それとも、どうしてわたしが笑えるのか。そこが不思議なのかな？ でもこんなのは不思議でもなんでもないの。だってそうでしょう？ 人の脳は記録した事柄を再生する事の出来る装置。脳が備える機能はこの四つ。わたしはその内、再生と再認を行っただけなのよ」「そうかもな」

ぶつきら棒に俺は言って、

「で、その笑い方はいつ銘記して、保存に至ったんだ？」

相変わらず微笑みを絶やさないう少女はそれこそ愚問だと言いたげだ。

「そんなのは簡単。元からそこにあった。それだけよ。勘違いしてるのなら言っておいて上げる。わたしの記憶はわたしの記憶だけど、同時にわたしの記憶じゃない。……ちよっと違うかな。例えるならば日記。白紙のページに出来事を記録したのはわたしじゃないわたし。わたしはそれを読み上げているだけ。解りやすかったと思うんだけど……どうかな？」

「それ、例えになってねえよ」

「あはは。そうだね、その通り。それじゃあ質問はそれだけ？ そ

ろそろわたしの用件を伝えたいんだけど」

「待った。最初の質問にまだ答えてないだろ」

笑顔に差した僅かな曇り。長い説明はそれを誤魔化そうとしていたのかもしれない。或いは、彼女は彼女の記憶　さっきの例えを採用するのなら日記だ　から、彼女もまた笑って話をはぐらかそうとしていたのか。

「どうしてわたしがここにいいのか、だったかな？」

まるで隠すつもりは無いとでも言うかのような口調。俺はそれに首肯した。

「どうしてわたしがここにいいのか、さて、どうしてでしょうね」
「……………」

そこで初めて彼女の口調に変化が現れた。彼女の湛える笑顔、或いはその存在さえも偽りだったとして、けれどその言葉だけは真実であるらしく、微笑みながら肩を竦める仕草はこの上なく人間味があつた。

「敢えて言うのなら、それが初めから決まっていた事だから、かな。始まりが在るものには必ず終わりがあるっていうのは必然でしょ。

だったらその逆も成立する。終わりがあるものには必ず始まりがあるの。わたしは『邂逅』から『終焉』の閉じた輪の中を永遠に彷徨う存在だから。終わりの次には必ず始まりが在る」

「敢えてって……余計に意味不明になってるぞ。何が言いたいのかなるで解らん」

「ごめんなさい。でもわたしに言える事はこれくらい。人は誰も自分の存在意義なんて、自分では理解できないものでしょ？　それと同じ。その理屈はわたしにも当て嵌まる。わたしがここに在る理由は、わたしにも解らない」

それだけで十分だと言いたいのか、そこで言葉は途切れた。まだ質問はある？　と問いたげな瞳は正面から俺の姿を捉えていて、これ以上追加で何かを訊いてしまえる雰囲気ではなくなっていた。

訊きたい事ならまだあるし、兼ねてよりの疑問も解決していない。

「そうか。解った。自分でも何が解ったのか解らんが、取り合えずもういい。それじゃあ、次はお前の番だ。待たせて悪かったな」
「別に謝る事なんて無いのに。久しぶりの再会に質問攻めは付き物だからさ」

それは……違う気がする。

「本当なら色々話したかったんだけど、残念ながらあんまり時間が無いみたいだから手短かに訊く事にするね。答えはイエスかノーで十分。それじゃあ、訊くね。」

遙瀬くん。わたし達がはじめてであった時、二年前の事を思い出せますか？」

その瞬間。俺は彼女の笑みの認識を改めさせられた。

初めから儚かった表情。しかしそれは俺の一方的な思い込みだったらしく。

笑っているはずの彼女の表情は、どこか泣いているようだった。

それは二年前の事を思い出した所為か。

それは彼女が彼女である所為か。

「……ああ。思い出せる」

ややあって、質問と同時に発生した回答を俺は口にした。

「そう。それだけ聞ければわたしは満足。それじゃあ、この先に何が起きててもあなたは大丈夫。わたしも安心して、また眠っている」

語るその瞳は思い瞼を無理してこじ開けているよう。俺は何か言おうとして結局何も言えない。何を言うべきなのか。声にすべき文章を頭の中で推敲する事が出来ず、思考が追いつかない。

二年前。その言葉だけが、うっかり開けてしまわぬように鍵を掛けて閉ざした記憶の引き出しを開いてしまったらしい。単純な脳の作りが嫌になる。絶対的に関連性のあるキーワードを、パスワードとして設定してしまうのだから救いようが無い。

開けてしまったパンドラの箱。

その中から溢れ出す禁忌の記憶。

「……次に会うときは、全てが終わった、時」
眠そうな瞳は遠くを見つめている。

誰にも見えない何かを見据えているような瞳は、これから起きる事を見ているかのよう。

まさにその通り。この時から彼女は知っていたのだ。

孤独、罪、禁忌、絶望。

四つの想いが奏でる四重奏。今日この場での会話は序奏に過ぎない。

日常に紡がれた多重奏。アンサンブルそれは脆い砂の土台の上に立てた日常の楼閣を一瞬にして風化させ、落城させた。

「それじゃあね、遙瀬くん。

……最愛なるわたしの 絶望」

再会の約束。

開演の祝詞。

最後の一言を言い終えて、彼女はその場で眠りに落ちた。

物語の幕は上がり、愉快、爽快、痛快、痛快、後悔。

夢のように儂い日常の終焉と共に始まる物語。俺はただ舞台の上で筋書き通りの役を演じるしか無い。それが無為にして滑稽であると解っていないがらも。彼女の謳う物語の上で。

「こつちの質問にはまともな答えなくせに、勝手な事だけ言いやがって……」

死んだように眠る人形のような少女を見下ろしながら、俺は溜息混じりに呟くのだった。

(第一章：日常旋律ノ了)

第二章：孤独共鳴の歌姫 / 1（前書き）

記憶を辿れば行き着くのは闇。

深淵の中の静寂と静謐。

けれどそれはどんな陽の光にも拭えない、深すぎる闇。

いつまでも明けない夜は、暗すぎる世界と昏い記憶を一層冷たくする。

それは捨てられない 私の記憶。

それは歌われない 私の孤独。

捨てられないのならせめて。

歌われないのなら、せめて。

いつか重なり合う事を求めて私が謳おう。

永遠の孤独を、刹那の共鳴の為に。

それは初めから叶わぬ夢。

だって私は知っているから。

私の歌は、誰にも届かないと。

/ 孤独共鳴の歌姫

夜の空。

暗闇の平面に浮かぶ月は金色。それは輝いて見えるというよりもむしろ、空に穿たれた異界への門のように見える。この静寂の中では、ただ。

夜の街は寒気を覚えるほどに静まり返っていた。

時刻は一日の残りも僅かとなった夜。まだ深夜に満たない深淵。

その中に 彼女、楠涼音はいた。

制服のまま。手に持った鞆は彼女が一度も帰宅していない事を物語っている。

彼女が居たのは夜の闇の奥。建物と建物の中の自然的に発生した暗闇の中。月光さえも満足に受けられる閉鎖空間は、完成した一つの異界。下界からの干渉を受ける事の無い故にそこにあるのは、虚しいだけの静寂。

耳を澄ませば自分の心音さえも聞こえるのではないかと思うほどの夜の中で、涼音は眼を瞑った。或る筈の無い風を感じるかのように。或いは眠りに就くかのよう。

行動の真意は明確ではないが、そうした彼女の姿は時を止められたヒトガタのようだ。

しかしそうしていた事が原因なのだろう。

彼女の細い身体を誰かが揺らす。

「こんな時間に何してんの？」

声は男の物。というよりも青年の物だった。

涼音は眼を開けない。肩に手を載せられたままで静止している。

構わず青年は言葉を続ける。

「その制服、うちの制服だよな。あんた何年？」

表情には軽薄な笑顔。相手を安心させようとしている事が簡単に見破れる、安物の微笑み。

この場所は夜、ちょうどこの男のような人間がたむろする場所とはまるで反対の場所だ。若者を集める夜の明かり。コンビニや書店、ファミレス等の施設は一切無い。零時になるまでもなく、完全な眠りに就く静かな通りなのだ。

涼音の瞳は、未だ閉じたままだった。

「おい……」

憤怒を堪えるように、青年の言葉が漏れる。

華奢な肩を掴む手には少しずつ強い握力が込められていく。

「さつきから無視したがって、何とか言えよ」

誰が聞いても苛立っていると解る口調と言葉はしかし、彼女には無意味だった。

涼音は瞼を閉じたまま、小さな声で、けれど青年に確かに聞こえる声で、

歌を、歌っていた。

「ッ!?」

衝動は、彼のちっぽけな理性を簡単に崩壊へと導いた。

頭で思考するよりも早く、言葉を発する余裕など無く、青年は少女の身体を押し倒す。

鈍い衝突音は涼音の身体がアスファルトに打ち付けられた音。苦悶の声を漏らしてもいい、むしろ漏らさない方が可笑しいという状況でも、彼女は動じず、瞳を閉ざしたまま歌っている。

「……ああ、そうかい……。無理矢理されたいって事だな？ 仲良くする気は無いみたいだから……。俺も容赦はしないぜ？」

肩で息をしながら、血走った眼で青年は言う。

彼はここらでは有名な遊び人だった。不良グループの上層にいた彼にとつて、夜の街で見かけた女との行為は特に珍しい事ではない。ある時は冷静に口説いて。ある時は仲間達と無理矢理に。今夜は前

者のつもりだったようだが、少女の態度が彼のプライドに傷をつけてしまった為に、強行手段に移ったのだ。

両手を少女の白く整った顔の隣に付き、荒い息を吐きながら、二人の顔は後数センチも寄れば鼻先が触れ合うほどの短い距離。

それでも歌い続ける涼音の歌は、既に彼には聴こえていなかった。「取り合えずここで一回してやるよ。その後は仲間達と。……くはは……もう泣いても喚いても無駄だぜ？」

いつもなら大人数で行う行為。けれど今夜は自分一人。それも相手は今までに無いほどの美少女ときている。

彼の理性は既に焼ききれていて、判断力は欠片ほども残されていない。

それ故に、自分の行動の意味を理解していなかった。

「はあ……はあ ああ？」

否、彼には僅かに理性が残されていた。

それが故に、少女がそれまで断固として開かなかった瞳を開いている事に気付いたのだ。

「何だよ、今更謝ろうとか、思ってるのか？」

嘲笑が漏れる。

彼はまだ気付いていない。

「あなたにも」

「はあ？」

そこでようやく出た少女の言葉。夜の空に美声が流れる。

青年は自分を取り込むかのような、深い漆黒の瞳に見とれる事暫し、言葉を忘れた。

「私の歌は届かない」

薄れていた理性。それ故に自らの状況を理解できない青年。

「届かないのなら、せめて」

声に引き戻されるように、青年が我に帰る。

一度忘我に至った故か、彼の理性は再生を遂げていた。

身体を震わす悪寒。

暖かいはずの五月下旬の夜。

彼は確かに、自分の全てが凍えるのを感じた。
すっ、と白い指が伸びてきて、青年の顔に触れる。

「私の孤独　あなたも感じて？」

そこでようやく彼は気付くのだった。

自分の犯した大きな間違い。

それは彼女を陵辱しようとした以前の問題。

この相手とは、関わっては、いけなかった。

しかし気付いたときには遅かった。彼の脳裏に突如言葉が流れる。

「　　!?!?」

意識に介入した言葉は呪文のような韻を含み。

なにより、その量が異常だった。

「ぎゃ　　あああああああああああああああああああ
!?!?」

思考を埋め尽くす言葉。否、歌。

少女の孤独を謳った歌に、青年は頭を抱えて転げまわる。

一方で涼音は、自分を押し倒した音を見下ろして呟く。

「可哀想な人」

感情の伴わない、冷たすぎる一言は月の下で叫び声に掻き消され
た。

少女は謳う　　月光の下で孤独の旋律に乗せて。今宵という孤独
の歌を。

第二章：孤独共鳴の歌姫 / 1（後書き）

第二章……というよりもようやく物語を進めようと思います。一章は序章。二章からは本格的なストーリーを書きたいと思います。

それと前回更新よりジャンルを変更いたしました。詳しい事はブログにて公表しておりますが、ジャンル変更したからといって、これまでと物語り自体はまったく変化ありません。

これからもシリアスコメディ（我流ジャンルです）を存分に展開していきたいと思います！

では、これからもこの作品をよろしくお願い致します。

青い空は天気予報通りの快晴。五月下旬の朝。季節はじきに夏へと移り変わり、カレンダーの数字は五から六へと変化する。梅雨前線の到来を間近に控えた今日、雲一つ無い青空はまるで陰鬱な雨日を前に最後の悪足掻きをしているかのようだった。

順調に上昇していく気温もさる事ながら、俺はそろそろ訪れる期末テストの心配をしながら、内心とは裏腹に欠伸をしていた。

「ぎりぎりまで眠っておいて、よくわたしの隣でそんな行動を取れますね」

空の隣で。

「はあ……。いつも言っていますが、起床と就寝の悪循環は生活に悪影響を及ぼします。最近は特に風邪が流行っているようですから、兄さんもこれを期に生活を改めてみる期はありませんか？」

「っん、と斜め上を向いて、同じ制服を着ているというのに他の女子とは違ったお嬢様然とした雰囲気や遠慮なく振りまき、本心からかそうでないのか、空は一見兄を心配するような事を口にする。

それが毎朝目覚ましで覚醒する事の出来ない兄への遠回しな苦情なのかどうかは不明だが。

そんな事なんかよりも気になる言葉があつたという事もあり、深く追求するのはむしろそっちにしておくことにした。

「風邪？ 流行ってんのか、最近？」

「ええ。わたしのクラスの欠席者は二人だけですが、学園全体では結構な数の欠席者がいるようです。全員が全員、同じ症状なのかどうかは解らないけど」

つい昨日の教室を思い出す。どの角度から見ても教室内に空席は

無い。他のクラスの事情は知らないが、どうやら今学園内で流行している風邪ウイルスは二年B組にはまだ侵食していないらしい。

「兄さんも気をつけてくださいね。兄さんが感染してしまえば、同じ家にいるわたしまで風邪に犯されてしまいます」

「まあ、大丈夫だろうよ。俺のクラスではまだ誰も休んでないからさ」

「そうですね、それは何よりです。もっとも兄さんに風邪の心配をする事自体がお門違いなんですけど。よく言いますから、バカは風邪引かないって」

悪戯な笑みが憎らしい。

「……………」

反論出来ない自分はもつと憎らしい。どうしたもんだらうね。

「お前さ、俺にも人並みの感情はあるんだよ」

「それで？」

「そういう事は出来るだけ控えてくれたら嬉しいな、と」

「だったらそれなりの努力をする事ですね」

……世の中の兄貴とはみんなこのような兄妹環境にあるのだろうか。

晴天の下。

まだ梅雨は始まっていないというのに、天が恵んでくれたこの快晴の日を俺は朝から沈鬱とした面持ちで歩く事となった。

校門で空と別れ、その後登校してきた生徒達が作り出す流れに乗って教室に到達する頃には、成績云々から訪れる陰鬱な気分は霧散していた。深く考えすぎないのがポイントだ。一日を楽しく過ごす為には。

教室はやはり普段通り平穏を保っていた。

談笑に花を咲かせる彼ら彼女らを横目に見て、話題を探ろうかと考えるがその行動の無意味さに気付いて、大人しく窓際の席へと歩みを再開。

「おっはよー。今日はあたしの方が先だね」

先に席に着いていた流深が、空に輝く太陽に対抗するような笑顔に向けてくる。

「おはよ。まあ、珍しい事もあるんだな」

冗談を言いながら腰を下ろして、ちらりと視界に入れたのは流深の表情。その表情に何故かあの日の事を思い出してしまい、夕日の色に染まった教室の中で、終始それとは照的過ぎる哀しい表情を湛えた少女を思い出していた。

「どうかした？」

「いいや何でも。お前はいつも笑ってるな、と思ってたただだよ」
或いは。

その笑顔もまた偽りなのではないか、と。考えすぎが。

「あつたりまえだよ。暗い顔しててもしょうがないでしょ」

さも当然のように、流深は答えた。

喜怒哀楽。人間の感情はそれら四つのどれかに割り当てられる。

ならば心境を無意識かで相手に代弁してしまう表情もまた、それらが司っているのだろうか。

だとするのなら。

俺は、あの日以来流深の怒りと哀しみを見たことが無い事になる。

恐らくは、流深にある感情は喜びと楽しみの二つのみ。残りの二

つは

「どうしたの？ さっきからぼーっとして」

独白モードに入ってしまった俺の意識を、流深の言葉は強制的に引き戻した。

きよとんとした表情。大きな瞳が俺の顔を覗き込んでいた。

「あつ、そつだ。アレ知ってる？ 最近流行の噂」

埃を被る前のまだ新鮮な記憶が引き出される。思い出したのはついさつき。登校中の空の言葉。

「風邪が流行つてるとかいうやつか？ なんでも結構な数の生徒が休んでるそうだな」

「え、なにそれ、なんのこと？」

自信を持って書いた解答がテスト返却後に赤ペンで撥ねられていた時の気分を味わう。的外れだったらしい俺の返答に、流深は何それ美味しいの？ という感じの顔をしていた。

「風邪、流行ってるの？ このクラスではまだ誰も休んでないみたいだけ」

話の喰い違いで生じた沈黙を、流深は自分が一步引くことよって消滅させた。どうやら気遣いというものを知っているらしい。これは新事実発覚だ。

「そうらしい、空が言うにはな」

「へえ、お兄さんのことを心配して忠告してくれたんだ、きっと。だから風邪に気をつけてくださいね、

って意味なんだよ」

「……だつたらいいな」

喜色満面として言う流深はそうだと信じて疑わぬらしい。まるで他人を疑う事を知らない子供のような、とても純粹で無垢な笑顔。いつか世界中の全てが自分を愛しているのだと思っていた、誰もが失ってしまうあの頃の心を、流深は無くさずにいる。

残念ながらそんな綺麗な物など既に俺の中には無く、あつたとしても「バカは風邪を引きませんからね」とか言われた矢先では、そんな考えなど浮かんでこないだろうが。子供は変な所で幻想的で、その一方他人の言葉に強く影響されてしまうのだ。

閑話休題。

風邪の話はすっぱりと忘れる事にして、続いて流深の話を書く事にしよう。

「ところでお前の話は何なんだ。噂って？」

「通り魔の話」

いささか物騒な単語に、俺は不意にリピートを要求していた。

「だからさ、連続通り魔の話だよ」

聞き返して後悔した。余計に悪化してやがる。なによりも、微笑み混じりの明るい表情でそんな事を言いやがる流深の神経はどうなっているのだろうか。連続、通り魔。

怖気がした。

「そんな噂があつたのか、この平和な学園には」

「そんな噂があつたんだよ。本当に知らなかったの？」

まったく知らなかった。日々平穏を保っていたこの学園の空気は、いつからそんな生暖かくどろどろとした噂に汚されていたのか……。

「ふうん。意外だな、この噂を知らない人がいるなんて」

知らないも何も、通り魔なんてのは十九世紀末のイギリスか、ミステリ小説の中にしか存在しない空想の産物でしかないと思っていた。この平穏な街はいつから殺人鬼に怯えて暮らさなければならぬ、危険な街に成り代わってしまったのか。

「何人殺されたんだ……？」

一応。話の流れ上恐る恐る訊いてみると、

「誰も」

流深の返事はあっさりと、予想をさらつと裏切る言葉だった。

「誰も殺されてないよ。だからニュースにもなっていない。この辺の高校生とか中学生の間でだけ流行ってる噂なんだ」

情報の整理が付かない内に、流深は矢継ぎ早に言葉を繋げる。

「ちよつと待った。何で誰も殺されてないのに、通り魔なんて騒がれるんだ？」

当たり前の矛盾点に疑問を持ち、尋ねる。被害者がいない通り魔事件。そんなものは絶対にありえない。被害者がいないということ、犯人もいないということ、けれど通り魔事件というからにはそれには『通り魔』という『犯人』がいるわけだ。加えて。通り魔事件なんて銘打たれるほどに物騒な事件には、望まなくとも死を与

えられた『被害者』が存在する。両者は光と影のようなもの。どちらが存在する限り、必ずどちらかが存在する

「……あたしもよくは知らないけど、その事件の被害者の人は殺されて無いけど、死んでるんだって」

混乱する思考に介入してきた新事実。果たしてそれは事の矛盾点を増やすだけだった。

「いや、訳解らん……」

というしかない。殺されていないのに、死んでいる。それは即ち、被害者がいるということになる

「あ、そうか」

急激に纏まった思考。安堵なのか俺は短く呟いていた。

被害者はいない。それは誰も死んでいないという事柄から俺が付けた、確証の無い推測。それを無意識かで過程として肯定していたから、次の一言に矛盾を感じてしまったのだ。今この場に置いて絶対的な真実は流深の言葉の中のみある。そして流深は一言も被害者の存在には触れていなかった。つまり 被害者はいない。……それでも残される矛盾は、その被害者は殺されていない、けれど死んでいるという点。疑問として残るのは、はたして被害者は犯人にどんな被害を受けたのかという点だった。

少しの間。

俺は考える事を放棄した。

「……降参。どういう意味か教えてくれ」

「知らないよ。噂だもん」

誰にか白旗を上げて解答を求めると流深はそれを一蹴した。

「あたしは聞いた事をそのまま言っただけ。だからあたしもこれ以上の事は知らない。ごめんね」

苦笑の前で合掌されては、罪の無い相手を恨む気にはなれない。

これ以上の情報はいくら流深に訊いても得られる事は無いだろう。結果として、俺は頭のモヤモヤを消し去る事が出来ないまま、この噂を記憶の片隅にしまいこむ事を決意した。放課後に空にでも訊い

てみればすつきりするかもしれん。余計に矛盾した話を持ち込まれて、夜も眠れなくなる危険性を孕んだ、一種の賭けにもなるが。

まったく。折角の快晴も朝からアレよコレよで台無しだ。それとも空が晴れている分、反比例して俺の気分は晴れてくれないのだからか。

一足早い梅雨の訪れを心から憎らしく思う。

「まあ、薄暗い通り魔の話なんて朝から話題にする事じゃないな」「うん。そっだよなっ」

俺の言葉に流深は澱み無い笑顔で賛同した。それと同時に始業の鐘が鳴り、椅子を引く音がそこかしこから聞こえてくる。俺は一瞬光度を上げて自分から背けられた流深の笑顔を合図に、教室に入ってきた教師を振り向き、そして思った。

はて、この話題を振ってきたのは一体誰だっただろう？ と。

お父さん、お母さんへ。

とおくへ行ってしまったとききました。

おしごと、がんばってください。

わたしも大きくなったら、お父さんとお母さんのおしごとをおてつだいたいします。

ずっとまっています。できるだけ、早くかえってきてくださいね。

一限目が終わり休み時間に入る。

チャイムが鳴り終わるよりも早く、流深がやってきた。

「朝の話だけだね」

ノートを閉じて鞆に仕舞おうとする動きを唐突に中断。今朝方聞かされて、まだ頭にひっ掛かっている矛盾話を思い出した。まだ記憶に新しい、出来る事ならさっさと忘れ去りたい通り魔の事件の話。溜息を飲み込んで、俺は流深を見上げた。

その話は終わったはずだと思っていたのだが……。

「通り魔について、何か思い出したのか？」

「ん？ ううん。そっちじゃなくて風邪の話。このクラスにも欠席

者が出ちゃったみたいだよ」

風邪の話？ と予想だにできなかった言葉を反復する。その行動が通り魔の陰に隠れて存在感を皆無のものとしていた、風邪流行説を思い出させた。そういえばそんな話もした。遂に正体不明のウイルスはこのクラスにも浸入してしまったらしい。

「なんだろうね？ 新型のインフルエンザかな？」

「だったら、こんな時期に流行りはしないだろ。それで誰が休んでるんだ？」

「ええと……なんだっけ、ふあ、んんと……ね、確か」

「悪かった。お前に名前を訊ねたのが間違이었다よ」

果たして俺はそこまで脳内を混乱させてしまう質問をしたのだろうか。

まだ悩んでいる流深を無視して、俺は教室中から空席を探す。休み時間だけに席に座っている生徒とそうでない生徒の比率は圧倒的だったが、欠席者を割り出すのはそう困難な仕事ではなかった。

「あれま。まさか橘たちばなが病欠って……」

俺が割り出した欠席者のフルネームは橘湊人みなと。凡そ真面目といえる生徒ではなく、一般に不良とか言われる類の人間で、短い茶髪は後天的なもので間違いない。そういった意味では目立っていた生徒だから、俺が彼の存在の消失に気付くのもそれほど時間が必要にはならなかったのだ。

不良といってもやたら体格のいい、古い表現を使うなら番長とかの柄ではなく、どちらかという小柄だったと記憶している。流行りに流される最近の若者と表現すればいいだろうか。彼の全体像を簡単に纏めると、細い華奢な身体に、どちらかという童顔な金髪気味の茶髪生徒。

「たちはな、くん？」

はつきりと思いつけないらしい流深は呟いて首を傾げていた。

橘の事を知っているのなら、今日この場に姿が見えないのは病魔による体調不良ではなく、単なるサボリだと考えるのが普通なので、

彼の存在を流深が知らないというのはあながち嘘ではないだろう。しかし疑問点があるとするのなら、橘はこれまでに学校に来なかった事は無かったと思う。俺の記憶が正しいのなら、特定の授業中教室に居ない事はあっても、朝から一度も見かけなかった事は無かったはずだ。

「金髪の男子だよ。覚えてないか？」

どうしてもモニターが浮かばず、積年の恨みの相手を呪いに掛けるように名前を反復する流深に告げやると、どうやらそれで思い出したらしい。憑き物が取れた晴れやかな表情が再び戻る。

「あの人ってそんな名前だったんだ」

「すっかり覚えとけよ。俺の場合みたく勝手なアレンジを加えて呼んじゃったら、それこそどんな対応するか解らん野郎だからな」

……出来れば、話しかけない事が最善だ。

橘は華奢な身体付きと幼目の面構えの所為で、一目にワルだと判断する人間は案外多くない。だが橘が付き合っている連中は一目でそうだと解る、薬にだって平気で手を出すような輩でグループの規模もこの辺りでは最大だという。

水面下での鬭争なんかがあるとは俺も想像していないし、実際のグループに喧嘩を売りに行くような事は相当の理由がないとしないらしい。日々喧嘩に日常を費やすなど、ナンセンスな事はしないそうだ。

何度か話したことがあり、上記のことはその時に聞かされた話だった。

さっさと足を洗えば、それなりに仲良くもなれそうな奴だったのが。

「まかせといてよ。あたし、人の名前を覚えるのは得意なんだ！」

「……そうかい」

得意げに胸を張るその姿に、俺は言いようも無い悪寒と、どうしようもない不安を感じていた。

お久しぶりです。突然のお手紙をすいません。

お仕事の邪魔になるといけないので、出来るだけ我慢していたのですが。

三年ぶりですが、お二人は元気でしょうか。私は元気です。

お父さん、お母さん。お仕事が落ち着いたらまた会えると聞いているのですが、まだお忙しいようですね。少し寂しいですが、私はお二人の帰りを待っています。

いつか、必ずまた会えると思っています。

お返事を頂けると嬉しいです。お仕事、がんばってください。

昼休み。俺はオートパイロット設定されたように、習慣化された屋上での昼食に向かっていた。

途中の廊下ですれ違ふ生徒達は誰もが風邪引きのようには見えず、マスクをしている者が居るわけでもなければ、咳き込んでいる者がいるわけでもなかった。これでは風邪が流行っている、といわれてもいささか信じられない。現に同じクラスの生徒が欠席していても病原菌は静かに学内を汚染し、気が付いた頃には大量の生徒が正体不明の病状に苦しむ、などという状況にならなければいいのだが。どこかの誰かがバイオテロを企てていたり、流星にしないだろうけど。

「そんな事があるわけなんだが、どう思う？」

「……………」

空。今日も青空。

平穏を象徴するような静かな雲の流れと……気まずい沈黙だけが漂っていた。

場所は屋上。夏場前の吹きつける風が涼しくて気持ちいい。なんて爽やかな心境になる事など出来ず、俺はただ無言を返答に決め込んだ楠涼音にインスタントスマイルを向けることで場を和ませようと努めている。……無駄なことだとは解っていても、努めている。

あの日。絶縁状のような一言を突きつけられてから今日まで、俺たちの間に会話は無かった。適当な話題を俺から振る事はあっても、それに対する返事が無いから、会話が無い。ここで言葉を発するのは唯一俺だけという虚しい事実は、会話の一切無い思い空気の中の暗い食事を現実とされていること現在進行形だ。

「……………」

感情の浮かばない黒瞳。

楠涼音の興味はその手にあるサンドイッチのみに向いていて、それ以外のものはまるでそこに何も無いかのような無関心に殺されている。

「あ……そうだ、あれ知ってるか？ 通り魔の話」

どうにかして関心を得ようと、俺はそんな事を口走っていた。

苦し紛れに飛び出した言葉は、しかし初めて彼女の心に触れていた、らしい。

指示された動作を実行している最中に電池切れしたロボットのように、或いは唐突に身体の動かし方を忘れてしまったかのように、楠涼音は停止している。時間そのものが止まっているような静止。瞬きさえも忘れていた少女は開いた小さな口を閉じ、ゆっくりとその瞳を俺に向けた。

「通り魔？」

久方ぶりに聞く声。疑問符付きの言葉には、ほんの少しだけ、けれど確かに、

感情のようなものが、添付されていた。

その衝撃が強すぎたのか、俺の意識はうつかりすればそのまま二時間は固まったままでいてしまいそう。だがそれはようやく交わった言葉によって生じた会話により、瞬時に再起動を果たした。

「あ　ああ。なんでも最近そういう噂が流行ってるらしい」「それってどういう噂？」

食事の途中だつて事は完全に忘れているらしい。

俺は自らの弁当箱に残ったおかずを確認して話を続けるべきか思案し、結果続行を選択した。

「俺も詳しくは知らないけどな」と前置きし、

「誰も殺されてない、らしい。けど妙なことに、誰も殺されてないのに被害者は死んでるんだと。これ、どういう意味か解るか？」
「知りえる全ての情報を口外した。全てといつてもこの程度ではないのだが。」

「あなたは どう思うの？」
質問に質問で返すのはどうか　と反論したくなるが、初めにそれをしたのは俺の方なので仕方ない。

この時何故か、今朝方軽く考えてみたが、脳が悲鳴を上げたところで放棄した思考を再開する事を俺は選んでしまっていた。

殺されていないのに死んでいる。それはつまり、通り魔と呼ばれる人物は誰も殺していないが、その被害者は何らかの形で死んでしまった、ということだろう。でもそれでは、そもそも『通り魔事件』なんて噂自体が発生するはずが無い。死人に口なし。被害者は死んでいるのだから、その死の原因が何らかの形で通り魔事件に関わっているのだとしても、それを誰かに伝える事は出来ない。一般の通り魔殺人は、被害者の死に方や殺害現場の情報、及び周辺を目撃情報などから初めて『事件』として処理認識される。だから誰も殺されていない『通り魔事件』なんてのは存在し得ない。なぜならそれを『通り魔事件』だと伝える要因である『殺人』が存在していないのだから。

何度も繰り返した思考。何度も行き着く同じ結論。

「有り得ないだろ、そんな事って。誰も殺されていないんなら、そこには死が存在しないわけだし、だったらそもそも『通り魔事件』なんてものが存在するわけがない」

「そう思うの？」

僅かに感情を含んだ言葉。俺はそれを　哀しみと感じてしまった。

気付けば彼女の眼は確かに俺を捕らえていて、会話は確かに成立していた。

「私はそうは思わない。人の死は、つまりその意味を無くすということ。だったら、もしも　その人を誰も見なくなったら？　そこにいるのに誰にも気付いてもらえないとしたら？　存在自体はそこにあるのに、誰にも触れられることなく、誰からも認識されないのなら　それは、死といえると思わない？」

……散々無口を決め込んでおきながら、ここへきて急に饒舌じょうぜつになったものだ。

しかしながら彼女の言う事にも一理ある。というよりも素直に頷くことが出来ると言っている。色即是空という考えに似ているが、全ての存在は他者の干渉を受ける事でその存在を保っているという概念で、例えば歴史上に名を残した人物がいて、歴史の教科書が何かでそれを一人の人間が知ったとする。それによって過去の人物はその存在を『在った』と認識されて、初めて『存在』として確立する事が出来る。だが仮に、この国に歴史の授業、大袈裟に言えばこの世界に考古学事態が存在しなければ、歴史上に存在したとされる人物は誰にもその存在を認識される事が無く、初めから無かったことと同じになってしまう。これは何も故人だけではなく、今生きている人間、今在るモノにだって同じことが言える。この世の全てのものは、誰かに観測されるからこそ存在していて、最終的には自身自身が自らを観測して、存在として在るということだ。

もしも一人の人間が周囲から完全に孤立し、どんな干渉も受けら

れなくなってしまうた拳句、自我さえも無くしてしまったとしたら

それは、死と言えるのではないだろうか？

……多分、彼女が言いたいのはそのということなんだと思う。

「なるほど確かにそうかもな」

長い思考の果てに、ようやく俺が現実に目を向けると、楠涼音は食べ掛けだったサンドイッチの最後の欠片を口に含み、咀嚼し嚥下していた。

ごみ入りのビニール袋を持って、彼女はさっさと立ち去ろうとしている。

その後姿に何か言葉を掛けようと考えていると、先手を打たれていた。

「その通り魔。きつと淋しかったただけなんだと私は思う。あなたには解らないと思うけど」

これはもう、感情のような、とか曖昧なものではなく、間違いなく本物の感情が籠もった言葉。明らかに心から出た想い。

「ちよつと待った、それってどういう意味なんだ。」

疑問は閉ざされた扉に跳ね返され、虚しく、短く反響した。

/ 4

拝啓、お父さん、お母さん。

お二人が私の前からいなくなってしまうてから、もう随分と経ちました。

こうして手紙を書くことも、回数を数える事が出来ないほど何度もしてきました。

お父さん、お母さん。お二人には、私の言葉は届いていますか？もしも届いていないのなら、こんな質問をする事も、こんな手紙を書くことも意味が無いことなんですけど。

それでも、きっと私の言葉は届いているのだと、信じています。事情があつて返事が送れないのだと思っています。

だから、いつか気が向いたらでも構いません。

どうか、私の言葉が一つでも届いているのなら。

一度でも構いません、お返事をください。

わがままを言つてすいません。

お二人のご健康を心よりお祈り申し上げます。

放課後。ホームルームも終わって後は帰宅するだけになった俺は、

荷物を片手に校舎の中を適当に練り歩いていた。こうしていれば、もしかするとどこかで彼女と会うことが出来るのではないか、という魂胆も少なからずあり、勿論そんな目論見を持ってしまった理由を紐解くと別段色っぽい事情や、青春の香りがする甘酸っぱい事情も無い。

楠涼音を探しているのは偏に昼休みの会話の続きが気になったからである。

……何となく気になった、だけで行動できる自分というのがいかに暇を持て余している人間かということは考えない事にする。タイム・イズ・マネーなんていうけれど、余った時間を換金してくれる場所などどこにも無いから性質が悪い。その逆もまた然り。

「……で」

小さく漏らした言葉は溜息のようで、どこか非難がましい響きがあった。

それもまあ、こんな状況ならば許される事だろう。

「なんでお前がついてきてるんだ？」

「え？ うーん……特に理由は無いけど、強いて言うならあたしも暇だから、かな」

自分も、とか言う辺りこいつは俺が暇人だと理解しているらしいが、そんなことはどうでもいいことで、だいたい部活にも所属していない生徒が帰宅せずに校舎内に留まっているという事は、そいつが暇人だと推理する事は誰にでも出来る事だ。問題なのはそんな事では無い。

今度は本物の溜息をついて、流深を横目に流し見た。その視線に気付いたか、気付いていないか、流深は視線を斜め上に外してやや挑発的な口調で問うてくる。

「今度はあたしの質問。そっちこそ、何で放課後の校舎に残ってたりなんかしてるの？」

まだ自分の質問に答えられていないということは解っていないのだろうか。

「なあんか、最近変だよね。この間だつてさ、ホームルームが終わってから一時間も経ってるのに、まだ教室に残ってたりしたし」
俺は答えない。

流深が言っているのは恐らくあの日のことだろう。

夕焼けの教室。下駄箱を開くと呼び出し文書があつて、それに従い人気の絶えた教室へと足を運んだあの日のことを流深は言っている。……まさか、真実を口外してしまうわけにはいかない。

それは、俺があの日から守ってきた、たった一つの約束だから。

「……………」
足音が、虚しい。

黙秘権を行使し続ける俺を、流深は怪訝な表情で覗き込んでいる。
「ま、いいけど」
大きな瞳が言葉と共に背けられ、どちらも笑う事の無いにらめっこは、唐突に終わりを告げる。質問の解答が、こちらが答えたくないことと見ればそれ以上深く追求してこないこないところが、流深の長所だった。

昔から、といつても俺が流深と関わり始めたのは中学三年の時かなので、昔とはいつても時を遡るほど精々二年ほどなのだが、それも一応昔話としての域を出ないものだと思つたので問題は無いだろう。もし仮に問題があるとして、それがどんな問題であるかは考えるだけ無駄なので考えない事しておく。

と、話を戻そう。

御桜流深という人間は、疑問に思うようなことがあれば遠慮なく追求してくるが、それに対する相手の態度によって途中で質問を撤回することが多々あった。まず第一に相手のことを考えて、好奇心を抑えてしまうのか。或いは別に理由があるのか。それは定かではない。

誰とでも邂逅を求めくせに、誰にも深く関わろうとしない。それは遠くから相手の心の中を除きこむような、路上で相手が無害かどうかを見定めている猫のような在り方。

誰の心にも立ち入らないのに、誰の心でも理解しようとする、二律背反。

中学時代、俺が流深に与えた人物像はそんなものだった。そうして俺が物思いに耽っていると。

ばたん。背後から音がした。

「痛いですう……」

泣きそうな声に振り向く。

瞬間、俺は無意識下でここへきて三度目の溜息を溢していた。

……ストーカーは、本日も健在だ。

夕日が沈もうとしている。
空の色は赤から、直に藍へと移り変わり、そして黒へと終着するだろう。

私は家の鍵を開けながら、そんなことを考えていた。

夜と朝。隣り合っているのに正反対な二つの刻。朝がある限り、明けない夜は無い。逆を言えば、夜がある限り沈まない朝は無いということ。一日は朝から夜へ、夜から朝へと円を描いて廻っている。飽きもせず。ただひたすらに、螺旋を描きながら永遠としてあり続ける、閉じた、輪。

楠、と住居者を示す表札 正確には名前の書かれた紙でしかない の下に設置された郵便受けを開くと、そこには当然のように一通の手紙が私を待っていた。

昨日も、一昨日、一週間前も、一ヶ月前も、一年前も。もうずっと

と、私がこの小さな扉を開けば先客としてこれが私を待っている。

私は無造作に手紙を掴み、部屋の扉を開けた。アパートの一室は、高校生が一人暮らしするには決して大きすぎる部屋ではない。短い廊下を抜ければすぐにダイニングに辿り着く。

電気を点けていない所為もあり、扉を閉めればそこは既に闇が支配する真夜中のように暗い。……というよりも、カーテンさえ締め切って、外界から一切の干渉を受けようとしないこの部屋は、暗いというより昏い。

私は廊下を歩き終えて、電気のスイッチを入れた。

小さな部屋。まるで生活臭の感じられない部屋。けれどそれを自分で言うのも可笑しな話かもしれない。

鞆を放り出し、もう片方の手に持った手紙を落とした。

闇の中、それは一直線に床へ落ちていき、闇へと墮ちた。

明かりの点けられた部屋の床は、一面同じような紙が散乱している。毎日のようにやってくる手紙を、どうしてか私は捨てられずにいたから、こうして長い年月をかけてたくさんの手紙が積もっていたのだ。

私が小さい頃に、私の前からいなくなってしまった両親。

その両親に宛てて書き続けた手紙。

会いたいという、ただそれだけの希望を文字に込めて送っては、宛先不明で送り返されてくる。無駄なことだとはいっていた。けれど私はそれをやめられず、今もこうして手紙を出し続けている。

どうしてか。

決まっている。

私は、ただ、寂しいだけなんだ。

両親が居なくなってから、自分から心を閉ざしてしまった私は必然、社会から孤立していった。返ってくるはずの無い返事を待ちながら、手紙を書くことだけに没頭して日々を送っていた私。周囲が

ら浮き彫りにされ、自分が誰なのか見失って行った私。

今日の昼休みを思い出す。

誰からも認識されなくなった人間は死ぬ。

人は死んだ後であっても、記憶の中でなら生きられる。だから本当の意味で人が死ぬのは、その人のことを知る人が全ていなくなつてから。

では私は？

両親はいない。

私を預かってくれていた親戚はもう傍に居ない。 自分から遠

ざけた。

周囲が認識してくれていた楠涼音は、今私の中にある孤独が殺した。 孤独は、自分から呼びこんだ。

……ああ、そうか。

楠涼音という私は、もう既になくなっていったんだ。

床に広がる手紙が楠涼音の心の残滓ならば、今辛うじて私が楠涼音としてあれるのは、この残留する想いがあるから。

「けれど、それも、もう……」

呟いた私はテレビのリモコンを握って、その視線をテレビの画面に向けていた。

「……お前さ、放課後にする事とかないの？」

ぺたん、と膝を突いて廊下に座り込むストーカー娘、もとい御巫曆は口をぱくぱくさせながら驚愕に目を見開いていた。

それが何に對しての感情の表れなのかは不明で、訊いてみる気もない。

新学期以来、放課後になると妙な違和感を感じるようになってい

た俺が、その原因が何であるかを知ったのは四月も中旬、入学式から二週間ばかりが経過した日のことであつたのだが、その話はまた後にしておこうと思う。

……ここ最近は一人で帰路に着き、誰にもストーキングされず帰宅できていたのだと思つていたが、それは俺の勘違いで、真相は曆のストーキングスキルが急激に上昇していたということなのかもしれない。だとしたら、今日までの俺の私生活にプライベートという単語は存在していなかったということになる。

それは……勘弁してほしい。

「今日は部活が無いんですよ……」

俺の危惧は、どうやら杞憂で済んだらしい。

安心と同時に納得のいく一言は、曆にしては上出来かもしれない。一年の部活動は四月の間は仮入部期間で、本入部は五月からとなる。部活に入ったことで放課後のストーキングが出来なくなつていたというのなら、それは確かに頷ける説明だ。

と、待てよ。それではまた懸案事項が復活してしまう。俺は曆の尾行が無くなったのは、あの日の会話が原因だと思つていた。少々きつく言い過ぎたのではと自分でも思つていたから、それで曆が折れていたのだと。

結果として曆が活動を停止していたという事実に変わりは無いが、前者の理由ならばこれから部活が無い日の曆は俺へのストーキングを行い続けるということ、後者ならばそれがないということになる。実際にどちらが原因なのかというと、それは前者だ。

……もはや、溜息さえも出てこない。説得のプロがどこかにいるのなら、どうか曆を更正してくれ。

「あ、あの先輩」

弁護士でも雇おうかと考え始める俺に、控えめな声。

見れば曆の視線は流深に向いていた。

「そちらの方はどちら様ですか……？」

曆の瞳は、より一層驚愕の色を濃くしていた。

「その、もしかして、その、あの、えっと」

高速で泳ぐ眼を見て、俺は暦の言いたいことを理解する。

「ああ、こいつはクラスメイトだよ。別にそんな関係じゃない」

どこか優しさを含んだ口調。勝手な思い込みなのだが、こんな状況ではそうだと思われても文句は言えない。誰だって誤解してしまうだろうし、俺だってそうだ。ならば誰に責任が起債するのかという、それは勝手にすたこら俺に付き添って歩いている流深なのだ。言つと暦は、しかしそれでは納得しなかった。

「本当ですか……？ 先輩」

何か、おかしい。

こんなことはあまり思いたくないが、御巫暦という人間は先天的な天然性である。明らかに変声機で声質を換えた怪しい電話の相手が、まだ免許も持っていない人物の名前を名乗って交通事故を口実に金を貸してくれ、と言い出しても信じてしまうような、そんな人間なのだ。

嘘を言っているのならともかく、本当のことを言っているというのにそれを信用しないというのは、この相手に限つて言えば異常だ。怪訝を湛えた瞳はいつしか、俺ではなく流深へ矛先を変えていた。それは暦にしては珍しい、僅かだが確かな敵意を孕んだ視線。

「ええと……」

串刺しにされた流深が苦笑いしながら俺へアイコンタクトを送ってくる。残念ながら、こんな自体は俺にとっても初めてなのでどのような対応をしていいか解らない。お手上げだ。

「えっとね、あたしは本当にただのクラスメイトだよ。うん。大したこと無い……友達以上、恋人以上みたいなの」

おい。なんのフォロ〜にもなつてねえ。というか今以上に誤解を生む。

「そんなことを訊いてるんじゃないです！ あなた、先輩をどうするつもりなんですか！」

急に口調を強くする暦。その言葉から伝わるのは、明確な敵意。

どういうことだろう。暦がここまで他人に対して反抗的な態度をとるなんて。

「暦、いい加減にしろって」

「わたしは、先輩の為に言ってるんです！」

「俺の為ってなんだよ？ だいたい、お前流深とどつかで会ったことあんのか、なんか相当恨んでるみたいに見えるけど。変だぞ、今日のお前」

言つと、暦から敵意がさつ、と一気に静かに引いていった。理性を取り戻した瞳は、確かな穏やかさを感じさせる。

やや暴走気味だった暦は、落ち着いていつものような温和な雰囲気気を発し始めるかと思うと、今度は何やら悩み始めてしまった。

「ええと……。あれ？ わたし、えつと、先輩……この人、誰ですか？」

「御桜流御だよ。よろしくね」

俺宛の質問に流深は即答する。

言葉からは、欠片ほど邪気を感じ取れない。凡そ妙な言い掛かりを付けられた相手に向ける言葉とは思えない、その柔らかかさ。

完全に無害な流深に、暦はようやく心を開いた。

「えと、えと……。御巫、暦です」

名乗ったかと思うと、暦はぺこぺこと身体を折りたたみ始めた。

それは驚くほど慣れた、職人業といった差し支えない完璧なお辞儀。

「ごめんなさい！ すいません！ 申し訳ありません！ 心苦しいです！」

最後のは誤用している気がするが、暦は謝罪の言葉を矢継ぎ早に並べた。本当に、こいつは人に謝るといふ行為が慣れすぎている。いつかその性格が裏目に出なければいいのだが……。

しかしながら、こうして後輩の性を心配してやれるとは、俺も上級生らしくなったものだ。

言つまでも無く、流深は自分の眼前で世話しなく上下運動を繰り返

返す頭を見ながら、明らかに処置に困じている。救済を求めるように俺に視線を投げかけてくるが、こればかりはどうしようもないのだ。

こうなってしまった暦というのは、それはもう厄介なのだ。……

この状態の暦を止められるのは、俺が知る限りではただ一人

「暦」

空気との摩擦熱でそろそろ暦の頭に火が点くんじゃないかと思い始めた俺の思考をさえぎり、その声は廊下に響き渡った。

残響を聞きながら暦の背後、その向こうを眺めてみれば、思い浮かべたとおりの人物がいて、それが誰であるかは言うまでも無いと思う。

一同の注目を一挙に浴びているというのに、そんなものにはまるで動じない少女はかつかつ歩いてくると、

「なにやってるのよ、こんなところで、て、兄さん？ それから

……」

暦の肩に手を載せた。それと同時に、俺は額に手を当てて小さく首を振った。

……状況は、ややこしくなるばかりだ。

困惑の渦は収束しかかったところでまた回転を始める。

渦の中に飛び込んできた第三者　空の視線はやはり流深に向いていた。

……嗚呼、もしもどこかに神様とやらがいるのなら、どうかこの哀れな子羊たちに救いあれ……。

陽は既に沈んでいた。

黒い平面は月と疎らに散りばめられた星の明かりだけで照らされている、夜。

学校で騒いでいる間に、気づけばこんな時間になってしまっていたらしい。暑くなってきたといってもまだ五月。直六月がやってくるが、それでもまだ夏本番には程遠い。日の入りの時刻は例年通りらしかった。

結局、暦のごった返しは空騒ぎの枠を出なかったが……確かにあの場に存在した刺々しい空気はなんだったんだろうか。暦が憎悪に近い敵意を抱いていたことも気になる。他人を跳ね除けるなんて機能を持たないような人間だというのに。

暦の発狂は最終的に自己抑制されたことにより誤解は解け、いや、そもそもあの場に誤解と呼べる何らかの認識が存在したのかは不明だが、とりあえず暦の不審な態度は収束した。

厄介だったのはその後だ。
発狂に次ぐ暴走。

暦の謝罪は異常と言って過言ではない。脳がブレーキの掛け方を忘れてしまったように、暦の頭は上下運動をやめようとしなものだから、謝られている側が何かしてしまったのではないかと罪の意識に駆られてしまうほどのものだ。

一度そうなってしまった暦を止められるのは、彼女の同級生にして親友、ついでに俺の妹である空だけで、あの場に偶然空がやって来たのは不幸中の幸い。……この場合は逆か。幸い中の不幸、空の登場で暦を正常化することはできたが、今度は空の様子が何やらお

かしくなってしまったのだ。

「……なあ、空」

こうして学校から帰途を辿っている間、会話は愚か、空は俺と視線を交えようとさえしてこない。

暦の発狂も、空のこの態度も、大元の原因を問いただと一人の人物に辿り着く。それが誰であるかは明確で、個人的な名前を出すとそれは御桜流深に他ならない。どうしてあいつは、こう後輩から敵視されてしまうのだろうか。

「はい？」

暗い帰り道、空の白い顔がこちらを向く。行儀のいい立ち姿勢はどこをどう見ても非の打ち所が見当たらない、優等生然としていると同時に随分なお嬢様オーラを振り撒いていた。

これが俺と同じ遺伝子を継いでいるというのは、にわかに信じ難い。

「どうかしましたか、兄さん？ 今晚の夕食のメニューなら、こんな時間ですし、簡単なもので済ませようと思っっていますけど、何かリクエストでもあるのですか？」

夕食のメニュー。和洋中でいえば今日は和食の気分だ。簡単なもので済ませるのならせめて、味噌汁だけは用意してくれれば じやない。

「いや、そうじゃなくて」

雑念を祓うように、頭の中に浮かんだ味噌汁像を掻き消した。

遙瀬家では基本、家事全般は空がこなす。父親は単身赴任で家にいないし、母もこれまた身体が弱かったりする。そのことは当然空も既知で、今年の春に実家に戻ってきてからは自ら家事の負担を背負っているのだ。名門私立は全寮制だが、その中で家事術の極意を掴んだのか、空は既にどこへ嫁に出しても問題は微塵も無いというほど完璧なスキルを体得しているという認識は、妹鼻肩の考えではないと言え切れる。

「なんですか？」

脱線しすぎた思考を正規の路線へ修復。

「あのな、今日のことだが、流深は中学からのただの友人だ。お前が妙な勘違いをしているとは思ってないが、一応言っておく」

話題の修復、完了。

兄妹だというのに他人行儀な態度を取り続ける空。凜とした立ち姿は正面を向き直さず、じっとこちらを観察していた。それがどれくらい続いただろうか。空が見ているのは俺の眼なのだと解つたと、空が歩を止めたのは同時だった。

「兄さん」

場所は意図的に選んだのか、街灯の光に照らされた空はさながら舞台の上でスポットライトを浴びる物語のヒロインを連想させた。

やや斜め前の位置になってしまったが、俺も足を止める。

「あの人とは関わらないでください」

聞いた言葉は、予想外を極めた一言だった。

陽は既に沈んでいた。

黒い平面は月と疎らに散りばめられた星の明かりだけで照らされている、夜。

太陽の空。月の空。世界は二つの空で構成されている。太陽の光が月の空を創り出すのか、或いは月光が太陽の空を作り出すのか。隣り合っていて交わらない二つの空。ただ一つだけいえることは、どちらかの空が存在する限り、必ずその対極となる空が存在する。光があるから、影がある。転じて、影があるということはどこかに光がある。

そんな詩的なことを考えながら脚を動かして、ふと思ってしまった。

私の世界はどうなのだろう。

私の心象世界は、いつまで経っても夜のままだ。明けない夜は無いというけれど、きっと私の夜が明ける時は　私が死ぬときだろう。白と黒。光と影はそれぞれがより多くのものを内包するために分かれた。光が内包するものがこの世の希望なら、影が内包するのはこの世の絶望なのだろうか。

……いや。それは違う。

だって、私の希望は。

この影の世界。夜。月の空の下にしかないのだから。

物思いしている間に、いつしか私はいつもの場所にやってきていた。

どうしてだろう。初めて夜の世界を出歩いたのは、いつになるだろう。発端は思い出せないけれど、確かにどこかに存在しているはずだ。私がこの行動を止められないのは、本来の目的とは別に、自分の行動の原因を知りたいからなのだ。

建物と建物の狭間。足音が残響し、心音さえ喧騒に思える静謐な闇。私はここで待ち続けている。いつか自分を理解してくれる人物が現れるのを。

どうしてこの場所を選んだのか、それも思い出せない。

そう　記憶を辿れば行き着く先はいつも闇の中。

深淵の中の静寂と静謐。出口の無いトンネルが存在しないのと同じ、明けない夜は無い。

けれど闇は違う。それはどんな陽の光にも拭えない、深すぎる闇。いつまでも明けない夜は、暗すぎる世界と昏い記憶を一層冷たくする。

それは捨てられない　私の記憶。

それは歌われない　私の孤独。

どこまでも深い暗闇の中で、私は泣いていた。

見方によっては鳴いている。……むしろ、そっちの方が的を射ていると私は思う。

「
吹き行く風に声を乗せて、私は歌っていた。
まるで小鳥が囀るように。」

声にならない声で歌う。

誰にも聞こえないその声は、私にだって聞こえない。けれどどうしてだろう。それは酷く哀しい、胸を焼いてしまいそうなほど熱い、絶望の旋律で象られた孤独の唄だと私はいつも思う。思ってしまう。星の光を見上げながら、たまに私の前を横切り去っていく人影を眼で追いながら、時には月に向かって、この唄は続く。

今夜もまた、誰かが私の唄に共鳴してくるまでは。

「兄さん。兄さんがあの人と特別な関係でないことは解っています。兄さんは嘘が下手ですから、本当のことを言っているということは容易に理解できます」

街灯に照らされながら、スポットライトを独り占めにするヒロインの眼は俺だけに向いていた。もっともこの舞台を客観しているのは俺だけなのだから、何の優越感もなく、相手は実の妹であるから欣喜なんてものもない。

あるのはただ、空は全てのことを理解しているのだという直感と。長く離れていたという事実に基づく、その否定だけだった。

「もう一度言います。これ以上、あの人とは深く関わらないで、兄さん」

これまでの他人行儀を捨てたそれは、空の本心から出る、皮肉でも非難でもない言葉だった。

「あの人は兄さんには危険すぎます」

「……それは何を根拠にして言ってるんだ」

空の言葉の一つ一つを、俺は否定できずにいる。

同じ日に、同じ人物を、別の人間二人から同じように否定されては、即断でそれを否定することは出来ない。ましてや他人に対してどこまでも肯定的な後輩と、読心術とも称せるほど異常な洞察力を持った妹に言われたのでは尚更だ。

しかしそれは讒謗でしかないという確信もまた、俺は持っていた。ややあつて、空は濁り無い瞳で言った。

「それについては兄さん自身が最も理解していると思いますが」
挑むような言葉は確かに真実としか言いようが無い。

御桜流深が無害であると確信している俺はその実、彼女が自分にとって危険であるという確信も同時に持っている。両者に優劣はなく、天秤は左右どちらにも下がらないまま静止していて、俺はどちらが正しいのか、判断できないでいた。

「空……」

「なんですか？ 兄さん」

「何でお前や暦が流深に対してそんななのは知らないけど、俺にはお前たちが正しいか間違っているか判断できない。だからお前の言うことには頷けないし、俺はこれまで通りに過ごして行こうと思う。……ていうか、お前が言っていることが正しいとしても、俺は今の生活を変えることはできないよ」

空の眉がぴくりと跳ねる。

一瞬で張り詰めた空気は肌を刺すようで、息苦しいというよりも痛々しい。

「悪い、空」

「……そこまで言う理由はなんですか、兄さん」

まるで理解できない。空の言葉にはそんなニュアンスが籠められていた。

「約束だから」

表情一つ変えないで言っていると、反比例して空の表情はどんどん悪くなる。おそらく今、空の心の中を除けるのだとしたら、意味

不明だ、とか何を言ってるんだこいつは、と鬼の形相で咆哮する妹の姿を窺えるだろう。

「誰との約束ですか、それは」

空の質問に、俺は答えない。

俺が黙秘権の行使を決め込んでしまうと、空はそれを一秒に満たない速度で感知し、一步前に出た。行儀の良い立ち姿が俺の身体の前に沈んで、浮かび上がる。生きてきた年数と男女間の成長の差をその威圧感さえ感じられる様でカバーしていた空でも、これだけの近距離では兄妹の身長差を隠しきれしていない。

「答えたくない、ってことね……」

呟いた言葉は、多分誰にも向けられていない。

空は視界の焦点を俺の瞳に合わせて、俺は瞬間、

抗うことの出来ない拘束感と、首筋にナイフを突きつけられたような悪寒を感じた。

「おい……空」

短い声と同時に、悪寒は消え去った。

強風の前に消灯する蝋燭のように呆気無く。海浜を引いて行く潮のように潔く。

一瞬尋常でない気配を感じさせた空の瞳の色は、普段の色に戻っていた。

「解りました。言いたくないことは無理には訊きません。兄さんがそれを正しいと思うのなら、わたしは否定しないし、非難もしない。ただし肯定も、援助もしません」

「……お前、その前に何か言ってただろ」

「さて、お腹も減ったし、早く帰って夕飯にしましょう」

「いや誤魔化すなよ。つつかそれ、どっか主婦くさいぞ」

「何か言いました？」

「……いや何も」

完璧すぎる笑顔が怖い。

ともあれ場は和やかな雰囲気を取り戻し、星空の下の夜は平穩を

肯定した。

「ああ、そういえば空」

さっきの街灯から四つほどそれを跨いで、何の前触れも無く俺は切り出した。今朝から訊こう訊こうと思っていた質問を思い出したのだ。

それはこの穏やかな夜のムードには不釣合いな質問で、空を呼び止めてからそのことに気づいた俺は、出来ればこの声が空の耳に届いていなければいいと後悔してしまう。

「はい？　なんですか？」

思いつきだけで口を開くのはやはり駄目だ。

願いは虚しくも叶わず。恨むなら自らの不運を。省みるなら自らの口軽を。

ここで適当な嘘をついてしまえば、それこそさっきの繰り返しになりかねず、そうしたところで空を欺くなど俺には出来ないだろう。質問を決行するのが最善の策だ。

「お前、通り魔事件の噂って聞いたことあるか？」

そういえば同じ質問をするのは今日これで二度目だな、などと思い出す。

「ええまあ」

迷う風も無く、空はあっさり肯定した。

「歌姫殺人のことですよね？」

かと思えば、新種のワードが飛び出してくる。

聞けば聞くほど謎が深まる。これはもしかすると誰かの仕込じゃないだろうか。

「歌姫？　……なんだその不適當過ぎる呼称は。この噂って、学年ごとに内容とか名前とかが違ってたりするの？」

「いえ。この名前は朔夜さくやさんが　　て言っても解りませんね。歌姫殺人はわたしがお世話になっっている先生がつけた呼び名です」

……そんな昼ドラのタイトルみたいな名前を付けるとは、どこかの誰かと同格かそれ以上のネーミングセンスだ。

「その先生って、お前の担任か？」

「いえ、朔夜さんは三年の担当です。たまたま気があったので、休み時間などに話をさせていただいています。……担当教科の準備室があるのは二年の校舎ですので、たまになんですけど……」

空の話し方は心底残念がっているようだった。

昔から空が他人に対して強い興味を示したことは無い。中学時代がどうだったのかは知らないが、俺は自分の妹が何かに執着している様子を見たことは無かった。その空が自ら話をしたいと望む人物というのは、一体どんな人物なのだろうか。

少しだけ沸いた興味はけれど、明日の行動をこの場で予定付けるほどではなく、俺はその教師から関心をなくそうとしていた。

「よかつたらわたしが兄さんのことを紹介しておきましょうか？
面白い方ですから、きつと兄さんも気に入ると思いますよ」

空が、こんなことを口にするまでは。

六月一日。天気曇り。

順調に上がっていく気温に季節の変化を感じている内に気が付けばカレンダーは五月から六月へと移り変わっていた。外は誰かさんの気分を代弁したような灰色。俗に梅雨と呼ばれる季節の到来を空は明確に示している。

「雨は降らないそうですよ」

しきりに窓の外を気にする俺に空が言った。

「今日は一日中曇りだそうです。まあ、天気予報なんて当てにならないから、一応傘は持っていて損はしないと思います」

「そうかい。それはありがたい助言だな」

今は朝食の席。どうでもいいことを描写しておく、和と洋のどちらにも一貫しない我が家の朝食は今朝はトーストに野菜を挟んだサンドイッチという洋食。

「あれ、もう学校行くのか、空？」

皿の上に残った自分の朝食を見てから問う。机の対面が既に片付けられていることから、空は俺が起床する以前に食事を済ませていたらしいことが推測できた。

驚いた風に問うと、溜息交じりの返事。

「ええ。……昨日言ったと思いますけど、朔夜さんにアポを取っておかなければいけませんから」

言われて納得する。が、それは納得こそすれど素直に飲み込めない返事だった。

「お前あれ、本気だったのか？」

「そうですけど、何か？」

「いや、普通学校の先生と生徒が話すのにアポとかって無いだろ」
「……確かにそうかもしれませんが、あの人は相当変わった人ですから。まあ、兄さんなら問題無いと思いますよ、きっと」

あまり納得のいく説明ではなかったが、これが空の言葉なのだからこんな言い方以外に説明のしようが無いということなのだろう。それにしても、いちいち話をするだけでアポが必要な教師って……相当な変人に違いない。

「なあ、空。俺やっぱその人と会ったの止めてもいいかな？」

少々弱気な発言に椅子から立ち上がった空は歩みを止めて振り向いた。

「大丈夫ですよ、兄さんなら」

「その大丈夫つてのが、俺には何かの呪文に聞こえるんだが……」

「それじゃあ、行ってきます。兄さんも遅刻はしないようにしてくださいね」

毎度のことながら俺の発言は無視して、空は部屋を去ってしまった。

結局残されたのはまだ見ぬ変人への不安だけ。それはおそらく本人と会うまでは確実に消えず、会ったとしても勢力を増大させるだけだろう。この際すっぱかしてやるのか。しかしそれではそのことが露見した後が恐ろしい。どちらにしろ、俺に喜怒哀楽の喜と楽は選べないということだ。

「はあ……。どうしたもんかな」

声を出してみると少しだけ気分が楽になる。

人一人減っただけで静まり返った部屋に音が欲しくなってテレビを付けてみるが、それは瞬時に後悔へと変わった。

「……うわ、やっちゃった」

画面に映し出されたのは子供の落書きのように歪な形をした、けれどまだそれが人の形であると解る白い線が引かれた地面。本来なら風化し灰色のアスファルトはしかし、白い落書きから所々はみ出して赤黒い。

それは間違いなく、血痕だった。

番組はニュース。この時間ならどこの局もそれくらいしかやっていないだろう。

報道内容は……状況から見て人死に沙汰であることは間違いない。テロップで確認したところ、どうやら映し出されているのは自殺の現場らしい。

テレビを点けたことが明らかに裏目に出た。

俺一人しかない部屋はそれ故に俺一人の気分でその空気を変動させてしまうのだ。と思うも俺はすぐにチャンネルを変えたり、テレビの電源を落としたりはしなかった。自殺の報道を明記するテロップには補足説明がある。

連続自殺、七件目。と。連続……って。

連続という言葉に俺が疑問を持つのと、アナウンサーがそれについての説明を始めるのは同時だった。自殺が始まったのは先月の頭から。その方法は様々で、今回は見ての通り飛び降りだったらしいことを若い男性アナウンサーが語る。

……どうにも引っかかる。

が、自分が何に引っかかっているのか解らない。結局それが解決する前に報道は終わってしまった。

暗い雰囲気の記事画面が切り替わる。調子外れな音楽とともに血液型占いが始まり、俺は皿の上のトマトサンドを残したまま席を立った。

午前中の授業が終了して、昼休みが始まると俺は早々に教室を出ていた。

昼休み開始直後に教室を後にするのはいつものことだが、今日の

俺は手に弁当を持っていない。これは弁当を持ってくるのを忘れたから、とか間抜けな理由があるのではなく、食事以外の目的があった教室を出たことを意味する。

朝。曇り空から雨が降ってくることを心配しつつ登校し、その心配が杞憂で済んだことを実感しながら席についていた俺の携帯が震えた。メール受信を意味するそのバイブレーションに伝えて制服のポケットから携帯を取り出し、それが空のメッセージであることを確認。内容は至極簡潔な短文だった。わざわざ引用してやるほどでもないその内容は、一言で言うなら認可通知。つまり例の変人教師が俺に会ってもいい、と承諾したことを意味するメールだ。

……空がどんな風に提案したは知らんが、そんなもん却下してくればよかったのに。

などと内心毒づきつつ今に至る。

俺は六月の湿気が漂う校舎の廊下を歩きながら溜息を連発。弾数制限のない嘆息が意識している内で五回に達したとき、目的地に到達した。すりガラスで中は確認できないが、人がいるのは明確だ。

一応ノックなんかを試してみる。

「はい、どうぞ」

想像していたのと違う、透き通った声がそう告げた。

俺は違和感を飲み込んでやや開き気味の戸をスライドさせて

ぱふ。……確かな質量を伴って落下してきた何かが、俺の頭部に衝突。

もふ。……竜宮城で貰った玉手箱を反対向きで開けたように頭の上から白い煙が降りてくる。

かこん。……おそらく初めに俺の頭上に落ちてきた何かが床に落ちる。

以上の三つは全て擬音語であり、聞く人によっては別の表現になっているかもしれない。

何らかのリアクションを起こす前に自分の置かれた状況を悟った俺は二三度目を瞬かせ、顎が外れたように口をぽかんと開けて

つまりは失笑していた。

啞然、呆然、茫然、自失。

「ちっ　　なんだ、つまらん」

その言葉で我に返る。と、初めに一言。

「は　　くしゅん！」

……意識に反して、盛大なくしゃみを一つ。

大量に吐き出した息のお蔭で視界を遮っていた霧　　もといチヨ

ークの粉は霧散した。

種明かしをしよう。誰でも小学生の低学年か中学年くらいの人にやっただことがあるかもしれない。スライド式の扉の間に黒板消しを挟んでおくという、単純だが悪質なブービートラップ。

確か日本語では『まぬけ騙し』の意味だったな。

うーん。つまりここでいう『まぬけ』というのは、もしかして俺か？

「……一応訊いときますけど、これを仕掛けたのって」

「無論。私だ」

即答。

……。

「何だこれくらいのイタズラで怒っているのか？　随分と狭量じゃないか」

……言葉が出ない。

「ん？　　……ああ、ちよつとちよつと！　何してるんだお前は」

背を向けて立ち去ろうとする俺を、焦った風に呼び止める。

「失礼しました。弁当食いに教室へ戻ります」

「待て待て。まだ何の話もしてないのに、もう帰るつもりなのか？」

「人の頭に黒板消しを落とすような人とは、話すことなんてありません」

無然として言い放つと、何故か相手は溜息なんかを吐いたりする。

……それって逆だろ？

「ちよつとしたイタズラだよ。別に悪気があつたわけじゃないし、

引っ掛かったお前の姿を録画して笑ってやろうと思ったけど止めた。だから気にするな。気を悪くしたなら、ていうよりもしているから謝ろう。すまん。私が悪かった」

悪意はなかった、か。イタズラって漢字で書いてみる。悪の戯れだぞ。

必死の説得にしては態度から億劫さがダイレクトに伝わってくる。この時俺は生まれて初めて他人に対して殺意を覚えた。この手に使用しても罪にならない拳銃が握られていたら……間違いなくこの場で発砲していたことだろう。

「……謝罪の意思がまるで感じられませんが」

「いつまでそんな所に突っ立ってるつもりだ？ さっさと入って来い」

……無視？

空が自ら俺を売り込んだりするほどの人物がどれほどの者かと思つたら、予想は悪い意味で的中していたらしい。この人、とんでもない変人だ。

いったん芽生えた腹の腸が煮えくり返るような感情と、それに伴うどろどろとした生暖かい衝動を押さえ込む。

このまま退いてしまつては後に空からどんな仕打ちがあるか解らない。

ここまできたら乗りかかった船かと諦めて俺は部屋の中へと歩を進めた。

一歩目。落とし穴でも仕掛けられてはいないかと、風呂の温度を確かめるようにつま先で床を突付いて確かめてみる。安全確認。異はないらしい。

「奇怪な歩き方をするな」

誰の所為だよ。と思つたが言葉には出さなかった。この変人になりきれない言葉を返してやっていたら、それこそ時間がいくらあっても足りないだろうと思つたからだ。

先入観に囚われつつもどうにか部屋の奥に設けられたデスクの前

まで到達する。と、そこに座った部屋の主は部屋の真中、縦に置かれたテーブルを指差し座るよう促した。言われるがままに俺は手前のパイプ椅子を引き、腰を下ろす。

てつきりブーブークツシュンでも仕掛けられているのかと思っただが、杞憂だったらしい。

「さて。空から聞いていると思うが、一応初見なんで自己紹介でもしておこうか。朱空朔夜、三年の国語科担当だ。この準備室は空き部屋を貰ったものだ。準備室と銘打っても、見ての通り私の私室となっているけどね。どうも、職員室とやらが好きになれないんだよ」話しながら朱空朔夜なる女教師はシャツの胸ポケットからタバコの箱を取り出し、紫煙をくゆらし始めた。……ここって確か、学校だよな？

咎めるような俺の視線に朔夜さんは、んっ？ とか言っただけを寄越した。

「それだよ。その視線だ。今時の職員室ってのはね、どうも禁煙が暗黙の了解として定まっちゃってしまってるらしいんだよ。いちいち校舎の外に出るのも面倒だろ？ まったく。世間は禁煙ブームとかなんとか言うが、私のような生粋の愛煙家には迷惑な話だよ」

学校への不満か、世間への不満か。おそらくはその両方だと思えるようなことを語ると、さて次は私の名前についてだが、などこの愛煙家さんは話題を変える。どうやらまだ続くだらしい。

「姓は朱空。発音が明けの空を表しているというのに名前は夜ときている。姓が名を打ち消してしまってるんだよ。妙な話だろ？ もしも名前に朔の文字がなかったら、こりゃあもう大変な矛盾だったところって訳だ。姓は血の名前、名は自らの魂の名だからね。ようするに、名字は自らの歴史を宿し、名前は自らの宿命を宿すといったところか？ もっとも、こんな考えは今時の流行じゃないけどな。最近では名前に対してオシャレなんぞを追求しようとしているから、可笑しな話だ。一族の中で確立するために人間には名字の他に個別の名が与えられると言っのにね。」

さて、どこからか論点がずれてしまっていたな？ ええと、確か自己紹介だったか。まあ、必要最低限の情報はこれで共有できただろうから私の方はこれで終わりにするでしょう」

彼女は一体なんの評論会議に出席しているつもりなのだろう、と考え始めた俺の思考を読み取ったか朔夜さんは話を区切った。

自分の話はこれで終わりだ、と告げる瞳が同時に次はお前の番だと俺に促す。

気乗りはしなかったが、先に名乗られた以上はこちらも最低限の情報を差し出す必要がある。……なんとなく、この人ならその必要最低限の情報を悪用しかねないような気もするが考えすぎだろう。

「二年二組、遙瀬橙弥です」

「ハルセ？ もしかしてお前、空の兄妹か？」

「ええそうですけど、空から聞いてませんか？」

どうにも噛み合わない。

空曰く、変わり者なこの人物は自分の気に入った生徒としか交流を持つとうとしないらしい。そのような変人に気に入られてしまう要素を俺は持っていないから、単に空の兄であるというネームバリューが買われたのだと思っていたのだが。本当の理由はそうでないらしい。

「ふうん。そうか、兄妹か。ははは、こりゃあ空との話のネタが増えたよ」

悩む俺はそつち退けで、変人教師は勝手に納得してしまった。

「ん？ 何か聞いたそうだが、質問があるなら遠慮はいらんぞ」

「はあ……。それじゃあ、朱空先生は何で俺と話してもいいと思っただんですか？」

素直に従って質問してみる。

「私のことなら名前で呼んでくれて構わないぞ。私も『先生』なんて呼ばれるのはこそばゆい。まあ、お前がそう呼びたいのなら好きにすれば良いがね。」

えっと、何で私がお前と話す気になったか、だったな。別に、大

した理由はない。空は私のお気に入り、その空からの紹介だったから話してみる気になっただけだ。それと、強いて言うのなら名前かな。トウヤって名前は聞いていたからね。ほら、私の名前、ソラとは『空』って文字、お前とは『ヤ』っていう発音が同じだからそんなどうでもいい理由で俺はこの変人のお眼鏡に適ってしまつたらしい。しかしそのどうでもいい理由は別の部分で俺の違和感を取り除いていた。俺は朱空朔夜という人物を直接この目で見るまで勝手に男だと思っていた。それは名前の発音が自分と似ているからというただそれだけの簡単な理由だったのだ。

はあ、と溜息のような素っ気無い返事をする、彼女は気を悪くした風もなくさらに続けた。

「しかし兄妹揃って、妹は名字に、兄は名前に縁があるとはなかなか面白い偶然じゃないか。私が空のことを気に入ったのは偶然のようで実は必然だったということだな。うん、実に面白い神秘だ。ははは」

縁とか言うほどのことじゃないと思う。

面白い、と語るのは彼女の本性かららしい。これまで無表情、むしろ持ち前の目付きの悪さの所為で不機嫌にさえ見えた彼女の表情がここへきて綻んだ。思えば、俺が朔夜さんの全容を把握したのはこれが初めてのことになる。部屋に入るなりトラップを炸裂させられた為それどころではなく、むしろ足元や頭上にはかり気を配っていたからだ。

端的に言えばドラマにでも出てきそうな麗人秘書。ただ常に相手を威嚇しているような鋭い視線はそれに当て嵌まらない要素なのだが。身長は女性にしては高めで、俺と比較して推定すると百六十五センチくらいはあるだろう。ただそうでありながら、女性であることを明確に表す細く華奢なボディーラインはモデルだと言っても通用するかもしれない。もっとも、人を陥れるような性格の悪さを隠蔽し目付きをどうにかして矯正することが出来なければ人気も出ないと思うが。

余程俺と空の血縁関係背景を知って愉快になったか、朔夜さんは滑稽なほどに笑う。それはもう、腹を抱えての爆笑と言っても過言ではない。

「ははは はは」

一頻り笑い、朔夜さんは煙草を口にくわえる。肺に溜め込んだ煙を吐き出して、

「それで、お前は私に訊きたいことがあって来たんだろ？」

スイッチを切り替えるように、かちりと話題と表情を切り替えて俺を見据えた。

“ 久しぶり ”

寒空の下で、表情の無い少女はそう呟いた。
声は冷たい風に乗って空に消えていく。

少女の言葉に応える者はない。

“ ずっと、待ってたんだよ。ずっと、ここで ”

無表情。……そう思える少女の表情は本当に感情が無いのだろうか。

私は知っている。

この少女は何の感情も抱かないでここに立っているのではないと。ただ、今の心情を表に出してしまえば認めたくないこの現実を受け入れてしまうことになるから。自分は現実を肯定するように自らの感情を干渉させてはいけないのだと、必死になって言い聞かせていた。

そう、何度も、幾度も。

現在からの逃避。いつか本当に笑っていた自分が死んでしまわないように。

少女は 私は、この現実から目を背けなければならなかったのだ。

だから、無表情の仮面を被って過去にのみ自分を肯定していた。

“ 私の声は、届いていますか……？”

泣きそうな声が尋ねる。応える声は無い。

ただ虚しいだけの余韻は、冷たい空気に溶けていく。

思えばこの時から。

私は、私では無くなっていたのではないか。

感情の浮かばない少女。私は心の奥に総ての感情を沈めていた。たった一つ。

この暗い、どんな光の侵食も許さない昏過ぎる孤独を除いて。

最後に一度だけ。少女は驚愕するように眼を見開いた。

白く細い指が、頬をなぞる。片方の瞳から零れてしまった涙。その残留する暖かさに触れて。

私の中の何かが、崩れた。

少女は固い地面に両膝をつく。冷たい空気の中、彼女に同情する者は無い。誰も、彼女に声を掛けたりはしない。誰にも、私の声は届かない。

幼い頃の幻を瞼の裏に浮かべて。

少女は自分と同じ名字の刻まれた墓石の前で泣き崩れていた。

厚い灰色の雲が覆った空。

突然一変した世界に私は自分がそれまで目を閉じていたのだと思いき知らされた。

眠っていた……ということではないだろう。ただ薄らぼんやりとした意識の微睡の中で、自分は夢とも追憶ともつかぬ幻想を見ていたということだけは理解できる。

幼い日の記憶。出来ることならどんな記憶よりも先に忘れてしまいたい記憶だけれど、そう思えば思うほどに私の脳はこの記憶の忘却を拒む。……自分の意思に天邪鬼な自分の脳。これほどに煩わしいものは無い。

私は空に向かっていた視線を落とす。

私が今背を預けているフェンスの対面にはいつもいるはずの少年がいなかった。

「……」

短い、沈黙。

この場に自分しかいないのだと解って、私は少しだけ残念に思ってしまった。

まったく、こんな感情はいつ以来だろう。

それはきつとさっきのことが原因だと思う。

こんな自分にもまだ人間らしい感情が残っているなんて。

「こんな、人殺しの私に。」

「」

何かを口にしようとして、私は唐突に口を閉ざした。

じとつとして肌に纏わりつく空気を揺らして、屋上の扉を開く重い音が私の耳に届いたからだ。普通の生徒ならここには来ない。私は扉を開いた人物におおよその見当がついていた。

けれどそんな私の予想が外れているのだと、現れた人物を見て気づかされる。

この時の私は、正直に言うに驚いていた。

自分の表情がどうだったかは解らないけど、少し昔の私なら両目を大きく見開いて驚愕に愕然としながら現れた人物を直視していたことだろう。

二人目の屋上の来訪者は私が予想していた少年とはまるで違う、少女の姿をしていた。

顔立ちや背丈から推測して彼女はおそらく私と同級生。

漆黒の髪を生暖かい風に靡かせる少女の瞳は髪の色に揃えた漆黒。

違うと言えば濡れているように艶のある彼女の髪に対して、その瞳は深すぎる黒色。目を合わせていれば、それだけでこちらの心の奥まで見透かされてしまいそうな、そんな黒色。

彼女は整った顔を二三度左右に振るい、この場に自分を含み私と二人だけしかいないことを確認する。と、振り子のように揺れて戻ってきた少女の顔がぴたりと私に向いて止まる。

目が合った瞬間。私は、何故か背筋が凍るように冷たくなるのを感じた。

何かが、違う。そう違う。

初見と今とでは明らかに少女には変化がある。

重たい鉄の扉を開き、最初私の前に姿を現した少女が太陽ならば今の彼女は月。

対極であるはずの二つの存在を、一つの存在が感じさせている奇怪。

「初めまして」

無害を極めた笑みを作って、少女は言う。

その表情は私にも解るほどに暖かさがあって、見る者全てを安心させる笑顔だと言うのに。

私はまるで、首元にナイフを突きつけられているような恐怖を感じていた。

暖かさを伴う太陽の光と、冷たさを伴う月の光。

傍観する者には前者。だが直接それを向けられた者には後者に感じられる笑顔。

どう反応するべきなのか狼狽する私に、彼女は気を悪くするのではなくむしろその反応が当然であると言うかのように私から視線を外し空を見上げた。

「嫌な空。雨はまだ降らないのかな」

心のそこから今の空模様を憂う声。憂鬱な面持ち。

「まあでもそのお陰であなたとお話が出来るんだから、今日の天気には感謝するべきかな」

雨だつたら流石に屋上なんかにはこないでしょう？　と言って、再び私に向けられる微笑。

けれどそれは再び私の意識を凍結してしまうことはなかった。

……私と、話？　彼女は、今確かにそう言った。意味は明白。けれどもその意図が解らない。確かに興味本位で私に声を掛けてくる人間は皆無ではない。毎日ここにやってくる男子生徒もその一人だけ、この少女は違う。

そう。興味本位からの行動ではなく確かに目的を伴った行動。

短い彼女の言葉だけで何故か私にはそれが理解できてしまった。

「単刀直入に訊くね、楠さん。」

人を殺した気分って、どんな気分？」

それは。

私の中の何かを塞ぎ止めていた堤防をあつさりと決壊させてしまう質問だった。

何年ぶりだろうか。確かに感じる　恐怖。自分と同年代のはず

の少女が、今は何よりも怖い。

「え」

知らず、そう呟かされる。

何年も感じることの出来なかつた自分の感情に戸惑いながら、言葉にならない心中の声は、私の意思に反して外に出てしまっていた。初対面の相手が何故か自分の名前を知っていること。自分しか知りえない事柄を知っていること。

「なんだ、まだそんな顔出来るんだ」

少女の声には僅かに驚きの韻を踏んでいた。

私はまだ、目の前の相手が何なのか解らない。

何故だろう　この相手には自分の全てが見透かされている気がする。初め彼女の瞳に魅入られた時に感じた直感的疑念は、いつしか彼女の言葉から得る実感で確信に変わっていた。

「あなたは……なに？」

不意に呟いた疑問は、けれどこの上なく今の私の心中を表してい

た。

「さあ」

誤魔化す風ではなく、むしろそんなことは自分が聞きたいと言う風に彼女はそう告げた。

この時、厚い灰色の雲を見上げる黒い瞳が何故か濡れているように私には思えた。

儂げな横顔。その表情を見てようやく理解する。目の前にいる相手が、この少女が自分と同類であるのだと。

それまで喉に詰まって息苦しかった重い空気が少しだけ軽くなつた気がした。

「自分が何で、どうして生まれてきたのか……なんてことは誰にもわからないことでしょうか？ そんなことが解っているのなら、わたしはこんな所にはいない。人はみんな、生きるために生まれてきて、その意義を求めて与えられた時間を削っていく生き物だから。……持論なんだけども、これはね」

少女と目が合っていないからだと思う。

語る少女の姿を私は落ち着いた心中で眺めていられた。舞台の上で独白する女優を眺めている心境に似ている。それが他人事であるとの無意識に思ってしまったということも、それが他人事であるというのにそれを何故か自分に当て嵌めてしまう事も。

空に浮かんだ月を見上げるように、そこに立つ存在が自分の遠くにあるものと解った上で私は少女を見つめる。

嗚呼、そうか。ようやく気がついた。やっぱり彼女は私なんかと同種ではない。同じ方向に傾いているとはいえ、彼女はもっと別の。

「わたしの質問には答えたよ。次はあなたの番。楠さん、答えて。

あなたは、あなたの歌で人が死んだことをどう思ってるの？」

同じ質問。

同じ表情と同じ声で再度問われた私はけれど、さっきのように動揺はしなかった。

何故だろう。一番触れられたくない筈の場所に触れたというのに、私はこんなにも落ち着いている。こんなにも哀しいのにどうしてこんなにも、嬉々としていられるのだろう。

私は私の心に気づいた途端、塞き止めていた感情が溢れ出すのを確かに感じ寸での所で蓋をした。

「……………」

私は答えない。

数秒前までであった温もりを押さえ込んで、もう一度自分を空っぽに引き戻す。

その様子を眺めていた少女は質問を黙殺する私におそらくこれが最後になる笑顔を向けた。

「答えたくないみたいだから、質問は撤回するよ。わたしが知りたかったことは、もう十分聞かせてもらったし」

それじゃあね、という別れの言葉と同時に少女の髪が翻る。言葉は、本当の友人に掛けるように何気なく。また明日会えることを前提とした軽い口調だった。

私はその背中を見送ることしか出来ない。

きつと、まだもう少しここにいてほしいと思うこの感情ももつすぐ消えてしまっだろう。

扉に手を掛けると少女は不意に行動を止めて振り返った。

「ああ、そうだ。気付いてないみたいだから言っておいて上げる。あなたの言葉はね、ちゃんと誰かに届いてるんだよ、楠さん」

この先二度と会うこと無い少女は最後にそんな言葉を残して立ち去った。

どこか緩んでいた部屋の空気は朔夜さんの一言で張り詰めた。

紫煙はゆらゆらと昇って、天井にぶつかると、その様子を目で追うという無駄な時間を三秒ほど過ごし、俺は口を開いた。

「聞きたいことは大方予想が付く。教えるのは空のスリーサイズでいいんだな？」

「いや、なんでそうなるんですか!？」

先手を打たれて、質問とは違う言葉を口にしてしまった……。空のヤツ、一体どんな風に俺のことを話しているのだろうか。

疑うべきは実妹の言動か、それとも変人教師の思考回路か。

答えは歴然としていた。

「なんだ。気にならないのか、お前？ 健全な高校生男子なら、それくらい恥じることはないと思うが」

「健全な男子高校生は妹の身体数値を気にしたりはしません」

「他の生徒がいいのか？ リクエストを聞いてやろう」

「ねえよ、そんなもん！」

先の問いの解答。間違いなく後者。そのことを俺は改めて承知する。

肩で息をする俺を朔夜さんは冷たい目で見ていたが、やがて動物園でまったく動かない動物に興味をなくした子供みたいに視線を外す。

無慈悲な表情が紫煙を吹き出した。

「冗談だよ、本題に移ろう」

遊んでいやがったな、この人。

朔夜さんはもう一度煙草を口から離す。

口から紫煙を吐いた後もそれを指に挟んだままだった。

「歌姫事件。最近流れてる噂を私はそう呼んでいる。ああ、ネーミングがダサイとかの批判は一切受け付けないからな」

人のネーミングセンスについてツッコミを入れるのは流石に飽き飽きしている行動で、俺の中の不毛行為ランキング不動の一位だ。そんなことにわざわざ労力と時間を割くほど、俺は愚鈍ではない。指摘拒絶というのなら喜んでそれに従おう。

朔夜さんは机に肘を突き、手の甲で作った台座の上に顎を載せる。「話をする前に確認しておきたいのだが、お前はこの件についてどこまで知っている？」

「殺人を犯さない通り魔の噂、てことぐらいです」

「そうか、だったらそこから始めよう。」

そもそも通り魔、という言葉の根源的事件は十九世紀末のイギリスで起きた連続殺人で、その際には五人の女が殺されたのだが……それについて長く語るつもりはない。この事件以来、世間では路上で起きた殺人、或いは傷害事件を『通り魔』と呼んでいるわけだ。その類の事件を一つ一つ挙げていけば一概に全て同じものとは言えない。動機 怨恨、衝動、現状打破。被害者の数、その共通点など、違う点を上げていけばきりが無い。だがそれでも唯一共通している部分、それは通り魔と呼ばれる事件には必ず殺人衝動が付き纏う。どれだけ綺麗な理由があろうと犯人は必ず被害者に対して殺人衝動を持っているはずだ。

だが今回の件はどうだ。誰も殺さない通り魔？ そんなものは通り魔でも何でも無いよ」

淡々とした口調で朔夜さんは語る。感情が伴わない語り口調。それに合わせて、語る彼女の瞳は無慈悲な色に満ちていた。

「突然だが遙瀬、お前は人間の死の種類について二つの死がある事を知っているか？ 医学的な面で言う、脳死や心臓死などは別にして」

それまで完全に聞き役モードに入っていた俺は、突然話を振られて動揺した。

正直先の長い話を頭の中で整理している間に次の話が始まってしまったために、今自分に当てられた質問の意図があまり掴めていない。

内心で焦っているのを悟られないように視線を朔夜さんから外す。思考。題目は死。

死、といっても俺はまだまだ高校二年生。 齢十六の若造でしかない

い。……そんな俺に、死について卓越した意見を求めるといのは無理がある。

が、どうということかこの時ばかりはそんな考えは浮かばなかった。授業中に教師から質問を受けるときとは違う。俺の脳裏には質問に対する解答が瞬時に浮かび上がっていた。

「一つは言葉通り、臨終を迎えること。もう一つは……ええと、その人物が周囲から忘れられること……ですか？」

巧い言葉が見当たらず、後者においては詰まりながらの返答になった。

「ほお」

短い声は朔夜さんのもの。睨む様に細めた目とは裏腹にそのイントネーションは感心しているようだった。

「なんだ、私が説明する手間が省けたな。ふうん。お前、腐っても空の兄だけのことはあるということか」

「褒めてるんですか、それ？ つうか、勝手に人のこと腐らせないでください」

などと反駁してみても簡単に流されてしまうだろうことは理解していた。

朱空朔夜という人物の大まかな人物像は昼休みの短い時間でも簡単に作成することが可能だった。

「知っているのなら話は早いな。話を進めよう」

「……やっぱり」

「あん？ なにが、やっぱりなんだ？」

聞こえないように、さっきよりも明らかに小音量呟いたつもりだったが、この変人の聴力は変なところで秀でているらしかった。ことういのを本当の地獄耳というんじゃないだろうか。

「いえ、なんでもありません。話を進めてください」

呆れて話の進行を促すと、そうか、なんて言っつて朔夜さんは話し始める。

「お前も知っていると思うが、人間という生物は二度死を迎える。

一度目は脳、肺、心臓の三つが機能を停止させたときに訪れる肉体的な死。そして二度目は、既に命を亡くした人物が記憶として誰かの中に残留している状態を前提とし、その記憶が何らかの形で失われたときに訪れる精神的な死。そうだな、例えばここに遙瀬橙弥という少年がいるとしよう。その橙弥少年はある日交通事故に遭い、死の一步手前で生還する。だが、その時橙弥少年には身体的な異常は何も無かったが目が覚めると同時にそれまでの記憶も失われていた。さて、この場合目が覚めた少年は、一体どのようにして自分を『遙瀬橙弥』として認識するのだろうか？」

「……無駄だと解つていますけど、一応言つとききます。例え話でも交通事故に遭つた被害者を目の前の人物にするのは止めた方がいいですよ」

額に手を当てて、俺は慥然として言い放つ。もし仮に、とか言うけど俺はここに現存しているんだ。……うん。帰りは車に気をつけて帰ろう。案外交通事故を起こした車の運転手は朔夜さんだったりするのかもしれない。

もっともな筈の俺の意見に、朔夜さんは何故か気を悪くしてしまつたらしい。

「例え話だ。いいか？ 私が言っているのはあくまで私の話の中にだけ登場する『ハルセトウヤ』だ。お前とは何の関係性も無い。気に入らないというのなら言っておいてやろう。『この話はフィクションであり、登場する人物及び地名、それらは全て現実とは関係ありません』。これで満足か？ これでもまだ足りないというのなら、私の話に出てくるハルセトウヤとお前が別人であることを論理的に説明して」

「あー、いや……もう……なんかすいません。解りました。解りましたから、話を戻してください」

なぜ俺が謝らなくてはならない？

だったら初めから文句をつけるな、と朔夜さんは悪態について脱線していた話題を修復した。

「まったく。お前が余計な口出しをするから、どこまで話したか解らなくなった」

「……すいません。確か話は目が覚めた少年はどうやって自分を『遙瀬橙弥』だと認識するのか、だったと思います。……そりゃ自分に記憶が無いんだったら、他人からそれを教えてもらうしかないでしょう。入院した病院の担当医とか、家族とか」

考えるまでも無い単純明快な解答は考えずとも俺の口から紡がれた。それに間違いが無いということは、朔夜さんが一度首を縦に振ることで肯定される。

「その通りだ。他人とは自分を映し出す鏡だ。所詮人間なんて生き物は、他人なしでは自分を認識することは出来ないということだ。

……だがもし、その少年が自己の存在を定義する物を何も持っていなかったとしたら？ 少年の身からは少年の身分を現す持ち物が一切出ず、彼の家族も姿を現さない。こんな状況では少年に自己を認識される術は無い。人間が自分を自分と認識する方法は二つ。一つは脳の中に保存された記憶を再生し、再認する方法。内側からの認識だ。そして二つ目は他人、或いはそれまでの自分が遺した何かから得る認識。外側からの認識だが、今の状況では少年はどちらの手段を取る事も不可能だ。

するとどうだ？ 少年と、事故に遭う前の少年である『遙瀬橙弥』を結びつける存在はどこにもない。必然、それまで存在した『遙瀬橙弥』という人物は永遠に忘却へと葬られてしまう。自分は自分。この世界に一つしか存在しない、唯一無二だからな。それはつまり、それまで在った『遙瀬橙弥』が死んだことと同義だろう？」

最終的には殺されてしまうのか、遙瀬橙弥は。
俺は呆れるのさえ忘れていた。

理由は二つあって、この時既に朔夜さんがどんな人間かを理解していたことと、もう一つは昨日のことを思い出していたから。そうつい昨日の昼休み。俺はこれに似た話を聞いていた。あの時は今回ほど長い前フリはなかったが、結論は同じなのだ。そして話の発端

も同じ。

「つまり今回の通り魔　歌姫事件の犯人は、被害者から自己に関する記憶を全て奪った、てことですか？」

訊くと、朔夜さんは小さく唸って黙り込んでしまった。それまで饒舌だった所為でそれがなんとなく不気味に見えてしまう。

「奪った、という表現は適切ではないが、何らかの方法で自己を認識できない状態にしたということだから、まあ……それでも構わない。重要なのはそこではないからな」

遠い目をして、朔夜さんは煙を吐き出す。

今彼女が何を思考しているのかは不明だが、少なくとも被害者への同情などではないだろうことだけは解る。見ず知らずの他人が奇妙な死に方をしたからと言って、俺ですらそんなことにどうこう深く思ったりはしない　とここまで考えて、ぴたりと思考が停止した。

何かが可笑しい。でも何が。そこだけが不明瞭なままで取り残されている。

「こんな子供の噂話。死の順番が逆転する、なんて奇怪な事柄がなければ興味はないんだけどね」

「死の順番が、逆転する？」

思考の果てのどこかに存在する矛盾を探す。そんな無為な行動を中断させるのに、朔夜さんの一言は十分過ぎた。

とつさに聞き返す。すると朔夜さんは、ああ、とか気の無い返事をよこしてから言葉の意味を説明し始めた。

「お前も知っているだろ？　最近巷を賑わせている連続自殺」
それなら知っている。

丁度今朝のことを僅か半日足らずで忘却しきってしまうほど、俺の記憶機能は低スペックではない。

朝食の席。俺と朔夜さんを引き合わせるために普段よりも早く家を出た空に取り残されて、一人朝食を取っていた最中のこと。会話が無く静まり返った状況を打破しようと点けたテレビで報道されて

いた事件だ。しかし、それとこれとで関連性はあるのだろうか。

「一連の自殺だけどね、自殺をはかった人物には皆それをする理由が無かったんだ。周囲の人間は全員、自殺した人物に関して自殺する数週間前から様子が可笑しかったと口を揃えて証言している。『壊れていた』とまで言ったらしいから、異常だ。」

考えてもみる、ただの自殺を、事件としてわざわざ報道すると思うか？ この国で自殺する人間なぞ、月に数えて三桁は軽く越しているだろう？ この事件を処理した者が言うには、自殺した人間は自殺をする前から既に死んでいたそうさ。ここで言う死は、さつき言った精神死。つまり認識的な死、なんだがね。大方の見方は薬にでも嵌っていたのだろう、とのことだ。だが実際は違う」

話を区切るたびに吸っていた煙草をここにきて朔夜さんは灰皿に揉み消した。

「自殺した人達が、歌姫事件の被害者だって言いたいんですか？」

見当は付いていたし、その方が納得がいく。

俺の発言を朔夜さんが肯定して、ようやく解った。俺が気になっていたのはほんの些細な矛盾。見落としていたこの『噂』の本質だったのだ。

そう。言うなれば今回の事は全て、最初から最後まで幻でしかないんだ。

どれだけ信憑性を得て、どれだけ作り上げられた話だとしてもそれは所詮噂。どこまでいっても現実ではないのだ。俺は今日まで様々な情報を得てきた。が、それらはどれも、らしい、とか、そうだとかそんな確証のない情報でしかなく、具体的にそれがどんなものなのかその核となる情報が欠如していた。

朔夜さんの言っていることを纏めるのなら、今起きている連続自殺で死んだ人物は歌姫事件の被害者だと言うことだ。それがどういうことなのか、つまり彼らは何らかの形で噂の犯人に遭遇している

その結果自我の崩壊を余儀なくされた。自分が誰なのか、それが解らないというのは実は相当な恐怖だ。四方八方を壁で囲まれ窓さえも無く一切の光が無い真つ暗な空間に閉じ込められた人間がどうなるか、狂気に理性を押しつぶされ最終的には死ぬ。今回の事はそれと何ら変わらない。

自己という光を失い、闇の中に閉じ込められた人間。

自分が誰なのか解らなければ自分と外界との繋がりを見出すことも不可能。

その絶対的な孤独に押しつぶされ与えられる死 確かにこれは朔夜さんの言う通り『孤独死』という命名が適切だろう。

付け加えておくと、死の順番が逆転する、というのはつまり本来なら先に肉体的な死を迎えてから次に精神的な死を迎えるという普遍的な死とは違い、今回は精神的な死を迎えてから自殺により肉体的な死を迎えたということだった。

引つ掛かっていた疑問や矛盾は全て解決した。のだが、止せばいいのに俺はまた新たな疑問を発見してしまう。……深く追求すればするほど、どんどん深い疑念が生まれる底無し沼みたいだ。

「なあ、遙瀬」

自分の思考に没頭していたために、朔夜さんがデスクから立ち上がったことに気付かなかった。

彼女は新たな煙草に火をつけて遠い目を窓の外に向けていた。

「ここまで話せばお前も気付いていると思うが、一つだけ解らないことがある」

それは、ようやく俺が彼女と同じだけの情報を共有出来たと認める言葉。

その発言に俺は無言を返答として肯定した。

「筋は通るが……人を孤独死させる方法、それだけが解らない。一人や二人なら偶然精神面の弱い人間だった、で済むが……。人間の世界とは結局認識でしかない。自分の認識出来る範囲で自分は絶対に孤独なのだと それも自我を見失うほどに その人間の境

遇や周囲環境を一切無視して思い込ませることなど、普通なら不可能だ」

彼女にしては普遍的な疑問だった。

そう。生きていく上で何の干渉も無く過ごせる人間などいない。故に、人間に『自分は世界で一人きりだ』と認識させ、あまつさえ自我を崩壊させる方法なんて。

「遙瀬……集団無意識、という言葉を知っているか？」

それまでとは違って、朔夜さんの言葉からは自信が感じ取れない。おそらく確証の無い憶測を言おうとしているのだろう。

「総ての人間はみんなどこかで繋がっている、というアレですか？」
それと同じ様な話を俺は過去に聞かされている。

「ああ。人間は現象であり発生した根源は総て共通している、という考えだ。霊長には極稀に、その根源に通じる存在が発生するんだ。その存在は無意識の内に根源へ触れる方法、深層心理へアクセスする方法を理解している。根源に通じるということは、その存在にあって世界はその存在の意思一つでどうにでも出来るということだ。無論、そこから流れ出た人間も。ならば、その存在にとって人間を特定の感情で縛ることも容易いことだろう」

「歌姫事件の犯人が、その根源に通じる存在だって言いたいんですね？」

朔夜さんの言いたい結論が解って、俺は言った。

彼女は肯定も否定もせずに続ける。

「そうだとしたら、その存在の持つ感情は絶対的な『孤独』。無人島に一人残された、なんてものじゃない。真つ暗な世界で自分独りだけが取り残された、と言ってもまだ足りないくらい。そんな強烈な孤独を強制的に共鳴カタルシス、或いは同調シンクロさせられれば、精神が狂っても可笑しくは無い」

「共鳴する……孤独ですか……？」

自分でも気付かない内に俺の声は怖気を含んでいた。

一切の強がり排除して素直な感想を述べるのなら、

それは、とんでもない恐怖だ。

理由は上記に同じ。そんなものを抗うことさえ許されず強制的に与えられてしまえば。

「全て推測の域を出ないがな」

と最後、朔夜さんに付け加えられる。

犯人についての分析はこれ以上無意味だと思ったのだろう。

そもそもこれまでの全ては常識からはみ出した、むしろ逸脱したと言っていることだ。いくら奇人変人の類である朔夜さんであろうとその心理を見極めることは出来ないらしい。

「あの、朔夜さん」

話は終わりだ、とばかりに黙々と煙草だけを自分の世界に受け入れる朔夜さんに俺は声を掛ける。一つ目の疑問はとりあえず保留。仮定の結論なら得られたし、思考は次へと切り替わる。

連続通り魔の噂、連続自殺事件、孤独死。それらが繋がったことにより生まれた疑問は二つ。一つは仮解決した孤独を与える手段。そしてもう一つは

「その噂、妙だと思いませんか？」

「どういうことだ？」

「いや、だから」

口にしかけて思い出す。瞬間的に断片的だった記憶のピースが逆流し、一つの結論と完成したパズルを俺は思い描く。

「なんだ？」

「あ、いえ……なんでもないです」

そんなことをいってお茶を濁す。

それは最後の疑問、その正体こたえが浮かんだからだった。

誤魔化したのは明白で、それは朔夜さんにも見破られてしまっている。訝しむように瞳が細められたのはその証拠だろう。俺は悪戯が母親にばれた悪ガキのように、苦笑い交じりに喉から言葉になら

ない声を出す。……どうしよう、この状況。

「ふん。いいだろう」

「何がいいのだろう。」

「最近、この学校では風邪が流行っているらしいな」

「何を言い出すのかと思えば。朔夜さんは空の言葉を復唱した。」

「もしも先の仮定が正しいものとして、頭の中が孤独で満たされてしまったのなら、お前は どうする。学校なんかには、行くと思うか？」

そんなことは決まっている。学校に行くどころではない。外に出れば目に映る全てが自分の知らないものであり、同時にそこから未知を得ることで恐怖する。おそらく部屋に籠ってしまっだろう

「あ」

そこまで考えて、朔夜さんの言いたい事が解った。解ってしまった。た。

教室の様子を思い出す。昨日欠席していた橘は 今日も学校に来ていなかった筈。

怖気が走った。背筋を濡れた蛇が這い上がってくるような感覚。

「ほらっ」

場に不釣合いな声に自我を引き戻される。と、朔夜さんはまた立ち居地を変えて窓際から俺の真正面に移動していた。胸に突きつけられている、破り取られ折り畳まれたノートの切れ端。……なんだこれ。

「ラブレター、ですか？」

「口は災いの元だ。お前は自分の何気ない発言で、土に還りたくはないだろう？」

「……冗談です。何ですかこれは？」

「持っていれば役に立つだろう。まあ、気にせずに受け取れ。そして光栄に思うがいい」

彼女の発言は要領を得ない。

とりあえず俺はその紙切れを受け取り、制服のポケットに封入した。

「あ、俺そろそろ教室戻ります。弁当もまだ喰ってないんで」

最後の才子として付け加えるにはベタかもしれないが、俺が言い終えるのと昼休み終了のチャイムが鳴り始めるのが奇跡的に同調した。

かくして、昼食抜きで午後の授業を受けることを余儀なくされた俺は、朔夜さんの悪魔的な大爆笑に見送られて国語化研究室（命名、朱空朔夜）を後にした。

7 (後書き)

めちやくちや長くなってしまいました……！

書き始めると止まらなくなってしまった事が原因です。

ちなみに、更新が今日まで滞っていた理由(言い訳)は、ブログの方に挙げております。

それでは読者の皆様、今年も本作をよろしくお願いいたします！

(- -)

幼い日の想い出。

記憶のどこで確かに残留する、私の過去。

いつの日のことだったかはもう覚えていない。

けれど、それが思い出したいくない記憶であることだけは、曖昧な
残滓に対してでも確信を持つことが出来る唯一の事柄だった。

記憶の中の私。幼い子供そのものである少女の目は、社会の厳し
さや汚さを知らぬ、純粋で明日への希望に満ち溢れた光で満ちてい
た。

ある日の夜中。

理由は解らないけれど、私は電気も点いていない廊下に一人で座
り込んでいる。映像はヒントがズレた写真のようで、そこに在った私
の記憶は、雨に打たれて字が霞んだ書物の様。古い映画のような記
憶の再生。パジャマ姿で膝を抱える私は、そこに在る闇だけを見つ
めていた。

やがて、声が聞こえてくる。

少女の背後から聞こえるそれは、少女が背を預けている扉を一枚
隔てて闇の中に響く。

私は、いつもここで思い出すのだ。

少女がこうしているのは、この声を聞くためだったのだ、と。

そうして目的を果たした私は、けれどその場を離れようとはしな
い。

時刻は深夜。既に、日付は変わっている。

深淵の中で生きているのは、二人の男女の声と時計の針の音。それと、私の心臓の鼓動だけだった。

やがて。

穏やかだった会話は少しずつ不穏に変わっていった。

泣き出しそうな感情を抑えながら、会話に耳を傾ける。

熱くなる瞳。大きくなっていく鼓動。感覚が短くなっていくと錯覚する時計の針の音。

会話は既に討論へと変わっていた。

男の怒声。

女の泣き声。

私は二人の会話の内容を知っていた。

二人 両親は一週間前から、每晚私が眠りについてからこうした言い争いを続けていた。いや、本当はもつとずっと前からかもしれない。一週間前の晩。トイレに起きた私は、それから每晚二人のやり取りを盗聴している。

やがて声は、耳を塞ぎたくなるほどに悲痛な叫びに姿を変えていった。

かたかたかた。

上下の歯がぶつかりあって、そんなリズムを刻む。

寒いわけでもないのに膝は震える速度を上げていく。

やがて零れだした涙は頬を伝って、床に落ちる。

両親の会話を聞いていれば、自分が堪え切れず泣いてしまうことは解っていた。だって、もう一週間もこうしているのだから。それでも私は二人の会話を毎晩聞いていたのだ。どうしても、それを聞き逃してはいけない気がしていたから。

何よりも。自分が眠っている間に、二人がいなくなってしまうのではないかと、心の底から恐怖していたから。

曖昧すぎる記憶は、そこから先を思い出させてくれない。

深すぎる闇はやがて孤独になって、私の中に充満した。

茜色に染まった空と道。

放課後になって俺は、とある理由からクラスメイトである橘湊人の家に向かっていた。

そのとある理由というのは、そもそも高校生がクラスメイトの家を訪ねるのに大した理由が必要なのかは謎だが、昼休みの一件だった。

朱空朔夜なる変人教師を空に紹介された俺は貴重な昼休みの時間を割いて彼女との対面を果たしていた。無論そこに俺の希望は含まれていないし、拒否権も与えられてはいない。お陰で昼飯を喰いそびれた、というのは百歩譲って気にしないでおくにしても、部屋の扉に仕掛けられたトラップには流石に憤怒を抑えきることは出来なかった。

そんなこんながつい何時間か前にあつたのだが、それはそれで全くの無意味というわけではない。事実俺自身収穫と呼んでいいもの手にしていた。

連続通り魔。

先日のホームルームで耳にした物騒な噂。

誰も殺さない通り魔が出没する、というこの噂こそが俺と朱空朔夜を引き合わせた要因であり、得られた収穫もこの噂についてである。

矛盾と謎が多すぎた噂の内容だったが、それも昼休みの会話で殆どの説明がついた。

残された疑問は二つ。未解決のまま取り残されている。

……いや、正確には一つは確信のない状態だ。

それを解決するために、俺はここに来ているのだから。

「ところで」

呟いて俺は視線を自分の右横に移す。

声は、どこか非難がましい響きだった。

「何でこう、放課後の俺の行動には毎回お前が付き添ってるんだ？」

それも、こんな状況でなら許されることだろう。

先日引き続き、俺の隣には御桜流深の姿があった。

「放課後は暇だからね」

「暇だったら、お前は俺に付き纏うのか？」

「それで、これからどこ行くの？」

質問しているのは俺だというのに。中学からの知り合いは、そんなことなどお構い無しに関連性の無い自分の疑問を投げかけてくる。何でこう、俺の周りの連中は俺の質問に対してこうなのか。

「橘くんのお見舞いだよね？」

「何で知ってたんだよ。俺、一言もお前にそんなこと言ってねえだろ」

「あれだけ色んな人に家の場所訊いてたら、誰だってそうだと思うでしょ」

「……お前、そんな所から同伴してたのか」

聞き込みによって知り得た橘宅に辿り着いた。高級マンションでもなければ、見るからに欠陥住宅丸出しの問題建造物でもない、一見普通の三階建てマンション。高校生が一人暮らししているといっても、特に不思議は無い。

教えられた部屋の前に言って、俺は周囲を見回す。

よもや曆の追跡がここまで及んでいるのでは無いかとの行動だったが、ここから見る限りではその心配も無いらしい。

気にすると言えばさも当然のようにここまで同伴してきた流深の存在であり、出来ればこれ以上はお引取り願いたいところだ。しかしながらそんなことを言って聞くようなやつではないから厄介なのだ。

そんな事実を改めて理解し小さな溜息を吐く。

今ならまだ流深を伴って行動していても大きな問題は発生しない。これが終わったら、何としても帰ってもらわねば困るところだが。その時のことはその時に考えよう。

ここが最終妥協線だと定めて、俺はインターホンを鳴らす。

ぴーん、ぽーん。と明るい音が部屋の中から漏れて外にまで響いた。

……………。

待つこと数十秒。

中から応答は、無い。

「留守かな？」

流深が首を傾げるのと同時にもう一度インターホンを鳴らしてみる。

結果は同じ。中から漏れて来る機械音以外、後はずっと無音を肯定している。

……………これはどうも見間違いだったのかもしれない。朔夜さんとの会話から、最近欠席者が多いのはそいつらが全員事件の被害者だからだと予想を立てていたのだが……。橘は例外なのか、或いはその考え自体が誤認だったのかもしれない。

クラスメイトが自殺者候補として名を連ねていないのなら、それはそれで大いに安堵できることだ。とはいっても部屋を訪ねてみただけでそうだと決め付け、ことが起こってから後悔するのはバカらしい。

鞆から携帯を取り出して、住所と一緒に聞いておいた橘の携帯番号を入れる。

これでもし何食わぬ声色で『もしもし』などと聞こえてきたなら、橘はただのサボリだったのだと決定して帰ることにしよう。そう決めて、通話ボタンを押し込む。

「うああ

ああああああああああアアアアアアア

「アアー!!」

スリーコールほどの間。

場を支配していた静寂を切り裂いたのは、そんなおよそ声とは思
い難い絶叫だった。

騒然、という言葉が正しいか。それとも啞然と言うべきか。

おそらくはそのどちらも正しいのだろう。空気をかち割らんばか
りのシャウトが場を満たし、その中で俺は携帯を握る握力さえ入れ
ることを忘れてしまいそうな状況なのだから。

「……なんだか凄いや着信音だね」

「……こんな着信音、誰が設定するんだよ」

忘我の果てから俺を呼び戻したのはそんな流深の言葉だった。本
気で言っていないことは明らかで、おそらくはこの場を満たす妙な
空気を換気したかったのだろう。

携帯から聞こえる声が、いつしか留守番電話サービスに繋がって
いることに気付く。

部屋の中から漏れる轟音は呼応するように静まっていき、やがて
場にはまた静寂が戻ってきた。

爆発音の様な絶叫に流深はまだ面食らっているように見える。そ
んな中で俺は努めて冷静に思考していた。部屋の中から聞こえた声
はどう考えても異常。タイミングから考えて、原因は間違いなく携
帯電話だろう。

何だろう。胸騒ぎを抑えながら俺は徐に一步前が出る。と、眼前
の扉に拳をぶつける。

「おい、橘! なにやってんだ!?!」

無駄だとは思っていたが、取り合えず呼びかけてみる。

予想していた通り返答は無し。物言わぬ扉は平然とそこに立ち
はだかっていた。

鉄の扉に何度も拳をぶつける姿はさながら借金取りか何かのよう
にも見えるだろう。この様子を事情を知らない第三者に目撃されて

いないことを祈るばかりだ。

「あれ……？」

可能性、とかそんなものに期待していたわけではない。ただ他にすることがなくなってしまったために殆ど無意識でそれを行い、そして無意識に声は出ていた。

手を掛けたドアノブは驚くほどあっさりと回ってしまい、扉は至極あっさりと道を開けた。

「鍵、掛かってなかったみたいだね」

「らしいな」

ノブを握ったまま半開きの扉を一度閉める。

ここが最終妥協線だと思っていたが、どうやらそうも行かないらしい。……流深には、どうあってもここで帰ってもらわねばならない。

「流深、悪いが今日はもう帰ってくれ。橋には俺一人で会う」

「どうして？」

言葉の意味が解らない、と言いたげな眼で流深は俺を見返す。橋がどうにかなくなってしまっていることは今の叫びで流深にも理解できている筈だ。それ故にここで引き返すということはに抵抗があるのだらう。

そうであっても、俺はどうしてもこれ以上流深を関わらせる訳には行かなかった。

「実はな、今日俺が橋に会いに来たのはお見舞いが目的じゃないんだ」

「え、そうなの？」

「ああ。詰まる所俺は橋にある物を借りていて、それを返しにきたんだ。で、それを返却する場面にお前には立ち会ってもらいたくないわけだ。……あー、つまり、俺が橋に返さなければならぬものというのが……」

「それってつまり」

口の動きから次の一言を予測して、俺は大急ぎにその口を手で覆

う。

「まあ、そういうことだ。だからお前は速やかに帰宅してくれ。お前が橋を心配していたことは俺からよく言っておいてやる。……頼む。帰ってくれ」

懇願する俺を、流深は冷ややかな眼で見ている。どうとでも思うがいい。これで踵を返してくれるのなら、俺の面子は仕方の無い代償だと思おう。

黙視の非難を表情を変えずに受け止めること僅か、先に折れたのは流深の方だった。

自分の口にまだ蓋をしている俺の手をどけて、

「わかった。……今日は帰る」

まだ遊び足りない子供の様な、拗ねた口調で受諾した。

何度か振り返っては冷ややかな視線を浴びせてくる。そんな風にして去っていく流深の姿を無言のまま見送り、来た道を辿って帰っていく後姿が見えなくなるまでそうしていた。

今更ながら、もう少し別の手段は無かったもんか。咄嗟のことだっただけに、あまり込み入った話を持ち出せばどこかで確実に矛盾が生じてしまうだろうから、それならと単純さを追求したつもりだったのだが……。

「……さて」

と一息ついて、俺は思考を切り替えた。

これ以上済んだことを考えたところでどうしようもない。それよりも今は目の前の目的を達成すべきだ。

俺は再びノブに手を掛けた。鍵の閉まっていない扉を開く。

中から出てきたのは、闇だった。

陽は落ちてきたと言っても、まだ太陽は健在。部屋の中の窓を全てカーテンが何かで閉ざすなりしなければ、こんな状況にはなり得ない。そんなことを無意識に理解して、俺は自分のクラスメイトが置かれている現状が常軌を逸していることを改めて認識した。

ばたん、と音を立てて扉がしまる。一切の光が遮断され、場は虚

無に支配された。

視界が黒一色の状態のまま、壁に手を這わせて電気のスイッチを探す。しまった。こんなことなら入ってすぐに扉を閉めずに、ある程度玄関の様子を見てから閉めればよかった。

もう一度扉を開けようと決めると、まさに暗中模索状態で指先がどうにか突起物を探り当てる。かち、と音がして頭上の電灯が点灯。失われた視界が復活した。

ようやく視界に納まる部屋の内部。フローリングの床。短い廊下の奥。ダイニングと思しきその部屋と廊下との境には木製の扉があり、中央に穿たれた長方形のすりガラスからは中が真っ暗であること以外に何の情報も得られない。

……冷静に考えてみると、俺は今不法侵入しているんだな。そう考えるとあまりいい気はしない。

ダイニングの灯りは玄関に比べると簡単に点ける事が出来た。だいたいこういうマンションの場合は、扉のすぐ隣に電気のスイッチがあるものだ。

俺は部屋の隅に眼を向ける。……そこには頭から布団を被って蹲る橘湊人の姿があった。

部屋の中には唯一、荒い呼吸音だけが響いている。

「橘」

呼びかけると、上下に揺れていた布団が動きを停止させた。

「……誰……だよ」

声は掠れていて、何度か聞いたことのある橘湊人の声とは違っていた。

声だけではない。振り向いたその顔は以前教室で見たものとは、まるで別人の物。充血し切った真っ赤な眼や、ぐしゃぐしゃになった金髪。随分とやつれている様子を見ると、数日間何も食べていないことは明らかだ。……まさか、今までずっとこの状況のまま震えていたのだろうか。

警戒心と恐怖に満ちた赤い眼に俺は言った。

「遙瀬橙弥。覚えてないかもしれんが、お前のクラスメイトだ」

「遙……瀬……？」

数回しか話したことはなかったが、どうやら俺のことを覚えていたらしい。

橘の眼から警戒心が消えた。

「お前……なんで、何しにきたんだよ……？」

「ちよつと話を聞きたくてな。……訊くまでも無いと思うがお前、学校休んでる理由は風邪じゃないな？」

橘は小さく頷く。がちがちと歯を鳴らして、膝を抱えて再び震えだす。

……それは次の質問を予想してしまい、それに答えなければならぬことへの恐怖心がそうさせているのだろう。そうだと解つていながらも、俺は次の質問を口にしなければならぬ。その為には俺はここに来たのだから。

一旦意味無く硬く閉ざされたカーテンに視線を投げかけて、俺は言った。

「お前が学校を休んでる理由を、俺に教えてくれ」

「ああ……あああ」

覚悟はしていたが、質問すると橘は頭を抱えて俯いてしまった。

「歌が……歌が聞こえてくるん……だよ」

手詰まりかと次の手を考案し始めた俺の耳に、そんな声が届く。

「歌……？」

その言葉には何故か抵抗が無い。おそらく朔夜さんが通り魔事件を『歌姫事件』なんて呼んでいたからだろう。

問い返すと橘は余計に震えだしてしまった。何かを必死に伝えようとしているようだが、口が震えて上手く言葉を紡ぎだす事が出来ないのだろう。

「……それってどんな歌なんだ？」

「……解らない……でも、それが怖いんだ……気を抜いたら聞こえてくる音が全部その歌に聞こえて……それを聴いてるだけで、俺、

どうにかなったまいそうで……俺……このままじゃ、死んじま
う……」

「孤独死……か」

呟いて、橘の異常な震えを見る。

これまでに自殺した人たちも皆こんな状態だったのだろうか。他の症例を見たことが無いだけに、今の橘がどれだけ危険な状態なのかは解らないが。自殺をする人間は必ず死ぬ前にその兆候を見せると言う話を聞いたことがある。……となると、今の橘は相当危ないということか。

俺は橘と対角になるように部屋の隅に凭れ掛かる。

……別人のようなクラスメイトを見て、俺は意を決した。

「橘、お前がそうなった原因を教えてください」

それこそが聞きたかった答え。今日俺がここに来た理由。

時刻は次期に夕方の六時を過ぎようとしている。

掠れた声で、橘はその問いに答えた。

「なるほど……」

橘の話でようやく確信を持つことが出来た。

歌姫事件。そう名付けられた通り魔事件の真相と、その犯人。

橘の口から出てきた人物像は、俺達と同じ高校の制服を着た女

ということだけで名前までは出ていない。だというのは俺はその

女が誰であるかを理解していた。……告白してしまえば、

俺は橘の話を書く前から、その人物が連続通り魔だということを知っていた。

今から思えば、本当はそれを否定するために話を聞きに来ただけなのかもしれない。

「遙瀬……助けてくれよ……俺、どうしたらいいか……」

橋の声からはもう、死への恐怖しか感じられない。

助けてくれと言われても……。

朔夜さんの言っていたことが当たっているのなら、俺にはどうすることも出来ない。

「ああ……取り合えず、やれるだけのことはやってみるよ」

俺にやれることがあるのかは不明だが、少しでも安心させてやれるのならと気休めにしかならないと思いながらも俺はそう言って部屋を出て行った。

外は順調に夜へ向かっている。

茜色を飲み込んでゆく藍色が、夕陽の勢力が弱まってきていることを明確に示していた。

俺は橋のマンションを出て一息つく。さて、ここからどうするべきか……。

ある程度今後の行動は決まっているものの、それには色々必要な情報がある。それをどのようにして手に入れるかが現状での懸念だったりするのだが、さてどうしたものか。

ここで俺はあることを思い出す。……今日一日にあったこと思い出出すことと言えばそれは間違いなく昼休みのことに他ならず、この先様々な意味で衝撃的だったそれを忘れることは簡単には出来ないだろう。

ポケットの中に手を入れる。そこには昼休みの終わり、教室へ戻ろうとする俺に朔夜さんが渡した紙切れが入っている。あの時は他

の事で頭がいつぱいだつたために、中身を確認することを忘れていたがもしかすると今の状況に役立つものかもしれない。

ノートの切れ端みたいなのを取り出して、開いてみる。

中身の予想は当たらずとも遠からず、といった所だろうか。

そこに記されていたのは単純な数字の羅列だった。横一列に並んだそれ以外には他に何も書かれていない。それが意味するところは考えずとも理解するのは容易なことだった。それは何かの暗号でもなければ、誰かのテストの点数でもない。数字の羅列の正体は携帯の電話番号だ。

「役に立つ……か」

確かにそうだ。この紙切れを渡したのが朔夜さんだから、おそらくこれは朔夜さんに繋がる番号である筈だ。……しかし彼女の行動が齎す結果を常識に当てはめて考えてはいけない。もしかすると『宇宙に繋がる電話番号』とか、そんな類の有料ダイヤルかもしれない可能性は、ゼロではないのだ。

最悪の結果を想定しながらも、俺は紙に書かれた番号へ電話を掛けた。これで多額の請求を受けたなら、学校に訴えてやろう。

『そろそろ掛けてくる頃だと思つてたよ』

果たして、聞こえてきた声は朔夜さんのもので間違いなかった。

それにしても、もしかが第一声で無いというのには違和感を感じる。これでもしも電話の相手が俺でなかったらどうするつもりだったんだろう。

まったくの他人を装うという悪戯を思いついたがそれはまたの機会にしておくことを決めて、俺は矢継ぎ早に要件を告げた。

「調べて欲しい事があるんですけど」

『楠涼音のことか？』

……この人は。

「……朔夜さん、あんた初めから知つてたんですね」

『まあね。橘湊人以外にも、私の愛する生徒達の中には被害者がいてね、私も話を伺つた。もっとも、その生徒から有力な情報はあま

り得られなかったけれどね。それで、どうだったんだ？ 橘湊人の様子は』

この人が間違っても愛する生徒達、なんて熱血教師みたいなことは言っではいけない気がする。それと連続通り魔の正体 歌姫事件の犯人がわかっていながら、それで有力な情報が得られなかった、というのはどうだろう。

その点を指摘してやると、朔夜さんは言っている意味が解らないと言いたげに溜息をつき、

『私が興味があるのはね、人を自殺に追い込むほどの孤独をどうすれば与えられるかだ。別にそれを誰がやったのか、とかそんなことに興味は無いんだよ。』

いいから、さっさと橘湊人の様子を話せ』

こんな冷徹人間を教師にしてもいいのだろうか、俺は本気で考えてしまった。

いいわけが無い。今すぐにも解職請求をしてやりたい気持ちを抑えて、俺はついさっきのことを全て話した。何かに怯えている橘の異常な様子や、頭の中に流れる歌のこと。ただ一部だけ省いた部分は橘が見た人物像が制服姿の女だという部分で、その辺は話しても無駄だと思っただからだ。

意外なことに朔夜さんは俺が事後報告している間終始無言のまま、授業を聞きながら必死にノートを取っている学生を連想させた。もしかすると寝ているのかもしれないと思いつつも、話の初めから終わりまでを話した俺が聞いたのは寝息や欠伸ではなく感嘆の声だった。

ははあ、と一人だけ納得して、朔夜さんは言う。

『なるほどな。解ったよ。遙瀬、前言撤回だ』

「前言……って、どれくらい前のですか？」

『孤独死の謎の正体。どうも私は思い違いをしていたらしい。』

こいつは共鳴カタルシスや、ましてや同調シンクロなんかじゃない。こいつの正体は

言霊だ』

聞きなれない単語に俺は呆気に取られる。

言霊。聞いたことはあるしその意味だって知っているが、それではあまりにも非現実的すぎて、すんなりと受け入れることが出来ない。

電話の向こうで朔夜さんはそんな俺の心中を察したのだろう。すぐに補足説明に入った。

『言霊と言っても、お前が思っているような魔法的なモノじゃない。そうだな、言い換えるなら催眠術……いや、強制暗示と言った方が的を射ているかもしれない。……ああ、こっちの方がじっくりくる』

「どっちにしても、俺はすんなり受け入れることは出来ませんが……」

『孤独死、なんて死に方自体が現実の境界から外れているんだ。全てを現実的な理屈や道理で片付けることは出来ない。万人全てを納得させる理は、それこそ暗示でしかない。何にだって反論や逆説は存在するんだ』

最後は少し論点を外したことを言って、この部分だけはやけに適當なことで片付けられる。

しかしながら、確かに。孤独死なんて異常を解決しようとしているのだから、どこかで非現実的な要因が存在するのは致し方の無いことなのかもしれない。

『暗示は絶対的な孤独。それもその他の全てを消し去って唯一思考を支配する。……例えばね、自分はこの世界に独りだけなんだっていう、すぐ目の前にいる相手さえも自分の存在に気付かない。自分と言う存在がそこに『在るのに無い』という、自覚と錯覚の摩擦。二つは互いに擦れ合い、最終的には消滅してしまい何も残らなくなる。』

何の存在の断片さえ実感できず、虚無のままに無に帰する死。それこそが孤独死だ』

同じような話を俺は楠涼音から聞いている。

理屈は解った。何人も人間を孤独死させてきた方法は解ったが、それでも残るのはそんなことをする理由。楠涼音が、どうしてもそれだけの孤独を他人に与え続けているのかそれだけがどうしても解らない。

一人悩み始めると、そんな俺のことを知ってか知らずか。

肩を持つつもりではないんだけどね、と前置きしてさらに朔夜さんは続ける。

『暗示と言うのは、即ち自分の持っている感情を相手に植え付けることだ。自分の思い描いたことや、自分の抱く感情を相手の深層意識に書き込む。見方によつてはそれは共鳴とも言えるかもしれないが。どちらにしても、楠涼音は、これまでに何人も人間を死に追い込むほどの孤独を今もなお抱えているんだよ』

「……暗示を解く方法は無いんですか？ まだ死んでいない人を救う方法は」

そんなことを俺は呟いていた。

朔夜さんは肩を持つつもりはないと言ったが、俺にとってそれは弁護になっていたのかもしれない。

涙ながらに助けてくれと懇願したクラスメイト。

今もどこかで死に逝こうとしている誰か。

今も誰かを殺そうとしている、一人の少女。

俺が救いたいと思つたのは、果たしてどちらなのか。

自分では、どうしてもそれが解らなかった。

『無いな。この件に関わってしまった者は諦めた方がいい』

しかして自問の解答がどちらであったとしても、その両方を否定する言葉は朔夜さんは発した。

『言霊というのは呪詛を言葉に宿して暗示を与える術だ。呪いと言つてもいい。暗示に掛かった者は既にその先に死を約束されるのと同じことなんだよ。そんな連中を救う方法は無いし、在ったとして

も私は知らない。

さて、そろそろ本題に入るとしようか。そもそもこの電話はお前が私に用があつて掛けてきたものなんだから、私ばかり質問していは可笑しな話だ』

そうと思つていながら、自分の疑問解決を優先させたこの人の神経はどうなつているのだろう。

「……楠涼音のことです。彼女が抱えている孤独がどんなものか、教えてください」

『それを知つてどうするつもりだ。まさか原因が解れば、今の彼女を止められるとも思つているんじゃない？ 先に言つておいてやるが、それは不可能だ。呪詛の類は最終的には術者に戻ってくるものだから、既に楠涼音は大量の怨念を己が内に溜め込んでいるということになる。』

完全に、手遅れだよ。どうして今でも存命出来ているのか不思議なくらいだ』

朔夜さんの言葉に容赦は無い。

それが論理的に考えて正しいのだということは俺にも解る。解つて、しまつ。

だがそれでも、俺は質問の答えを聞かなければならなかった。

電話の向こうで息を吹き出す音がする。

『まあ、それでも知りたいというのなら話してやろう。好奇心はどんな人間にも備わつているものだからな。仕方ない。』

理由はお前と異なるが、そのことについては私も興味があつた。死に匹敵する孤独の正体。それは人によって異なることだが、楠涼音における孤独とは単純なものだったよ。彼女はね、幼い頃から独りだったんだ。もともと家庭が円満では無かつたこともあるが、彼女が小学校に上がるうとしていた時期に彼女の両親が離婚している。原因はこれまた単純だが仕事関係だった。彼女の父親は外国へ行き、そして死んでいる。慣れない異国の地。あまつさえ精神状態が不安定な時だ、どんな仕事も手につかず結果として職を失つた。それが

止めとなって、彼は自殺している。母親も同じだ。生活環境の激変と、支えだった仕送りがなくなつての自殺。ありがちとは言わないが珍しい話でもない。ただ、幼い頃からそんな環境に置かれて生きてきた涼音の中には、深い孤独だけが残されただろうね』

……それが、今回のことに繋がると思うのだろうか。

話し終えて、朔夜さんはまた息を吹き出す。口から紫煙を吐き出しへビースモーカーの姿を脳裏に浮かべる。

孤独死。常識では扱いきれないほどのその死の原因。

俺は毎日、同じ場所で彼女に会っていたというのに、それをどうにかしてやることは愚か、そのことに気付くことさえも出来なかった。

『聞きたいことはそれだけか？』

自分から話すことは全て話し終え、加えて俺の方にもこれ以上聞くべきことは無いだろう、とでも言っているようなイントネーション。

その見えざる意思を感じ取りつつも、俺は言った。

「楠涼音の住所を教えてください」

そう言つと、間髪入れずに聞こえてきたのは心の底から呆れた人間が吐く溜息の音だった。

『あのな、遙瀬。さつきも言ったが彼女は手遅れだ。これまで何人も人を殺してきたような孤独を彼女は今もまだ抱えていて、さらにそれは彼女が殺人を繰り返すたびに重みを増していく。いずれその重みに耐え切れなくなつて自我が押し潰されるのは必然だ。それに彼女に会つて話をした上でそれをどうにかしようと思つているのなら止めておけ。お前も言霊の餌食になつて植物状態に陥るだけだ。』

どちらにしても、放っておけばことは解決する。楠涼音はいずれ孤独死するだろうし、そうなればその時点でそれ以上世間を騒がせる連続自殺は続かない。お前が出て行つて、無駄死にすることは無い』

最後の方はなんとなく咎めたり莫迦にしているようではなく、遠

回しに行くなと訴えているような気がした。空の兄ということも立場でもある。そんな俺を見殺しにしようとは思わないのだろう。

いくら彼女が冷徹人間であっても、自分のお気に入りを哀しませることはしたくないということか。

それでも俺は、何故か楠涼音に会うことを選んでしまった。

なんとなく。昼休みに孤独を語った彼女の言葉の真意が 助けを求めていたのだと思ってしまったから。

その淋しい心に気付けなかった俺には、やっぱり責任があると思うのだ。

毎日、彼女の一番近くにいた人間として。

『……このお人好しが。もう好きにしろ。これ以上私は知らん。勝手にどうとでもなればいい』

どちらも黙りこんだまま次の句を発しない会話に、朔夜さんが折れた。

俺は無言でその行為に感謝の意を捧げつつ、聞かされた住所へと向かう。

やはり 責任は取らなければならぬものだと思っから。

いつもと変わらぬ月光を暗い夜の影の中から見上げる。

楠涼音は、今宵もまたこの月を見て思うのだった。

この闇はきつと誰かの幸せが落とした影なのだ、と。

月の光は明るい。だからこそ影もより大きくなる。

だとするのなら、今私が居る孤独の影は、いつかの私が居た幸せな日々^なの落としたもの^だというのだろうか。そうなの^だとしたら。

その頃の私はとても幸せだったの^だらう。孤独なんてどこにも見当たらない。自分の周りには、いつも誰かがいて笑っていた。そんな日々^が。

「でも、それももう終わったこと」

今の私にあるのは、誰にも理解されない淋しいだけの心。

明けることの無い夜。

払拭される事^の無い孤独。

それは捨てられない私の記憶で、それは歌われない私の孤独。

捨てられないのなら、歌われないのならせめて、私が謳おう。い

つか重なり合う事を信じて。

永遠の孤独^{トク}を、刹那の共鳴の為に。

それは初めから叶わぬ夢だと知っている。

けれど……それでも、私は。

そこまで考えて、月を見上げる視線を地面と平行に戻す。

……不意に聞こえてきたのは、誰かの足音。それもただの道行く
通行人ではない。

足音は短距離走のランナーのように慌しく、けれど一定しないリズムを刻む。

その音が大きくなっていくのに呼応して、私の耳に届く音は追加された。

やがて私の前に正体を現した二つの音は、疾走が地面を打つ音と、そして荒々しい息遣い。

前者は私の前で停止し、後者は今もまだ続いている。

「……どうして」

そう呟くしかなかった。

学校の昼休みにしか顔を合わせることが無い筈の相手。

走ってきた少年は少しばかり俯いて息を整えた。

やがて深呼吸のように大きな息を吐いたその少年は汗を滴らせる顔を上げる。

少年 遙瀬橙弥は全てを見透かした月光のような眼光を私に向けた。

「どうして……」

目の前に現れた少年の存在を信じられず、楠涼音は再度呟いた。

それはどうして自分の前に現れたのかと言つ意図を尋ねたものではない。

この相手は既に自分のことを知っている。

彼女が殺人を犯したということ。そしてその方法も。

不可避の死。

常識では扱いきれず、一般では死とさえも扱われないような虚無。それを強制的に与えることの出来る力が彼女にはあって、それは

自分にだって向けられるかもしれない。そのことだって彼は理解している。

理解していながら彼はここにきた。

今日もまた誰かを殺そうとしている自分の前に。

今宵もまた誰からも理解されない孤独を抱える自分の前に。

相手が全てを知っていると、その表情から読み取れてしまった故に口をついた疑問。

どうして、という呟きは言い換えれば、信じられないという嘲りでもあった。同時に何故そんな行動が取れるのかと言う、心からの疑問でもある。

命を賭けるということとはただの愚考でしかない。

たとえそれで何らかの目的を達しえたとしても。

少年の目的は彼女にも明らかだった。自分を知った人間が持つ感情は、恐れか、或いは同情でしかないということを知った彼女は理解している。少年の行動が語るのは彼が感じた感情は後者であったということ。

そこまで思考して、涼音は悟った。

つまりこの相手は自分を止めに来たのだ、と。

どういう方法からか自分の過去を知り、毎日顔を合わせ、言葉を交わしている。

……そんな彼だからこそ、自分ならば私をどうにか出来ると思っただらう。

けれどそれは妄信。

根拠の無い過信。

少年は自分は私にとって特別な存在だとしても、思っているのだから。そう考えて、彼女は嘲笑することさえ忘れて呆れてしまう。

会話を交わす、と言っても実際それは彼が一方的に思い込んでいるだけのこと。

私にとって、橙弥は他の誰とも変わらない。

「……なんて、莫迦らしい」呆れるように言って、「こんなところに、何をしにきたの？」

呆れつつ、しかし彼女はそれを問うてしまった。

荒かった呼吸を整え、橙弥が答える。

「もう止める」

言葉は予想していた通り。

「これ以上はもう止める。そんなことをしても何にもならない」彼の言っていることは正しい。

いくら自分の孤独を誰かに聴かせても、そんなことは無駄。

理解されない虚しさだけが残留し、蓄積し やがて孤独は増大する。

より深く。より冷たく。

「そんなこと 知ってる」

反駁は一瞬躊躇っているようでもあった。その理由は涼音にも解らない。

「それでも私は謳うだけ。この孤独を。私の、孤独を」

「そうやって人を殺して、自分も孤独死させるためか？」

涼音は頷く。

孤独死、という言葉の意味はよく解らない。けれどそれがこれまで自分が殺してきた人間の死の名前なのだということは話の流れや状況から理解できた。

だから頷いた。

それを仮初の殺人定義にする為に。

「 違う」

涼音自身さえも気付いていない、そんな無意識の言い訳を彼は見抜いていた。

……涼音の表情が僅かに変化する。

この時、彼女は何か彼がこれから口にすることを聞いてはいけない気がした。

「お前はただ、一言伝えたかっただけなんだよ」

「なんの……こと？」

涼音は心から少年に問う。

とおい昔。彼女が無理やりに閉ざした心。その中に押し込められた一つの感情。一つの言葉。

「お前の家に入ってきたよ。本当は話をするためだったけど留守だったから……気は進まなかったが、鍵が開いてたから勝手に上がらせてもらった」

今日で二度目の不法侵入は、確かに彼の良心に負担をかけただろう。

それでも、常識に囚われながら日常を生きる一般人である筈の彼がそれをしたのは相応の理由があった。

どうしても意識的な拒否権で衝動に抗えなかった理由。

それを橙弥は口にした。

「手紙、今日も帰ってきてたぞ」
手紙。

涼音が毎日書き綴った手紙。

それは決して返事の無いことを解った上でそれでも毎日繰り返していたこと。

両親が死んだと知った後も　いや、両親が死んだと知ったからこそ彼女はその行為を止めることが出来なかった。そうすることで突きつけられた現実を或いはただの悪夢だったのだと思いたかったのかもしれない。

今は覚えていない、幸せだった日々に戻れるのかもしれない。

それは気休めでしかない。

それは今の彼女の支え。

残留する想い。幸せだった日々の残滓。

少年の言葉は少女の心を確かに深く抉った。

「お前だって知ってるはずだろ、自分の両親が死んでることぐらい知っている。当然、彼女はそんなことなど知っている。」

知っているからこそ手紙を書き続けている。

けれど、それはどうして？ 不意に浮かんだ疑問。

既に居ないはずの相手に手紙を書くのは、それを現実と認めたくないがため。しかし彼女は既に知っているのだ。それが現実であり、どう足掻いても揺るがないということ。その現実に対抗するために手紙を書く。毎日毎日。

行動と理由。二つの因果関係は輪を描いて螺旋を繰り返す。

では、その意味とは何だろう。

この因果が導く一つの答えとは、一体何なのだろう。

それこそが、この殺人の本当の定義ではないのだろうか。

「……………違う」

一瞬の思考を彼女は口に出す言葉でしか否定できなかった。

記憶というパンドラの箱。心の奥に深く幽閉したそれに少年は鍵を差し込んでいた。

「お前は自分で全部理解しているんだ。この殺人に、お前の思うような意味は無い。お前は別の理由を定義して、本当の理由を隠してるだけなんだ。ただずっと背を向け続けた記憶にだけある殺人定義。そこから逃亡するために」

これまでに涼音が殺してきた人間。

中には彼女の手に掛かる前から崩壊していた者も存在した。

或る時はその手に刃物を持って現れたこともある。或る時は薬に溺れて自我を失った獣のような者もいた。その、およそ日常とは掛け離れた存在と初めて相対した際でさえ動揺を見せなかった少女が、今この瞬間に確かに精神を揺さぶられている。

現実という鎖に縛られて、日常という檻の中から出ることの出来ない何てことの無い普遍過ぎる一人の少年に。

涼音は一人呟く。

違う。違う、と。

その声は本当に小さくて澄弥の耳には届かない。

夜の闇の中に溶け込んでいくような小音量の否定を涼音は繰り返

し眩く。

「お前が認めたくないのは、両親の死なんかじゃない。もっと身勝手な手で、我が侘な事実の否定。そうだろ？ お前の手紙にはいつだって一つの感情しか籠められていなかった。言葉で伝えられないことを文字で記していたんだ。」

楠涼音。お前の本当の殺人定義は事実からの逃避。お前が首を振り続けた過去の事実は――

少年はそれを口にしようとした。
果たして。それは成されなかった。

「違う　　！！」

槍のような真実の告白は　少女の、楠涼音の叫びにより掻き消された。

小柄な少女からは想像も出来ない大音量の叫び。昼間に友人の絶叫を聞いていてもなお、橙弥はそれに一步引き口を閉ざしてしまう。

涼音は僅かに脳裏に蘇った自らの過去を断ち切った。

断ち切ったつもりで声を荒げて言う。

「違う。違う違う違う違う　　！！　私は、ただ自分の孤

独を謳うだけ。謳って、歌って、詠って、自分を殺すだけ　　！」

ヒステリックを起こしたような少女の金切り声。

怒髪天を衝く。という言葉が声に当て嵌まるのなら、今の少女の叫びは正にそれだろう。少女の声は目の前の少年ではなく自らに向けられたもの。威嚇となっただけの結果論ではない。

「認める」

言葉ではない。本当の意味での少女の言葉に怯んでいた少年はしかし、再び訴えを続けた。

続ける、つもりだった。

「……のなら」

声が聞こえたから。

否。それは声とは違った。

脳に訴えるそれは　言葉。死の孤独を与える、強制暗示。

直接心を鷲掴みにされた少年はそこで口を閉ざすしかなかった。
「届かないのなら、せめて……」

口を閉ざす。ではなく、言葉を区切ると言うが正しいか。
遙瀬橙弥は、口を閉ざすことさえ許されず、その思考を停止させられていたのだから。

「届かないのならせめて、私の孤独をあなたも感じて」
後はクリアになった思考のホワイトボードに、ただ一言、彼女の感情を投影するだけ。

少年は……暗示を待つだけの空人形。

蜘蛛の糸に捕獲された蝶の様に、ただ死を待つことしか出来ない。

「ッ !?」

だから、この声にならない驚愕はきつと少女のもの。
心の内に抱えてきた孤独を少年に共鳴させるだけ。

ただそれだけのことを彼女は出来なかった。

言霊。文字通り言の魂。

それは古来より言葉に宿る魂を指して言われてきた。それがいつか、呪いを与える強制暗示の術として語られるようになってしまった。楠涼音のそれもまた同じ。ただ、暗示の設定だけは個人により異なる。

涼音は知らなかった。

自分が無意識に設定していた暗示が何であるのかを。

“……………涼音”

不意に、声が聞こえた。

橙弥の思考を支配したその瞬間。涼音の中でそれまで押さえ込んでいた記憶が逆流した。

……

曖昧な、過去の記憶。

暗い廊下と、両親の怒声。

ずっと忘れていた、私の記憶を私は視ていた。

凭れていた部屋の扉が開く。

“……………涼音”

声は良く知っている、低い男性のもの。

それは紛れも無い私の父親の声だった。

瞳いっぱい涙を溜めた私は、潤んだ視界に精悍な父の顔を納める。

そうすることで、私は安心できるはずなのにこれまでにこれまでに涙を溢していた。

父の腕が、私を抱きしめている。

頬と頬の触れ合う感触。私は父の表情が窺えない。

“涼音……………”

父は、私の名前を呼ぶことしかししない。

ただ一つだけわかるのは、私の名前を呼ぶ父の声が震えていること。そこからわかる、父の心境。

“……………いや、だ”

掠れた声で、私は呟いた。意味は明白。

“わたしは……………はなれたくない”

毎晩聞いていた二人の話の内容は、父が仕事の関係で海外に移らなければならぬということ。母はそれに反対していた。

その理由はきつと、私にあったのだと思う。

まだ幼かった私。生活環境の激変を気遣って、母はそれに反対していたのだ。

しかし父にだって事情がある。自らの職に執着するのわかる。

子供の私にだって解るのだ。母が解らないはずが無い。

だからこそ母は涙ながらに懇願していたのだ。

結果的に、それが自分も父も苦しめることだとわかっていたというのに。声を出せばそれだけで感情が擦り切れてしまいそうなほどの辛酸に耐えながら、毎日、毎晩。

そうまでして母は私のことを優先してくれたのだ。

“ごめんな……ごめんな涼音……本当に……ごめん”

父は、本当に辛そうに言って、その場で泣き崩れてしまった。その姿は絶対に許されない罪の十字架を背負って、その重みに耐え切れず倒れこむ罪人のよう。

私はその時初めて、父が泣く姿を見た。

幼い子供にとって一番強い大人である父親。

その父を泣かせたのは私なのだ。私が父よりも強いからじゃない。私が弱いから、父を泣かせてしまった。私と言う存在が、両親の心に負担をかけ続けていた。

その事実にも、私は気付いてしまったから、涙を流していたんだ。

両親は共に私のことを最優先にしてくれていた。だからこそ、その行動が結局私を泣かせてしまったと言う結果に父は耐え切れなかったのだろう。……今になって、やっとそれが解る。

父は結局家を出て行ってしまった。最後に見た父の顔は、とても辛そうで悲しそうな笑顔。

彼が死んでしまったと知ったのは、その笑顔を見てから一年後のこと。実の父親が死んだと知っても、そのときの私はどうとも思わなかった。まるで、そのことに干渉せずに逃避するかのよう。

それからの私は……というよりも父が家を出てからの私は、母と口を利かなくなっていた。

別に、母親が嫌いだとか、なぜ父と一緒に行かなかったのか、とかそんなことを考えていたわけではない。ただ私はこれ以上母と深く関わってはいけなと思うっていたから。それだけの理由で、実の母親を私は遠ざけていた。

母の死は、父の死から半年後のこと。

それは本当に何気ない日常。

普段通り帰宅した私を待っていたのは、既に命をたった後の母の姿だった。

二人は共に自殺により命を絶った。

自分で自分を殺す殺人。それが自殺。

けれど、二人の死は本当に自殺なのだろうか。

両親の本当の死因。

それは孤独死。

……

「……………私が、殺した」

上の空で涼音は口にする。

ずっと、自分が遠ざけていたその事実を。

もしも。

もし一度だけでも、父がいなくなつた後に私が母と話していれば。父がいなくても二人で幸せに生きていけると示していれば。彼女は自ら命を絶つたりしなかつたかもしれない。だというのに、私は失うことが怖くて遠ざけた。大切にして、失って、孤独になるのが嫌だったから。

結局、本当に孤独だったのは私ではない。

本当の孤独の中に居たのは、他の誰でもない父と母。

私が初めて孤独死させてしまったのは　　大切な、大好きだった両親。

それは言霊なんかじゃない。避けようと思えば、避けられた死。

「それなのに、私は」

二人を殺してしまった。

彼女が犯してきた殺人の意味。それは両親の死因からの逃避。

それは少女が受け止めるには重過ぎる残酷な現実。

閉ざした記憶と開いた能力。

言霊、強制暗示は彼女自身が本当の孤独を手に入れるために手に入れた能力。

自分を孤独で埋め尽くして、最終的には孤独死させることが目的。

そうすることだけが、唯一両親を殺してしまった自分に出る償いであると少女は思っていた。

少女の抱えていた孤独の正体。誰にも謳われない。誰にも知られることの無い。少女の殺人の答え　　償いの為に背負い込んだ、

死への願望。

「私は……私は……」

ようやく手に入れた答え。ずっと彼女が遠ざけていた答えが解つて、

初めて彼女は　　本当の孤独を知った。

「……どうして……」

呟いて、少女は地面に膝をつく。

これまで抑えていた感情が一気にその瞳から零れ落ちる。

偽物の孤独と、本物の孤独。

「誰も殺さない通り魔。……その本当の意味は孤独によって相手を自殺させることで、自分は誰も殺さないのだという意味じゃなく

両親を殺してしまったことを、否定していたんだな」

哀しそうな瞳で橙弥が呟く。

その眼は僅かに濡れていた。

少女は頷く。頬を地面に擦り付けるようにして力無く。

そんな少女を橙弥は哀しそうな眼で見つめていた。少女の過去を知った上で同情するのではなく、少女の過去を知った上で彼女を我が俾たと罵るのでもなく。純粹に、彼はただ純粹に一人の友人として彼女の孤独に共鳴していた。

「あの噂はお前が自分で流していたんだろ」

疑問ではなく、肯定。

その言葉に少女は頷くことしか出来ない。

考えてみれば単純な矛盾だったのだ。誰も殺さない、傷つけることの無い通り魔。そもそも、そんなものが噂になるはずが無い。被害者がいないのなら、それは誰にも知られることが無いのだから。

「私は……逃げていただけ。ただ誰かに、振り向かせて欲しかった自分の過去と向き合わせて欲しかった……」

少女の希望は身勝手な願望かもしれない。言った少女ですら、それは解っていた。

それでも少年は、そんな彼女を非難したりはしなかったのだ。

橙弥は暗い夜に浮かぶ金色を見上げて、呟くように言う。

「自分のことを通り魔なんて存在に定義していた時点で、お前は知らない間に振り返っていたんだよ。答えは見えていたけど、それに辿り着こうとしなかった。それがお前の逃避だったんだ」

少女は答えない。

少年もまたそれ以上を口にはしなかった。

楠涼音の中で、答えは既に出ている。背中を押してやる責務も果たした。これ以上、自分がこの場に居る理由すら無いとさえ思っていたからだ。

「ごめん……なさい」

小さな声。

初めて歌われた、彼女の孤独。

それは確かに、誰かに届いていた。

「ごめんなさい……お父さん、お母さん。わたしは、ずっと逃げていました。……ごめんなさい。二人を……独りにしてしまって……」

「ごめんなさい」

そのココロを、言葉を少女はずっと伝えたかった。言葉ではなく自身の言葉で。誰かに届く声にして。

重ねてしまった罪はどんな懺悔でも赦されることはないけれど。それでも謝ることしか少女には出来なかったから。重ね続けた孤独は全て、それをするために溜め込んだものだったから。

本当の殺人定義。それが殺戮でない証明。

謝罪の声はなんだか濡れているようだ。と、橙弥は思う。

六月の初め。曇っていた空は夜になってひとまず月を覗かせている。

金色の光の下。何度も謝り続けた少女はやがて、深い意識の底に落ちていった。

六月二日。天気、雨。

昨日の晩に回復の兆しを見せた天気は、俺がベッドの中で眼を覚ます頃にはすっかり雨を降らせるまでに悪化していた。

今は昼休み。雨が降っているということもあり俺は屋上には行かず、代わりに朔夜さんの私室と化した国語科研究室にいる。

二度と来たくないと思っていたこの完全校則無視、下手をすれば法律さえ無視しているかもしれないこの部屋に俺がいるのは、部屋の主である朔夜さんに尋ねなければならぬことがあったからだ。

「朔夜さんは、初めから全部解っていたんですね」

昨日あったことの顛末を話し終えて俺は言った。

相変わらず校舎内喫煙を生徒の前で堂々とするこの変人教師は、紫煙を吹き出して答える。余談だが、彼女のデスクにおいてある灰皿には既に三本の吸殻がある。俺がここに来たのは昼休みが始まってすぐのことだから、この煙草は授業が一つ終わることに吸われてきたものと考えて間違いないだろう。それが何だと言われると確かにその通りなのだが。

閑話休題。

ヘビースモーカーな国語教師は表情一つ変えずに自白した。

「知ってたよ。楠涼音が犯人だってことも、彼女の過去も全部」

「歌姫事件つてのは、被害者が言霊の暗示を歌って言ったからですか？」

これも確信があつて訊いたことだったのだが、意外にも朔夜さんは首を横に振った。

「歌姫事件というのはね、遙瀬。孤独を謳うことを指していたんだよ。まあ、発音が同じだってことで、歌姫事件の方がそれっぽかったから言い換えて採用したまてだ。言っただろ、有力な情報は得られなかったと」

俺としては、それっぽいとは何っぽいのか、その点を深く追求したいところだが。

「こんな話を知っているか？ ステージに立つ大女優というのは、実はみんな孤独なんだ。何故か。女優というのは舞台の上では偽物の自分を演じなければならぬからだ。何億という人間に認知される自分は、全て偽りでしかない。それで歌姫。孤独という歌を謳う、一人の少女さ」

既にわざわざ言う必要など無いと思うが、朔夜さんの言葉からは感情が感じられない。

冷徹なまでの淡々とした言葉。それと仮面のような無表情は自分は既に終わったことに興味がない、と言っているように思える。

短くなつた四本目の煙草が灰皿に投じられる。

朔夜さんは新しい煙草の箱を胸ポケットから取り出して、そこで

手を止めた。

「まあ、お前は上手くやったんだろうね。昨日の電話で、結局は死ぬんだろうな」とか思っていたから、お前がここに来たときは驚いたよ。と、そんなことはどうでもいいな。

朗報だ、遙瀬。これまで言霊の孤独に支配されていた植物人間は全員無事だ」

人のことを勝手に殺して、さらにそれだけに飽き足らずそれを語る口調が心から無関心だったことに俺は腹を立てていた。そんな俺だったのだが、その言葉を聞いて驚愕する。

ゼンイン、ブジ？

「どうも私が考え違いしていたことは『彼女の暗示がどう設定されているか』だったんだ。無論孤独死の原因である暗示なんだから、それは孤独に設定されているものだと思っていたんだけどね。どうやら、楠涼音が設定していたのは『共鳴』だったんだよ。

ようするにね、彼女は単に理解者が欲しかっただけなんだよ。自分の孤独に共鳴し、いつか自らの目的を遂行するための後押しをして欲しかっただけ。孤独死は彼女が持っていた孤独に共鳴した連中の末路だったんだよ。報われないね。彼女は自分が欲しかった理解者を、自分で殺してしまう結果になっていたんだ」

暗示の設定が共鳴だったからお前は死ななかつたんだよ、と朔夜さんは付け加える。

……俺が昨日見た楠涼音の記憶。あれはつまり、言霊による共鳴が見せたものだったということか。

「楠涼音も無事なんですかね？」

「無論だ。彼女は私の知り合いに預けたから問題ない。何でも屋を自称してる変な奴だが、あいつなら大丈夫だろう。アレはアレで、私は信頼している」

この人に変人とか言われたら、その人も終わりだろう。

朔夜さんは俺の心中を読み取ったか、何か失礼なことを考えたな？ と咎めてくる。目つき同様に勘もまた鋭い女性なのだ。いえ、

何でもありませんよ。センセイ。

「この学校で暗示に掛かっていた生徒はどうしているんですか？
橋は今日も欠席していましたけど」

「そいつらも全員その知り合いに預けているよ」

聞いて、愕然とする。

「全員　　つて、その知り合い、相当大的な病院でも経営してるんですか!？」

なんか変なことを口走ってしまう。

朔夜さんは、ああ、とかまた興味無さ気に言っただけで種明かしをする。実はね、欠席者全員が暗示に掛かっていたわけじゃないんだよ。いや、むしろそんな連中は少数だったよ、二桁にも達していない。

学内の欠席者数なんてのはね、数えてみればそれなりの数字なんだよ。知らない者が見れば、多いと思うだろうな。私もその例外ではなかったわけだ」

「なんか……随分とぞんざいな話ですね、それ」

非難する俺を、事実だからしょうがない、と朔夜さんは拗ねたように言っただけなような眼で見据えた。彼女と会話していて初めてそこに感情が伴った気がする。

ちなみに暗示を掛けられた生徒は少しすればそれから開放されるらしい。詳しいことを説明してくれたが、その理由は朔夜さん特有の難しい言い回しによって理解不能だったために割愛する。俺の言葉にしてそれを説明するならば、目的を達成し終えたから、ということだ。

はあ、と溜息を一つ。

結局この事件　歌姫事件は終わったわけだ。

俺の中で解決されていない疑問は、後一つだ。俺はそれを口にした。

「朔夜さん、あなたって何者なんですか？　楠涼音の過去を調べたり、その国語教師にあるまじき洞察力といい。……本当は妙な組織の職員だとか、そんなんじゃないですよね」

我ながら頭の悪いことを訊いている。

罵声を浴びせられることを覚悟していた俺が聞いたのは　そんな危惧に反する笑い声だったりするから驚きだ。

「ははは、はははは　なんだそれは、作業員！？　面白いことを言うな、お前は！」

……どうやら、ツボに入ってしまったらしい。

俺、なんか面白いこと言ったかな？

朔夜さんはデスクにばしばしと平手打ちを喰らわせてから、呼吸を整えて言った。

「そんな裏設定は無いよ。たまたま、前の仕事で情報収集とかを任される役だったから、そういうのが得意なだけだ。私は普通の国語教師だよ。安心しろ、秘密を知ったからには死んでもらう、とかそんなことは言わないから」

だいたいのだが。

まださっきの爆笑の余韻が消えない室内で、俺は腰を上げる。

昼休みは半分ほど消費してしまったが、まだ教室に戻って弁当を喰うぐらいの時間は残されている。同じ失敗を繰り返してはいけないのだということ、俺は中学のときに習った第一次世界大戦と第二次世界大戦から学んでいるのだ。

さっさと立ち去ろうとする俺を、朔夜さんが呼び止める。

振り向くと、やっぱり無表情で煙草を銜えている朔夜さんが俺を見据えていた。

本当に、さっきのように笑っていれば美人だとわかるんだが。どうしてこんな、不機嫌に傾いた無表情を常に貼り付けているのだろう。そういうのが好きな生徒が、今年の三年には多いと言っただろうかね。

火が点いた四本目の煙草から紫煙をくゆらせつつ、朔夜さんはまっすぐに俺を見て言った。

「また来いよ」

……まったく。兄妹揃って、変な人に目を付けられてしまったも

のだ。

俺は呆れながらそれに頷くことなく、しかし否定することもなく、
弁当の待つ教室へと向かった。

（孤独共鳴の歌姫ノ了）

第三章・Fate preface / 1 (前書き)

……最愛なる、わたしの絶望。

/ Fate preface

/ 0

……

月明かりだけが明るい夜。

季節を象徴する、桃色の花弁を湛えた一本の桜。
短い命を儚く散らす姿をわたしは見上げていた。

この場所に縁の想い出があるわけでもなければ、こうしているの
にたいした感慨も浮かばない。哀しいことが在ったからこうしてそ
れを紛らわせているわけでもないし、その逆でもない。

こんなことは昔から時々在った。

それがいつのことだったのか、その時のわたしが何を思ってそう
したのか。重要であるはずの情報は全て記憶の彼方へ忘却してしま
っていて思い出せない。だっていうのにわたしは懲りずに昔の自分
を、この意味の無い行為によって再生しているのだ。

目的は無い。発端も無い。

どこから始まってどこで終わるのか、それさえも解らない。……
もしかすると邂逅も終焉も初めから用意されてなどいないのかもし
れない。当事者であるわたし自身が解らないのだから、答えは結局
全てが『かもしれない』という曖昧な結末に至ってしまう。

別に哀しくはなかった。だって、目的や発端がなくて今こうして
いるわたしは、確かにここにあるから。それだけで、わたしは
この行為に目的を見出すことが出来た。

早足な風が花弁を散らす。

「こんばんは」

どういうことだか、わたしは知らずそう呟いていた。

風が止み、揺れる桃色が静寂を取り戻すとわたしは半身で振り返った。丁度自分が声を掛けた誰かと、桜の木が視界に納まるようにそこに誰かがいることは解っていたから、わたしは時頃の挨拶として言葉を発していたのだろう。

直に、わたしが見ていた春の象徴は全ての花卉を散らしてしまう。そうなってしまうえば、再開はまた来年　この木にとっては来世となってしまうのだ。

わたしには、何だかそれがとても哀しいことに思えて、それで突然の来訪者に声を掛けていた。

声を掛けた相手は同じ年くらいの少年だった。見知った顔ではない。わたしに面識が無いということは当然相手もそうであるがために、少年もどう返答してよいのやら戸惑って狼狽している。

風は無い。それでも散っていく桃色の花卉。その一片をずっと見送る。

「あなたは、この木が好きですか？」

問いかけると少年は頷いた。

その動作が何だか可笑しくて、わたしは不意に微笑んでしまう。

桜。

短い間でしか自身を誇れない儂い、季節の象徴。

一心不乱に散り行き、やがてその命の灯火が消えてしまっても、また時季が来れば同じ場所で咲き誇る。まるで輪廻のように。廻る季節のように。同じ因果の螺旋を永遠に繰り返していく。

その在り方に、わたしは憧れていた。

もしかするとそれがわたしがこうしている理由なのかもしれない。

或いは

「え………？」

少年の言葉に、短く呟いたのはわたしだった。

或いは。

わたしはただ待つていただけなのかもしれない。

ここで誰かに声を掛けてもらおうのを。その誰かを、ずっと。
この御桜の下で。

……

/ 1

季節は冬。

空気は過ぎ去っていく冬の名残のように少しだけ冷たい、三月上旬のことだった。

来年のこの時期には高校受験でばたかしているのだろうかと思いつつ、俺は残り少ない今の学年での生活をこれといって特別な思いも無く過ごしていた。

学年末テストも終わったこの時期のこと。教室の中はただカレンダーの日を捲って行くだけの倦怠ムードに包まれている。まあこの先に何かがあるというわけでもないのに、誰かが喧騒を撒き散らしながら場を盛り上げるといふことが無いというのも、今の時期の特色なのだと思ふ。三年になれば受験、卒業云々で慌しくもなるだろう。だから今はこの平穏で少し退屈過ぎる毎日も悪くは無い。それどころか、俺はむしろ好ましいとさえ思っていた。

だというのに。

平凡にして平穏なスローライフは唐突に終わりを告げてしまった。

というのも、今年度ももう一ヶ月を切ったこんな時期に転校生なんてものが我がクラスにやってきたことが原因だ。正直、意味が解らない。どうせならば進級してからにすればいいのに。何でわざわざこんな微妙な時期に転校してくるのか、その意図が俺には解らなかった。

……それはまあ、正直なところを言えば俺も少しは情動的に盛り上がりもした。

小学生の頃から俺のいたクラスには転校生なんてもんは一人もやってきた例たゆしがないし、その転校生が女子で、それもかなりの美少女だったりするのだから、俺のテンションゲージもワンランクからツーランクほど上昇したことは認めざるを得ない。

だからこそ、俺はその少女を何ら抵抗無く日常に受け入れることが出来たのだろう。

ある日のこと。卒業式も済んで、いよいよ校内での自分が最上級生に昇格した三月の下旬。

始業の鐘が耳に入ると同時に教室に入ってきた転校生少女 御桜流深は学生鞆を机に引っ掛けて俺に言った。

「おはよう」

その何気ない挨拶に、俺も同様のセリフで応答する。

流深が転校してきた日に行われた席替えは、盛り上がり欠ける教室を少しでも活気付けようとした担任による発案で、俺はその催しによって流深の隣の席に座ることとなった。

イカサマは一切無い。純粋なクジによる決定である。

隣の席というアドバンテージの所為か、俺は他の生徒よりも流深と話す機会が多い。転校後と転校前の違いを修正する質問に答えた

りしている間に、気がつけばこんな風に挨拶を交わすことなどは日常的習慣として定着していた。

「今日も遅刻ぎりぎりか。なかなか慣れないもんだね」

「外国から転校してきたわけでも無いんだから、登校時間に慣れるも慣れないも無いだろ」

頭をかきながら流深はそんなことを呟いていて、俺はその可笑しな言葉に意見する。

最近ではそんなやり取りから一日の始まりを実感していたりするのは、どういうことだろうか。

「そつでもないよ」

黒板の前で担任が特に話題も無いのに無理やり捻り出したみたいな雑談を終了させて、冷ややかな視線と無関心の沈黙に見送られて退室していくのを意味無く待ってから、

「住んでる環境が変わると、人間のバイオリズムは結構変化するんだよ。生活習慣に少しくらい乱れが出てきても、それは特に不思議なことじゃないと思うな」

「バイオ………悪い、何だそれ？ テレビゲームか何かか」

と、こんな風な会話は三日に一回くらいのペースで展開される。

流深の話す事柄に俺がついていけないという、そんなパターン。

時々流深はこのように意味の解らないことを何気なく口にすることがあるが、それについて俺が問うと、

「ん？ 別に気にしなくてもいいよ」

とか流されてしまうから始末が悪い。結局のところ俺は話の意図がつかめず、後になってそれはもっともな事を言った俺に対しての誤魔化しだったのではないかと疑ってしまったりもする。つまり流深の話に深い意味は無く、少し変わった形でお茶を濁しているだけなのだ。

そんな仮定を立てたのが最近のことで、今日までは深く取っ付く必要もないかと思っていたが、この機会に一度反撃してみるのも悪くない気がする。などと考えて俺はそれを口にした。

「それじゃあ、前の学校では今みたいに遅刻してなかったのか」

今日でこそ遅刻まではしていないものの、トータルで見ればその実流深は遅刻の常習犯だったりする。俺自身朝は弱い方で比較的遅刻が多い方なのだが、彼女は私の俺を凌駕する遅刻魔なのだ。

本人はその話題は既に終わったものだと思っていたらしく、予想外の俺の質問に僅かな間で思案顔を見せてから答えた。

「ううん。前の学校でも週四くらいのペースで遅刻はしてたかな」

「だったらバイオリズム関係ないじゃねえか……」

仮想はこの瞬間より現実となった。それにしても週四ペースって……。

転校以前の流深が公立の中学に通っていたのか、それとも私立の中学に通っていたのかは知らないが、それでも週四回は多すぎる。

よもやその汚点が内申に影響するから、とかいう理由で転校したのではないだろうか。

俺は色々な意味で流深の天然発言に呆れかえっていた。

「お前さ、そんなに大丈夫なのか……？」

「え、なんのこと？」

「……いや、もういい」

どうも流深にとって俺の心配は必要の無いものらしい。当の本人がそれを気にしていないというのに、他人の俺が気にすることではないだろう。このことにはこれ以上触れないことにしておく。

そもそも隣の席というだけで、俺が流深の将来を面倒見てやる義理は無い。そうでなくても自分のことだけで手一杯なのだ。

それに隣の席、という関係もこの先そう長くは続かない。

こうして今日も他愛も無い会話が終わる。

ホームルームから一限目の開始までにある時間に組み込まれたこの日常も、後少しすれば変わってしまうことだろう。俺の学年は一組から五組までである。直に進級と共にやってくるクラス替えのシャッフルイベントの結果次第では、それもありえることなのだ。確立

にしてみればそう低くない。

三月の終わり。

旧暦では春とされているが、現代ではまだ冬に分類される今の時季。

風は少し肌寒いものの、気温は緩やかに上昇している。

廻っていく季節の中。

もつじき消えてしまうこの日常を俺は無感動なまま過こして行く。

この先に在る 日常とは歪よこんだ日々の螺旋を予期せぬままに。

第三章・Fate preface / 1 (後書き)

長らくお待たせしました。第三章開始です！

春。

学年の数字が繰り上がるまでに用意される僅かな準備期間である春休みも終わり、新しい季節の幕が上がった四月。クラス分けの発表を見てから体育館で校長の話聞き流して、今は教室で三年で最初のホームルームが行われている。

呆れることに、クラスの面子に大きな違いは無かった。

一年からずっと同じクラスだった奴は数えるほどしかないが、二年から引き続いて同じクラスに配属された奴や、一年の頃にクラスメイトだった連中など覚えのある顔がずらっと並んでいる。

学区割によって振り分けられ、それほど人数も多くない公立中学ではこんなことも珍しくはないだろう。

担任も二年の時と同じ。担任を受け持つ教師は一年の時から決まっております、それが三年まで繰り上げられるのだから、どこに当たっても入学当初のような新鮮な気持ちにはなれない。

今更する必要など無いというのに、ジャージを着込んだ担任は意気揚々と自己紹介を開始していた。

それを全く無視して、俺は教室を見回す。

廊下側女子列の一番後ろの席。

これから嫌でも毎日面を合わせる連中の中には、御桜流深の姿もある。

二年の終わり。

終業式の日を俺は思い出していた。

確かに覚えている流深の溢した言葉は、この情景を予見していた

といってもいい。

もつともそんな大げさなものではないのだが、ようは俺とまた同じクラスになる気がする、とか言っていたのだ。その時は軽く聞き流していたが、どうやらその予感当たっていたらしい。……別にそれほど神秘的なことではないが。

眼を離している間に時計の針が活動を休止しているのではないかと思うような長いホームルームを、俺はそんな怠惰な思考を巡らせて過ごした。

「やっぱりまた一緒のクラスだったね」

「みたいだな」

その日の放課後。

どつという訳か流深は俺と帰路をともにして、そんなことを楽しんで言ってきた。

俺はありもしない衆目を少しばかり気にしながら歩を進める。

流深の家がどこなのかということ俺は知らない。それ故にこうしているのが自然なのか不自然なのかは解らない。ただし一つだけ明言できることがある。俺は朝の登校時も夕方の下校時にしても、流深と肩を並べたことなど無い。

転校後の流深が最もよく会話している人間は、実は俺だったりする。普通に女子と会話していればいいのに。

その理由はというと、別に転校生だから友達が居ないとかではない。存在感が皆無なわけでもなければ、周囲から反感を買っている訳でもない。単に流深が能動的に会話を持ちかける相手というのが俺だけだったから、ということが理由だった。

声を掛けられれば愛想良く対応しているし、決して孤立している

という訳ではなかったのだ。

「お前の家ってこっちの方なのか？」

沈黙して歩いている空気に耐えられなくなり、俺は別段興味があるわけでもない質問を試してみる。

果たして、返事は無かった。

足音だけが鳴り止まず、風が葉を揺らす音だけが生きている。そんな静寂。……どうもこういう空気は苦手だ。俺はこの状況が発生しようとしているのを抑制したつもりが、その実促進させてしまったということか……。

やがて気まずいとかでは無く、それを通り越してこの沈黙を不審に思った俺はそこでようやく隣に居るはずの少女が消失していることに気付いた。

顔を見ずに話していたから、それでだろう。

無意識に身体を後方へ振ると、流深の姿は簡単に見つかった。

歩数にすれば五歩分くらい後ろで、流深は立ち止まっている。

少女が立っているのは公園の入り口。ブランコと滑り台しかないような小さな公園だ。地元の間人なら過去に一度くらいは足を踏み入れたことがあるはずで、俺も例外ではない。幼かった頃に妹と連れ立ってきたこともある。その妹も今は家にいないのだが。

思い出すのは寂れた鉄の遊具だけが在る、寂れた空間。

記憶に違わず遊具もフェンスも塗装が剥がれ落ち、年月と共に風化し錆び付いたそこを流深は眺めている。その横顔が何かに取り憑かれたように、というよりも魂を抜き取られたように俺には見えて、不信感が二乗した。

瞬きもしないで何を見ているのか。感情の無い横顔からはまるで解らない。そもそも流深の考えていることが俺に解った試しなんて無い。

それでもこのまま置いて帰る訳にはいかないし、取り合えず声を掛けてみる。

「何してるんだ、んなところで立ち止まって」

人形のようになつてしまった少女に歩み寄る。

すぐ傍まで寄つたというのに、それでも流深は微動だにしなかつた。まるでここに在る他人の存在どころか、自らさえも忘却してしまつたように。

それは本当に人形みたいだった。

しかしそれは、命など無いのに今にも動き出しそうな人形が出す雰囲気とは反対のそれを持つていた。生きているはずなのに、活きていない。とでも表現しようか……いや、俺に出来る最良の描写はそれ以外無い。余計なモノを加えてしまえば、それこそ別物になつてしまいそうに思える。

少女の視線の先は、古い鉄の遊具達ではなかつた。

それは、掃き溜めのような錆びた空間で唯一生きていた。

「……桜、か」

呟いて確信する。

四角形の空間の中央で屹立し、一心不乱に咲き誇りながら桃色の花弁を散らしていく春の象徴。それはモノクロに彩られた公園で唯一の色として存在していた。

季節を考えれば別に珍しいことも無い。それこそ、ここまで忘我してしまうほど。

「御桜、お前もしかして寝てるのか？」

そう言つて肩をたたいてみると、止まっていた流深の時間はそれで動き出した。

「ごめん、急に立ち止まつて」

「いや別にいいけど。……お前が前に住んでた所つて、桜が咲かない地域だったのか」

日本中を探して、果たしてそんな地域が存在するのは解らないが。

俺の愚問に流深は当然のように首を振る。もちろん左右に。

普通なら嘲笑されてもおかしくない俺の言動に、しかし流深はどつとも真剣な顔をして、

「わたし、昔からこういうことってあるんだ。急に頭の中が真っ白になっちゃう感じがして、それで気がついたらさつきみたいになつてること。自覚はないんだけど」

自覚が無いのに、どうしてそんなことが解るのか。まさかさっきのような状態のままでも時間も過ぎ、気がつけば日付が変わっていた……とかそんな仰天エピソードがあったりするのか。

「ごめんね、わたしってこんなだから」

どこかで聞いたことのあるような台詞と共にもう一度謝って、少女は軟らかく微笑んで見せた。

その夜。日が落ちてから俺は家を出た。

目的があつた訳ではなく、ほんの散歩気分の行動だった。

目的は無くても理由はある。

イメージが在った　弱々しい電灯の光が届かない、月明かりのみに照らされた夜の中で佇んでいる少女のイメージが。

何故そんなモノが浮かんだのかは自分でも解らないし、その為になんか出歩く意味だつて解らない。発端から目的まで無いというのに、どうしてこつとも簡単に衝動を受け入れたのか。それさえも不思議に思えない。

忙しく瞬く電灯の光を振り返つて……気がつけば俺は昼間の公園までやってきていた。

エタイの知らない何かに後押しされたように。まるで初めからここに向かつて歩いてきたかのように。

目的も終着点も無いはずの散歩は、初めからここが目的地だと決められていたかのように唐突に打ち切られた。

頭は冴えていた。けれど自分の矛盾した行動と思考を一度でも可

笑しいと思わない。思えない。

それはまるで、初めから用意されていた筋書きをなぞる物語の登場人物のよう。

或いは 滑稽な旋律に乗せて踊る道化か。

月光の下。

背景は一切の闇。

寂れたモノクロ空間と、一本の桜の木。

白と黒だけに彩られる舞台の上に咲き誇る桜。

風に靡られて地面に落ちた花びらは、まるで桃色の絨毯。

そして、舞台の中央で、月光さえも薄暗く思えるほどに輝く少女。
この舞台の少女。

どこか哀しげな表情と儂い光を宿した瞳で、御桜流深がそこにいた。

「こんばんは」

透き通った声は風に乗って夜に響いた。

散り行く春の象徴を眺める少女が振り向く。

白い顔は闇の中で一層際立ち、およそ感情の感じられない面持ちは玲瓏。そこに存在しているはずなのに、どうしてもそうだと認識さえない佇まいは幽霊の様。まるでそこに、想いだけが残留しているような、今にも消えてしまいうに儂い一人の少女。

俺は自分の知っている少女を、どうしても既知の人物であると認識できず立ち尽くす。

声を掛けられても棒立ちしている様は、相手からしてみれば奇怪な様子だろう。

そこまで解っていないながらも尚、言葉を紡ぐことさえできない。発声器官の全てを没収されたか、声の出し方を忘れてしまったか。ただそこに立って眺めていることしか出来ない。

拘束感や束縛感は無かった。

そんな外部からの強制的な圧力ではなく、自分の中から湧き上がってくるたった一つの感情に意識さえも支配されて行動できない。

当然のように、少女は俺を訝し気に見据える。

非難する風でもなく、嘲笑する風でもなく。

どうしてか少しだけ楽しそうに、少女は口を開いた。

「あなたは、この木が好きですか？」

普段とは違う口調と声色に戸惑う。

少女は、俺の既知である御桜流深の姿をした別の何かのようだった。

それは偽者や本物の概念さえも越えて、限界まで似せて作られているのにどこかが決定的に違う。もしかすると俺が知っている彼女の方が間違いなのかもしれない。なんて考えてしまう時点で、本来なら可笑しな話なのだ。

なぜなら俺は、この時どうしても目の前の少女を御桜流深なのだと思えなかったのだから。

初めに後姿を見て、振り返った全容を見ても尚そうだと確信していながら、一言言葉を交わしただけでその確信は揺らいだ。

違和感と言えば簡潔で助かる。目の前の少女からは、肌で感じる違いが確かに在った。

それが俺が少女を記憶の中の御桜流深と結び付けられない要因。問題があるとするならば、その肌で感じる何らかの違いというのが俺自身にさえ具体的な所が不明だという点。視覚から得られる情報、聴覚から得られる情報。姿形も声も既に在る認識と合致するのに、俺はありもしない第六感から自身の認識を肯定出来ずにいるのだ。

奇しくも昼間と同じ場所で、今度は俺の方が忘我していた。まったく、これじゃ人のことは言えたもんじゃない。

質問の内容ははつきり覚えていないが、俺はどうか自己を再起動させて頷いた。

その動作のどこに可笑しな部分があったかは解らないが、俺の返答に対して少女は笑っていた。無邪気な子供のように。世界に疲れただ大人のように。希望を見据えるように、絶望を抱くように。

対照的な印象を、一つの存在が同時に与えてくるその異常。

……本当に、どうかしている。こんな所にぶらりと来てしまった拳句、俺は目の前の怪奇を　美しいなんて感じてしまうのだからどうしようもない。

その点で見れば、常識的な普通人だと思っていた自分自身でさえ異常者に思えてくる。

「少し、話をしませんか？」

見知ったはずの少女は、初対面の相手にそうするような口調で言う。

思えば初めて俺が流深と話したときさえ、こんな風な口調ではなかった筈だ。そうなってくると目の前の少女は、本当に初めて会う誰かになってしまっただが……。

それらの思考を全て無視して、それでも俺は少女に従ってしまう。否定という感情がそっくり消え去ったかのように素直に。

本来ならば外側から来る筈の衝動が、内側から発生してくる感覚。遙瀬橙弥という人間の元。少女は人間の根源的な部分を見据えて、直接そこに話掛けている。

矛盾した衝動を俺はそう解釈した。

俺は誘蛾灯に誘われたみたいに桜の木に歩み寄る。

桃色の絨毯を踏み、舞台の中心、物語の核へ向かう。

それから俺たちは他愛も無い会話をした。本当に、同級生同士がそうするようにごく自然に。どちらかの言葉にどちらかが笑ったりする、そんな普遍すぎる会話。

……

最後に、少女は語った。

俺は黙ってそれを聞いているだけだったが、話し終えた彼女に一言の疑問を投げる。

それが夢のように不確定的な時間に終焉を齎すとも気づかずに。

儂く笑って答えた少女が、明日にこの日のことを思い出すことは無かった。

この国の特徴として四季というものがあって、曆には十二の数字があつて季節は四つ。

だとしたら季節一つ当たり三ヶ月というのが均等なのだが、行き過ぎた人間の文明はその平等性をとうに破壊していたらしい。

今に始まつたことではないが、四つの季節の中で一番長いのはやはり夏なのだと思つ。

蝉はもう鳴いていない。連中も暑さで声を出すことさえ疲れているのかと、そう思えてくる今は八月下旬。俺たち学生は夏休みという長期休暇の真つ最中だった。

「へえ、妹いるんだ。知らなかつた」

「今は家にいないけどな。普通に公立の中学に上がるのが嫌だつたらしくてな。親戚の家から有名私立に通つていらつしゃるよ」

八月の終わり。夏はまだまだ続いているが、夏休みという期間は直に終了する。

そんな今日はわざわざ休みを一日潰して催される登校日で、三年は学力テストも兼ねて学び屋に足を運ぶ。

休み時間。こんがり日焼けしたクラスメイト達が多々見受けられる中で、終業式以来俺の記憶の中にあつた姿とまるで変化の無い御桜流深との会話である。

話題はいつものように流深からの提供だった。

それがどんなものかというのは、前述の会話で理解可能だと思つ。つまりは俺の家族構成についてだった。しかしながら、相変わらずどうしてそんな話題が沸いて出るのかは不明だ。

「家族なのに、一緒に住んでないってこと？」

言葉と同じように、そう訊いてくる表情もまた子供染みていた。

別に寂しいと思ったことは無いが、思い返すとここ一年と半年の間妹とは会っていない。正月には帰ってきていたらしいが、その時でさえ俺は顔を合わせていなかった。……そう思えば年に数回は妹も帰省していたのだが、悉く俺とはすれ違いで会っていない。もしかして避けられてたりしないよな。まあ、そんな心配をするほど俺はシスコンではないのだが。大丈夫だろう。……うん、多分大丈夫だ。……多分。

暴走しかけた思考を打ち切る。

何で俺がそんなことで頭を抱えなければならんのか。娘を嫁に出す父親とは、こんな気分なのかもしれない。それも適切ではないのだが。

「寂しくないのかな。何か事情があつて家を出て行ったとか」

「それはない」と思う。

俺は後者の意見を否定する言葉を続けて発する。

「精神年齢が実年齢を大きく上回っているような奴だったから、寂しいとかは思っていないだろ。どうも昔から他人を寄せ付けない感じの性格だったし、ずっと一緒に住んでた家族から離れたいと思っただんじやないか」

俺の中で最も有力な憶測がそれだ。

どういう訳か、妹は周囲の人間を頑なに拒む性格なのだ。

小学生の中学年くらいから始まった傾向で、はっきり言うと当時の妹は異常だった。

拒絶、というよりももっと……。存在自体を認可していない感じで、他人を見る妹の眼はゴミか何かを見るようだったことを覚えていて今思ったことだ。

「それは違うよ」

何故か、流深は否定した。

様々な情報により構成された俺の仮説を、本人に会ったことも無い他人が否定している。その割には流深の眼はやけに自身の色を帯びていて、この後何を言われても強制的に頷かされてしまいそうな雰囲気だった。

少々自己の思念に浸っていた俺はその言葉で現実に戻される。「悪い、何が違うんだ？」

「妹さんは多分、そんな理由で家を出たんじゃないと思う。って言ったつもりだけど。何か他に理由があったんだと思うよ、わたしは「そうか？ ……まあ、あいつなら何か企んでるのかもしれないな」帰ったきた妹がダークサイドに堕ちていないか、少し心配だ。よもや世界征服を成し遂げんとする謎組織の頭に成り上がったりはしていないだろうな。」

「バカバカしい……」
俺の妄想も飛躍しすぎだ。

妹の精神年齢は俺自身よく理解しているはずだというのに。しかしながら、世界征服とまではいかなくても、むこうの学校を既に支配下に置いているかもしれない。裏で生徒会が暗躍する私立学園。その頂点で優雅に笑う女王の姿を、俺は不覚にも想像してしまった。

俺の最新の記憶は小学生の頃の妹で、中学の制服を着ている姿など見たことが無いから、その想像もリアリティをまるで持たないが「それでさ、その妹さんは何て名前なの？」

「空」
考えてみれば、今更になってようやく名前が出てきた。

自宅では長期間発音することの無かった固有名詞を、俺は妙に懐かしく感じる。

「ソラ……さん？ ええと、普通に空海の空でいいのかな？」
「……そんな例えは聞いたことないが、それだ」

これも今更かもしれないが、御桜流深という少女の感性とネーミング

ングセンスは常軌を逸している。担任の名前さえも間違える始末なのだから、どうしようもない。

ただ間違えるだけならばいい。

その間違い方が異常なのだ。

聞いたことも無い奇矯な名前を真顔で口にする姿は、ちよつとしたミステリー……悪くすればホラーにさえ見えてくる。

「会って話してみたいな、妹さん。帰ってきたら教えてね」

「俺はいいけど、お前の方が忘れてるんじゃないか？」

何気なく口になると、流深はきよとんとした顔で俺を見返した。

「忘れる……ってどういうこと？」

何を言っているのか解らない、と眼差しで語りかけられる。

流深は俺の言うことの意味が解らないようだが、それは俺の方も同じだった。

逆に何故俺の言っていることが理解できないのか解らない。

今年の春。

新学期を迎えたその日のその夜。

俺は公園の桜の木の下で、一人の少女と話をした。

散り行く桃色の花弁。暗闇の中で唯一輝いていた光。止まっっているように感じられた時間。

その体験を俺は今でも鮮明に思い出すことが出来る。会話をした少女の表情も。紡いだ言葉も。そこから生じた感情も、俺は覚えていたというのに。

事の当事者である少女　御桜流深は、その日のことを一切覚えていなかったのだ。

翌日の教室で俺がその話をした時、まるで他人の夢語りでも聞いているかのような表情で聞き役をした流深。本心から俺の話した全てを覚えていないと言った少女。それが真実であることは、俺にだって読み取れた。というよりも、そんな嘘を吐く必要が全く無い。

ならば本当に　少女は何も覚えていないのだと、結論付けるしかなかった。

「……いや、お前って物忘れとか激しいだろ」
敢えて易しい言葉にして、俺は言った。

流深の記憶に妙な空白があるのは、実はそのことだけでは無いと俺は知っている。

その事実は流深自身の口から聞かされたことであり、時々知っているはずの記憶が思い出せないことが在るらしい。日常に連続するデジャヴ、とか言っていた気がするが、こいつの言葉は時々可笑しくなる。

「うっん……まあ、そうだけど。こういうことは忘れないと思うよ」
「こういうこと、て……？」

「誰かと話をしたこととか」

俺の記憶とは著しく矛盾することを言って、

「わたしが忘れることは……なんていうか、昔のこと。上手くは言えないんだけど、唐突に記憶の一部分だけが思い出せなくなる……ていうのかな」

さらに可笑しなことを言った。

記憶障害、というわけではないと思う。嘗て自らの性癖を語った際に流深はそう言った。

しかし俺にはどうも腑に落ちない部分がある。それがどの部分なのかは明確に解らなかったが、今それが解った。矛盾だらけの会話だからこそ、そこから見つけられた答え。浮き彫りになった他とは性質の違うズレ。

それは流深が自らの記憶に欠落があると知っていること。という根本的な部分だった。

忘れているのなら　　これまでに生きてきた全てを忘れたとか、
そんな大規模なことでないかと仮定して　　それを自覚することはありえない。

例えば知っている漢字や英単語を一つ忘れても、そもそもそれを覚えていたことさえ忘れているのだから、自分自身では気づくはずは無いのだ。再びその単語を見たとき、ようやく自分の忘却に気が

つく。

流深は『誰かと話したこと』は忘れないと言った。つまり他人と関わりを持つ記憶は忘却されないのだ。自分一人で体験した事柄。流深が忘れていているのはそういう記憶だ。

だとしたから、それを他人から指摘されることは無い。何故なら、その記憶は一人の人間だけのモノで、他人とは共有していないのだから。いわば鍵の掛かった箱の中に鍵が入っている状態……。何となく不適切な気もするが、単純に言い換えればそういうことだ。

つまり流深は自分が忘れている、と言ったことが俺は気になっていた。

どういつつもりなのかは解らないが、矛盾している以上それは嘘になる。

その矛盾を俺は指摘せずにはいられなかった。

「違うよ」

俺の話を最後まで静聴していたかと思うと、流深は頷いてから否定の言葉を投げかけてきた。

「わたしが忘れてる……というよりも思い出せないのは、断片的な部分だけ。

例えば一冊の本があつて、一ページあたり二十行ぐらいで書かれてるとして、他の十九行は普通に読めるのにどこか一行だけが読めない状態。後の文と前の文があるから、その中間があるのは解るけど、そこに何が書かれているか解らない状態ってこと。わたしの記憶にはそういう欠落があるの」

なるほど。確かにそれなら理解できる。

理解できてしまう故に余計に話が可笑しくなるのが残念だ。

それならば尚更、あの夜のことを忘れていることが奇怪になる。

断片的なんてものでは収まりきらないだろ、アレは。

しかし俺はそのことを口にするのではなく、静かに胸の奥にしまっておいた。

この時俺は、何故か自分が関わってはいけないことに関わってい

る気がしたから。

早々に手を引かないと、気づけば後戻りできない状況になってい
るのではないかという危惧が無意識に浮かぶ。それは本能から深層
心理に語りかける警告だったのか。或いはただの杞憂か。それを俺
に確かめるすべは無い。

全てを知るのはただ一人だけなのだ。

それが俺ではないのは明白。

では誰なのか。

決まっている、御桜流深だ。

もっと早くに気づくべきだった。とは後になって悔やむことしか
出来ない。

そう　この時はまだ、自分は日常にいると信じて疑わなかった。

あの夜の少女と再会してしまうまでは。

3 (後書き)

大変更が遅れました。

入試と定期テストが重なって……言い訳の詳細はブログに載せて
います。

目まぐるしく変化していく、というよりも過ぎていく日々の喧騒。季節は緩やかに冬へと移行している。

残暑と呼ぶには長すぎるような夏の名残、もとい延長が少しずつ収束した短い秋。

紅葉なんて気がつけば散りきって、もはや今が秋だと実感することさえ難しい。

ただ暑いと感じないままで寒くない今の気温から、俺の体は秋を感じ取っていた。

俺たち三年は進路のことではたばたと騒がしい日々を送っている。そんなある日の朝、俺は半年を過ごした教室に違和感を覚えていた。始業の鐘は既に鳴り終わって担任も教卓の前に立っているというのに、まだ流深の姿が見当たらない。遅刻寸前で教室に飛び込んでくることはこれまでもよくあったことだが、この時点でまだ着席していないのは初めてだ。

……まあそれも、俺が気に掛けることではない。

騒がしい奴がいないだけに普段よりも日常が大人しいが、それで寂しいと思うことはない。むしろ何となく久しぶりの倦怠が戻ってきて、これも悪くない気がする。

思えば四月以来、俺の日常には必ず流深の姿があった。

変わり映えしない日々。

変わり映えしない倦怠。

それを歪ませていた根源。

普段あるものが無いと、その欠乏感というものは意外と大きく感

じられるらしい。

とはいえそれはどうすることも出来ない事柄で、だったら深く考えるのは無意味でしかない。開いた穴は何らかの形で埋めるしかないのだ。

だから俺はそんなことなど全く気にせず、久しぶりの静かな時間を過ごした。

放課後。秋の空は真っ赤に燃えて、夕日は校舎の廊下を橙色に染め上げている。

日々早くなっていく日没。本当に、今年の秋というものは短い。暑いか寒いかの両極端しかない気候は順調に後者へと移行していた。

俺は恐ろしいほど人気の無い廊下を一人で歩いている。

下校時間まではまだ一時間もあるというのに、こうして玄関から教室まで戻ってくる間に誰とも会わなかったことが不気味といえば不気味だ。

放課後の教室に忘れ物を取りに行く、なんてことはよくある経験ではない。

故に俺は今の状況が通常なのか、異常なのか判別できない。おそらくは前者であるという根拠の無い推測だけは確かにあるのだが。階段を上り終えて踊り場の角を曲がる。そこに来て、俺は足を止めた。

別に誰かと廊下で会うことに驚愕したわけじゃない。

それがあって当然であるとさえ思うほどだ。

それでも俺は足を止めざるを得なかった。

教室の前。そこにいる人影が有り得ない人間の姿をしていたから。

「御桜……？」

影は、教室の壁に凭れ掛かるようにしてそこにいた。朝から一度も見えていなかったその姿。

髪の毛の長いシルエットは夕日の逆行で半分が影に覆われている。

細かい表情や顔の作りを確認することは出来ないが、それでも少女は御桜流深に他ならない。

欠席しているはずの少女は、俺の声に気づいてゆっくりと振り向いた。

「こんにちは、遙瀬くん」

声はどこか笑っているように軽い。

聞きなれた女の声。

人気の無い廊下。閑静な空間にその声はよく通った。

「お前、学校休んでたんじゃないのか？」

立ち位置はそのままで問いかける。

すると御桜流深という少女は小さく頷いてから、

「うん、まあね。……なかなか決心できなかったから、今まで」

躊躇うような口調でそう言った。

夕日色の廊下。二人の声だけがそこに在る。

何か言つべきか迷って、俺は口ごもる。

この状況は何だ？ 学校を休んだ奴が放課後になっていきなり現れる。その事を訊けば意味の解らないことを呟いて黙り込む。顔色を確認できれば何らかの推測は出来るかもしれない。生憎それも出来ない状況だ。

「少し長い話になると思うけど、いいかな？」

その質問に俺は頷く。

肯定の動作を返してやると、少女は、ふ、と声に出して笑った。

あまり人に聞かれたくない話だから、と言って教室の扉を開ける。教室の中に消えた姿を追って、俺もそれに続く。どの道目的は教室の中にある忘れ物だ。この行動が回り道になることはない。

廊下から教室へ足を踏み入れる瞬間、ふとした疑問が頭に浮かぶ。

俺が最初に流深を発見したとき、そのときの流深の体勢はどうだったか。

教室の壁に凭れる様にして　　まるで誰かを待つように。

誰か、とは状況から俺のことで間違いない。

では俺がここに戻ってくる理由は　　忘れ物に気づいて。

その事を知っていたのは、俺だけだ。

ここに俺が戻ってくる確証なんてどこにもない。ましてや時間が時間だ。学校を休んだ人間が、他の生徒に目撃されずに教室の前に佇んでいた。……いや、目撃者がいたかは解らない。ただこの状況は出来すぎている。

俺がここに来ることも、廊下に人気が無いことも、全ては偶然。

だというのに少女は　　その偶然が必然であるかのようにそこに在った。

まるで初めからこうなることを知っていたように。

或いは、

今この状況を創り出したのは　　あの少女なのだろうか。

疑問が何の解決もしないまま、俺は教室と廊下を分ける境界線を踏み越えた。

ばたん。とスライド式の扉が閉まる音。

やったのは俺で、指示したのは流深だ。

教室の中はやはり誰もいない。グラウンドから運動部の声が聞こえてくる。

昼間とは違う教室の雰囲気。俺たち以外の人気が無であること。

差し込んだ夕日で床も壁も天井も燃える様な赤に染められていること。原因は幾らでも推測できた。けれど俺は、

この妙な胸騒ぎの原因が目の前の少女であると、どうしても思ってしまう。

グラウンドに面した窓側。御桜流深という友人はそこで凭れかかって俺を見据えている。

廊下で会った時と同じ様に。

……いや、違う。

俺はこの少女のそんな姿を、もっと前に見たことがある気がしてならない。

それがきつと、この違和感の正体なんだ。

「とりあえず、自己紹介からした方がいいのかな」

透明の壁に隔てられた外の世界に視線を飛ばしながら、少女はそう言った。

俺はその姿を眺めることしか出来ない。同じ教室で学ぶ友人が、どこか遠い存在に感じられた。

「あなたも知ってる通り、わたしの名前は御桜流深。……実際は会って話をするのは、これが二度目になるかな」

俺に振り向かず少女は言う。

それがあまりに当たり前のことと、明らかに矛盾した言葉だと俺は瞬時に悟った。

「二度目も何も……話なら毎日してるだろ」

ここで、この教室で。

そう続けようとして閉口する。

外界に向けられていた少女の瞳が俺に向いていて、その表情を知ってしまったから。俺は続く言葉を発することが出来なかった。

「……なるほど、そういうことか」

何がどうということなのか、それは俺自身も実の所よく解っていない。

けれど理屈ではない感覚で俺は納得させられていた。

多くを語るよりも、ただの一見で。百の聴覚認識は一度の視覚認識に及ばない。昔の人はよく言ったものだ。

どんな衝撃的な告白を言葉で語るよりも、それは容易く受け入れられる。半強制的な暗示。俺は向かい合う少女の表情だけで、その心中を読み取ってしまった。……というよりも、読み取られされたと言っべきかも知れない。

呟いて一人悟った俺を見て、目の前の少女はくすりと笑う。

物分りの良い生徒を誇る家庭教師のような微笑。

「二重人格……とかそういうオチか？」

我ながら頭の悪いことを訊いている。

自分でも愚問と思える詰問に、少女は頷いてからいいえと言う矛盾した回答を寄越した。

「的を射た言葉、というよりも似て非なる存在って言った方がいいのかな。厳密に言えば、それは全く違うことだし、二重人格と云えば二重人格でもあるのかな。人格はそれまでに経験してきた感情の上に構成されるものだから」

小難しいことを言っているが、俺には何のことやらさっぱりだ。

啞然としている俺を気遣う様に、少女は補足説明を開始した。

「簡単に言うとわたしはあなたの知っているわたしよりも先のわたし。別に未来から来た、とかそういう意味じゃないけど。わたしは普段の御桜流深よりも多くを知っている御桜流深、て言えば解るか
な」

解らない。

解らないのだが、それでぴんと来たことならばある。

遠慮せずに俺は思いついた事柄を口に出す。

「流深が忘れてる記憶か……？」

その問いに少女は頷いて、

「わたしは自分でも気づかない内に自分の世界を二分していた。わたしは御桜流深の体験する『ある感情』を受け持つ存在。……こんなことが始まったばかりの頃は、自分でも異常だと思わなかった。

ただ少しずつ忘れてる部分が多くなっていくことに、今みたいな半端な二重人格状態になってしまったの。

人間の感情は、それまでにその人が体験した過去の上に作られるモノでしょう？ 痛みを知らない人間は、平気でそれを他人に与える。誰からも優しくされたことのない人間は、誰にも幸福を与えられない。人間は受動的に受け取った感情を、能動的に他人に受け渡す生き物。人間の人格はそうした感情の繋がりの上で構成される。御桜流深という人間を造る感情には、本来人間が持っているはずの『或る感情』がない。わたしはその『或る感情』を持った御桜流深。つまりあなたが知っている普段の御桜流深は、或る感情を抜きにした不完全な御桜流深で、本来ならばわたしが通常の御桜流深なの。二重人格、といえばそうなるけれど、人格が二つあるわけじゃない。御桜流深という人格は常に一つだけ」

これで理解できた？ という風に少女は俺を見る。

イマイチ明確な理解は出来ないが、曖昧ながら言いたいことは掴めた気がする。

つまり普段の流深は不完全な人格で、その原因は或る感情の欠落だと言いたいらしい。……しかしそれがどういふことかと具体的に問われれば、俺は言葉を失ってしまうのだが。

「まあ……理屈は何となく解った。それで、普段のお前から欠落してる感情ってのは何なんだ？」

えらく踏み込んだことを訊いている気がしたが、それを聞かなければ何のための会話だったか解らない。

恐らく流深はこれまでの長い説明を全て前置きとしている、というのが今の俺に在る唯一つの確信だった。

核心を突く疑問に、御桜流深という少女は表情一つ変化させずに答えた。

「普段のわたしには無い感情。御桜流深から零れ落ちた一つの感情は 絶望」

それが答え。

至極あつさりと告げられた言葉に俺はオウム返しに答えることが出来ない。

「どうしてこうなってしまったのかは解らないけど、わたしはいつの間にか絶望という感情を忘却するようになってた。原理は一切解らないし、こんなこと、誰にも話したことない。でもね、忘れた筈の絶望は時々蘇ってくるの……それが、今のわたし」

忘れていた筈の絶望。

これまでに体験しているはずの感情。

唐突に蘇ったそれによつて、御桜流深という人物が本来持ちえる人格は形成されるのだと少女は言った。

二重人格とは違う。けれど普通ではない。

幾つかの人格があるのではなく、一定期間だけで完成させられる本来の人格。

少女が俺に告げたかったことは、そういうことなのだろうか。

……間違いなくそうだ。

だとしたら一つだけ解らないことがある。

一部分だけ記憶……話に合わせるなら感情か……がどうして忘れ去られるのか。その疑問は本人も知らないと言つたのだから、これ以上を問うても答えは得られないだろう。

今の段階で確実に得られる答えのある疑問。

「お前の言いたいことは解つたけど 何でそれを俺に伝えるんだ？」

それは、俺には解らなくて御桜流深には解る疑問。

かつかつ、と足音を鳴らして少女が向かってくる。散歩でもするかのような自然な足取り。

それは俺の正面で停止させられた。白い顔にある黒い瞳がこちらを見上げる。

「あなたがわたしの絶望だったから」

答える声は、今までに比べて小さい。

自分でもその言葉に自身が持てていない様な、そんな口調。

意味の解らないその答えに、俺はさらに質問を重ねようとする。「今日はありがとう。明日のわたしは、きっとあなたがよく知っているわたしだと思うよ」

が、果たしてそれは成されなかった。

最後にそれだけを告げて、小柄な体が去っていく。

次に俺の口から出る疑問を予想していたのか、扉をスライドさせる姿はどこか拒絶の意思を感じさせる。

まだ尽きぬ疑問が残されているが、俺は帰っていく少女を引きとめようとは思わなかった。それがさして必要なことだとは思わなかったし、引き止めて質問攻めにしたところで答えが得られる確証はない。

唯一つだけ確かなことが在るとするならば、彼女がそれを語らなかつた以上、そこに俺が踏み込む必要はないということだ。

去っていく後姿を遠い眼で眺める。

その華奢な背中が、永遠の別れを告げている様に儚い。

今度いつ会えるのかは解らない。また再開することを少女が望んでいるのかも解らない。

夕暮れの教室。茜色に染め上げられた空間。

茫然と立ち尽くすだけの俺は、秋の終わりと少しずつ大きくなっていく日常の歪みを感じていた。

一瞬のうちに冷めていった気温が冬の訪れを感じさせる。今年の秋は本当に短い。というよりも夏が長かったのか。下がっていくばかりの気温と変わっていく窓の外の景色。少なくともっていくカレンダーの残りが、一年の終わりを告げている。

俺は白い息を吐いて窓の外を見つめていた。

校庭は冬枯れした木々に縁取られている。春の段階では満開だった桜も見る影が無い今となっては、気温の上昇と季節の移り変わりを待つてただ佇むだけだ。

窓の外は雨景色。

昨夜から降り始めた雫は夜更け過ぎに雪に変わることもなく、こうしてまだ勢力を落とさない。運動部が日々踏み鳴らしているグラウンドは一つの大きな水溜りみたいだ。

水面を打つ雨が作り出した波紋を数えることにも飽きて、俺は教室へと意識を回帰させた。

隣の席はまだ空席。

前回の席替えにより窓際を確保した俺、とその隣を確保した御桜流深。

公平なくじにより決定された席順では在るのだが、いかんせん俺はこれが偶然とは思えずにいる。何しろタイミングが絶妙だった。まるで示し合わせたみたいに。偶然の女神の目覚まし時計が変な具合に狂いだしたのだろうか。

現在の席が決定した前回の席替えは、あの日の翌日に催された。どこか歪な二重人格者であると、流深が自身を告白した日の翌日。

その日の流深は俺のよく知っている流深で間違いは無かった。…
よく知らない方の流深だったらどうなのかと言えば、どうでもないのだが。

これが偶然の悪戯ならば相当性質の悪い悪戯だ。
あれから二週間ばかりが過ぎた。

流深はその日のことをまるで覚えていないらしく、少女の日常に変化は無い。俺はといえば、俺は俺で複雑……怪奇な日々を送っている。日常といえばそれは日常だし、非日常といってしまえば否定できない。

変わったことは俺の中の御桜流深という人物像。その認識。
それと

「おはよう、遙瀬くん」

突然降りかかった声に顔を上げる。

空白だった隣席の机には鞆が投げ出され。

いつの間にそこにいたのか、御桜流深が蠱惑的な笑みを浮かべてそこにいた。

「……ああ、おはよ」

対照的なテンションで呟くように返答する。

あれ以来、日常で変化したことは二つ。

一つは俺の御桜流深に対する認識。

一つは御桜流深が御桜流深で在る日が増えたこと。

本来持ちえるはずの記憶が無い、一人の少女。

本来失われたはずの記憶を持つ、一人の少女。

同一人物であるとは解っている。それでも俺は、その少女を一人の少女だと思えずにいる。

空気、表情、言動　おそらくは心情も。

これまで俺が接してきた流深と、このルミは異なっている。

何十年間も或る一つの感情を得ていなかった人格と、それを得た

人格。

二つのスイッチはどのタイミングで入るのかは解らない、と彼女は言った。それによって変格される人格が二重人格ではない、ともただそれまで不揃いだった感情が完成して、その差が二つの人格が在ると勘違いさせてしまうと少女は言った。

ふと隣に視線を送ると、流深は不思議なものを見る眼で俺を見ていた。

「どうかした？」

本気で同級生を心配している口調だ。

「いや……今日はそっちなのか、て思ったただけだよ」

その言葉は、少女の心にはどう響いただろう。

席に着いた同級生は小さく笑って、

「そふみたい……だね。うん。昨日の晩にこうなってから、朝起きたときもまだ戻ってなかった」

自分を非難するように言った。

俺がこの流深と話したのは、あの夕方だけではない。それ以降も何度か話している。

本人曰く、記憶が戻るのは朝昼夜に分けると夜が一番多い。夜に思い出して、朝に眼を覚ませば大概はまた元に戻っているらしい。

……戻る、というのはどこか可笑しな感じだ。俺に馴染みが無

いとはいえ、本当の御桜流深はこっちなだから。

「最近はどうも周期が可笑しいみたいなんだ……。わたしからたして居る時間が、少しずつ長くなってきた。これまでは朝からこの状態になることなんて、殆ど無かった。そうでなくても、わたしが忘却した記憶を思い出すことは何ヶ月かに一回だけだったのに。ここ最近では時間差で毎日だよ」

そんな自分が怖い、と流深の瞳が語っている。

……ような気がした。

どうにも解らないことがある。

「お前はそんな風に言うけど、それって悪いことじゃないんじゃないかな

いか？ 忘れてることがあるってことはつまりお前自身が不完全だ
ってことなんだし。だったら 忘れてることを思い出すことは、
別に悪いことじゃないだろ」

それだけが俺には解らないでいた。

流深は自然的に起こる記憶の蘇生を疎ましく思うような口ぶりで
語る。それが罪であるかのように、まるで記憶を思い出すことが孤
独であるように、その行為が禁忌であるかのように。

けれどそんなことは無い。

忘れてる事柄を思い出すということは罪ではない。特殊な例を除
けば、それが周囲の人間に危害を加えることなんて無いのだから。
忘れてるのが殺人現場の記憶で、自分が誰かを殺した瞬間の目撃
者……みたいな記憶でも無い限り、それは何の問題でもない。

俺がそう言くと、流深は小さく首を振ってそれを否定した。

いったい何が間違っていると言っただろうか。俺にはそれがまる
で解らないでいる。

「わたしが自分の記憶を忘れてるのは、ちゃんとした理由があ
る。だからその逆説で、思い出しはいけない理由もちゃんとある
の。……自分ではどうすることも出来ない現象ことだけ」

それが何なのかと、加えて質問を掛けようとして俺は口を塞ぐ。

チャイムと共に教室に入ってきた担任の声に便乗するように流深
の眼は、この話はここで終わり、と俺に言っている。逆らうことの
出来ない哀しい色をした瞳に、俺は無言のまま従うだけだった。

どうしてだろうか。

この話をする時の流深は途方の無いほど遠いモノを見る眼をして
いる。

それがどういう眼なのか、具体的なことは俺には言えない。けれ
ど直ぐ目の前で会話をしている俺など、全く視界に入っていないよ
うな。

……いや、それは違つかもしれない。

これは俺の方が　御桜流深の世界の中に入り込んだような、そんな感覚。

だからこそ、流深の瞳には俺が写っていない。だって鏡も無しに自分自身を見ることがなど、人間には出来ないことだから。

放課後になっても雨は止まない。

雲に覆われた夕陽を浴びられずに世界は夜のように暗い。

誰も居なくなつた静かな教室に、俺と流深はいた。

窓際で凭れるようにしている流深と、机の上に腰を下ろしている俺。

この状況には色っぽい事情など微塵も無い。帰つてもすることの無い二人が、たまたま最後まで教室の中に残っていたというだけのことだ。

特にすることも無く、忙しく文字盤の上を回り続ける秒針を俺は眼で追っていた。

「朝の話の続きになるんだけどね」
覇気の無い声で流深が呟く。

言いたくないことを口にする、と決断したような苦渋の表情。

その声に俺が振り向き、流深が語り始める。

「遙瀬くんは、人間がみんなどこかで繋がってるって話聞いたことある？」

「いや、初耳だよ。そんな話は」

それが朝の話と何の関係があるのだろう、と思つたが口にはしなかつた。流深がそれを引き合いにするのなら、それにはきつと意味があるだろうと思つたからだ。

「世界の人間は総て同一の湖から流れ出た……細い川みたいなモノだつて考え。一つの大きな原因、人間という霊長が発生した因^{よすが}がどこかに在つて、わたし達はみんなそこから流れ出て枝分かれした存在。故にそれを辿つていけば霊長の　この世界の中心に辿り着ける」

「……まあ、言いたいことは解るけど。そうだとすると、そんなことに何か意味があるのか？」

「はつきりとした意味は無いけど。……この世界に蓄積された歴史。人間が重ねてきた時間を遡るということは、つまり世界の理を知ることと同じ。世界のこれまでと、人間のこれまで。長いのは圧倒的に世界の方。人間が発生した原因をさらに遡れば、世界の原風景に触れられる」

それがどうだと言うのか。俺にはまるで理解できない。

流深は一体何が言いたいのか、本当に解らなくなつてきた。この話と朝の会話とがどう繋がるというのか。

「世界の中心。そこには総てが在つて、だから何も無い。世界のこれまでと、世界のこれから。過去も未来も　あらゆる可能性が保存された場所。この辺りはアカシツクレコードつていう考え方と同じかな。未来は無数の選択により分岐する。中心に触れられれば、自分の思い描く世界を今の世界に上書きできるの」

この時点で俺は完全に話の趣旨が不明になつていた。

世界の中心、アカシツクレコード。そこに辿り着くことが出来れば、世界を自らの思うままに書き換えられる。それはダレカの心象世界の具現。言つてしまえば最大の禁忌。

……俺が話を聞いて解つたことはそれぐらい。後はだからどうしたという疑問しか浮かばない。

何の為にそんなことを話して、何故その話の相手が俺なのか。

今日はいつも以上に流深の心の内が読めない。

「それじゃあその世界の中心にはどうすれば辿り着けるか、霊長の発生はどうすれば遡れるか。遙瀬くん、あなたには解る？」

唐突に尋ねられる。ここらで俺に振っておかなければ、そのまま意識が飛んでしまうと察したのか。

「さあ……。つうか、話が壮大すぎて何が何やらよく解らん」
素直な感想を述べてみる。

と、流深は俺の理解力の低さを嘆くこともせず、むしろそれが当然だと言わんばかりに頷いた。

「あくまで誰かが立てた仮説だからね。本当に世界の中心なんてものが在るのかは解らない。だからどうすればそこに辿り着けるのかも解らない。誰もそんな場所を目指したりはしないから、詳しいことも何一つ解らないまま」

そう曖昧な結論を述べて、窓の外に視線を飛ばす。

止まない雨。陽が差し込む隙間さえ空には無い。

薄暗い教室に漂う沈黙が、妙な居心地の悪さを感じさせていた。

結局流深は何が言いたかったのか。俺によく解らない話を聞かせておいて、それがどんな意味を持つのかも解らないまま話は打ち切り。最後まで朝の会話と連結することも無かった。

……。いや、もしかするとどこかで繋がっていたのかもしれない。

直接流深の口からは語られなかったが、それは俺に察してくれと告げていたのではないだろうか。だとしたら、それはどの辺りなのか。朝の会話と関連し、今の話で流深が俺に伝えたかったこと。

朝の続きになる、と流深は言った。

そもそも続きとはどういうことになのか。

朝の会話が途切れたのは、流深が自分の記憶を失っている理由についての部分だった。となると、つまり今の会話の中にその理由が含まれていたということか。

それが一体どの辺りだったのか。朝の話と、今の話。関連性は何か一つ無い。

記憶の忘却、世界の中心、人間の発生。

後の二つは似た点があるかもしれないが、そこに最初のひとつと結びつく事柄は無い。

……本当にそうか。本当に何の関連性も無いのか。
世界の中心。アカシックレコード。世界のこれまでと、これからの記録。

断片的なキーワードから見つけ出した僅かな繋がり。
記憶と、記録。

世界の持つ、保存された歴史と未来を記録。人間が持つ、蓄積された過去を記憶。

話の中で流深が語った、世界の中心。そこに触れることが出来るのなら、世界を塗り替えることが出来る。もしも望まぬままにそこに到達しえる人間がいたとしたら。

もしかしたら、流深が言いたかったことは……

ある一つの仮説を結論付けて、俺は顔を上げた。

現実的に考えれば在りえない仮説。

常識の範囲内ならば絶対にないと否定できる一つの仮説。

俺は夜のように暗い窓の外を眺める流深を見据えた。

「お前……もしかして」

と口に仕掛けてその続きを言葉に出来ない。

流深の表情がこれまでに見たことの無いほどに、哀しい色を帯びていたから。

普通の歩幅でも一歩で無くせる距離。

俺と流深は間近にいながら、その存在は果てしなく遠かった。

どうして今まで気づかなかったのだろうか。

……御桜流深という少女は圧倒的に遠い。

「そろそろ帰ろっか」

かちりと表情を切り替えて、いつもの声で流深は言った。

その言葉に何と返事をすればよかったのだろうか。

流深が目には掛かった前髪を払い除ける。その動作でブレザーとシャツの裾が僅かに下がる。

「お前それ、どうしたんだ？」
包帯の巻かれた流深の細い腕だった。

「それは硬直状態から回復するには十分な光景だ。」

俺は殆ど反射的にその疑問を投げかける。

「え？ …… ああ、別に大したことは無いよ」

自分の腕に目を落とし、俺の言っていることを理解して誤魔化す。

「大したこと無い、じゃねえよ」

流深の言うとおり、それは本当に大したことでは無いかもしれない。

だとしても俺にはそうだと思えない。もしもさっきの仮説が当たっているなら、俺は包帯の下にある傷が、どんな経緯で付けられたものか知らなければならぬ気がしたから。

さっ、と腕を下ろして包帯を隠す。流深は逃げるように早足で扉へと向かって行った。

「また明日ね、遙瀬くん」

最後に一瞬だけ振り返って別れを告げる。

その後姿を追いかけることも出来ず、俺は立ち尽くしている。

この時点で、二人の間には埋めようの無い溝が出来ていた。

いや……それも今更かもしれない。

ただ俺が気づかなかっただけで、その溝は初めから在ったのかも
しれない。

擦れ違う想いと声の軌跡。

それは、二人がこれから辿る運命の筋書き。

言いようも無い不安と、言葉に出来ない想いだけが残留していた。

その日、灰色の雲が空を覆っていた。

本格的に冬へと移行した季節の下。先日の雨は満足に陽を浴びられず冷気となつて漂っている。それがこの寒い季節をより冷たくしているようだった。

冷えた空気の中、俺はため息をつく。

最近ため息の数が妙に増えた気がする。最近と言っても今年の四月以来だから、既に半年が経過しているが。そんなことを今更になつて自覚するのだから、俺はこの憂鬱な日常を無意識に受け入れていたのかもしれない。

しかし今回のため息は特別だ。これまでとは質が違う。

俺は一体何に首を突っ込んでいるのだろう、と自問しているようなそれだ。

目立つて大きな異常が無いから気がつかなかったが 俺の日常は既に歪んでいた。

そのことを昨日にようやく理解したのだから、自身の危機感知能力を疑う。

そんなことを考えていた日のこと。昼休みに入って、それまで姿を見せていなかった御桜流深がやってきた。

昨日のこともあり、何となく今日は欠席だと予想していたのだが外れたらしい。

流深は談笑していた女子達から歓迎の言葉を浴びつつ、笑顔でそれに応えて自らの席に辿りつく。愛想のいい笑顔が俺に向けられた。「おはよ……ていうか、今はもうこんにはだね」

一人で言つて一人で訂正してやがる。

流深の笑顔は久しぶりに見る純粹な表情だった。

どうやら今日は不完全な方の流深であるらしい。

ここ何週間か見ていなかった、或る感情の無い御桜流深がそこにいる。本人さえもタイミングの掴めない、不定期な記憶の忘却が今日になつて行われたらしい。

「何でまた。今日は遅刻なんだ？」

思い返せば、流深は遅刻ぎりぎりに教室に入ることはいくらでも明らかで遅刻はしていなかった。大概の場合は担任が教室に入るよりも先に席についていた。

鞆を机に引つ掛け、長い髪を揺らして椅子を引き、

「家でいろいろあつてね」

言葉に相応しくない笑顔でそう答えた。

「わたしの家つてさ、前から結構荒れてるんだよね。なんていうか、その、お父さんの仕事のこととか。……というよりも、お母さんの家系が特殊なのが原因かな。分家だけど、わたしのお母さんって古い家系の出身なんだ。それで考え方が食い違つてて、よく喧嘩してるんだよ」

困つた困つた、と髪を掻き揚げる。

その動作と表情が場の雰囲気とも話ともまったく合っていないから、違和感がありすぎる。

大したことはない、という風に語られるそれを俺は聞き流すことはできなかった。

昨日と同じ場所、流深の細腕にはまだ包帯が巻かれたままだった。

「その腕……家で怪我したんだろ？」

確信した上で問いかけているのに、肯定するようにそれを口にすることは出来なかった。

俺の中で その確信だけは間違つていて欲しいという願いがあったから。

勝手な予想を現実の言葉で否定してくれれば、俺はそれだけで安

心できる。

この最悪の想像が、間違いであったと安堵できるんだ。

「うん。あ、別に気にすること無いよ。こんなこと昔からよくあることだからさ」

果たして。流深の返事は予想通りで、俺の期待とは違っていた。

例えばようの無い不安が思考を支配する。悪寒が全身を貫く。

もしも、世界の中心に到達しえる人間がいたのならば

この世界は、そのダレカの世界により塗り替えられる。

望まぬ幸せも、望まぬ悲しみも、望まぬ希望も、望まぬ絶望も。

その全てが意思に反して与えられる。そのダレカを感情的に供給させられる。

「……どうかした？」

抑揚の無い声が尋ねた。

「いや、別になんでもない」

そう、なんでもない。

こんなことは俺が悩んだ所でどうこうなる話ではない。

少なくとも当事者でない俺が奔走するようなことは起きていない。

全力を尽くして解決するほどのこともない。ならば、事を中心にいる人物がそれを処理するのを見守るしか俺には出来ないのだ。

この先に何が起こるのかは解らない。知らない。

だから見届けることにしよう。

御桜流深が選ぶ答えの行

く先を。

放課後の風景がいつもと少し違う。

昨日までとは違ってホームルーム後は教室に残らないで直ぐに帰路に着いた。

道を先行しているのは流深の方。

それ故に俺は今の流深がどんな表情をしているのかは解らない。
空は灰色の曇り色一色。

今年最初の雪が街に落ちてきていた。

そんな中で傘も差さずに歩く。気づけば場所はいつかの公園前。
当然のように季節に従順な木々達は葉を落とし、公園の中心に聳そびえる桜の木も一切の色を無くしていた。

そこに、あの日の光景が浮かんで。

「 御桜」

フラッシュバックした記憶の中に呼びかけるように、俺はそう呟いて足を止めている。

冬枯れした桜の木。雪が本降りになれば、白い桜が散っているようにも見えるかもしれない。

「もう止めにしないか」

知らずそう呟く声が、他でもなく俺を驚かせた。

歩く度に揺れていた黒い長髪がぴたりと止まる。その後姿を視界に収めて、俺は公園の桜の木に視線を流す。

思えば、この歪みの始まりはここだった。

この場所で初めて彼女と出会い、初めて言葉を交わした。

それが無ければ、今は無かったはずだ。

夕焼け色の教室で語り合うことも無ければ、そこから始まるすれ違いも無し。何の変哲も無い日々の中に俺たちはいる。

しかしそれはあくまで仮定でしかない。

終わったことをいくら悔やんでも過去は取り戻せない。

既に俺たちは出会ってしまい、日常は歪んでいる。

それを受け入れずに否定すれば、今日までの全てを蔑ろにすることになる。

どちらの方がよかったのかなんて解らない。どちらが正しかったのかなんて決められない。

けれど既に終わったこと。幾つかの可能性の中で、今ここにある

一つの筋書き。

今在る日常を否定するわけにはいかない　だから、俺は言わなければならなかった。

「　流深、お前は何も忘れていない。昨日までと同じ、御桜流深なんだろ」

白い結晶が冷たい風に乗って消える。
振り返った少女の貌カオは、儚くも哀しい色に満ちていた。

「どういこと?」

哀しい笑顔で少女は問いかけた。
本当に何も知らないような。間違っているのは俺だと思ってしま
うような。

素のままの笑顔が一瞬自らの考えを否定したが、それが確信を持
ちえる原因とも成った。

訝しむ流深を見据えて、俺は続ける。

「本当は朝からずっと　お前は一度も忘れていなかったはずだ」
「だから何が。忘れるってどういこと?」

混乱しつつも非難するではなく、流深はその瞳に俺の姿を収めて
いた。

自分でもどうしてこんなことを言っているのか解らない。昼に決
めたはずだった。このことは全て流深に任せよう、と。

だというのに、何故。
なのに、どうして。

俺はこんなことを言っているのだろう。

「全部、無かったことにしようとしてるんだろ？」
奇怪な人格の在り方も、それによって生まれてしまった歪みも。
全て無かったことにして　自分を偽って贗物の平穩を創り出す。
それが流深の選んだ答えなら、それを見届けると決めた。そのつ
もりだった。

たとえそれが間違いでも、俺は受け入れることを決めたというの
に。

「もしも世界の中心に到達する人間がいたのなら」
言葉は意思による抑制を押しつけて外に出る。
それは昨日流深が語ったことだった。

もしも世界の中心に到達する人間がいたのなら。
決められた運命の筋書きを逆行して、その原点に辿りつく。そう
すれば世界の『これまで』も『これから』も自在に操ることが出来
る。

世界の中心。それがこの世全ての人間の意思ならば、そこに触れ
ることで自らの感情で世界を満たすことが出来る。

「それは例え話なんかじゃない。お前は世界の中心に触れることが
出来る人間だったんだ」

そこには何の確証も無い。当て付けでしかないただの推測。
それでも筋は通る。

絶望という一つの感情が無い少女。

忘却という手段で世界にそれを波及させず、今を保とうとする一
つの決意。

世界で唯一人　自分を犠牲にする代償として得た仮初の日常。

それは本当に。

それは本当は。

哀しみの上に打ち建てられた、遠すぎる平穩。

自分が記憶を失っているのには理由がある。

彼女はそう言った。

そうすることに意味があるのだと。

自らを犠牲にして、誰からも理解されない孤独を背負い込む。

それだけが、御桜流深が自分の辿る道を否定する唯一の手段だった

「それで？」

あっけらかんと、少女は白い息とその言葉を吐いた。

言ったとおり。言の葉のとおり。

それで、どうしたというのか。そう問いかけるようなイントネーション。

「それが間違っていないかったとして。それが本当のことだったとして。わたしには……あなたにはどうすることが出来るの？ それがわかったから、なに？」

淡々と語られる台詞には、一つの感情しかない。

居直るでもなく、否定するのではなく。

ただ決められた台本を捲り返しているような口調。

けれどそこには感情が在った。唯一つだけ、それだけは当然のようそこに在る。

「あなたにはわからない 人間には、人の心を見ることがなんて出来ないから。他人の世界に干渉することなんて出来ないから。それはそれぞれが違う存在だからじゃない。孤立しながら、ヒトは世界の中心で繋がっている。だから孤独じゃない。自分以外の誰かと交わることで安心できる。同じ世界を持つていると、安心できる。…

… 嗚呼、自分は独りじゃないんだって」

少女の声と表情は泣いている様だった。

既に諦めた夢を遠くから眺める様に。過ぎてしまった後悔を俯瞰する様に。

それでも少女の瞳から涙は零れなかった。

当然と言えば、それは当然。

何故なら、今の少女に在る感情は一つだけなのだから。

「でもわたしにはそれが無い。霊長の世界の中で確立するということは、つまり孤立して孤独になるということ。だからわたしには一つしか無い。たった一つ、この感情しかわたしには無い」

生まれながらに孤立し、誰とも交われない孤独。
生まれながらに持っていた、世界を染める禁忌。
それ故に少女には一つしかない

「わたしに在るのは唯一つ。

あなたという絶望。絶望であるあなた」

告げる。

その言葉を、無抵抗に俺は受け入れた。

受け入れるしか無かった。

俺には流深が背負ってきたモノなど解らない。

全て空想でしか理解できていない。

それでも、この少女がここに在るということは　それだけで俺
には遠い現象に思えた。

だから何も言い返せずに、俺は少女を見据えることしか出来ない。
何を見出そうとしているのかも、何の為にそうしているのかも解
らないままで。

気づけば俺は。

遙瀬澄弥にとって、御桜流深という少女が何で在るのかさえ、解
らなくなっていた。

それはまるで暗示の様な、無意識下のすり込み。抗うことの出来
ない『内面的な衝動』。外部からではなく、内側から湧き上がる矛
盾した衝動。

いつもそつだ。俺は一度でも御桜流深の言葉を疑わなかった。否、
疑えなかった。

その真偽など関係ない。唯、御桜流深から語られる全ては意識
の壁をすり抜けてきた。まるで初めから其処に在ったかの様に。当
然のように、必然を装って。

遙瀬澄弥の世界を簡単に染めてしまう言葉。

白い破片が空間を埋める。降り頻るそれはまるで隔たりの様。

其処に在るのに決して触れられない、在り得ない膺気楼みたいな少女。

「また明日ね。遙瀬くん。」

全部、今日で終わるから。

きつと、明日からは普通に話

せるよ」

泣きそうな笑顔が別れを告げる。

疎らに視界を埋める雪が、まるで少女の姿を隠しているようだ。

俺は自分に背を向けて去っていくその姿を、見送ることしか出来ないでいた。

永遠の別れを告げているような後姿。まるで二人の出逢いそのものが間違いだつたと、それが自らの後悔だと言うような足取り。その姿に俺は何と声を掛ければいいのかだろうか。少女のことを理解しているつもりで、その実、上辺でしか見れていなかった俺に。

十二月。冬。

陽は短い。直に夜が来る。

太陽が雲に隠された所為で弱々しい街頭の光だけが街を照らしている。

「嗚呼、そうか」

今、ようやく解つた。

点滅する街頭がまるで自分の気持ちを代弁しているみたいだ。

「俺は、流深の事が好きだつたんだ」

このキモチにもしも名前が在るのなら。それはきつとその言葉の意味が当て嵌るのだろうか。

過ぎた後悔の念だけを残して。俺は白い闇に隠れる家路をただ辿っていった。

……

その夜。本来闇色の世界は白い破片に埋め尽くされていた。黒という夜のイロは一変。白という雪のイロに染められている。冬の夜を天空から舞い落ちる雪は一層冷たいモノにしていた。その中で。

少年は一人、そんな白い夜を歩いていた。

初めから決められた道筋を辿るかのようにその足取りに迷いは無い。

遙瀬橙弥という一人の少年。彼は夕方の出来事を清算する為に或る場所へ向かっていた。

そこへ行けば目的の相手と会える確証がある訳ではない。予め待ち合わせている訳でもなく、橙弥はほんのついさっき思い立って家を出たのだ。

何となく、そこへ行けば会える気がしていた。

……初めて出会った夜と同じ時間、同じ場所。彼女は今日もそこにいるだろう、と。予感だけを信じて。

白い雪は行く手を阻んでいるように思えた。一步踏み出すことに沈む足が到達を拒んでいるように感じた。

けれど彼は一度も立ち止まることなく其処へ辿り着いた。

辿り着いてしまった。

錆びれた遊具しかない小さな公園。そこは一面が積もった雪の絨毯で白く塗り固められている。

目立ったものが何も無い寂れたその場所に少女は佇んでいた。

白い地面の上で屹立する桜の木。その下で、少女はぼんやりと空を眺めている。

街は何年か振りの大雪。それだというのに少女は傘も持っていない

い。

その手には、傘の代わりとなる物が握られていた。その姿を見つけて橙弥は公園に入る。

自分以外の人間の気配を感じて、少女はゆっくりと首を動かしてそちらに目を向ける。

その時点で、ようやく橙弥は気づくのだった。

「……………流深……………?」

目の前の異常な光景。遙瀬橙弥は相手の名前を呼ぶことしか出来ず、次の句を発せず居た。

「お前……………なに……………」

言葉半ばにして、橙弥は直ぐにその場を飛び退いた。しゅん、と鋭利な風切り音だけが闇の中に流れる。

闇に引かれた銀光は 少女が持つナイフが通った軌跡。

「……………遙瀬くん……………」

その声は全てを無くしてしまったように空虚な響き。

御桜流深という少女の姿は異常だった。

着ている服は橙弥と同じ中学の制服。紺色のブレザーにはたくさんの染みがある。暗闇であることや紺色の布地であることから橙弥はそれに気づかなかった。

故に、橙弥が少女から離れたのは別に理由がある。

染みがあったのは少女の服だけではなかったのだ。振り向いた少女の白い顔に飛び散ったそれは、まだ乾き切っていない赤い液体。

頬を伝うもの。髪を滴るもの。場所は様々。

それがまだ新鮮であると知らせるような異臭。

鼻を突くその臭いで、橙弥は飛び退いたのだ。

別段認識があった訳ではない。ただ彼の本能が告げていた。

少女の体中に飛び散った赤いそれが、人間の血であると。

流深が一步前に入る。

自分を見上げる橙弥の顔を見下ろしながら、感情の無い空っぽの笑顔を浮かべて。

「お前……なにしてるんだ……」

常套句しか口に出来ない。

ナイフを持った血塗れの同級生。そんなモノを見せられた少年の理性は既に崩壊寸前まで追い込まれていた。

少女は答えない。

無言のまま絶望を湛えたその瞳が、再びナイフを振り下ろす。

「ッ!？」

橙弥は震える足で地面を蹴った。その勢いで体は雪の上を転がり、結果としてナイフの切っ先は空を切って地面に突き立てられる。

二人の距離が開いた。

荒い呼吸で白い息を吐き出す。そうしながら橙弥は少女を見据えた。

ふらり。流深の体が起き上がる。白い足元は少女から落ちた血で赤く濡れている。

亡霊のような虚無感を伴って、流深は橙弥へ振り返った。

「ごめんね……遙瀬くん……」

泣いているような呟き。

その言葉に橙弥は答えない。

倒れた橙弥へ歩み寄る。少年はその姿をただ見つめることしか出来ない。

赤い斑点を雪に落としながら近づいてくるクラスメイトを、橙弥は受け入れた。

「ごめんね……遙瀬くん」

足元から崩れ落ちるように、少女が膝をついた。

「やっぱりわたしはそっちに居られない。あなたとは、やっぱり違うモノだった……」

頬を伝う赤い血は、いつしか無色の涙に変わっている。

凍えた吐息と共に零れる言葉の全ては紛れも無く彼女の本音。

「それでも 今日までわたしといてくれて、ありがとう」

握ったナイフを逆手に持って。大切な宝物を持つように両手で柄

を握って。

「わたしにはあなたは殺せない。わたしの絶望を、わたしは捨てられない」

最後、少女はそう言って握ったナイフを振り上げた。銀色の切っ先は真っ直ぐに少女の喉下へ落とされる。

さようなら、ありがとう。

そんな言葉を橙弥は聞いた気がした。

公園を埋め尽くした雪の上。白い絨毯に鮮血が飛び散った。

……

あの夜から流深は一週間眠り続けた。

俺はたまたま公園で倒れている流深を見つけたということになっている。あの日にあった事は誰にも話していない。それまでに流深と語ったことも。その奇怪な人格の在り方も。

これは後から聞いた話になる。

流深の家族は全員、あの夜に死んでいたらしい。

昔から家族仲は崩壊していたという流深の話を聞いていた俺は、父親が一家心中をはかろうとしたという話を疑わなかった。……正直に言うと、疑いたくなかったというのが正しい。そうであって欲しいとさえ思っただくらいだ。

俺はどこかで自分に責任を感じていた。もしかすると御桜流深を追い込んだのは俺だったのではないかと。

俺には何故家族の中で流深だけが生き残ったのかは解らない。

どうして、流深がナイフを持ってあの公園に居たのかも解らない。あれから二年が過ぎ、俺達はまた日常の中にいる。

結局、それ以来流深が無くした記憶を取り戻すことは無かった。

過ぎ去った過去に残留する想い。

今こうして在る平穏な日常。

或いは。

この日常も、二年前から決められていた筋書きなのだろうか。

そうだとしても。それが解るのは唯一人だけ。

その一人にもしと俺がその事を問いかけたら。彼女は答えてくれるのか。

流深、これはお前が書いた筋書きなのか？

その問いに答える声も今は無い。

(F a t e p r e f a c e / 了)

第四章：罪悪夢想の迷子 / 1 (前書き)

唯、一度だけでも助けたいと思った。
自分には何も出来ないと思つていたけれど。
それでも繰り返し返せばこの声は届くと信じた。

誰かの世界を垣間見て、誰かの死を傍観する。
重ねた罪の大きさに壊れてしまいそうな小さな自我。
けれどそれは。
わたし自身が背負った罪。

罪悪感と彷徨い続ける夢想の中。
或いはこの日常が。
今にも消えてしまいそうに儚い泡沫の日々。
本当は。

この幸せな日々こそが、わたしの夢だったのかもしれない。
だから、ずっと。
遠くから眺めているだけでよかった。

夢は、触れてしまったら嘘ユメになるモノだから。

第四章：罪惡夢想の迷子 / 1

/ 1

……

解るのは、ただ其処そこが燃えているということだけだった。

見渡せる世界の全ては赤く染まり、老朽化した木材が軋む音を上げて崩れ落ちる。

黒い煤が霧のように漂う赤い世界。

ここはどこだろう。この世界をわたしは知っている気がする。

曖昧な視界と、世界を埋める炎がこの場所の認識をさせてくれない。

轟音が遠くで鳴り響いた。

木の焦げた臭いが鼻を突く。

ぱちぱちと音を立てて火の粉が爆ぜる。

ここはまるで地獄の様。

ぼんやりとした視界に収まる全てが炎に焼かれ、悲鳴を上げている。

何故だかわたしは其処そこにいた。其処そこにいて、ただ見つめていた。

いつも思う……

ほんとうに、どうして自分はこんな所にいるのだろう。

いつ。なんの為に。どこで。どんな風に。わたしが其処そこに到るまでの経緯がまるで解らない。

……其処そこにいる。というのも適切ではなかった。

わたしは其処に在るけれど、実在はしていない。実態の無い亡霊のようにぼんやりと佇んで、この凄惨な赤い世界を見つめているだけだった。

ここはわたしの為の世界ではないんだ。

本来いる筈の無い世界なんだ。

この世界に実在しているのは二人だけ。わたしの視界に入る、唯二人の男女。

“ ”

声にならない叫びは自分でも何と言っているのか解らない。

唯一わかることは、その声は誰にも届かないということだけ。

そう。わたしにはどうすることも出来ない。わたしに出来ることは、最後まで傍観するだけ。

だってここはわたしの世界じゃない。

わたしの存在する場所じゃない。

いつもいつも、わたしは見続けることしか出来ないんだ。

毎夜繰り返し彷徨う、この夢想の果てを。

……

部屋に差し込む朝日を浴びて、御巫曆は眼を覚ました。

ゆつくりと開いた瞼の下で黒い瞳が濡れている。曆の表情はおよそ彼女が穏やかな眠りに就いていたとは思えないものだった。

額には汗が滲み、呼吸も荒い。

曆は華奢な体を布団の上で起こし、きよろきよろと首を左右に振った。

見慣れた壁紙。見慣れた天井。壁に吊るしている高校の制服。全て見慣れた物。毎朝、毎晩。この場所の主である曆には馴染み深い空間。

少女の部屋。ここは少女のいる世界。

そう視認して、曆はようやくそれまでに自分が見ていたモノが夢だったと気づく。

「あ　　はあ……」

零れた吐息は安堵からか、或いは陰鬱からの溜息か。

答えはその両者だった。

「……また、あの夢……か」

一人呟く声は曆自身も驚くほどに沈んでいる。

元気一番、と曆は学校の先輩によく言われていた。その自分が朝から鬱な気分では先輩に示しがつかない。最近では少女が眼を覚ましてから最初の思考は毎朝それだった。

毎朝。

そう毎朝だ。

つまり曆は毎晩悪夢に魘うなされる日々を送っているのだ。

もういつからこんな事になったのかは覚えていない。いつの間にか曆の夢は頻繁に悪夢となって少女を襲い、苦しめていた。何故か原因はまったく解らない。けれど確実に状況が悪化していることだけは解っていた。初めは数日に一度だった悪夢も、最近では殆ど毎日見るようになっていた。

寝不足を訴える重たい瞼を無理やり開き、曆は着替えを済ませて朝食へ向かった。

家には曆しか居ない。両親は早くから神社へ出ていて、朝はいつも一人で過ごす。それ故に食卓に会話は無く、気分を紛らわすことも難しい。そんなことを無意識に感じとって、曆はテレビの電源を入れた。

暗転した画面に明かりが点り、映像が映し出される。

「あれ……？」

小さな声。驚きと、恐怖が作用して口をついて出た短い言葉。呟きは言うまでも無く暦の発したものの。

電源の入ったテレビが映し出しているのは朝のニュース番組だった。その内容は朝という時間に似合わず人死沙汰。

今の時代、そんな報道は特に珍しいということも無い。

暦が驚きの声を出した理由は他にある。

(これ……夢の……)

心中で呟くと共にフラッシュバックする光景。

飛び散った鮮血、爛れた傷口、死の恐怖に歪んだ表情。

少女の中でブラウン管が映し出す次の映像が逸早く連想される。

どういうことか、リアルタイムで放送しているニュース番組の内容を暦は先に知っていた。

報道されている事件が起きたのは昨夜。報道されるのは夜が明けてからだ。勿論その場に暦は居合わせてなどいない。ならば、

少女は如何にしてその事実を知りえたのか。

答えは瞬時に見つかった。

御巫暦の意識に反して、脳は一瞬で疑問を解決してしまう。認めたくない事実を脳は肯定してしまう。

何故か。それは当然のことなのだ。

こんなことは、これまでに何度もあったのだから。

「うあああ………」

夢。即ち御巫暦という一人の少女が直視する死。

少女が見る悪夢は、その内容こそ様々だが或る一つの事柄で共通していた。

それは死。これから先、誰かの身に訪れる死を彼女は夢に予見する。

予見。少女の夢は未来に存在する死を事前に見せる。今まさに画面に映し出されている光景も、彼女は数日前に既に見ていたのだ。

………わたしが、殺した。

いつしか凶悪な呪いとなり、少女は自らその罪を背負ってしまった。

夢想到植えつけられた罪悪感。いつしか、それは少女の全てを塗り潰す。

穏やかな朝の時間。

一人の少女が流した涙。

一人の少女が背負った罪。

決して消えてくれない罪悪感。

日常という悪夢が少女の存在を虚無へ導こうとしていた。

夏休みという長期休暇が知らぬ間に残り一週間になっていた。季節は少しずつ秋へ移り変わろうとしている。

とはいってもそこは今の時代。蝉の声こそ勢力が衰えたものの、太陽はまだまだ澆刺としている。

五月の終わりから六月の頭に掛けて関わっていた事件が終わってから二ヶ月と少し。

そろそろいい頃だろう。と、意を決するようには俺は言った。

「あの、朔夜さん。何で俺、夏休みなのに学校に来てるんですか？」
「そりゃあお前が、学校に行こう、と考えて実際そのように行動したからだろ。高校二年にもなって、そんなこと人に尋ねない方がいいぞ。正気を疑われる」

そのセリフが原稿用紙に書かれていたら誰もが連想するだろう口調だ。

ここがどこかはわざわざ述べるまでも無いと思う。が、それでも一応言っておくところは学校で、その中に設けられた朔夜さんの私室もとい国語科準備室だ。

「それともお前は、自分がここに到るまでの記憶が無いのか？ それなら私は専門外だ。医者に行け。優秀な脳外科医を紹介してやる」

とまあ、このように朔夜さんに隙を見せるとことんそこをつけこまれる。揚げ足を『取る』ではなく『獲る』なのだ彼女の場合。人の弱みを見つけてはそこにつけ込んで、傷口と見ればそこを深々と抉るのがこの人の生甲斐だと俺は思っている。

といつても、それは俺にも既知の事実であつたので文句を付けず
言い直すことにしよう。

「朔夜さん、何で俺夏休みなのに学校に呼び出されてるんですか？」
「それは一概にお前がいないと私が暇だからだ。それくらいは自分
で理解しろ」

などと予想通りの言葉を返され、もはや何か言い返す気も起きな
い。

本来ならそれくらい、とは何を尺度として『くらい』なんて言っ
ているのかと言いたい所だ。そして何故、俺がいなければこの変人
教師が退屈するのかというのもまた謎である。

夏前の六月、厳密に言うなら五月下旬。歌姫事件と銘打たれた連
続自殺が原因となつて知り合った朔夜さんだが、どういう訳か事件
解決後も縁を切れていない。

それどころか夏休みに入ってから朔夜さんは、こうして暇があれ
ば携帯へ呼び出し電話を掛けて来るのだ。一度その呼び出しを黙殺
したことがあるが、その日は空から説教を受けて精神が参つた。

どこから俺の携帯番号を入手したのか、と考えたことがある。よ
く考えれば、俺は一度朔夜さんへ自ら携帯で電話を掛けているのだ。
つまり俺の個人情報が出したのは他でも無く俺が原因だという訳
だ。まあ、そんなことが解つたところで後の祭りもいいところだが。
前述の通り今日は夏休みであり、今日も今日とて俺は朔夜さんの
暇を潰している。

根本的にどのように暇を潰しているのか、そもそも潰せているの
かは不明だ。

変人に好かれる才能はあつても、変人を手懐ける才能を持ち合わ
せていないから質が悪い。

相変わらず校舎内喫煙をしている国語教師は何やらため息を吐き、

「しかし退屈だ」

「それじゃあ、俺がいる意味無くないですか？」

「日本語乱れてるぞ、遙瀬」

乱れてるのはこの部屋の秩序だよ。口にはしないけど。

自分のことは棚に上げておいて人の日本語を注意した学校内喫煙者は続いて、

「そうでもないぞ」

紫煙とともにそんな言葉を吐き出した。

「お前がいることによって今みたいに会話が生まれる。それだけで少しくらいは暇が潰れる」

「今みたいになって、どの辺りからですか？」

「どうやら俺の、俺がいる意味は無いのでは？ という疑問に対して言ったらしい。」

一度話が脱線しかかっただけに、少々解り辛い。

「『そりゃあお前が、学校に行こう』の辺りからだ」

つまり初めから暇を潰せていたらしい。

あれは会話というよりも、単に俺が屁理屈小言攻撃の餌食になっていただけではないか。というつつこみも、一般人相手だったなら成立したことだろう。

「しかしつまらんな。遙瀬、お前またおかしなことに巻き込まれてないか？」

「俺が生命の危機に曝されることを熱望するような、物騒なことを言わないでください」

正論かつ素直な意見を憚然とした口調で言い放つ。

どんな風に反撃してくるのかと思っていると、朔夜さんは意外な態度を示した。

「失礼なやつだな。それじゃあ私が人死嗜好者みたいじゃないか」

拗ねたような、けれど反駁するような口調で朔夜さんは言う。

普段とは少し違う様子には戸惑うが、ここで引いてはいけない。

「違うんですか？」

あくまで無愛想に言うのがコッだ。

間を取るように煙草を灰皿に押し付けた朔夜さんは、続いて無感動な瞳を窓の外に投げ掛け、

「いや、厳密には違う」

どうやら答えに辿り着いたらしい。愚問に全力を注いだ結果が出たようだ。

「私が嗜好しているのは常識で扱えない現象だ。そこに人間の生死は関係無い。ただ、そういった超常現象の中でも殺人が絡むモノに特別興味を惹かれるのも確かだ。

だがな、逢瀬。それはあくまで異常を孕んだ……いや逆か。つまりだな、私は死に興味があるのではなく、死を作り出した異常に興味があるんだよ。よって普遍的な死には一切関与したいと思わない。誰かの死を辿り、そこに存在する異常に行き着くことこそ私の嗜好だ。従って私は人死嗜好者ではなく、超常嗜好者と呼ばれるべきだろう」

「よくそんなことを、そこまで真剣に討議出来ますね」

ある意味で俺も見習った方がいいかもしれん。

俺がどうでもいい感想を思い浮かべて、この会話は終了した。

朝の十時に呼び出されてから二時間半。昼を過ぎた頃になって、俺は解放された。

しかし正式に帰宅してもいい、といわれたわけでは無い。単に、「そろそろ昼飯時だな。お前もさっさと済ませてこい」

という朔夜さんの一言により部屋から出ることを許可されただけなのだ。

呼び出しがある時間は日によって異なり、朝から呼び出される日は多くない。帰宅は基本的に下校時間まで許されない。授業こそ無いものの、これでは夏休み気分なんて微塵もありはしない。訴えてやろうか。俺の休日を返せ。

妹という圧力に逆らえない自分が惨めになるのを恐れて、不満を重ねるのはそこで止めた。

昼食を済ませてこい、と言われても当然俺は弁当など持参していない。となると、食糧を調達する方法は二つに絞られる。購買へ行くか、学食へ行くかのどちらかだ。

今の位置からだと言われ購買へ向かう方が距離は近い。

今から学食へ向かえば、昼休憩に入った部活の連中と混ざらなければならぬ可能性がある。そんな中で席を確保するのは難易度が高いだろう。それに健全に部活に励む奴らから、教師の暇を潰しているだけの俺が席を奪うのもどうかと思う。

ならば選択肢は必然的に一つに絞られる。

休み期間中の方が購買の利用率が高いというのは可笑しな話だ。

かくして適当なパンを購入することに成功した俺は、特にどこかで飯を食う当てがある訳でもないのでさっきまでいた国語科準備室へ向かう。

ところで、準備室とは言っているが朔夜さんはあの部屋で何の準備をしているのだろうか。

考えるだけ不毛だ。足を動かそう。

などと考えた直後だった。余計なことを考えていたことが原因で間違いない。廊下の角を曲がってきた生徒とぶつかった。

「あ すいません！」

それは幾度の修行を経て培われた、洗練されて一切の無駄が無いお辞儀だった。

俺が知る限りでこれほど完璧な謝罪のモーションが出来るのはただ一人。

ぶつかつた相手が誰であるかを悟るには、顔を確認するまでもなくその動作だけで十分過ぎた。

「よお、暦」

「はわあ！？ せ、先輩！？」

何をそれほど驚くことがあるのだろうか。

……いや。部活に所属していない俺が学校にいるというのは、何も知らない生徒から見れば可笑しな話だ。それを踏まえれば、暦のリアクションはどこも矛盾していない。

「今日は部活か？」

あたふたしている暦に尋ねる。

「は、はい！ 先輩は何をしているんですか！？」

いちいち声を張り上げるのは、部活で仕込まれているのだろうか。

「暦、声のトーン落とせ。普通に会話しろ」

「はい！ 了解です！！」

それだよ、それ。

注意を促す目的は二つ。一つは台詞の感嘆符を無くす目的、もう一つは話を逸らす目的。前者の成功率が低いことは理解していたし、実際無駄に終わった。が、後者は上手くいったらしい。

「それで、お前は何をしてんだ。校舎内でランニングか？ 先生に見つかったら捕まるぞ」

「はい！ ご忠告ありがとうございます！」

……え、マジ？

「ですが先輩！ わたしは校舎内でランニングなんてしていません！」

「……初めからそう言え」

元より暦とは会話が成立し難い。

暦の会話中における発言の優先順位は『謝罪』『陳謝』『深謝』『自己主張』の順である。だからこそ互いの意見を出し合う会話という行動の成立が難しいのだ。自分よりも他人を優先する、それが御巫暦という人間だった。

「わたしは今、お昼ご飯を買いに購買へ向かっています！」

「弁当は持ってきてないのか？」

「はい！ 忘れました！」

「暦」

「はい！ なんででしょうか先輩！」

俺は出来るだけ曆を傷つけないように、事実を述べた。

「衆目を集めすぎだ」

「はっ……!!」

カツ、と白い顔が真っ赤に染まる。

幸い立ち止まって俺達の行く末を見届けようとする物好きはおらず、通り過ぎざまに視線を向けてくるだけで済んだ。

とはいえ時刻は昼食時。購買へ向かうこの時間なら人通りは決して少なくない。

「はあ………」

大きなため息は俺の物だった。

羞恥の念に燃え上がっている曆をこのまま放置しておいて、後々取り返しのつかないことになるのも困る。ならば曆がこうなってしまうた一原因である俺がなんとするのが筋、か。

「ほら、行くぞ曆」

心ここに在らずといった感じの曆に声を掛ける。

と、小さな双肩が跳ね上がり、潤んだ瞳が俺を見上げた。

「行ってくつて、どこにですか？」

声はさつきより二段階小さくなっている。

失敗から学び、そして更正できる人間は大丈夫だ。

「購買だろ。さっさと行かねえと、飯売り切れるぞ」

言って歩き出す。

「は………はい、先輩!!」

最後の最後で同じ間違いを繰り返すことは、大目に見るとしよう。

パンとペットボトルのお茶の会計を行う曆の様子が変だ。

さつきからしきりに自分の体中を触っているし、その度に泣きそつな目でこちらを見てくる。

果たして俺に何を求めているのだろうか。

「どうした？」

待っているのもじれつたくなって、俺から問いかける。

と、暦は突如背後に現れた俺にびっくりと体を跳ねさせた。

「うろう……先輩……」

比喩じゃなかった。これは本当に涙を溜め込んだ瞳だ。

涙腺が決壊寸前の瞳で、暦はある程度予想がついていた一言を発した。

「お財布………忘れちゃったあ………」

そんなことだろうと思ったよ。

俺は二度目のため息を吐き出して、額に手を当てる。

まるで世話の掛からない実の妹の代わりに、この後輩は俺に或る一つの結論を齎した。

結論。 手の焼ける子ほど可愛いというのは、嘘。 疲れるだけだ。

俺は苦笑いしている購買のおばちゃんに財布から取り出した代金を差し出した。

場の成り行きから、昼食は暦といっしょに取ることとなった。

勿論暦を朔夜さんの菓食う国語科準備室などに連れて行く訳にはいかず、場所は中庭となる。

もつとも、朔夜さんなら空の友人である暦を連れて行っても歓迎しただろう。ちなみにこの場合の歓迎とは頭上から黒板消しを落とすことと同義だ。

精神的に脆い後輩のことを思うなら、俺が選ぶべき選択肢は決まっている。

何より、あの変人に関わればそれだけで妙な事に巻き込まれる確率が上がるのだ。俺は自分の後輩にみすみすそんな危険人物と邂逅

を果たさせるほど愚かではない。

「先輩。あの、どうかしたんですか？」

「いや、なんでも」

気遣いは無言であるからこそ他人の為なのだ。

それを口にする程無粋なこともない。

「それで、どうしたらいいんでしょうか」

「……は？ 悪い、なんの話だっけ？」

「部活のことですよ。どうすれば上達するか、という話です」

俺は一瞬頭の中が真っ白になった気がした。はて、そんな話をしていたらどうか。

記憶にはなかったが、話の途中で他のことを考えていたのは俺だ。

「あ、ああ。そうだった、な……」

適当に肯定しておく。

ところで部活だと？ 何故そんなことを俺に訊くのか。暦が何の部活に所属しているのかは、服装を見れば明解だ。制服やジャージなどではなく、時代を感じさせない白装束。簡単な言葉を使って描写するなら、ようするに胴着を暦は着用していた。

この学校でそんな恰好をする部活動は……

「弓道か剣道か……どっちにしたって俺に教わるようなことじゃないぞ。二つとも、俺には何の心得も無い」

「ふえ……？ そうなんですか？」

何故かとても意外そうな顔をしている。しかしながら、そんな顔をしたいたのはむしろ俺の方だ。この学校には、俺と同姓同名の弓か剣の達人がいるのだろうか。

「空がとても上手だって聞いたので、てっきり先輩のお家ってそういう家系なんだと思ってました」

「空って……あいつ部活なんてやってたなかったと思うが」

「正式に入部してる訳じゃないんです。仮入部期間に一度だけ練習に参加したそうです。そこで部の先輩に是非入部してくれって言われたそうなんです、断ったそうです」

なるほど。そういえば一度空が帰りが遅くなると言いに来たことがあったが、これが真相か。

俺は空に入部を懇願する先人達と、その誘いを切り捨てる剛直な妹の姿を思い描いた。

「残念ながら俺では力になれないな。直接空に教鞭を取ってもらえ。お前が頼めば、空も快く引き受けてくれると思うぞ」

「そうですか……」

何で残念そうなのだろう。暦と空の仲は良かったはずだが。

それから暦は無言のままパンを口に運んでいた。よく晴れた青空に眼を向けて、ぼんやりとしている。それはまるで塵気楼でも見つめるような、飛行機雲を眼でなぞるような様子だった。

やがて、

「先輩は、自分ではどうしようもないことってどうしますか？」

どこか遠い場所へ、届かないと解つていながらも言葉を紡いだ気力の無い口調でそう言った。

俺は口に含んだサンドイッチを飲み込んでから、横目に見ていた暦の表情を正面から見据えた。

「そりゃあどうしようもないなら諦めるだろ」

答えは深く考えるまでも無く口をつく。

手の打ちようが無いなら、それ以外に無いだろう。俺の短い人生を振り返ってみても、悪足掻きが功を奏した経験は無い。勝算の無い賭けには出ないことが賢い生き方だ。

「そうですか」

どこか様子が可笑しい。

暦との会話が要領を得ないことはこれまでもよくあった。

けれどこの会話は明らかに妙な感じがある。何というか……暦にしては真剣な感じだ。

この違和感に何か言つべきなのか迷う俺をよそに、暦が立ち上がる。

「先輩　　わたしは、今の生活が大好きです」

最後に、その儚くも本心から幸福を湛えた笑顔を別れの挨拶にして、曆は走り去っていった。

その小さな後姿に何か言いつべきだったのだろうか。今はまだ、解らない。

今は　　これが御巫曆と遙瀬橙弥が、日常の中で交わす最後の会話だと知らない今は。

準備室に戻った俺を出迎えたのは意外な人物だった。

「あら……。兄さん、来てたんですか」

「そりゃこつちのセリフだ」

優雅にコーヒークップを傾けるその少女は名を遙瀬空といって、間違いない俺の実妹である。であるのだが、これがどういう訳か空の振る舞いは全てお嬢様然としている。今年の春、三年振りに空が家に帰ってきてからは実家が王宮か何かに思えて戸惑ったくらいだ。空は肩に掛かる黒い髪を払い、カップを机の上に置いた。

「それは愚問ですよ。そもそも朔夜さんを兄さんに紹介したのはわたしなんだから、わたしが朔夜さんのところに行っても可笑しくは無いでしょう？ それとも兄さんには、わたしがここには都合の悪い事情でもあるんですか？」

丁寧なくせに挑発的な言葉だ。これも今となっては慣れたものだが。

空のイメージは常識知らずのお嬢様という訳ではなく、むしろその逆だ。

世の中の理を知った上でそれに逆らっている感じがある。

さながら王族に生まれながら、世の支配に抗う王子といったところ。勿論この場合はプリンスではなくプリンセスだが。

そんなことを考えながら、俺は空の対面の席に腰を下ろす。

その様子を空はカップに口を付けながら上目遣いに眺めていた。

どことなく睨み付けている風なのは、空が持つ常に何かに挑んでいる雰囲気のせいだろう。

「そういえば、空」

唐突に俺が切り出した。さっき曆とした会話を思い出したからで他意はない。

「お前、弓道部に仮入部してたらしいな」

空が立ち上がるのと、俺がそう言うのは同時だった。

不意を討たれたように空が動きを止める。顔だけを振り向かせた表情はいつもの冷静なそれと変わらない。

「ええ、一度だけ練習に参加しました」

言い終わると、空はため息染みた吐息を溢し、

「曆に誘われたんだけど、曆自身は練習にこなかったんだっけ……」
言葉遣いから考えて独り言のようだ。

空はその過去を思い出して嘆息しているが、その反面俺は合点がいつていた。

弓道部のことなのになるで他所事のように話していた曆を思い出す。伝聞口調の原因はつまりそういうことか。話全体がどこか借り物染みていた訳だ。

空は今一度大きなため息を吐く。世話の掛かる妹を思い出す姉の様な姿。

俺はカップ片手に行動停止している姉姿に声を掛ける。

「それで、何で入部しなかったんだ？ お前、聞くところによると相当な腕なんだろう？」

その言葉で空は忘我の果てから意識を蘇生させた。はっ、として顔を上げる。

「……別段弓に興味があったわけではないですから。そんな人間が混じっては悪いと思ったので」

「なんだそりゃ。部活くらい気軽にやればいいだろ」

これは空の昔からの癖だったりする。

責任感が強いと言えはあり体だが、空のそれは他とは異なる。

或る一つのモノに固執できない。それは責任感とは反対であるように思えて、実は連結した意味を持っているのかもしれない。責任

感が強いからこそ、無責任に何かを背負うことをしないのだ。

空はまさしくその典型で頼み事をすれば必ずそれをこなしてくれるが、逆に自分からは何にも執着しようとしない。

だからこそ弓道を真剣にやる気の無い自分が、本気になってその道を極めようとしている他人と肩を並べることが許せないのだろう。一度そこに入ってしまったえば、自分も同じ覚悟を背負う責務を負ってしまうから。

……何もそこまで気にしなくていいと思うけどさ。

「それはダメなの」

ここに来てまた口調が変わる。

歳相応の少女口調をした空の目は、けれどしっかりと俺を見据えていた。

一体、何が違うというのだろうか。

「……いえ、なんでありません。聞き流してください、兄さん」

結局疑念は晴れぬまま、空は俺に背を向けた。

どうも始末の悪い会話ではあったが、それでも空が話し難いのなら深く追求することは止めておく。そんなことをしても無駄な時間を浪費するだけということは、兄である俺がよく知っていることだ。妹に自分の強情さに似たものを感じているこの頃だからな。

「ところで兄さん、朔夜さんはどこですか？」

背中越しに空が尋ねてくる。

俺は空が開いている本を遠くを見る目で眺めながら、

「朔夜さん……って、そういえばいないな」

今更ながらそんなことに気がつく。この部屋にいて当たり前の人物の姿が無い。

壁際の散らかったデスク。唯一の窓を背にするその場所に朔夜さんは不在。

俺が昼飯の為に部屋を出たときにはまだ朔夜さんはそこにいた。

……まさか、何も言わずに自分だけ帰った、なんてことは無いだろうな。あの人なら遣りかねない。

思いの他早く仕事が片付いてな、先日は先に帰宅させてもらった。なんて全く罪悪感を感じていない表情で言う朔夜さんが思い浮かぶ。「わたしがここに来たときには、もう不在でした」
振り返った空の両手にはそれぞれコーヒ―が注がれたカップが握られていた。

二つのカップを机の上に置いて、空はその片方を俺に差し出す。

「先に帰ったんじゃないのか？ あの人ならそれぐらいするぞ」

「それは無いですよ。朔夜さんは面倒見のいい人ですし、呼び出しておいてそんな無責任なことはしません」

何を根拠にそう言うのか、揺ぎ無い瞳で空は言い放った。

いや、それは違うぞ空。

奴は教師という仮面を被った残虐非道な悪魔なのだ。小悪魔なんて可愛らしいものじゃない。自分の退屈を紛らわすためなら、全人類を巻き込んで命を賭けた死のゲームを開催しかねないほどの極悪人だ。

六月の事件を思い出しながら、俺がそんなことを言うと、

「そんなことは無いですよ」

コーヒ―を啜って、空は断固否定した。

「朔夜さんはいい教師です。実際、彼女に信頼を寄せる生徒も少なくはないんですよ」

「……あのな、空。お前がどんなペテンに掛かったのかは知らんが、取り合えずあの人には気をつける。取って食われるかも知れんぞ」

一向に引かない俺を、空は一層強い目で見据えた。

なんだ、その目は……？

「随分とメルヘンな例えが好きなんですね、兄さん。帰りに御伽噺おとぎばなしの本でも買ってきてあげましょうか？ それとも紙芝居がいいでしょうか。ああ、心配はいりませんよ。難しい平仮名があったら変わりに読んであげますから」

よほど癪に障ったらしい。空の言葉には容赦が無い。

一度奮起した空を宥めるのは難しい。

最善の解決策はただ言われるがまま言葉攻めのサンドバックになることだ。

あくまで冷静に兄を罵倒する空。そこへ、

「なんだ、私がない間に随分と盛り上がっているな。お前達」

扉を開いて、件の変人くだんが戻ってきた。

朔夜さんは取り立てて興味がある風でもなく呟いてデスクへ向かった。

「私のいない間に楽しむとは、遺憾だ」

鬼の居ぬ間に洗濯とは、まさにそういうことだろう。

それにしても朔夜さんには俺たちが楽しんでる様に見えるのか？ だとしたら俺は改めて彼女の人格を疑わざるを得ない。

「どこへ行ってたんですか？」

「昼食だ。食堂へ行っていた」

空の問いに答え、朔夜さんは俺の前に置かれたカップを啜った。

……いや、それ俺のだから。

「……朔夜さん、学食を利用するんですか？」

「当然だろう。高校の楽しみは学食だ。それとも私が学食を利用しては可笑しいか？」

可笑しい。この人が生徒に交じって食事をしている姿なぞ、一体誰が想像できよう。

食堂を利用する一般生徒たちが心配になってきた。よもや生徒から金を巻き上げてやしないだろうな？

「ところで空、遙瀬と何の話をしていたんだ？」

空に対してその質問のしかたは可笑しい。他にあるだろ、国語教師。

開いていた本を閉じ、空が顔を上げる。

「大した話はしていません。弓道部に仮入部していたことについて
適当な会話です」

「なんだお前、弓道に興味があつたのか」

「興味はありません。仮入部していたといつても一度練習に参加し
ただけですから」

ふん、と朔夜さんが小さく鼻で笑う。

「熱心な勧誘を受けたことだろうな。お前なら弓の腕も相当なはず
だ」

「ええ、まあ」

誇る風でもなく、空は肯定する。

空はそんなことより、と静かに朔夜さんへ振り向き、

「それより朔夜さん、早速ですが本題に入つてよろしいでしょうか
？」

こと、とコーヒーの入つたカップの底が音を立てる。朔夜さんが
俺から奪つたカップを置いた音だ。

「なんだ、随分と急ぐじゃないか空」

からかう様な微笑を浮かべて、

「お前から電話して来るなんて珍しいと思つていたが……よほど気
に掛かるようだな。お前はそんなことに興味は無いと思つていたの
だが」

言いながら、朔夜さんの瞳は新しい玩具を手に入れた子供のよう
に変化する。何にも興味が無さそうな虚ろな瞳は、光を取り戻して
生きた人間のそれへと蘇生した。

嬉々としたその笑顔を見ながら俺は驚嘆していた。

てつきり空の方が呼び出されたのかと思つていたが、実は逆だつ
たということか。我が妹ながら、自らこの変人の根城に乗り込むと
は。考えられん。

などと考えていると朔夜さんの視線が俺に向き、

「だったら、お兄さんには席を外してもらつるか？」
なんてことを口にした。

……席を外すとはどういうことだろう。俺が退場しなければなら
ない理由はなんだ？

「いえ」

俺の反論や同意よりも早く空が肯定した。

端正な顔がこちらへ向く。

「話は電話の続きですから、兄さんは空気のようなモノです」

「はは。そうだったな」

俺は既に蚊帳の外にいる。

一方で二人の間では話が進んでしまっただけ。

「しかし珍しいな。お前の方から話題を持ち出すなんて。夏休みで
相当暇を持て余していたのか？」

「ええ、まあ。そういうことにしておきましょう」

話がまるで理解出来ない。いや、まだ本題には入っていないよう
だが。

それでも俺に解ることは、今から始まる二人の会話が常識の範疇
を越えているということ。裏付けなら朔夜さんの表情から取れる。

「それで、実際にそういうことはあるんですか？」

「前例が無いとは言えないさ。世間にはそれを表す固有名詞だつて
あるんだからな。と言っても、それだつて細かく分ければ幾つかの
種類に分かれる。今の情報量じゃ、私には大したことは言えないな。
百円を拾うのと、地球に巨大隕石が落下するのではモノが違うだ
ろ？ 夢に見たことが現実に成ることはあるんですか？ なん

て、アバウトな質問では私の回答も限られてしまうぞ」

夢に見たことが現実になる……？ それはつまり

「予知夢、といったところか。空、お前の言うそれはどんな未来を
予知しているんだ？」

朔夜さんの言葉は俺が予想したものとは違っていた。

予知夢。それは読んで字の如く先に起こることを予知する夢のこ
とを表しているのだろうけれど。

「朔夜さん、それ予知夢じゃなくて正夢なんじゃないですか？」

知らず、拳手もせずには俺は二人の会話に口を挟んでしまった。

驚いたのはむしろ空の方だったらしい。朔夜さんは無関心な目をこちらに向けるだけで眉一つ動かさない。それに対して空の方は持ち上げたカップを静止させて、あからさまに驚愕の瞳を俺に向けている。

……どうやら、俺が首を突っ込んではいけない会話だったらしい。「確かに」

停止した空気を動かしたのは朔夜さんだった。

「私も詳しいことを知らない以上、一概にこれを予知夢とは言えない。お前の言うとおり、正夢の類かもしれない。今の段階でその辺が解るのは空だけだ」

同意するようなその言葉は何処となく可笑しい。

……いや。よく考えれば、そもそも可笑しな発言をしたのは俺の方だった。

殆ど何も考えずに口に出してしまったが、予知夢と正夢は結局同一の言葉でしかない。だというのにそれらを別物のように扱う朔夜さんの言動が可笑しく感じたのか。

「で、空。お前が言う『夢』は、一体どんな夢なんだ？」

「それは……」

言い難そうに空が口淀む。何となく横目で俺に視線を飛ばしているようだが、その意味はまるで解せ無かった。

ややあつて、

「……人が、死ぬ夢です」

泳いでいた視線を朔夜さんへ固定し、その言葉を外に出した。

人が死ぬ夢。それが俺の脳髓に浸透するよりも早く、室内に調子はずれな声が響いた。

「は？ いや、私が訊いているのは夢の内容じゃないぞ、空」

苦心の末に出したような空の言葉に朔夜さんはそう言い放った。

「私が聞きたかったのはな、空。その夢が現実になるまでの過程だよ」

さも当然のように朔夜さんは言う。

しかし今の会話から朔夜さんが言うような質問の内容を読み取れる人間はそういないだろう。何せ空さえも解せないのだから、一般人の大部分には理解不能なはずだ。

なによりそんなことを聞いて、一体何になるといつのか。

同じ事を考えているように、空はきよんとして目を瞬かせている。

「え……。すみません。そこまでは解りません」

「なんだそれは。……。まあ、解らないなら仕方が無い。それにしても、どうしてそんな質問をするに至ったんだ空？ その様子だと、夢が現実になるという現象を体験したのはお前じゃないようだが」

朔夜さんの言うことは正しい。意図は解らないが、空の疑問が実験に基づいたモノだとしたら、その質問にも答えられるのが当然だ。

……。と、ちよつと待てよ。

「朔夜さん、それって夢の内容を訊いてるのと同じですよ。些細な矛盾点に気が付く。」

「夢が現実になるってことはつまり、その過程も『夢』ってことでしょうか？ だったら『過程』を尋ねることは夢の内容を尋ねることと同じことじゃないですか」

「それは違うだろ。夢に出てくる場面が結末のワンシーンだけなら、現実における結末^{ユクマ}までの過程は夢とは別物じゃないか」

言われてみれば確かにそうなる。

だとしたら、朔夜さんが尋ねているのは一体どういうことなんだろうか。

「この話は終わりにしよう。空、相談に乗るのは構わんが次はもう少し情報を揃えておけ。私も無責任にものは言えんからな」

その言葉で、この場における空が持ち出した現実になる夢の話は収束した。

日が暮れ始め、下校時間を報せるチャイムとともに俺達は帰宅の途に着いた。

昼からのことはわざわざ語るまでもない。朔夜さんも空も何かしらの作業に没頭していて、俺はそれをぼんやり眺めて時間を過ごした。

しかし本当に、俺はあの部屋にいても仕方がないだろう。結局朔夜さんを楽しませる会話なんて発生しなかったし、そもそも発生したとしても俺は何にも楽しくなんか無い。むしろ疲れる。

太陽がオレンジ色に染め上げる夕方の世界。

部活を終えて帰宅する生徒達に混じって俺と空は校門を出る。

途中何人かの女子生徒が空に声を掛けていたが、その全員が俺へと驚きの眼差しを向けていた。おそらくは俺と空の血縁関係に驚愕していたものと推測する。これがもう見飽きた光景だったりするのだ。

自分に話しかけてくる友人の対応をしている空は、何というか……普通だった。

正直に言ってしまうと 俺は空を妹とか以前にどこか遠い存在の様に感じていた。

何年か顔を合わせていなかったという事実は確かに兄妹の関係を曖昧にしてしまっていたらしい。もっとも、そればかりが原因では

ないのだが。

よく考えれば。

俺はこの空とまだ約四ヶ月しか過ごしていないのだ。

勿論、まるで知らない他人が突然目の前に現れたわけではない。

あまつさえ血を分けた妹である。

空の振る舞いは完璧であるが故にどうにもとっつき難い。

家族だというのに俺が空を遠く感じることの最も大きな要因はそれだ。

ただ、同級生と話をする空はそれこそ歳相応の少女でしかない。

学校であまり会うことが無いために俺にとってこういう空を見るのは珍しい体験だった。

「兄さん。どうかした？」

声を掛けられる。

空はいつの間にか俺の隣で肩を並べていた。

「あ……、いや、なんでもない」

よもや考えていたことをそのまま口にするわけにはいくまい。

おそらく俺がそれを口にしたところで空は皮肉九割の感想を述べて一蹴して気にも留めないと思うけれど。わざわざ口に出さなくて言い事柄は存在するのだ。

「そうですね」

行儀のいい立ち姿が短くそう告げて歩き出す。

夕日の逆光で小さな背中が影に覆われる。

空のストレートの黒髪が小さく風に揺れていた。

「あれ……？」

揃っていた足音が片方、ぴたりと止まる。

別段会話も存在しなかったこの場で唯一生きていた音が足音だっただけに、辺りが急に静まったような錯覚を覚える。

呟きは空のもので俺よりも二歩ほど後ろの位置で立ち止まっている。

あらぬ方向を向いた空の視線の先には一人の少女がいた。

「暦？」

空の目線を辿った先。

制服姿のまままで御巫暦がそこにいた。

「空……………さん。えっと、こんにちは」

空に気づいた暦があたふたしながら挨拶する。

余談だが、この時間帯の正しい時頃の挨拶とは何なのだろう。こんばんは、はまだ早い気がするし。こんにちはというのも違う気がする。

「暦、家この辺りじゃないでしょ？ どうしたのよ」

「ええと、少し用事がありました！」

暦がぶんぶん首を振りながら話すものだから、会話している二人は全く目が合っていない。

それにしてもこの二人、本当に同級生なのだろうか。

小柄な上に童顔であるのが暦の特徴の一つである。それに加えて、腕を上下にばたつかせながら話す姿も子供染みている。なまじ会話している相手が空だ。この状況では同級生というよりも姉妹といった方がまだ通じるだろう。

「用事って？」

落ち着きの無い暦を窺めるかの様に、空の口調は平坦な音で紡がれる。

その冷静さが逆に不気味だ。慣れ過ぎているというのもどうなのだろう。

「ええと、それは、それはですね、えっと　　あ、先輩！　こんばんはです！」

態度があまりにも対照的な両者の会話を傍観していた俺に挨拶の

言葉が飛ぶ。

さつき空にはこんにちは、だったのにその辺の変化は何なのかという部分には触れないことにして、俺は別のことが気になっていた。暦の奴……誤魔化したのか？

「暦、話誤魔化さないで」

しかし当然ながら空を出し抜くことは出来ない。というよりも、今では空以外の相手でさえ通じはしないだろう。浅はかだ、暦。空は冷淡な口調で話題を引き戻しに掛かる。

自身にしてみれば今のが百点満点の欺きだったのか、暦は異常なリアクションで飛び跳ねた。

「あの……それは……その、ですね」

空のつま先辺りへ向けて口ごもる。

俯いて逡巡する暦の動作は、状況を把握している俺でさえ空が暦をイジメているように見えてしまうほどのものだった。

同じことを空もまた感じたのだろうか。

「まあ……言いたくないなら無理には訊かないわ」

と、追求する意思を無くした。

言った空は腰に手を当てて一度ため息を吐き出す。

確かに暦のテンションに付き合うのは気力があることなので、空のため息には同意できる。それがハイの時でも、ローの時でもまた然り。

追求を免れた暦はそれで安堵したのか気の抜けた表情へ様変わりした。薄暗くなり始めた街の中、夕日に照らされるその姿が何とも言えない悲愴感を醸し出している。

そんな俺の主観など知らないであろう暦は俯いた顔を上げて、

「……ごめんなさい。空、さん」

後半を歪な発音で口にした。

捨てられた子犬みたいな目をして、暦は眼前の同級生を上目遣いに見上げる。

そこに打算や何かしらの思惑が無いことが明白なものだから、

「別に、いいわよ。言いたくないことなんて誰にでも在ることなんだから、気にしないで」

それまで険しかった空の表情が打ち解ける。

ふん、と鼻を鳴らした空はしかし、再び声の調子を僅かに荒げて、「でもね、暦。いい加減『空さん』は止めなさいよ。わたし達友達でしょ？」

何と言うか、実にその通りなのだが空が言うとは何故か可笑しい気がする。

それは偏に俺がこんな空を見慣れていない所為なのだろうか。

「あ……はい、努力しますっ！」

びしっ、と敬礼の姿勢を取る暦。

努力して直すことでは無いと思うのだが、暦にしてみれば一大事なのかもしれない。

呆れるように、けれどどこか安心したように空は苦笑していた。

その表情の意味を俺は知ることが無いが、曖昧ながらその心境は読み取れる。それでもそれなりの付き合いだからな。空にしても暦にしても。

「それでは兄さん」

保護者のような感想を浮かべて傍観していた俺に空が向き直る。

頭の中でスイッチを切り替えるように、空の口調が一瞬にして余所行きへと移り変わる。

「わたしは先に帰りますから、暦をお願いします」

「お願いしますって……」

どうということだろう。

暦がこの辺りをうろついている理由は何らかの私情があるからで、その詳細は解らないが空にも言いたくないようなことであることは間違いない。ならばそこに俺が参入していい理由など微塵も見当たらないのだが。

そもそもお願いします、という言葉が何をお願いしているのかも解せない。

俺が明確な返事返さないことを勝手に肯定と受け取ったのか、空は済ました顔で歩みを進め、

「暦ならきつと迷子になっただけだと思いますので、兄さんがしつかりと道案内して上げてください」

横目で背後の少女を窺いながら、俺の耳元でそう囁く。

僅かな間背伸びした空は浮いた踵を地に付けると、暦へと上半身だけを振り返らせた。

「それじゃあね、暦。兄さんをよろしく」

にこり、と最後にお嬢様的な笑みを浮かべて空が退場した。

さて、と。ここからどうしたものか。

文句を言う相手も今は遠くの方で影のようになっていて、暦は俺から何らかのアクションを起こさなければ能動的な行動は見せない。

「えあ、あの、先輩」

前言撤回、しなければなるまい。先に口を開いたのは暦の方だった。

精神に僅かな衝撃を喰らって、その動揺が表に出ないように振り向く。

内心の驚きを隠す俺だが、一方で暦は内情を全開の表情でおどおどと俺を見据えていた。

「あの……わたし、本当に大丈夫なんで、気にしないで帰ってください」

つぎはぎの口調だった。

俺はもう見えなくなった空の背中を探すように遠くへ目を遣り、どうするべきかを思考する。

正直、この場に暦一人を放置していくのは危険な気がする。空の言う通り、リアルな迷子なのかもしれないし。暦がこの辺りにどれだけの知識が在るのかは知らないが、異郷の地で一人女の子を残していくのは俺自身も気が引ける。

……それにこのまま帰っては空に何を言われることやら。

お願いしますと言った妹の姿を思い出し、決意した。

「……そんじゃ、行くか」

呟きは思ったよりも沈んでいない。

むしろ何が面白いのかと問いたくなるほどに楽しげだった。

「行くつて………いえ、ダメです先輩！ わたし本当に大丈夫な
んで……！」

頑なに否定する。

他人の意思をやたらと主張する曆にしては、これは珍しいことだ。
人の厚意は跳ね除けず受け取って、それを倍返しするのが俺の知
る御巫曆という娘なのだが……これはどういった心変わりの結果な
のだろう。

「あのな、お前の言う通り俺も一応先輩なんだよ。だから迷子の後
輩を放置して置く訳にはいかねえんだよ。それに」
そこまで言つて閉口する。

それに　なんだと言うのか。学校の後輩が迷子になっているか
ら放っておけない、それ以外で執拗に曆を気遣う理由は要るのだら
うか？

答えは、意識せずとも口から零れた。

「　それにこのまま帰ったら空に何言われるか解らん。だから俺
を助けると思つて……な、曆」

そういうことだ。時として口走る言葉は思考以上に正確な場合が
ある。

今が正しくそれであり、それならさっきの妙な声の調子にだつて
頷ける。

結局俺は自分の意思なんかよりも空の言葉を優先しているのだけ
ら。

笑いは、実は滑稽な自身を嘲笑した嗤いだつた。………全然笑
い事じゃねえよ、それ。

俯いて黙り込んでしまった曆だったが、しばしの間を置いて顔を
上げる。勢いよく跳ね上がった顔がこちらを向いたかと思うと、曆

は目が合った途端にそっぽを向いて、

「……………わかりました」

渋々のように肯いた。

空に押し付けられた暦との散歩は何の進展も無いまま直に一時間を迎えようとしていた。

迷子だと空は言っていたが、道を先導しているのは暦の方で、どうやらその読みは外れていたらしい。

何処へ向かっているのかと尋ねてみたが、空の時と同じく暦が言い淀むものだからまだ行き先がはっきりしない。一向に目的地と思しき場所に辿り着かないことから、直接迷ってははいないかと訊いてみてが暦は首を横に振るだけだった。

そんなこんなしながら、俺は違う意味で犬のおまわりさんの気分を味わっていた。

この妙に気まずい散歩が一体どこで終着するのかは依然不明であり、後どれくらいこうしていれば終わるのか予想もつかない。

が、そんなことは別にして気になることが一つある。

前を歩く暦がいつに無く大人しいこと。それに加え定期的に後ろを歩く俺を肩越しに垣間見ていること。

何より さつきから同じ所ばかり歩いていることが何よりも気になる。

「……………暦、お前本当に迷ってないんだよな？」

「は、はい……………。もう少して着きますから、先輩はもうお帰りになってくださって結構ですよ」

「またそれが」

本当に、暦の様子が可笑しい。

さつきから言葉を交わせば俺に帰れと言ってくる。

初めに空が俺に迷子センター役を押し付けたときからそうだ。暦がここまで何かを否定することは珍しい。

「何かあったのか、お前」

「……な、何も無いです！ わたしは元気です！！」

元気なのは解ってるよ……。

こうしていても埒が明かない。

一度どこかで暦の真意を確かめるべきだと判断して、丁度よく現在地が公園の前であることに気づく。取り合えずここで話をしよう。それで何がどうなるかは解らないが、暦の様子が可笑しいことだけは確かなんだから無駄にはなるまい。

提案すると暦はどこか疲れた目をして同意した。

自販機でジュースでも買ってくると言って、暦をブランコに座らせる。

俺が背を向けている間に逃走を図りはしないだろうかと注意を回していたが、暦にその気は無いらしかった。待ってると言った俺の言葉を律義に守っている。あくまで同意した上でのお帰りをお望みのようだ。

俯いて両サイドの鎖を握る暦に何か粹な台詞を掛けてやればよかったのだが、生憎俺の語彙群の中にはそのような言の葉は見当たらない。暦は差し出した缶を無言で受け取る。

暦は冷えたアルミ缶を両手で握り締めた。

……温まるぞ。

俺はブランコに座らずその囲いに腰を下ろす。

思った通り、いい感じに鉄が冷えている。小柄な暦に合わせるには、自然、姿勢は前屈みになる。

「で、どうしたんだ暦？ 何か悩み事でもあるのか」

いきなり核心を衝く質問。

やはりと言うか、何と言うか。暦は答えず俯いたまま、缶のポイへ瞳を落としていた。

後になって悔やんだところで取り返しはつかないが、もう少し遠回しに訊くべきだったか……。

陽はすっかり落ちて、公園の中は闇に包まれる。在るのは遠くの
外灯が産み出す弱い灯かりだけ。

そして。

ギィ 錆び付いた摩擦音が静寂を割った。

「 は、ありますか……」

小さな声。それに続いて。

かりかりかり。無機質な音。その正体は暦が缶の上底を引っ掻いている音だと少しして気づく。

「先輩、はありますか……？」

かりかりかり。その音だけが大きくなっていく。

これから自分が口にすることを練習しているようだ。

全部は聞き取れないが、もう何度も同じ言葉を反復している。

かりかりかり。音は次第に大きくなっていき、

かりかりかり、かりかり かり ツガ……

「い ツ……」

爪が変に引っ掛かってしまった模様。

「……よし」

しかしそれで決心が出来たらしい。

暦の顔を上げる速度が尋常ではなく、何か常軌を逸したものを感
じたことはわざわざ言うまでも無いことであると思うが

「先輩！」

伏せていた瞳が滲んでいるのは、俺が触れてもいい事柄なん
だろうか。

思考すること数瞬間。それにはノートタッチでいることを決めた。

「先輩、は……ありますか！」

練習した成果がそれであるらしいから、その努力を認めてこける
のは止してやろう。

心中でほっと胸を撫で下ろす。ここに至るまでの暦の努力を知ら

なければ、俺は間違いなく別の意味で暦の発言を受け取り、然るべき対応を取っていたことだろう。訂正するべきだ。

暦の視線はどこまでもまっすぐに俺の目を穿っている。自分がひよっとしたら問題発言をしている、などとは露ほども思っていないのだろう。暦の目はどこまでも真剣だ。

「は……………っ！」

大きな瞳が一層開かれる。他人の口出しするところではないらしい。自分で気づいたのだろう。

間髪入れず、暦は次のように修正した。

「先輩！ したことがありますか！？」

何が！？

どうしようもない威力だった。

背中から鉄柵を軸にして一回転してしまうほどに。

無論、一回転というのは程度を表しただけで実際、俺は九十度回転して脊髄を強打した。

否応無しに夜空を仰ぐ体勢となった体を引き上げる。再び何も無かったかのように振舞って、俺は暦の前に再来した。

「暦……………お前、そんなこと聞いてどうするつもりなんだ……………？」

「え、だって先輩が『悩み事があるのか？』って訊きましたから」
背筋に嘗て無い戦慄を感じる。

この冷や汗が腰から上へ逆而上っていく感覚はいつ以来だろう。

トイレから帰ると何故か俺の部屋から出てきた空に冷ややかな視線を向けられた時以来、かな。おぞまし差としてはダイレクトである分こっちの方が上だ。

「もしかしてお前、そんなことで悩んでるのか……………？」

「はい。本当は一人でなんとかしようとおもってたんですけど……………先輩が相談に乗ってくれて……………いいましたから」

相談に乗ると言ったのは確かだが、内容にもよると今更ながら付け足したい。俺はどんな悩みでも解決出来る先輩ではないのだ。

夜の公園。

ブランコの錆びた鎖が風に揺れる。

「……先輩は、後悔したこと、ありますか……？」

キィ という嫌な高音が耳を衝く。

表情を陰らせた暦が最後にそう質問した。

最終的に訊きたかったことはそれらしい。二度に亘る失敗の末にようやくそこに至ることが出来たということか、あるいはまだこれでも完全でないのか。

「後悔って……そりゃ無いことはないな」

十六年程度の人生でも、振り返ってみて一つも悔いがないと言えは嘘になる。けれどそれはほとんどの人間がそうだろう。

暦の質問の意図が俺には理解出来ずにいる。

「そう……ですか……」

十人に訊けば十人が同じことを言うであろう俺の回答。そんなものでも暦には役に立ったのだろうか。

「そう……ですよね……。それってやっぱり、よくないですよね」「まあ、良いか悪いかで言えば後者だろうけど、そんなのはどうしようもないことだろ？」

後悔。後になって悔やむという性質上、それは結果の後に付きまとうものだ。ならば結果が解らない段階でそれを回避することは叶わない。補足するように俺はそう付け足した。

言い終えると、暦は何かを納得する様頷き、

「……わたしは……人間は、結局みんな後悔をするものだと思っ
ます」

その言葉はどうやら俺宛であるらしかった。

「どんなに後悔しない道を選んでも、やっぱりそれは在るものだと
思います だから」

顔を上げる。滲んだ眼光はけれど、それでも一層強い光だった。

「だからわたしは、今出来ることをします……今しか出来ないこと
をします！」

意気揚々と、そんなことを宣言する。

言っている意味が俺には解らなかった。けれど憑き物の取れたような表情をする暦を見ると、これまでの時間は無駄では無かったんだと思える。

「先輩、ありがとうございます」

小さな頭を下げる。それは見飽きた暦の得意技だ。

すっかり日が落ちた夜の空。

雲の無い星空は、明日が晴天であることを告げているみたいだった。

静謐な夜は煌々と輝く月の光を拒むことなく受け入れていた。深淵と称して差し支えないこの闇の中では、どれだけ弱々しくもそれが唯一の希望であるかの様に尊い。

誰彼の声もなき静寂の闇の中。其所に不釣り合いなほど純白なる少女の姿が一つ、この場に注ぐ月光の全てを浴びるかの様にして立ち尽くしていた。

虚ろな瞳は数刻前から虚空へと向けられている。ビルの狭間であるこの場所で見上げる空は小さく切り取られ、一枚の絵の様に思える。

少女が見上げるのは、しかしその虚空という題の遠い絵では無かった。

彼女が見上げるのは空よりも低い位置。先の比喻を用いるなら、その視線は絵を囲う額縁へ向けられている。

程なくして、少女の視界は一つの人影を捉えた。

遠目に、加えて月による逆光もあり表情など窺えない。判るのは、その亡者の様な立ち姿だけ。

やがて、月夜を背景に立つそれは当然のように身を傾け

果たして、それは夢の通りだった。

上空より落下してきたそれが、立ち尽くす少女の足下で横たわり、朱を流す。

御巫曆の今宵が、そのユメの瞬間と重なった。

「前から聞きたかったんだけどな。空、お前いつつも何読んでるんだ？」

「昼下がりは今も今日とて、夏休みにも関わらず学校のとある一室に俺達は居た。」

暇を持て余しながら嫌々に夏休みの課題を広げつつもまるで進まない俺とは対照的に、空は涼しい顔で分厚い辞書のような書物を黙読していた。

飾り気の無い地味な表紙には難解な英単語が並んでおり、その中で俺が和訳することの叶う単語は『dream』のたった一単語に過ぎない。それだけの手がかりで本の中身を知りえることができるなら、わざわざ空に質問したりはしまい。

「読んでみますか？ □で説明するよりは、そちらの方が早いと思いますけど」

「……いや、いい。解りにくくていいから、お前の口で伝えてくれ」
空の解り難い説明とは自身が完璧ではないとみなした説明でしかなく、他者からすればそれは十分に解りやすい説明としてたるのだ。言ってしまうえば、実は俺は既に空の発案を実行に移してある。が、タイトル同様にその中身は日本語外でつぶられており、俺にその内容を理解することは出来なかった。

そんな事情を知ってか知らずか、きつと知りながらにして空は本を差し出した。

俺の懇願は、耳に届いていないらしい。

「……………」
実に兄悩ませな妹である。

俺は暫しの間理解不能な文書の上に視線を落としさも文面を吟味

する体を装う。自分のこめかみに発汗を感じた。こんなものを長時間読み続け、その内容を頭の中にインプットしていく空は超人かその類で間違いない。

「冗談ですよ、兄さん」

不意に、くすり、と小さな笑いが聞こえてくる。

引つ込められた辞書の先を追っていくと白い指先に辿り着き、そこから視線を上げると口元を押さえて笑いを堪える空の顔があった。何が滑稽なのかと問うだけ無駄であろう。それは妹に理解出来る書物を読解出来ない兄に他ならないのだから。

「少し調べごとをしていただけです。他意はありません」

「……夢の仕組みについてか？」

「え……？」

面喰ったのは空の方だった。

「なんだ、それくらいは理解の及ぶ範囲でしたか。少し兄さんを侮っていたようです。今後の認識を改めなければいけませんね」

俺がどの程度の格付けを受けていたのかは気になるところだが、それを問うのは愚行だろう。

空の言葉は隠しようも無く皮肉だった。原因はおそらく予想外な俺の発言に気を悪くしたことだと思う。俺が知る限り空が最も屈辱を感じるのは、まさに鳩が豆鉄砲を喰らう体験である。それは自らの虚を衝く相手の行動に対してどうしようもなく狭量になるという、短所といえば間違いない短所。

「な、何が可笑しいっていうんですか！」

可能な限り悟られぬようにとした笑いだったが、それは妹を欺ききれなかったようだった。それはそれで悪くもない、反省の必要はないだろう。

「いやさ、お前って人に隠し事が出来ない質なんだな、と思ったんだよ」

普段が完璧な空は、それ故に意表を衝かれたときに見せる焦燥が滑稽だった。と言っても無論、俺の溢した笑いは嘲笑なんかの類い

ではない。それはどこか遠い、安堵のため息に似た心情吐露。

指摘された空の顔が朱色を帯びていくのが窺えた。達磨のごとく顔全面を真っ赤に染めるでなく、髪を被る耳の部分だけを変色させる。残念ながら髪の毛のカーテンも完全でないためにこの距離ならそれさえ視認できてしまうから皮肉な話だ。

「そんなことは……ありません。撤回しなさい、兄さん」

拗ねるような口調で、空は僅かな上目遣いに睨み付けてくる。

この様子を空の同級生達に見せてやりたい。気丈な振る舞いのお嬢様が持つ意外な一面に、もしかするとファンクラブなんてものが発生するかもしれない。流石に妄想の域を出ないことでしかないが。「ああ。そうだな、撤回するよ。空、お前は秘密の隠匿には抜かりが無い人間だよ」

「ッ……!!」

今度こそ、空の顔が赤く燃え上がった。

ただしそれは羞恥からではなく憤怒によるものであるらしく、日本茶入りのマグカップが中身を盛大に弾ませるほどの衝撃が机に振り落とされた。

「アンタのその 兄さんの飄々としたところが気に食わないと言つてんのよ ！」

「や、はい！ わかった！ わかったゴメン！ 俺が悪かった、兎に角落ち着いてくれ！」

空の口調が滅茶苦茶になっていた。激情に乗せられた咆哮は窓ガラスをもぶち破らんとする波動。轟、と迫り来るそれに俺はじつと耐えるしかない。

場を治めようとした俺の謝罪は、明らかな逆効果となり逆鱗を更に逆撫でするぐらいの効果になってしまったらしい。空は今にも火炎を噴き出さん勢いで怒髪する。

「この際だから言わせて貰います。兄さん、もう少し言動というものに気を遣ってはとうですか？ 貴方のその軽薄な言葉がどれだけ周囲を不快にさせているか……少しは考えなさいって言ってるの！」

語尾まで普段の口調を保つ余裕は無かった様子。どうやら俺は心底空を憤慨させてしまったようだ……。

「兄さんは勝手すぎるんです。これ以上、わたしに要らない悩み事なんてさせないでよ……兄さん」

声調に穏やかさが戻る。空は小さく俯いていた。

「……悪い。その、お前の気を煩わせてたなんて……知らなかった」

「いいえ。忘れてください、ただの妄言です。記憶に留めるだけ脳細胞が無駄ですよ」

心底バツが悪そうに言い捨てて、空は席を立った。後ろ姿を呼び止めて再び腰を落ち着かせるといふには、少々ならず無理がある。

ばたむ。こうして室内に残されたのは後味の悪い静寂と憐れな男子生徒一人だけ。

なんてこった。これじゃあ悪戯を咎められた子供だ。性質の悪いことに相手は妹で、その妹の怒髪に天を衝かせたのは間違いなく俺だ。悪戯にしては度が過ぎた。

「これじゃ、朔夜さんのことは言えねえな……」

なまじ、俺が悪行を働いたのは実の妹だ。ともすればあの変人教師より性質が悪いかもしれない。

自嘲気味に呟いてみる。言葉にしてみるとそれは思考よりも素直に呑み込めた。

「私がどうかしたのか、遙瀬？」

出来すぎた偶然にもはや呆れることさえも忘れてしまう。

心配すら感じさせず、或いは俺が余程放心していたのか　おそらく後者　背後に立った朱空朔夜は先の自嘲を聞いてしまったらしい。

今更動揺することもしないで振り向く。朔夜さんは素知らぬ顔でそこに立ち、複雑な心境の男子生徒を無関心に見下ろしていた。

感情無き両眼は朔夜さんが状況を理解していないことの証明であり、俺にとつての救いでもあった。この慈悲とは無縁の冷酷な変人は、あるうことか他人の窮地において蜜を舐める思いをするのだ。

「なんでも無いですよ。……で、ずいぶん長い昼食でしたね。自分の部屋に生徒を監禁してたことも忘れて、食欲の限りを尽くしていたんですか？」

「監禁とは心外だな。私は私の留守中、君に在室を強制していたつもりは無いぞ」

確かにそれはそうである。だがしかし、休みであるのにも拘わらず生徒を学校に呼びつけ 朔夜さんの言い分を借りるなら 自らの在室中の時間を束縛するのは監禁と変わらないのではないか。よって、朔夜さんの理屈は詭弁に過ぎない。

学校の一室であり、あまつさえ準備室の名目で宛がわれている部屋を自室と呼称したことに異論が唱えられないのは、既に気に掛けるところでない。

「それに、私は今までひたすら食を貪っていた訳じゃない」

心外だ、とばかりに鼻を鳴らす。何が気に障るのかと思案して、俺はあくまで朱空朔夜という人物が女性であるという事実には思い至った。

「あれ、それじゃ本当に何してたんですか？」

当然辿り着く疑問を口にする。

朔夜さんは立ち話もなんだから、と体現して定位置のデスクへ歩み進める。胸ポケットから取り出した煙草に火を着けるあたり、話は短くて済まないようだ。

「昔の友人と話し込んでいてな。丁度近くに来ていると言うから、近隣の喫茶店へ出向いていた」

昔の友人と称される人物は朔夜さんの口からよく聞かされていた。その誰かが同一人物なのか否かは定かではない。

「そうですか」

抵抗無く受け入れられる。ここで朔夜さんが、職員室で夏休み明けの課題テストを製作していた、なんて言うようなことがあればそれこそ信じられない。

「それで、なんの話をしてきたんですか？ まさか学生時代の想い

出に花を咲かせてた、なんてことはないですよね」

「共有する学徒の頃の想い出があるならそれも一興だな。残念ながら今日の話し相手は仕事仲の友人だよ。話は、半ば相談のようなものだった。以前空が持ってきた話題についてどうしても引っ掛かっていたものでな……そういえば空はどうした？」

問う側と問われる側が逆転し、一瞬焦燥が過る。内心の焦りを悟られぬように言った。

「帰りましたよ。体調が優れないとか言っていましたけど、気にすることはいいですよ。明日には万全に戻つてると思います」

「そうか。まあ、いいだろう。話し合いの成果を報告するならお前で事足りるし、むしろ空よりも相応しいくらいだ」

紫煙の向こうから聞こえる不可解な言葉の意味するところは、その真意を煙の中に隠していた。

ぼんやりと窓の外を眺めながら、遙瀬空は深く息を吐き出した。

透明の隔たりは快晴の元ではその向こうを何ら拒むことなく映し出し、校舎内の廊下に開放感を齎している。そんな本来ならば清々しいはずの天候はしかし、今の彼女には都合が悪い。

特にそう考えて足を止めたわけではないが、硝子が今の自分の表情を映し出さないことに期待を裏切られたような気分になる。それは結果として空の陰鬱な心持を増長させることになり、元を質せば何気ない自らの行動が墓穴を掘ることとなっていた。

重ねてため息が出る。

窓を鏡にするという、そんな目論見があったわけではないしろ、そうあって欲しいと思った自分は確かにいる。先のことも含めて空回りし続ける自分の行動に空は嘆息した。

どうも上手くいかない。

今回のことに限定した感想ではない。

大抵のことなら何でもそつなくこなしてしまう空だったが、それでも苦手分野が無いわけではない。ことそれは兄である橙弥に対しては非常にはつきりと表に出してしまう。

どうにも自分の気持ちを上手く伝えられない。伝えたい思いと、出てくる言葉が相反してしまう。

現状、空にとってそれが一番の悩みの種であり、昔のある経験から遙背空という人物に付属された特性であり短所だった

かぶりを振って、弱気を取り払う。過ぎたことを気にしているようでは埒が明かない。

「さて。これからどうするかな……」

時刻を確認してそんなことを呟く。

“ やっぱり、戻った方がいいかな…… ”

でもどんな風に接すればいいのだろう。どんな風に声を掛ければいいのだろう。どんな言葉を口にすればいいのだろう。どんな顔をしてそれを言えばいいのだろう。どうすれば、どんな風に

「 …… 」

混乱しかかった迷いも半ば、取り敢えず空はその考えを一度念頭の題目から排除した。

取り留めのない思考の果てに仮初の答えを見つけた訳でもない。

ここで意識を切り替えなければならぬ理由は偏に 視界に入ってきた一人の少女でしかかった。

「 曆？ 」

その名を口にする。

空の視線を先には紛れもなく見誤ることなきクラスメイトの姿があった。

どこか挙動不審な姿はまだ遠く、丁度教室四つ分は離れているだろう。一年の教室がある一棟の向かいにあるこの二棟は、本来ならば一年が足を踏み入れることはない。

御巫曆の小さな体軀もまた、空の存在に気が付いて振り向いた。

「空……さん」

その声は距離という不可視の壁に阻まれて空には届かなかった。会話をするには両者の距離は少し遠すぎる。

空の脚が動いた。

休日の校舎で友人と会ったことの些細な歓喜も勿論あるのだろうが、それよりも今の彼女の中には名伏し難い焦燥と不安があった。どうにも曆の様子が可笑しい。以前帰宅途中に遭遇したときよりも明らかに。

「どうしたの、こんな所で」

会話するに支障のない距離まで来て、空が問いかける。依然歩みは止めないで。

両者の距離は教室二つ分。

空は改めて違和感を感じた。

夏休みであつても学校の中で生徒に会うことは何も不思議な話ではない。空にしても御巫曆という友人が弓道部に入っているということは知っている。だが、この状況は ならばこそ、空の目に映る曆の姿には違和感を感じざるを得ないのだ。

曆が身に纏っているのは、空と同じ制服。

両者の距離が教室半分くらいの空白に縮まったところで、空は足を止めた。会話が滞りなく進む距離ではあるが、空自身がそうと判断して前進を中断したのなら問題ない。

「曆……？」

もしそうだとしたら、遙瀬空はこんな困惑に囚われた表情はしないだろう。

有り体に言えば、御巫曆の様子は異常だった。

確かに空の姿はその瞳に捉えているようだが、確実に焦点が合っていない。曆が見ているのは空でありながら空ではない何かの様な、そんな虚ろな瞳をしている。まるで話し相手が今ここにいない、白昼夢的存在であるかの様な 遠い視線。

「なにしてるの、曆」

怪訝な表情が一層その色を濃厚にする。

今、空は確信した。目の前にいる友人が異常だと。

不安はあったのだ。言い表せない不安。けれどそれは杞憂に過ぎないのかもしれない、と思えてしまうほどに瑣末な不安が。取り越し苦労ならば何も問題はない。しかしそれは今、確かに形を伴ってここに異常を成している。

体は動いてくれない。その神経が働かない。

空は思う。今、ここにいる少女は一体誰なのかと。

姿形は間違いなく既知の友人のそれと見て間違いない。けれど肌で感じるその人物は断じて自分の知る友人ではない。或いは、夢を見ているのは自分なのではないか。虚ろな瞳に映る遙瀬空という人物こそが、ここでは夢想の産物なのでは

そうして永遠と思えるほどの一瞬は流れる水のように滞りなく過ぎ去り、呼吸さえも忘れてしまいそうな空白が終わる。

やがて、

「空、さん。わたし、人を殺しました」

そう、焦点の合わない瞳が口にする。

意識を覚醒させていながら未だ心は夢想の中に在るかのよう、或いは自分がいる場所が在り得ない蜃気楼の中であるような矛盾した存在。

御巫曆という一人の少女は、此処に在りながら其処に無い。

人形にも似た空つぼの黒瞳が続ける。

「夢を見るんです。誰かが死ぬ夢を。確かめるのは怖かったけ

ど、やっぱりそうだった。みんな、わたしの所為で死んでしまうんです。わたしが……みんなわたしが殺したんです。でも、誰もわたしを咎めてくれない……誰も、わたしが殺したなんて知らない……。わたしは、どうしたらいいの……？　ねえ、空……わたしはどうやって償えばいいのかな？」

初めて敬称の付かない呼び名で、親友の名を口にする。

感情の伴わない口調に涙が落ちた。

片目から流れ落ちる雫は、まだ僅かでも御巫曆という少女に己が残留しているという証拠。

放心状態でその告白を、それこそ夢現に聞いていた空がようやく自我を取り戻す。掌には知らず汗が滲んでいた。手だけではなく、額にも。不安は確かな懸念となり、少女の胸中を蝕んでいく。

「ごめんなさい」

掠れる声。消えてしまいたいそんな瞳の光。

何故、自分は一度疑ってしまったのか。自らの名を呼んだ少女は確かに御巫曆という、自身の親友ではないか。間違いない。その少女が今、自分に求めていることは何なのか。常識で考えれば信じられない告白も、今は思考の隅にすらない。

曆は確かに、助けを求めているのではないか？

目の前にある全てを認めて、空の脚が動いた。

「曆 アンタ ツ」

数字にすれば二人の間は二十メートルもないだろう。

空の脚ならこの距離を詰めるのに次の句を発するほどの時間さえ必要にならない。

後一步踏み出せば空の体は急加速して即座に空白を埋めることが出来る。後一步。後一度、その脚が廊下を踏み切ることが出来たら。しかしそれは飽くまで過程の域を出ない事実だった。

「ッ！！」

右脳に激痛が走る。

何かに、音も立てずに輝が入る。電圧に耐え切れなくなった回路がショートするみたいに呆気無く。それは何の予兆も無く訪れた。

堪らず倒れ込む。次の一步に踏み出した脚は脆くも膝から力が抜け、踏ん張りが利かず前のめりに倒れこむ始末。それでも空は倒れこむ体の勢いを殺しきれず転倒。廊下との衝突よりも今は頭痛の方が激しい。空は手を突いて体を庇うこともせず、一心に頭を抑えて激痛に耐える。涙目になりながらも、その視界に親友の姿を見失わ

ぬように顔を上げて。

「……………コヨミ……………ッ……………！」

痛みに耐える空の姿は、果たして暦の目にどう映っていたのか。或いはその悲痛な姿さえも彼女にすれば夢の光景なのかもしれない。

空は亡霊の様にそこに立ち、自身の姿を遠く眺めていた。けれど今は其処にいない親友を想いながら痛みに悶絶する。

やがて一瞬閃光のような光景が過ぎり、それに伴って痛みが止む。跡に残ったのは、友を呼ぶ叫びとそれに小さな波紋を作る涙の溜りだけ。

……

夢を見た。

またいつもの赤い夢。

それはこんなにも近くにあるというのに、こんなにもずっと絶望的なまでに遠い。直ぐ傍に在るのに手を伸ばしても届かなくて、声を上げても届かない。

肌を焼く灼熱と噎せ返るほどの煙だけがどこまでも本当で、それは間違いなく自分がここに在ることの証明の筈なのに。

どうして同じ世界の中に居るのにこの声は届かない。

いつだってそうだった。何度も誰かの最期を見てきて、何度もその誰かに声を掛けようとした。けれど結果は同じ。何度も声を張り上げて、何度叫んでも。唯の一度だってそれが叶ったことなんて無い。みんな避けられぬ結末に消えてゆく。

この苦しみも、この悲しみも、この痛みも何もかも。何度訴えても届かない。

ぎしり。木材が断末魔の鳴を上げる。黒い煙を燻らせながら軋む空間。いよいよこの夢も終わりに近づいてきた。

もう少してまた救いの無い悪夢が終わる。無為な存在としてここに在るわたしも　これで終わる。

ふと思った。これは本当に夢なのかと。

毎夜繰り返されるこの赤い悪夢は果たして本当に夢なのか。

重なる夢。その見果てぬその最果てにきつと答えはある。

だから確かめなくちゃ。この夢が本当に夢なのか。この夢の終わりに救いが在るのかどうかを。轟々と炎上する世界。木の軋む音は世界の悲鳴、断末魔の様。

その悲しいだけの音に掻き消されると解っていても。この声はきつと届かないものと知っていても。

それでもわたしは、それを口にしてしまった。

「……先輩、わたしは、人を殺しました」

悲しい赤に満たされた世界の中、遙瀬橙弥という先輩の横顔に眩き掛ける。

「それでも わたしは……」

その続きを口に出ることが出来ない。……そこに続く言葉が出てこない。

いつもこうして夢から醒める。このどこまでも現うつのような繰り返しの赤い夢から

……

「俺の方が相応しいって、どういうことですか？」

既に学内喫煙を注意する気にもならない。

俺は天上へ昇っていつては蟠る紫煙を眺めながら訊いた。換気扇が起動していないことを確認すると、朔夜さんは思い出したように窓を開けて持ち前の鋭い目を俺へと向ける。

「まあ、もともとの話題は空が出したものだだったが、私が気になっていたことはお前の発言についてだからな。覚えていないか、遙瀬？」

「何のことやらと思考を巡らせる。」

そもそも俺は、空が持ち込んできた話題についても早速忘却しよ

うとしていた頃合だったのだ。細かい内容など既に覚えていないし、自分の発言で朔夜さんに疑念を抱かさせるものがあつたとしてもそれが何だったか思い付く筈もない。

換気用にと開放した窓の外へ、朔夜さんが煙を吹き出す。その紫煙が薄くなつていく様を見守つてから、

「すいません、覚えてません」

「なんだ、ついこの間の話だろ。一週間以内に起こつた物事は全て記憶しておくことを薦めるぞ。人生、最後を迎えたときに記憶の中に在る映像が多ければ多いほどいいからな。お前もなんの想い出もないまま、空虚に死んでいくのは嫌だろ」

「それ、話が違つてきてますよ」

相変わらず意味の解らない方向に朔夜さんの話は脱線していく。

それも本人は大真面目に。

覚えていないのなら仕方ない、と呟いて、まだ長い煙草を灰皿に揉み消した。必要以上に先端を灰皿に擦り付けるその姿が、どこか寂しげに見えるのは一本の煙草を吊つてもいるのだろうか。だとしたら、この人の情は生身の人間よりも嗜好品に向けられることが多いということになる。

「『正夢』と『予知夢』の違いについてだよ。この辺りに口を挟んだのはお前だっただろ」

「ああ、その話ですか……」

はつきりには言わないが思い出した。

空が未来のことが夢で解るとかそんな話を持ち出して、『予知夢』とそれを称した朔夜さんに意見したのは間違いなく俺だ。何を思つて意見したのかまでは思い出せないが。

「何の話かは解つたんですけど、それって違わないんじゃないですか？ 『正夢』も『予知夢』も同じことを表す言葉じゃないですか？」
そう、そこまで結論付けたのは思い出せた。それに今からでも両者は同じモノだと思えない。

朔夜さんはデスクに頬杖を突きながら、興味なさ気の胡乱な瞳を

部屋中に這わせる。その行動に何の意味があるのかは理解できない。「大雑把に言うなら、な。だが両者は微妙に異なるニュアンスを持っている。お前だってそう感じたからこそ、あの時異を唱えたんじゃないのか？」

彷徨っていた朔夜さんの視線がぴたりと止まる。その目先の終着点を俺が発見するよりも早く、冷徹な瞳がようやくこちらを向いた。「え、はい……多分、そんなだったと思います」

正直なところ覚えていない。が、言われてみればそんな気もする。指摘されてみれば確かに、二つの言葉の間には言い表せない違いがあるような気もする。具体的にそれが何なのかは、未だに掴めないのだが。

ふん、と朔夜さんが鼻を鳴らす。俺の返事に事実的な胸中が伴わないことを看破して、呆れているような態度。

「お前、なんか変だぞ。心此処に在らず、って感じだな」

じつ、と目の奥を覗き込むように見つめてくる。普段の朔夜さんらしからぬその様子は、何だかこちらの様子を探っている猫の様に見える。

「そうですかね」

空返事で答えてみると、それまで隠していた感情が遂に堤防を破った。内なる感情のダムを決壊させたのは間違はなく喜色。文字通り喜色満面となった国語教師が悪戯に言葉を紡ぐ。

「空と喧嘩でもしたか、ええ？ なあ、おにいちゃん」

「ほつといてくださいよ。それと、その身の毛もよだつような呼称は止めてください。癪に障ります」

からからと笑う悪魔。

よく考えれば、朔夜さんが俺の嘘を見破る要素などこの部屋には満載だったのだ。空が置いていった本から、飲み掛けで放置され若干周囲に飛沫を飛ばす日本茶まで。あらぬ洞察力の持ち主である朔夜さんしてみれば、先ほどまでの出来事を想像するくらい容易いことなんだろう。

「ほら、さつさと本題に移りましょう。そもそも話を振ってきたのは朔夜さんの方なんだから、いちいち脱線しないでくださいよ」

「生徒間の問題は教師として見過ごせないんだがな。まあいい。それじゃあ本題に移るとしようか。遙瀬、お前は『予知夢』と『正夢』の違いはどの辺りにあると捉える？」

発言に文句をつけてやりたい部分はあるが、後半を口にする朔夜さんの口調こそ真剣なモノに他ならない。ここは俺も切り替えて命題に取り込むべきだろう。

改めて思案してみる。

そも俺が『予知夢』と『正夢』という言葉の間にどんな違いを感じているのか。

予知夢というのは読んで字の如く、或る現象が起こるよりも先に幻視してしまう夢のことを言う。目の前で初めて起こった筈の現象に、これ前にも見たぞ、というような既視感を持つてしまう。イメージとしてはデジャブに近い。

それに対して正夢は、自分が見たものが現実の世界でも現象として発生する夢のこと。この言葉で想起することは、夢が本当になった、という事後感想。この辺りが二つの夢に在る違いだとしたら……

「そう、か。つまり、『予知夢』は飽くまで『後で在る現象を先に視る夢』で『正夢』は『先に視たことが後で現実になる夢』だったことですね？」

その答えに辿り着く。

微妙なニュアンスの違いというのは其処に在る訳だ。

『予知夢』は飽くまで後の出来事を先に視るだけ現象。

『正夢』は先に視た夢が後で現実になるという現象。

俺が自ずと解答を導き出したことが意外だったのか、朔夜さんは細い目を大きくしてこちらを見返してくる。仕舞いには、ほお、なんて嘆じたりもするから俺の解答には相当期待されていなかったのだろうか。

「今日は冴えてるみたいだな遙瀬。とても妹にフラれて傷心中とは思えないぞ、むしろいつもより頭の回転が早い」

「勝手な既成事実を創作しないでください。事実、俺は傷心中じゃありません」

「ははは、そうかそうか。解ったよ。いやしかし、あの空が兄妹喧嘩とはなあ。どんな惨状だったのか是非とも聞かせてほしいな」

「断固としてお断りします」

むっ、として返す言葉にありたけの怒気を乗せて。朔夜さんはその怨嗟さえも滑稽だと言わんばかりに爆笑に拍車を掛ける。……改めて、どこまでも人でなしだ、この教師は。

人の不幸に腹を抱えながら一頻り笑い続けると、急な発作みたいに跳ねていた双肩が動きを止め、滲んだ涙を指で拭いとる。

「それじゃあな、次の質問だ」

今にも酸欠になりそうな程爆笑していた人間が出す声とは思えない程にシリラスな声音がそれを紡いだ。

緩んでいた表情が一変して威を取り戻す。さながら表情を仮面みたいに付け替えているかのような早業は何度見ても慣れない。頭の中に感情を切り替えるスイッチでも持っているみたいだというのが初見の感想で、それは今も変わらない。

神妙な面持ちで朔夜さんは次の句を発する。

「『予知夢』と『正夢』　お前は危険なのはどっちだと思う？」
単純な形式の問い。二択問題の体でそれは紡がれた。

意味が在るか無いかは別にして思案する。二つの怪奇な夢について、その違いは先の通りと理解した。ならばどちらがより危険性を孕んでいるのか。

考えるまでもない。まず初めに行き着く解答は提示された二つの選択肢ではなく、この質問に対する根本的な疑問。危険　そもそも、夢にそんなものが含まれるのだろうか。

「……あの、朔夜さん。これって質問から矛盾してるんじゃないですか？ 『予知夢』にしても『正夢』にしても、結果を先に視るこ

とに違いは無いわけですよ。だってたらその結果を回避することだ
って出来るということでしょう。勿論、その夢が悪い内容ばかりだ
とは限りませんが。というよりも、二つの夢に危険も何も無いん
じゃないですか？」

当然にそう考える。

性質が微妙に異なるとはいえ共通した二つの現象に危険性で差を
付けるのは難しい。それどころか、今回に於いては元より危険性な
んてものが伴うかも怪しい。根本的な部分で、二つの現象は『事後
に現象が発生する』といった点で同じ性質を持つ。なら、むしろこ
れは危険を回避できる現象なんじゃないか。

「あー違う違う」

首振り人形みたいに朔夜さんの顔が左右に動く。

俺の解答はその一言によって一蹴の元に否定された。

「お前が言ってるのは夢が現実に変わることにについての危険性だろ。
違うんだよ、私が言ってるのはそういうことじゃなくて、当事者が
背負う危険についてだよ」

がりがりとして朔夜さんは頭を掻く。自分の質問が意図していること
を何故理解できないのかと非難しているような仕草と表情。

「それにお前、危機を回避できるとはいつても、それは飽くまで自
分の視た夢が現実化すると解った上の仮定だろ。それに、前にも言
ったと思うけど夢に視るのは結末部分だけかもしれないだろ。だっ
たら、当事者が自分の夢が現実化したと気づくのは『事が起きた後』
じゃないか」

言われてみれば確かにそうなる。夢なんて曖昧なモノ、意識が覚
醒してから一時間もすれば殆ど輪郭を失っている。眠りに就く前に
『あなたが今晚見る夢は明日、現実を起こることですよ』とでも言
われなければ、それを頼りにすることなんて出来ない。俺は現象の
性質だけを視野に入れて、根本的なところで考え違いをしていたと
いうことだ。

なら、朔夜さんが言う『当事者に於ける危険』とは何なのか。

「表裏の逆転。因果関係の認識が拗れることで起きる、夢想と現実の逆転現象だよ」

此方からの返答が望めないと悟ったのか、朔夜さんが先に答えを口にした。

「これも飽くまで自分の夢が現実化していると認識した上での話だけれどね。ここでは何度もそういうことが在ったのだと仮定する。遙瀬、私たちが夢と現実を正しく分けて認識できるのは何故だと思う？」

新たな質問が投げられる。答えは簡単に見付かった。

「そりゃあ、夢なんて記憶に残らないですし、現実とは時間の上で連続しています。昨日在ったことと今日在ったことには必ず繋がりが在るじゃないですか。例えば、夜に寝たから朝に起きる、みたいな確かな因果関係があります。けれど夢にはそれが無い。条理も理も無視した無秩序の『想像』でしかない。記憶に蓄積されていくのは現実で起きた現象ばかりで、その連続の繋がりが今は現実だと認識させるんじゃないですか？」

自分でも言いたいことを巧く言葉に出来なくて歯痒い。それでも朔夜さんは俺が言おうとすることを読み取れたようだった。

「そんなところだ。だがな、夢を視ているときにこれが夢だと認識できることは稀なんじゃないか？ 大抵の人間は夢が醒めた後にそれが夢想の産物 空想だったと気付く。それはな、夢を見ている間、夢の中に在る意識にとつての『現実』は紛れもなく『夢』だからだ。条理も理も関係ない。今確かに自分はここに在るのだから、自分の現実は今なんだ。そう認識するのが道理だ。人間にとつての世界とは認識に他ならない。その認識が常識や道理といった外部情報に裝飾されてその意識にとつての『世界』になる。」

先の仮定で『何度も夢が現実に変わる体験をした』と言ったな。それが毎晩ならどうだ？ 夢に視ることと全く同じことが現実に起きたら。しかもそれが毎日なら。いつか思っんじゃないか？ もしかしたら、自分は勘違いしているんじゃないか？ 本当の『現実』

は先に視る『夢』の方で、今まで『現実』だと思っていた方が『夢』なんじゃないか、と。切欠はほんの些細な事柄で構わないんだよ。精神的に参っている人間なら尚更だ」

滅茶苦茶な話だと、それを否定できるならどれだけ楽なことか。俺にはどうしても朔夜さんの言うことを否定できない。

言い知れぬ不安を覚える俺に、朔夜さんはさらに付け加えて言った。

「そも、後のことが先に夢に出てくるなんてことが異常なんだ。人間の常識なんてモノは、結局のところ自らが理解できない現象から身を守る防衛本能にすぎない。自分の理解の範疇を越えた現象を自分以外の集合認識が否定してくればそれほど有難いこともないだろう。そんなもの、全部自分の内側でしか起きていないことだということ。ここで働く防衛本能こそ、現実と夢の逆転認識なんだよ。先に起きた現実の現象を今夢に視ているんだ、と脳が思い込む。一度記憶の中にある瞬間が再生されるのは、別段異常ではないからな。自分が正常だと思いついた脳にしてみれば、当然の自衛手段だ。哀しいかな、その自衛手段が結果として破滅に繋がるというのに。逆転認識の末期症状とも言えるのが、その循環だ。自らの身を護るために行われる逆転認識が連続で行われ、やがてどちらが本来の現実か完全に見失う。そうなれば最後、夢想も現実も無い。どちらにも依存できず、夢と現実の境界を失ったまま定まらぬ認識の狭間で永遠に循環し続けることになる」

醒めた口調はどこかヒトの構造を嘲笑している様に聞こえる。

夢と現実の逆転現象。……それも事実上は当事者だけの反転認識でしかない。夢想と現実の間を行き来し、どちらが本来いるべき場所かを見失ってしまう。自分のいるべき場所が 帰る場所が 解らなくなった、

「迷子だな、まるで。夢想と現実のどちらが本来の世界か解らなくなって彷徨う迷子だ」

俺の考えを読み取るように、朔夜さんが先手を打つ。

夢と現を循環う迷子　その表現が頭のどこかで思考を揺らしている。酷く、その言葉が当て嵌まる様子を、自分が知っている気がしてならない。

「質問に戻るうか。……と、まあ、やっぱりそんなことはいいか。特別気に掛けるようなことでもないしな。私としてはお前に話したいことは全て話し終えたし、これ以上長く語るつもりもない」

あつさり言い切って、新たな煙草に火が点けられる。紫煙を吐き出した朔夜さんの目は虚ろで、本当にこれ以上話すことは無いらしい。

「私も相当餓えてるのかもな……こんな、答えの出ない問いに無意味な時間を費やすなんて」

呟く自嘲は独り言だと無表情が言う。朔夜さんの視線は空が置いていった本へ向けられ、固定されている。

「なあ遙瀬、私は今からさっきまでの話を根本から否定することを言うが……独り言として聞き流してくれ」

感情無き相貌と、蜃気楼みたいに揺れる紫煙。虚無感を伴ってそれは言葉に変わる。

「報われないよ。どれだけ後に理屈を繋げても、結局二つを隔てる確かな理なんてありはしないんだから」

それは本当に、何処までも独白の域を出ない心情吐露だった。語るべくして語られたのではない。心から意味の無い、唯そこに在ったから紡がれた言の葉。

言い終えた朔夜さんは、新しい玩具に飽きた子供のような表情で窓の外を眺めている。窺える横顔から感じられるのはやはり圧倒的な喪失感。

ここ数日の間、朔夜さんはきつと先の命題に取り組むことで退屈を紛らわせていたのだろう。見付かった答えに納得がいていないことは歴然としている。

「今日はもう帰っていいぞ。それで早く空と仲直りでもしろ。空の機嫌が治ったたら暇潰しに話を聞かせて貰うことにしよう」

それが唯一の希望だと遠い目がつ。

「それじゃあ失礼します」

手をひらひらさせている朔夜さんにそう言って席を立つ。空が残していった本は毎日この部屋に置いて帰っているものなので放置する。

去り際に一度だけ振り向くと、国語教師はこれ以上無いほどに憂鬱な面持ちで窓の外を眺めていた。

準備室から出て時刻を確認すると、まだ下校時間まではまだ時間があつた。

確認した時刻を再度目に入れて、さて、と考える。

このまま帰宅するのは構わないが、そこで間違いなく遭遇する空にはどのような態度を取って接するべきか。珍しく憤激した妹を宥める算段がまだつかないだけに、自然足取りは重くなる。決定。もう少し学校で善後策を模索しよう。

決断してみると脚は無意識に止まった。しばし窓の外へ視線を飛ばしてみる。

そこには何かがあるというわけではなく、ただただ青いだけの晴れ空が広がるだけ。窓から身を乗り出して風に吹かれるだけで、何となく清涼感を感じられるのは夏の風流だと思う。

そんなことをしていると、制服のポケットが震えた。

意味のない数分程度の時間を中断させた携帯のバイブレーション。浮遊していた意識はそれで引き戻される。

「御巫、暦」

携帯のディスプレイに映し出された名前を口にする。小柄な後輩の姿が脳裏に浮かんだ。

自分の声は何処か落胆している風だったことが妙に気に掛かる。

この期に及んで、まさか在らぬ期待を抱いてしまったなんてことは考えたくない。自嘲しながら、通話ボタンを押し込んだ。

「もしもし」

『先輩ですか……？』

携帯に電話を掛けてきた相手には可笑しな言葉に苦笑してしまふ。

今更ながら疑問に思う　　暦が俺に電話を掛ける理由とは何なのか。そもそも暦から電話が掛かってきたことなんて一度もない。面識があるからといってアドレスの交換はしていたがそれだけで、メールも電話も一度だってしたことがないはずだ。

それだけの理由で、俺の中には言い知れぬ不安が渦を巻いて回転を始めていた。

「ああ、俺だよ」

肯定する。すると次に聞こえてきたのは、予想し得なかった安堵の吐息。

『よかった……先輩。まだ無事だったんですね』

心から安心したように、暦の声がそんなことを言う。

『先輩、大丈夫ですよ。わたしが今から行きますから。』

きつと、

大丈夫です』

要領を得ないことを暦は口に出している。

普段ならいつもの狂言だと苦笑して済みますことが、何故か今はそうできない。

不安は確かにあった。

いつからかと明確なことは解らないまでも、確かに不安と称して差し支えない霽は蟠わたかまっていた。その正体も、それが何に対しての不安なのかも解らない　　そも、それが不安という感情何のかも明らかでない。それが今ではこうして、明らかに形を伴った危機感が心中を掻き乱す。

「暦お前、さっきから何言ってるんだ？」

努めて冷静に問いたです。

目の前に本人がいるのなら少しは焦燥もましだったかもしれない。それが今は実体を伴わない声のみの会話。今すぐに何か起きたとしたら 俺にはどうすることも出来ない。

『先輩……わたし、人を殺しました』

泣きそうな声が見当違いの言葉を紡ぐ。凍えるように震えた弱弱しい声。

それが意図するところなど考えるまでもない。否、意図などない。発言内容は検討するまでもなく罪の告白であると明確なのだから。それが何かの暗喩ならばどれだけ救われるだろう。生憎、御巫曆という少女は冗談など口にしない。

『夢を見るんです……。人が死ぬ夢を。毎日、毎晩 わたしは人を殺します。わたしが夢を見るから、きつとその人たちが死んでしまつんです……。でも先輩、わたしには何も出来ないんです。わたしには誰も助けられないんです』

嗚咽を交えた声が掠れる音声を伝える。

或いは、さつき朔夜さんと交わした会話があったからかもしれない。不確かな形でしかなかった不安が確固とした一つの形を成し、俺はそれを受け入れる他になかった。

もつと早く 気付く機会なら在った。あの晩、曆の様子がどこか異様だったのも……それよりも以前、昼の段階で可笑しな予兆は始まつていた。

夢と現を循環う迷子。朔夜さんの言葉が思つ出される。

どちらが本来の世界かを見失つてしまえば、いつか夢想と現実が逆転する。それ故に迷子。自らの居る世界を見失つて永遠に循環い続ける存在。曆の現状は間違はなく朔夜さんが言った末期症状だ。けれどそれとは別に、何か曆を追い込む 少女の認識セカイを壊す何かがある。

掠れる声で曆がした告白。自分が人を殺したと言つた一人の少女。そこに在るのは間違はなく、罪悪感。恐らく、御巫曆の逆転認識

は罪悪感に寄るモノ。それが、彼女の脳に自衛本能を働かせた。

思いの外結論は容易に導き出された。

『待つててくださいね……先輩』

その声が再び意識を現実へと引き戻す。今にも途切れてしまいそうな掠れる声。それが何より、暦の状態を明確に示していた。

『わたしの声は、届かないとわかっています……。それでも、先輩にだけは届いて欲しいんです。唯一度だけで構いません……。だから』

「おい暦！ お前今どこに居るんだ？」

叫びは虚しくも廊下に反響するだけで、泣き出しそうに言葉を繋ぐ後輩には届いてくれない。

『……だから、待つててください。わたしが、直ぐに行きますから』

「暦……！！」

何度呼び掛けても返事は同じ。聞こえてくるのは唯、通話が途切れたことを意味する虚しい機械音だけだった。

通り過ぎる夏の風が御巫曆の髪を揺らす。

虚ろな瞳が捉えるのは既に老朽化が進み、今はもう使われることも無くなった旧体育館。周囲を囲う深い緑が夏の日差しを遮り、暑さは影の中では和らいでいた。今はもうこの場所に訪れる生徒はなく、老朽化した木造の体育館は部活動にも使用されていない。

校舎の裏側に位置し、繁みの奥にひっそりと佇むこの木造建築の周辺には曆のそれを除いて人気は当然のように皆無に等しかった。

肌寒さを感じるほどの静寂に満たされ陽光の侵入を阻もうとするこの空間を、曆は不気味に思いながら見上げていた。

さながら幽霊屋敷。昼間でさえそう思える。これが夜ならば悪い冗談にも聞こえないだろう。長い年月を耐え抜いたこの空間が、ここだけが周囲から取り残されている。その在り方が不気味さを一層強くしていた。

普段ならばそう感じた直後にその場から逃走するであろう少女はしかし 今確かな、一つの小さな想いだけに縋ってその瞳は決意の色を宿し光を放つ。

御巫曆は逃げる訳には行かなかった。自らの宿命に向き合うことを決めた。その代償も。その罪悪も。全て背負うことを決めた。目を背け続けるだけの逃避を、涙を流すだけの後悔の日々を終わらせると決めた。

けれど今、この瞬間の少女の意志を繋ぎ止めているのはそんなモノではない。

自意識ならとっくに壊れている。自分という存在の定義を見失い、

唯夢現の幻を追って彷徨い続けるだけの迷子でしかない少女には、もはや一片たりとも自己は残されていない。

なら、どうして。

なら、なにが。

今この瞬間の御巫曆をここに在らせるのか。

なにが、少女をカンナギコヨミのカタチを形成し、突き動かすのか。

その答えを知りたくて。 或いは知っているから。

御巫曆はもう、後戻りもその場で崩れてしまうことも許されない。抱えてしまったモノの重さを小さな体躯で支えながら、千切れてしまいそうな意識を繋ぎとめ。今此処に在る自分と、自分が救えなかった全ての存在の嘆きを再生し。この瞬間も夢想と現実を迷い歩く少女は今。

終焉無き循環を終わらせる為に。

自らが背負った罪の贖罪の為に、

御巫曆は、重く軋む体育館の扉を開放した。

……

ぎしり、と重い扉が音を立てる。重量の割りに少し押し動かしてしまえば鉄の扉はそれほどの力を必要としなかった。むしろそれが繋がる木造の壁の方が今にも崩れてしまいそうだった。

薄暗さは外と比べ物にならない。キャットウォーク横の壁に穿たれた窓から入る光は影を生み出し、或いは一層深く濃くする。濃厚な闇の中に指す一筋の光はスポットライトの様だった。

長く手入れが行き届いていなかった体育館の足元から埃が舞う。

少しでも動けば、それは肌に纏わりつく霧の様に舞い上がった。

脚に感じる嫌悪感の正体を知ろうにも、見下ろした視界は闇に覆われて答えを見出さない。

しかしそんなことは気にならなかった。

曆にとつて、この場での一番の驚きはその『暗闇』に他ならない。体育館に入る前、曆には一つの覚悟があつた。読んで字の如く、火中に飛び込む覚悟が。

けれどその心構えも無意味なモノとなり、何よりそれが現状では曆の思考を驚愕に陥れている。こんな光景は有り得ない。これは、自分が思い描いていた風景とは違いすぎる。この静謐も、静寂も、閑散とした影の視界も。全部が全部、何もかもが全て夢想だにし得なかつた景色だつた。

そう。御巫曆は先に知っていた。

幽霊屋敷みたいだと見上げた体育館の中が今、どのような状態になつているのか。その光景を毎日、毎晩視てきた故に知っていた。

地獄のような火炎の海の中。それこそが扉を開いた時、まっさきに視界に入るべき光景だつたのだ。しかし、

一面の赤を夢想していた視界は　濃密な闇の海に支配された。驚きは次の瞬間に恐怖へと姿を変える。固い決意が、まるで砂の上に造られた城のように崩れ落ちた。

大切な人を救う。その願いにも似た決意は、それ自体の強度と比べものにならない脆さの少女の中にあつたモノ。必然、壊れるのは少女の方に決まっている。

絶望するよりも早く、曆の足元が崩れる。屈した膝が床に打ち付けられる痛みさえ遠い。

涙は、知らぬ間に頬を伝っていた。

「また……また……わたし……」

涙する顔を覆うことさえ忘れて、暗黒の天を仰ぐ。

自分には誰も救えない。知っているのに。誰かが消えてしまうと知っているのに救えない。　だから、彼らを殺したのはわたし。

それしか考えられなかった。自分が死の瞬間を知ってしまうが故に誰かが死んでしまう。全て、その罪は自分の夢に在る。

そしてまた、唯一つ残された贖罪の希望さえ失った。

間に合わなかったのだ。いつも視る赤い地獄の景色の中で、いつもそこにいる大切な人はもういなくなってしまうた。この静謐が物語るのは既に全てが終わったということ。

手遅れ。それだけでなく、曆は大切な人の最期の瞬間にその場面に立ち会うことも出来なかった。

その絶望が今になって湧き上がる。喉が潰れるほどに叫びたい。けれどそれが出来ない。そう思うことさえ出来ない。喉よりも先に潰れたのは心の方だったのだから。

泣いてしまえば楽になれただろう。自分が悪いと叫ぶことが出来たなら、どれだけ楽になれるだろう。けれど今はもうそう思うことさえ叶わない。

ぴしゃり、と音がした。

虚空の闇に泳いでいた曆の視線が地に落ちる。当然何も見えない。音の正体は、自分の頬に触れることにより思考が理解が及んだ。

濡れている。確かに一筋の雫が伝った跡がある。その温もまだ新しい涙の残した軌跡を確かに指先に感じる。

とっさにもう一度視線を闇に向ける。果たして、そこに映る景色は一変していた。

濃厚な闇に閉ざされていた筈の視界が光を取り戻していた。舞台上の上、その一部分だけが切り取られた一枚の絵のようにはつきりと其処に映し出されている。

そしてそこに一人。一人の、少女がいた。

曆にも見覚えがある。彼女と会ったのはいつのことだったかと思ひ返しながら気付く。

「……遅く、なかった」

手遅れなんかじゃなかった。と、消えてしまった灯火の希望が再び息を吹き返す。

曆は瞬時の内に理解した。舞台上の上にいる少女とどこで邂逅を果たしたのか。否、邂逅などしていない。曆は少女のことを知っているだけ。

夢。炎の中にいた一人の少年と一人の少女。曆は二人を每晚視ていた。

遠く鮮明に窺えない表情は、けれど夢の中の臃気な輪郭と重なる。無意識に立ち上がる。足下では、ぴしゃり、と今度は一層大きな音が上がる。

「わたし……まだ先輩を殺してなかった……」

それは、泣き出しそうな歓喜の声だった。

遅かったのではなく、早かった。ここはまだ火が上がる前の夢の中。ならば、まだ。

小さな希望が湧く。全てが終わった後でないのなら、まだ何も始まってなどいないなら、ここから先の運命は変えられるかもしれない。

曆が拳を握る。一度壊れてしまった想いを叱咤するように。今一度、決意の固さを確認するように。

舞台上の少女はそんな曆の存在の一切を意に介さず、何も無い闇に視線を投じている。

見果てぬ闇の先に、在る筈もない何かの答えを求める様に。儂げな横顔は今にも泣き出してしまいそうな。それでいてどこまでも哀さを湛えた、無表情。

「あ……あの……」

その横顔に曆が呼び掛ける。

焦燥の叫びは張り詰めた空気を揺らし、閉鎖された空間の中で何度も反響した。それが、きいんと鼓膜に響いて曆は不意に耳を塞いでしまう。大音声で発せられた希望の一声は、果たしてそれが向けられた少女には届かない。

舞台上を独占する少女は糸が切れた人形のように、すとな、と膝から崩れ落ちる。

曆の存在など、其処に無いモノだと言わんばかりの無干渉。同じ空間で同じ時間を共有している二人の間を隔てる壁でも在る様に。曆の叫びは、曆の世界にだけ反響してやがて消えて行く。

続く第二声を発しようとして、曆は異変に気づく。

舞台上に跪いた少女の頬を、透明の液体が滴っていた。時間という概念を無視するようにその雫だけが周囲とは異なつて遅く流れる。ゆっくりと、躊躇うように、涙は確実に、少女の膝へと墮ちて行った。

或いはそれが皮切りだったのかもしれない。

ごめんなさい。

曆は、そんな言葉を聞いた気がした。

瞬間

世界が、色を変えた。

一瞬の出来事に曆の理解が遅れる。自分の背後で落下した照明の一つに、知らず舞台の上に注意を向けていた曆は気づくことが出来なかった。ばちり、と電気が空間を進る音と、照明を天井に吊るす強固なワイヤーの切れる音。落下に伴い、小さく爆ぜた火花が床一面に撒き散らされたガソリンに引火し、燃え上がる。

振り返れば、既に其処は火の海。

赤い視界が夢と重なる。これまでに何度も視た、今宵も視てしまつたろう赤い景色。

怖いとは思わなかった。ただ、有り得ないと思った。

炎が走る。空間を満たすガソリンを伝つて炎は急速に勢力を増す。その様子を支援するかのごとく、まだ天上に留まっていた照明が一つまた一つと続け様に落下していく。

地獄絵図。その言葉が相応しい。降り注ぐ幾つもの照明はまるで

隕石。それが舞い上がる炎に照らされて赤く染め上げられる。

轟、と巻き上がる炎。落下音はさながら空間が爆ぜる爆発音。地獄に降り注ぐ隕石の落下を知らせる音は雷鳴。爆ぜる炎は泡沫。

空間の全てを焼き払い、灰にする煉獄の炎。

この光景を暦は知っていた。

後は、この場に必要な役者が一人足りないだけ。

「あの ツー！」

さっきよりも声量を上げて叫ぶ。爆音の合間を狙って飛ばされた叫びは体育館全体のどこにいたとしても聞こえていただろう。

それでも、依然として少女の関心は暦に向かわない。

最初の照明が落下したときと同じ体勢で、ゼンマイが切れた人形のように微動だにせず。空っぽの表情が虚空を見上げていた。

どうして 焦燥だけが暦の中に蓄積していく。

何度叫んでも、どうして気づいてくれない。どうして、自分の叫びは届かないのか。

時間がない。焦りは確かな言葉となって呪いの様に脳裏を巡る。

赤い世界は着実に広がっていく。夢想の中に視るあの地獄が、後数刻としない内にここに顕現する。

だから早く。今、この場に居ない人物が現れてしまう前に、ここから逃げなければならぬ。早く外に出なければ、また。この夢が人を殺してしまう。

「……………っ！」

祈りに似た何度目かの叫びがようやく実を結ぶ。

事切れた様に時間を止めていた舞台上の少女が立ち上がった。

ふらり、と向けられた表情。空っぽの無表情が、どこか優しさを含んでいるように見えてしまう矛盾。その視線が暦の立つ方向に向けられていることが何よりの救い。ここに来てやっと、暦の表情が和らいだ。

「あ……………あの！ 早く、ここから出ないと！」

一歩踏み出しながらそれを言葉にする。

三度、歩を進める音がして、そして止まった。

「そん、な……………」

伸ばした手は何もない空間を握って、力なく項垂れる。うなだ

語られるまでもない。解ってしまった。

舞台から注がれる視線が自分になど向いていないということ。やはり、自分の声は届いていなかったということ。何よりも。そんなことよりも。

ここに、不足していた最後の一人が現れてしまった。

悪夢を視る気分で振り返る。気づいてしまったとしてもまだ確信には至らない。そこにその人物の姿がなければ何も問題はない。曆は自分の直感を杞憂だとして安堵できる。

けれど、悪夢は確かにそこにカタチを成していた。

「先輩……………」

体育館の入り口。膝に両手を宛がい肩で息をしながら、それでもその眼光は真っ直ぐに前だけを見据えている。遙瀬橙弥という少年は確かにそこに居て、その視線を舞台上へと向けている。

始まった。始まってしまった。

曆は思い出す。

自分の夢が現実になる。そのことに気づいたのはいつのことだっただろう。

誰かが死ぬ夢を視た。話したことも、会ったことも、声を聞いたことも、その姿を一瞬たりとも見たことなどない。全く面識のない誰かが死んでしまう夢。初めは気にしなかった。そんなことは別段不思議でもなんでもない。たまたま運が悪かっただけ。道で躓いて転んだこととなんら変わりない不運。

それがいつしか畏怖の対象が変わったのは、誰かが死ぬその夢が現実に変わったとき。

偶然ならばどれだけ良かったことだろう。たった一度だけの不運な偶然ならばいい。それが、毎晩繰り返されるのだ。

自分が視た夢が現実になる。ならば、それはつまり自分が夢を視

るから誰かが死ぬことと同じ。

だから、自分が殺した。

謝罪など届くはずもない。どんな言葉を以つても償えない罪。元より、その言葉さえも届きはしない。

どうすることも出来ない絶望。

それが今は身近な 大切な人の身に訪れようとしていた。

「先輩ッ！ 先輩ッ！ 来ないでください！ そこにいてください！」

懇願の叫び。掠れた声がそれを告げる。

橙弥は何かを言っていた。首を振ったりしながら、鬼気迫る形相で何かを叫んでいる。それが曆に聞こえないのは、きっと今も続く爆音の所為。炎が燃え上がる轟音の所為。

「先輩……！」

絶え間ない爆音に掻き消されるお互いの声。

曆の願いの叫びは、果たして遙瀬橙弥を止めることが出来なかった。

轟然と燃え盛る炎を恐れようとせよ そんなものなど元から眼中にない様に、橙弥が走り出す。

一直線に駆ける疾走を目にして、曆は気づいた。どれだけ自分が叫ぼうとそれは無駄なことなのだ。自分がここにいるということが、それだけで先輩を動かしてしまう。先輩は、優しい人だから。だから、自分がここにはきつと助けに来てしまう。

トロイの木馬もいいところだ。何よりも性質が悪いのは、木馬の中に潜む悪魔は曆自身だということ。

「ダメです来ないでください！ わたしは大丈夫ですから！ お願いです、先輩！ ……お願いだから、来ないでください……。先輩だけでも逃げてください……。！」

自分などどうでもいい。

どうせ、この先などないのだ。それは、ここに来るまでに固く決意したこと。

橙弥の脚は止まらなかつた。手を伸ばせば、直ぐにでも曆の手を取ることが出来る距離にまで走り寄る。それが一層曆を焦らせ、涙を溢れさせた。その涙は、自分に向けられた優しさ故か……救う救われるの立場が逆転したことの愚かさ故か。

「先輩　　！　来ないください、せんぱ　　」
声が出なかつた。

信じられない。それだけが意中に浮かぶ。

橙弥を牽制するように伸ばした手は、走り来る少年の体に触れ
そして擦り抜けていった。

ホログラム映像を掴もうとしていた様に。有り得ない虚気楼に手を伸ばす様に。

曆の存在は、それこそこの場に有り得ない存在なのだ。

御巫曆という一人の少女は既に終わった幻想。カタチを持った一つの夢想でしかない。だから初めから何かを成しえる筈などなかつた。声は届くはずなどないし、何かに触れることさえ叶わない。

曆は力なく振り返り、走り去っていく少年の背中を見つめる。
絶望が再来した。

曆の中で正常な思考は既に皆無に等しかつた。一連の現象を頭の中で整理するなど出来る筈もない。哀しみに涙が流れる。滂沱の様に零れ落ちる涙の雫は、炎の中に落ちて尚健在だった。

辛かつたことは唯一つ。大好きな人に見捨てられたこと。

遙瀬橙弥という少年が自分の手をすり抜けて行ってしまったこと。
その一点だけが、哀しかった。

「……でも、まだ……」

それでもまだ曆を動かすのは、確固とした一つの決意。

この夢だけは現実にしてはならない。大切な人を消してしまうこの夢だけは、決して。

初めの絶望とは違う。今ならばまだ、先輩を助けることが出来る。終わってなんかいない。終わらせてしまう前に、自分が決着をつければいい。

その想いととも走り出す。何も成し得ない夢ではない。人に死を与える夢があるならば、人に生を与える夢だつてある筈だから。体を翻して走り出した第一歩。しかしそれで、曆の体が前に進むことは無かつた。

……何が、脚を掴んでいる。

これまで炎の熱さも、爆発の風も感じなかつた曆に干渉してきた何か。

「あ……」

振り向いて声が漏れる。まだ何の感情も浮かんでこないのは、その光景が意味するところを正常に理解できていないから。

「うああああ……」

けれどそれは救いだつた。これが何か理解できなければ、こんな感情だつて生まれなかつたのだから。

曆は必死に首を振つて否定する。

怖い　そう思つてしまった。

曆の脚を掴んでいたのは手、人間の手だつた。それも一つではなく、三つ。どれも元を辿つていけば別々の胴体に繋がれている。腐敗した肉体。零れ落ちる脳漿。頭蓋が露出した頭部。朱色の涙を零す終わつた瞳。どれも　生者の持つ体のパーツではない。

一心不乱にかぶりを振るう。幻想だ。こんなものは有り得ない。

これは全部マヤカシでしかない。

なのに、その幻想が。

「ああああああああああ　　！！」

叫ぶ声で聴覚を遮断する。

聞こえてしまうのだ。音にならない断末魔や、苦悶の叫び　助
けを求めて懇願する死者の声が。

曆の脚を掴むのは三人。その三人の体にしがみ付き、這うようにして近づいてくるのがさらに三人。そこから同じようにしてまた三人。その姿だけが異なる者達が作り出す死の鎖。人間の肉体を以つてして生み出された、死の連鎖。

のは悔恨だけだった。

救いたかった大切な人を救えなかった自分への、恨みと後悔。
伝えたかった一言も伝えられないまま……

消えていく最期の意志。結局成し遂げることが出来なかった小さな想い。

ずっと遠くで声がする。誰かが呼んでいる気がする。

薄れていく意識と真つ暗な世界。どこにも救いなんてありはしない。逃れることの出来ない絶望の牢獄。これが、これまで自分が他人に与えてきたモノ。

拭えない絶望の中。今でさえ尊い哀しみの中で、

“ 曆 ”

誰かが、少女の名を呼んだ。

……

世界はいつしか光を取り戻していた。

朧気な視界が、ここが全て終わった後の夢の中だと認識させる。

嗚呼……これが、わたしの最期。

虚無の中で誰に看取られることもなく何もかもが終わり行くだけの時間。それは、きっと夢の中と何ら変わらない時間。

「先輩……？」

最期の夢の中に現れたのは、やっぱり大好きな先輩。

何だ、わたし、まだ、見失ってなかったんだ……。

どんなに遠く感じて、どんなに大切なものを失っても、それでもやっぱり、先輩だけは忘れられない。だって 先輩は、わたしが一番大切な人だから。こんな人殺しの自分なんかよりも、ずっと、

ずっと大切に愛しい人だから。

「先輩……」

見殺しにしてきた人たちには、その罪を償うことなんて出来ない
と思った。

どんな懺悔も足りない。償える命は一つだけ。それも、こんな汚
れた命だけ。

そんなわたしが、こんな、幸せな夢を最期にして、許されるのか
な、先輩。

先輩の表情は何だか悲しそうだった。きっと、優しい先輩だから
わたしに同情してくれているんだと思う。でも、それはダメなこと
なんですよ、先輩。わたしは人殺しなんだから、誰にも理解されて
はいけない。誰にも、同情なんてしてもらっちゃいけないんです…
…。

先輩の手の甲に掌を重ねる。確かに暖かいその手が、それだけで
泣いてしまいそうなくらい愛しい。

「先輩……」

何を言えればいいだろう。

罪悪感だけで自我を保っていた今までから開放されて、わたしは
今、何を思えばいいんだろう。大好きな先輩に何と言えればいいんだ
ろう。わたしは、何と言えれば救われるのだろうか。

嗚呼そうか……。

何を言えば救われるか、なんて考えてはいけなかったんだ。

わたしはせめて、最期に救えなかった先輩に謝らなければいけな
いんだ。

ならきつと、この夢もその為にある泡沫の幻。

御巫曆という夢の欠片が、最後に殺してしまった人へ謝罪するこ
とを許された機会なんだ。

でも、それなら。

それなら、どうして。

先輩は、こんなにも悲しそうにしているのかな。

そんな顔をするのは違うと思う。先輩は、わたしをもっといっぱい恨んでいる筈なのに。どうして、こんな。わたしを哀れむようにして哀しい目をしているのだろう。

やっと気がついた。今、わたしが言わなければならないことに。

「笑ってください、先輩……」

声は意識せずに震えていた。

先輩に悲しい顔をして欲しくなかった。大切な人に泣いて欲しくなかった。先輩はいつも、ちよつと疲れてて、それでも他人のことを大事に考えて。誰よりも幸せであつて欲しい人だから。だから、悲しい顔はして欲しくない。幸福を湛えた笑顔が、この人には相応しい。

……笑ってください、先輩。

でも、その言葉は、本当は笑顔の先輩に見送られたいと思つたわたしの我侭でしかなかったのに。口にしてから気がついた。そんな都合のいい言い訳に。

「笑っていてください」

覚えたての言葉を繰り返す赤ん坊のように、わたしは繰り返した。懇願する声は掠れていて、頬は何だか熱い。何かが、そこを流れているみたいだ。

「先輩……先輩……わたし……」

何を言えればいいのか。言葉が出てこない。

それでも、言わなければならぬことは知っている。

それをずっと後回しにして逃げてきた　心のどこかで断罪を恐れていたから。

最期くらいは、大好きな先輩に咎めて欲しいから。

だから、言わなきゃいけない。

「先輩……わたし、人を殺しました」

罪人は裁かれるもの。

わたしという人殺しを、裁いてくれる存在は無かった。だから、先輩に。赦されることなら大好きな先輩に裁かれたかった。

先輩の手がわたしの頬に触れる。滴っていた熱い何かを拭い取って、先輩はわたしの願いを聞き入れてくれる。優しい微笑を一瞬見せてくれた後で、またさっきの哀しい瞳に戻ると、

“お前は　人殺しなんかじゃない”

そんなことを、言った。

どうして……？

どうして、そんなことが言えるんですか。

「違います」

その声は罅割れていた。

先輩の言葉を否定しても、先輩は首を横に振る。

頑として、わたしの言葉を受け入れようとしない。

庇うように慰めるように。首を振って否定の言葉を重ねてくる。

それが、わたしには解らなかった。どうして先輩には解らないのか。わたしが夢を視るから人が死ぬ。それはわたしが夢を視るといふ行為で殺人を行っているということ。だから、わたしは人殺しなんです、先輩。

“違うよ”

どんな言葉を口にしても先輩はそれを認めてくれなかった。

「違います……！」

初めて反抗の意を籠めた言葉を怒声にする。不思議と、相手を跳ね除けるその言葉は自分自身を庇うみたいに聞こえた。

可笑しい……。先輩がわたしを庇ってくれている筈なのに、どうしてそれは糾弾のように刺がある。その刺が心のどこかに刺さって

抜けてくれない。……それが、とても痛い。

“お前は誰も殺していないよ”

「どうして……。どうしてですか先輩。わたしは　わたしが夢を
見るせいで誰かが死んでしまうんですよ？　だったら、だったらそ
れはわたしが殺したことと同じじゃないですか、先輩」

頷いて欲しかった。認めて欲しかった。そうしなければ、今すぐ
にでも壊れてしまいそうだった。

だって、それは。

“お前は夢を視てただけだよ。誰も殺しちゃいない。罪なんて元か
ら無いんだよ”

最後の夢。大好きな人に看取られて生涯を終える　そんな幸福
は、やっぱりわたしなんかには許されていなかったんだ……。先輩
には、嘘が吐けない。大好きな先輩を欺くことなんて出来ない。

この先輩はわたしが夢想した優しい先輩。でもその役割は罪の追
求。……これはわたしに課せられた罰。断罪でも制裁でもない。逃
げ続けた罪と向き合う、ずっとわたしが目を背け続けた清算の時間。
解っていた。いつかきつと、逃げる事が出来なくなるってこと。
いつか、向き合わなければならぬこと。

罪悪感なんて嘘。本当はそんなの、枷でもなんでもない。　わ
たしは、わたしは自分を最低だと決め付けなければ生きていけなか
った。

わたしは途切れそうな意識を必死に繋ぎとめて、消えてしまいそ
うな儂く愛しい顔を見上げる。今でははつきりそうと解るほどに痙
攣する唇を動かして、ずっと隠してきた心を音にならない惨めな声
に変える。

そう。

唯、一度だけでも助けたいと思った。

夢の中の自分は何処までも無力で、生きたいと泣きながら苦しむ
人に手を差し伸べる事だつて出来ない。すぐそこに迫る死神の存在
を叫んで伝えることも出来ない。

自分には何も出来ないと思つていたけれど、それでも繰り返し返せばこの声は届くと信じた。

声が枯れるまで。喉が焼けきれてしまうほどに。何度も叫び続ければ、きつといつかは、誰かを救えるものだと信じた。

誰かの世界を垣間見て、誰かの死を傍観する。

いつしか自分の夢の中で死んでいく人たちが、夢の外でも死んでしまうことに気がついた。

声が枯れるまで泣いても。喉が焼け切れてしまうほどに自分を責めても。既に起こってしまったことを変えられる訳がない。わたしの夢が人を殺す。その罪は全てわたしにある。

重ねた罪の大きさに壊れてしまいそうな小さな自我。けれどそれは。

わたし自身が背負った罪。

誰かに裁かれるわけじゃない。そうだとしたら楽になれた。

わたしはわたしの罪を、誰にも咎められることなく永遠に抱えていかなければならなかった。

だから、自分は人殺しなのだと思わなければやっていられなかった。誰も救えない自分は、無力で無価値で無意味な幻想のような幻影のような幻のような夢のような……そんな哀しい存在なのだと思います。と思いたくなかったから。

結局全部自分のためではなかった。

夢の中で死んだ人の最後を看取ろうと、何度葬列に並んでも、何度同じ痛みに泣き喚こうとも。それも全部無意味。わたしの存在に意味なんて無い。そう、思いたくなかったから……。

わたしは……最低です、先輩。

自分のことしか考えていませんでした。自分だけが可愛くて、我侷で。

そんなわたしは、先輩のことを好きになんてなってはいけなかったんですよね。

だから

罪悪感と彷徨い続ける夢想の中。

或いはこの日常が。

今にも消えてしまいそうに儂い泡沫の日々。

本当は。

この幸せな日々こそが、わたしの夢だったのかもしれない。
だから、ずっと。

遠くから眺めているだけでよかった。

わたしは先輩の頬に手を伸ばす。罪に汚れた小さな手を、先輩は拒むことなく握ってくれた。

もう、きつとこれが最後になる。

声になる言葉を出せるのは、後一回きり。

さあ、何を伝えよう。

罪の清算は済んでいないけれど、わたしはまだ穢れたままだけど、
それでも

“せんぱい、わたしはせんぱいのことが　　だいすきです”

そう口にして、音にはならなかった。

でも、それでいい。わたしには気持ちを伝える資格なんてないし、
それに、

夢は、触れてしまったら嘘ユメになるモノだから。

まだ、終わらせたくない……。

先輩がいるだけでわたしは幸せなんです。

だからこれは悪夢なんかじゃないんです。

先輩がいたから……先輩が笑ってくれたから……。

どんなに辛くても、この夢は幸福な幻想なんですよ、先輩。

先輩……

ごめんなさい、先輩。……さようなら。

唇を動かすだけの長い独白の終わりに御巫曆は呟いた。

「……………です、せんぱい……………」

肺に含んだ空気が喉を通り抜けただけ。そんな声だった。

最後に何かを伝えようとして、それが結局叶わずに終わる。けれど本人はそれで満足したのだろうか、薄く開いていた瞼が瞳を隠す。

「曆……………？ おい、曆」

その、小柄な後輩の肩を揺すりながら名前を呼びか掛ける。

何度呼んでも返事は無い。今俺の腕の中に在るのは完全に意識が途切れた後の人間の体。

一瞬の焦りもけれど直ぐに拭い去られる。華奢な双肩と小振りな胸が僅かに上下しているその様子が、ただこの少女が眠っているだけなのだということを報せていたからだ。その寝顔は安らかとは言えないが、けれどきつと悪夢は見えていないだろう。

苦しみぬいた末に、安らかではないが幸せそうな寝顔だった。これで悪い夢を視ているというのなら嘘だ。

目の端に溜まったまま溢れることが無かった涙を指で拭ってやる。もう何日も睡眠を取っていなかったのか、曆の眠りは一目に相当深いものだと解った。

「……………よく頑張ったな、曆」

小さな後輩の体躯を背に乗せる。体重を感じさせない少女を背負い上げて、俺は立ち上がった。開放した入り口から入ってくる外の

光は絨毯みたいで何となくいい演出に思える。……と、それでは自分が御伽噺の王子様だと言っているみたいだな。

自分の思考に苦笑する。これだから空に、御伽噺の絵本を買ってやろう、なんて言われるんだ。

埃っぽい足を踏みしめながら外に出ると、開けっ放しの鉄の扉に凭れかかるようにして空が待っていた。勿論、誰を待っていたのかと訊けばこいつは自分の親友を待っていた、と即座に返答するだろう。兄の帰りを待ち望む可愛い妹は、さてどこにいったのやら。

「暦は……大丈夫ですか、兄さん」

大きな瞳が不安の色を湛えていた。

俺は何も言わずに、背に乗せた暦の姿を空に見せてやる。それだけで、言葉で語るよりもずっと意味があることだと知っているから空なら、暦の寝顔を見るだけで今本人が安静かどうかは判断できるだろう。

空の緊張が緩んだのを確認して、暦を降ろす。

俺は空が背にする扉とは逆の扉に凭れ掛かり、晴天の青を見上げた。

「暦はさ、ちよつと優しすぎたんだよ」

そんなことを口にする。相変わらず視線は空を流れる雲に。これは誰に語っている訳でもなく自分の中で起きたことを整理しているだけなんだ、と態度で示しているつもりだった。さすがに、さつき喧嘩別れした妹と面と向かって会話するのは気負いする。

俺の態度が意図するところを悟ったかどうかは解らないが、空も再び扉に背中を当てた。とん、と綺麗な音がしてそのことが解る。横目で確認してみると、空もまた同じ様に首を上方に傾けながら目を閉じていた。

今なら、正面向かって立ってもばれないだろうな。しないけど、そんなこと。

不意に緩んでしまった口元を正して、冒頭から間が空いた独白を再会した。

「自分が悪いんだって思い込むことは、結局自己防衛だったのかも
しれない。でもそれを人に明かすってことは、そのことで誰かに咎
めて欲しかったんだ。こんな話、国も法律も裁けないからな。罪の
重さは良心の重さだから。曆は自分を庇うために罪悪感を背負って、
結果そのことが余計に大きな罪悪感として押し掛かった。だから
誰かに助けて欲しかった。自分以外に自分を責めてくれる誰かが欲
しかったんだ」

それも全部勝手な俺の想像かもしれないが。けれどそれに反論し
てこない空の様子を見ると、あながちそれも間違いじゃないかもし
れない。

「朔夜さんと話したことだけだな、『正夢』と『予知夢』の違いっ
てヤツなんだよ。二つを決定的に隔てる基準なんて無い。そうだろ
だって、どっちもそれが『特殊な夢』だと気づく頃には全部終わっ
てるんだ。だったら、両者を分けるのは当事者の意識でしかない」

朔夜さんが憂鬱に言ったことを思い出す。二つを隔てる確かな理
なんて無い。

元から意味の無いこと、追求するだけの無駄な……そう、何日も
前に見た夢の内容について頭の中で議論するような、そんなこと。

「ようするにさ、『予知夢』はドラマのシナリオを先に知った上で
ドラマを見るようなもので、『正夢』は自分がドラマのシナリオを
書いてからドラマを見るってことなんだ」

なんとなく、その例えがしっくりくる。俺にしては上出来だった
かもしれない。

その時、隣で聞いているだけだった少女がぐすりと笑った。

「なんだよ……」

「いえ。兄さんにしては解り易い例えだったので、可笑しくて。も
しかして、朔夜さんの言葉をそのまま引用したんじゃないですか、
兄さん。いつも宿題でやってるみたいに」

からかうような声が無邪気に聞こえて、つい幼少期を思い出す。

一瞬だけ、ほんの僅かな一時、昔の空をそこに見た気がした。そ

れが嬉しいようで表情が綻んでしまっても、よく考えればここは笑っている場面ではないと気づく。兄の、威厳がそうさせる。

「……その例えも朔夜さんの引用か？ 随分攻撃的だぞ」

「いいえ。朔夜さんはこんなこと言いませんよ。女の子にはいろんな感情の表し方があるんですよ、兄さん」

小悪魔め。だんだん朔夜さんに似てきたんじゃないか。

独白だと言っておきながら、いつの間にかそこには会話が生まれ
ていた。

「で、話は戻るけどな。自分の見た『現実になる夢』をどちらに分類するかは、当事者の良心なんだ。予知夢なら罪の意識なんて無い。不幸だな、とか、同情はあるかもしれないけどそこには自分に課せる感情が無い。それに対して正夢は、自分の夢があるから誰かが死んだんだっていう、罪の意識がそう認識させる。暦の場合は、自分の夢を正夢に位置づけてしまったんだろうな。さっき言ったこともあるけど、それ以上にこいつはそういう奴だからさ。結果として、意識が罪悪感に耐え切れなくなってパンクしたんだ。行き場をなくした罪悪感、夢や現実の境界を曖昧にして自我を蝕む。暦が自分の夢を予知夢だと認識していたら、こんなことにはならなかった」

朔夜さんが言っていた逆転現象のきっかけは、それかもしれない。或いは今日のことを考えるなら、暦は前にも誰かが死ぬ現場を現実に見てしまったか。どちらにせよ、暦の正常を壊すには充分すぎる。これ以上俺には言うことが無かった。これ以上何かを言っても、それは空にだって既知の事実だろうから。何を言っただて無駄なら、何も言わずに今はこうして時間の流れだけを見詰めていればいい。何も言う必要が無いのなら、だが。

「お前、最初から知ってたんだろ。暦が夢で悩んでること。だから朔夜さんに相談したり、あんな訳の解らない本を持ち出したりしてたんだな？」

「あれ？ 兄さんには難しかったですか、あの本は。わたしには小

学校の教科書みたいでしたけど」

「お前はまたそうやって……まあ、いいけどさ。深く追求する気はないし、何で暦がここにいるのか解ったのか、なんてことは聞かないことにする」

ことは遡ること一時間前。

廊下で暦から電話があつてから、それこそ迷子のように校舎内を彷徨っていた俺は空と鉢合せになった。そこからはお互いに最低限必要な言葉だけを交わしてここまでやってきて、今に至る。それだけで充分に空には世話になったのだから、深く追求してまた喧嘩するのもバカらしい。

兄に迷惑を掛けない 面倒は全部自分で背負って、解決してしまうのが遙瀬空という俺の妹だ。

「でもな、無理はすんなよ。お前は俺の妹なんだから、この頼り甲斐のある兄に相談くらいすればいいんだよ。相談料なんてとりやしないからさ」

飛行機雲が伸びていく。青い壁面がもう直赤い夕焼けに暮れ始める。

どん、と鈍い音がして振り向くと、さっきまでそこにあった空の姿が消失していた。

「兄さんに頼り甲斐があれば、相談くらいはしますよ」

「……それはつまり、俺は朔夜さんよりも頼りにならないってことだな」

晴れやかな笑顔が直ぐそこに迫っていた。

悪戯ながら無垢な笑顔を湛えた空に苦笑しながら、俺は眠り姫状態の暦を背負い直す。

「お姫様抱っこしたらどうですか、兄さん？」

「……バカ言うなよ」

少しだけ安心することがあるのなら、もう昼間のことはわだかまっていらないらしいことだった。

長い間離れていた妹の気持ち、俺は少しずつ理解できるように

なってきたのかもしれない。

今日は少し深く踏み込みすぎて、知らない道に在る知らない段差に躓いただけのことだとして忘れよう。同じ間違いを繰り返さないように、曖昧な輪郭だけを残すようにして。いつか思い出したとき、今日のことかいつかの夢のようで笑ったり出来るように。

これからどうするんですか、というこれまでとは一変して真面目な空の問いかけに俺は肩を竦めた苦笑で答えた。

「取り合えず、頼り甲斐のある人に任せろよ。少し前にも似たようなことがあったしな。……あの時より人数も少ないし、大丈夫だろうよ」

相当飢えているようだったからな。曆を退屈凌ぎにされるのは業腹だが、今は彼女に頼るしかない。

半分だけ色が変わった夕方の天空を見上げて、俺達は兄妹揃って国語科準備室へと向かった。

(罪悪夢想の迷子 / 了)

8 (後書き)

際限なく書いてしまうのは悪い癖です。

二話同時に投稿してますので、お気をつけください)09/5

22)

第五章：禁忌破綻の空色 / 1 (前書き)

凍えた月の夜。

見上げた蒼穹は翳り無く煌びやかで。

三千世界を満たす理は綺羅星の様。

小さな頃の夢は溢れんばかりの禁忌に犯されて。
いつしか何も無い空白ばかりを求めていた。

見えてるものは世界の理。ずっと遠くの開闢。
見えないものは自分の心。ずっと近くの終焉。

手にした叡智は色褪せた世界。
鏡写しの心象。

幻想にも似たいつかの理想、見失ったいつかの純真。
綺麗なモノに汚れて欲しくなかったから、
ずっと大切にしていたい想いが在ったから、

わたしは大切なそれを禁忌にして、ずっと遠くから眺めていた。

それはきつと、ずっと見えなかった心の奥。
それがきつと、探し続けた大切な宝物。

亡くしてしまった、あの日の恋慕。

十二月が始まって、今日の空模様はわたしの心象を具現化しているみたいに曇りきっていた。それが同じ名前同士ということに関係しているのかしてないかで言えば、九割方後者だと思う。そもそも、こっちは空は胸中ブルーだと陰鬱を意味するのに、あつちの空は青ければ青いほど快晴なのだ。共通する心情の表現はこの曇天だけだから、なんとというか複雑な気分は否めない。

寒々しい廊下の窓から天を仰ぎつつ、わたしこと遙瀬空はそんなことを考えながらため息を吐いた。はあ、と吐き出した息が窓ガラスを白く曇らせる。そこに写っていたわたしの顔が靄に包まれた。期末考査も既に過ぎ去り、後は冬休みの始まりを待つだけとなった師走の頃は、もう短縮授業が始まっている。わたしだって勿論例外ではない。今日も午前中だけの授業で帰宅していいのだけれど、そうしないのがわたしの日常だったりする。

本来ならエスカレーター式で入学するはずだった私立学園に比べて、やはりというかなんというか、財力の違いから当然のごとくこの公立校の校舎は古びて小さい。小さいといってもそれは無論金持ち私立と比べてのこと。むしろ一般的な公立高校と比べれば、少しばかり大きいのかも知れない。

校舎の数は三つ。向かい合うように一棟と二棟、その間に三棟がある。一棟は一三年の教室が集まっていて、二棟は二年の教室と一部の特別教室が設けられている。三棟は二つの校舎を繋ぐ役割も果たしていて、設けられる教室は職員室を初めとして生徒指導室や保健室、各教科の特別教室。音楽室とか、美術室とか、実験室とか工

トセトラ。

わたしは今三棟の廊下において、目的地に向かう途中で足を止めていた。

それにしても、寒い。一応エアコンは完備されているのだけれど、性能はお世辞にもいいとは言えない。焼け石に水、とでもいうのだろうか。今こそそれは熱量の関係が逆転している例えなのだけど。

豪華な造りだった中学時代の校舎を思い出す。……まあ、比べちゃいけないってのは解ってるんだけどさ。それでも、どうしても。こればかりはどうしようもない。人間なんて何でも格差を付けたがる習性を遺伝子的に持つてるんだから。

嘆息をやめて、わたしは再び歩き始める。止まっていちゃそれこそ体温が奪われていくみたいだ。体を動かしている方が少しだけマシだと思う。これだけ寒いならいっそのこと雪でも降ってしまえばいいのに。ほんとう、中途半端だ。

灰色の雲を凝視していれば、或いはその想いも届くのではないかと思いつながら歩を進めていく。結果、願いは届かず無念。よかったことといえば、寒さを意識しないで済んだこと。

国語科準備室。そうプレートが張られている。正直なことを言えば、ここはそんな高尚な部屋じゃない。朱空朔夜さんという人の私室だ。

わたしはいつものようにスライド式のドアをロックして、入室を試みる。

瞬間、その手を止めた。

「……………」
なんて、リアクションしたらいいんだろう。

その場から一步退いて、背伸びを試みる。手を伸ばせば、届くでもそれも何となく億劫だ。

「はあ……ま、いいかな、今日ぐらい」

呟いて、僅かに空いたドアの隙間に上履きに包まれた右足を差込み ドアをスライドさせた。その際、脚に力を入れるのは最初だ

け。ドアが慣性の法則に従い、運動エネルギーの方向に動き始めたのを確認して脚を引っ込める。

ばふ、なんて擬音染みた音がして、足元に小さな白煙が舞う。

わたしは落下したそれ 黒板消しを拾い上げて、今度こそ部屋へと入った。

入室早速、頬杖を突いてつまらない表情をしている朔夜さんにわたしは言う。

「どういうつもりですか？ こんなの、今時小学生だって引っ掛かりませんよ」

デスクで何やらの作業をしている朔夜さん。この結果は解り切っていた、とその瞳が言っていた。

「いやなに。もしかしたら、お前も同じ轍を踏むんじゃないかと思っただけだよ。赦せ。可愛いイタヅラじゃないか、悪意は無い」

「イタヅラって漢字で書いてみてください。悪の戯れですよ」
そこに必ずしも悪意が介在しているのかどうかは、考えるだけ無駄なことだ。

それにしても、朔夜さんは『お前も』と言った。わたしの前に、同じ様な罫を仕掛けられた誰かがいるとも言っただろうか。高校生にもなつて、こんなのに気づかないというのはどうかと思うな。

少しだけ考えてみた。考える必要なんてないけど、それでも。考えることは大事なことだし。

この部屋を訪れる人物というのは、わたしが知る限りでは兄の遙瀬澄弥だけだった。まさか、他の教諭が来室したときに同じことをするとは思えない。三年の生徒がやってきたのだとしても、それを事前に知ることが出来なければトラップは仕掛けられない。呼び出しを掛ける、という手もあるけど……こんなことをする程の相手ならその生徒は朔夜さんのお気に入りだということ、だったら一度もここで鉢合わせていないというのは不自然極まる。………それなら、もしかして。

答えは自然と出てきて、必然的に一人に絞られた。

「……………橙弥にも、同じことをしたんですか？」

「半年ほど前にな。お前とは対照的な結果だった。事後の表情は二人とも似ていたが」

半年……………というと、丁度わたしが朔夜さんに橙弥を紹介した時期だ。なるほど。確かにそれなら来客の存在を事前に知ることが出来てかつ 後の始末に困らないというわけだ。

なんてこった。まさか、たった今この瞬間に自分が罵倒した誰かが二親等血族だったなんて。……………なんだろう。この、複雑な気持ちは。……………うん。今度遠回しにからかってみよう。

「それよりも、まただな、空」

何と切り出そうか思索していると、煙草を銜えた朔夜さんがそんなことを言った。

わたしは臆だった視界の焦点を朔夜さんの目に合わせる。相変わらずの鋭い視線に射抜かれて、不意に背筋が冷たくなった。……………あ、ドア、開けっ放しだったんだ。

「なにがですか？」

と、訊いて後ろ手に部屋を閉鎖する。

どうでもいいけれど、この部屋は他のどの教室よりも暖かい。面積の関係もあるけれど、エアコンに加えてさらに電気ストーブまで備え付けられているというのが一番の理由だろう。いつからかは知らないけど、完全に朔夜さんの私室だ。いつそこに泊り込めばいいのに。電気代も何もかも、学校経費で降りて生活費が安く上がる。なにと訊いたわたしの質問に、朔夜さんは紫煙を吹き出しながら

答える。

「呼び方だよ。お前、中途半端に遙瀬の呼称が代わるだろ？ 『兄さん』とか『橙弥』とか『お兄ちゃん』とか」

「最後のは言ったことありません。少なくとも、朔夜さんの前では、一度も」

「ってことは、わたしの前以外では言ったことがあるんだな？ あ、言わなくてもいいぞ。推理してやる。そうだな……………進行形で兄妹の

関係に於ける禁忌を犯している最中に連呼してでもいるんじゃないのか。ん？ 解り辛いかな？ うん。はつきり言うつつまり近親そ

「それ以上言うと、色々面倒なことになりますよ、朔夜さん。わたしに隠し事が出来ないくらい、貴女だつて知ってるでしょう？」

引き攣る頬を笑みに換えて、わたしは言う。……断っておくと、朔夜さんの言葉は全部非現実でしかない。言うまでもないけれど。

握った黒板消しを投げつけ兼ねない勢いだと悟ったか、朔夜さんは、

「すまんすまん。冗談だよ。まったく……お前をからかっても面白くないな。兄妹でこつも反応が違うというのは、それはそれで面白くないこともないが」

拗ねた子供のように唇を尖らせた。その表情が可笑しくてつい笑いそうになってしまう。

……しかし笑っている場合ではない。こつも簡単に朔夜さんが退いてくるなんて、ちよつと予想外だった。これじゃあ話が戻ってしまふ。

「で、だ空。そろそろ一貫させたらどうだ？ 兄さんか、橙弥か」

「……………」
負けを認めた瞳が、紫煙の向こうでにやりと笑う。

悔しいけど、やっぱりこの人には敵わないなあ……。

朔夜さんが忌み嫌う人生の要素は『退屈』だ。常に何らかの非日常を求めて餓える獣染みている。もつとも彼女が唯の獣なら、何も苦勞しない。人間ならこの地上に存在する殆どの獣を調教することが出来るだろうし、実際、それが可能だということはサーカスでも見ていれば無意識に悟れる。朔夜さんは獣なんて御し易いモノじゃなくて、いうなら、どこまでもヒトらしい人間だ。自分の欲望を抑えず、どうすればそれが叶うか冷静に判断して実行できる。愚鈍さなんて何処にもない。そして自らを鎮める理性だつて、持ち合わせているんだ。

「ま、いいけどな、そんなことは。お前と遙瀬がどんな関係であっても、これからどんな関係になっても知ったこっちゃ無い。好きにすればいいさ。でもな、空」

黙りこくつたわたしに朔夜さんが折れた。かと思うと最後に付け足して、

「それはあくまで私にとつてのことだ。私や、お前以外の他人全員。お前の中でははっきり分別をつけないと、いつか痛い目を見るのはお前の方だぞ」

「えっと………すみません、どういう意味ですか？」

惚けたつもりは無かつたし、実際意味が解らなかつた。

確かに、このことで後悔とか、それに比類するような思いをするのはわたし以外の誰でもない。誰も傷つかないし、困らない。全部わたし一人で背負うことだし、必然的にそうなること。でも、朔夜さんの言うことはもっと別なことを意味してるような気が あれ、ちよつと待った。………なにか可笑しい。

「言いましたっけ、わたし………その、橙弥のこと」

「いんや。見りゃ解るんだよ。私の知り合いに、似たような奴がいてな。それで、なんとなくだが しかしその様子だと間違いじゃないらしいな」

「知り合い、ですか。よく言ってますけど、その『知り合い』は一人の人なんでしょうか？」

「うん？ ああ、まあな。それなりに長い付き合いだよ。私のお気に入りであつたしな」

夏のことを思い出す。精神状態がほとんど崩壊していた暦を預かって、見事に解決を図ってくれたのも朔夜さんが言うその『知り合い』だった。何でも、万屋なんて今時流行らない商売をしている人らしい。ただしその胡散臭い稼業とは裏腹に、実績はあるらしい。これは橙弥の言葉だ。結果として暦が何も無かつたみたいに戻ってきたときは、その人に感謝をすることになったけど。

朔夜さんが知り合いと称するのだから、当然普通な人ではない。

きつと破綻者だ、間違いない。と根拠無き確信をわたしは抱いている。実際、朔夜さんの目に留まる人間はどこか異常なのは、唯一人遙瀬澄弥という人間を除けば既知の事実だったし。それが確信に至る材料というには少し頼りないんだけど。確率論に於いて大切なのは分子じゃなく、分母と分子の揃った数字なんだから。十分の一と百分の十では、紙の上では同じ結果でも現実ではそうと云えない。十分の一の方がその後九十回を終えた後に百分の十に成り得る可能性は、決して百パーセントではないのだから。そう言った意味では、二分の一は頼りになる数字じゃない。今は五十パーセントでも、今後十パーセントにも一パーセントにも成り得る。

でも朔夜さんの性格をトレースして考えるなら……その『知り合いい』も『お気に入りだった』と言われているのだから　　って、あれ？　どうして過去形なんだろう。

わたしは思い至った疑問を口にする。

「朔夜さん、『お気に入り』だった、って今は違うってことですか？」

「流石に鋭いな。遙瀬相手ならこうはならな……い、こともないか。あの少年は無駄なところで勘が鋭いからな。ああ、今は違うよ。私はね、昔っから妙なモノに魅せられる性だったんだよ。だから私はあの男を　有り体に言うなら好きだったのかもしれない」

衝撃の告白だった。……でも、そんなことを無表情で言い放つ朔夜さんの神経はやっぱり疑わしい。それに無表情というにも少し語弊がある。鉄仮面染みた冷徹　玲瓏の方が似合う　の表情を肯定し続ける朔夜さんだけど、その瞳は案外彼女の心境を表しやすいわたしだから解るのかもしれないけど、それにしても、それじゃあ完全な無表情じゃない。

今、朔夜さんの瞳に浮かんだのは……失望、無然……諦めにも似た負の感情だった。

「アレはもう、そんな次元じゃなかった。私はね、どうこう言ってもやはり普通の人間なんだよ。アレは、そんな私が踏み込んでいい

相手ではなかった。お気に入り、なんて言葉は、それこそ私の中にアレを置くことを認めることだ。そんなのは、嫌だ」

苦い過去を想起しているみたいな表情が煙の向こう側で、それにね、と付け足す。

「哀しすぎるんだ、あいつは。きつと、世界中どこを探しても奴ほどこに哀しい人間はいない。いいや、人間と比較することさえ間違っている。全ての存在は現象だが　　アレは既にヒトという現象の域を逸脱していたからな」

紫煙が吹き出される。換気扇の活動が追いつかず、閉鎖された小さな部屋にはどんどん副流煙と朔夜さんの灰から出てくる主流煙に溢れていく。

わたしは膾炙楼みたいに霞む朔夜さんの瞳を見据えながら、その奥を凝視する。

色即是空という考え方がある。煎じ詰めて言えば全ての存在は現象であり、色であって全てが対となる色と支え合って存在しているという考えだ。その考えに従うなら人間は世界の上に在る、ヒトという現象なんだけど……朔夜さんの言うことは、その人は『ヒト』という現象から外れて他の現象に成り果てたということを意味する。つまりそれは、『異常者』とか『破綻者』とか『社会不適合者』とか　　そんなではなく、ただの『異常』でしかないということ。

朔夜さんがそこまで言う存在に、或いはこのとき、わたしは興味を持ってしまったのかもしれない。

「さて」

と朔夜さんが立ち上がる。デスクの上に散乱していた資料だか何だかがいつの間にか整理され、今は一つの纏まりになって朔夜さんの手の中。雑談に精を出しているようで、実は朔夜さんはしっかり仕事をしていたということか。なんていうか……やっぱり、この人には叶わない。

「長い話だったが、ここまでだ。終わったことに執着するのは好きじゃないんだよ、私は」

どこか非難がましい口調だった。

とんとん、とデスクの上で紙の集合体が音を立てる。綺麗になったデスクの上に散らばっていたプリントの数々は、今や朔夜さんが小脇に抱える茶色い封筒の中だった。さらにそれを鞆に仕舞って……何だか、帰り支度をしているみたいに見える。

「それじゃあな、空。ちゃんと戸締りするんだぞ」

「……………はい？」

今度こそ真正銘、心の底から何もかもが理解できないと言いたかった。それが収束した二つの文字が生み出す言葉。時に肯定の意味を持つそれは、今は感動詞としての役割を担った。

「少し野暮用 出張でな。午後からは出なければならぬんだ。

ああ、先に来た遙瀬には言っておいた。言ったら、早々に帰っていた。確かに、帰ってもいいとは言ったが……薄情な奴だな。お前も好きにすればいいぞ」

「え、いや、あの、その」

暦の顔が思い浮かぶ。うん、初めて親友の心境を共有できた気分だ。上手く口が回らない。

「後のことは任せた。ほら、鍵だ。職員室なんか持っていくな？」

あそこは信用なら無いからね。お前が持っている」

「ちよつと、朔夜さ」

ばたん。虚しく扉が閉まる音。静まり返った室内。

……………どうして、こうなるんだろう。

わたしは預けられた鍵を見る。職員室が信用なら無いなんて、教師の言うことじゃないと思うけど。今はそんなことなんてどうでもいい。

さて、どうしようかな。

答えはとっくに出ているというのに、何故だかわたしはわざとらしくそんなことを思ってみたりするのだ。そう。わたしの放課後は既に変わらぬ一つの形になっているんだ。今日はちよつとだけ、それがいつもと違うだけ。

かくして、遙瀬空はいつものように自分専用のマグカップを用意した。

……

「ねえ、どうしてセカイは汚いのかな」

「……さあね。そんなこと、わからないよ」

声は質問に答えられないというよりも、そもそもお前は何を言っているのかわからない、と言っているみたいだった。それが気に入らなくて、わたしは少し口調を強くして問いかける。

「みんな、ウソツキばかり。本当のことなんて一つもないの。ねえ、どうして？」

「ううん……。ウソツキばかりとは思わないけど、でも、それは仕方ないことじゃないかな」

「どうして仕方ないの？」

「だってみんな、人には嫌われたくないから」

「違うよ」

わたしは首を振った。

「そんなの、絶対に違う。だって、嫌われたくないからウソなんて言わないんでしょう？」

わたしの反論に、う、と痛い所を疲れたように少年は口ごもる。

本当は、少しだけ意地悪してみたくなっただけだった。

だって、わたしの言ってることはそもそも矛盾してるんだから。

でも、幼い少年にはそんなこと解らない。

人に嫌われたくないから、嘘を吐かない。それが出来るなんて、理想だ。嘘無き平和な仲間なんて幻想に過ぎない。だって、人間はみんな汚い世界に生きているんだから。それとも、汚い人間ばかりだから世界が汚いのか。誰だって心のどこかに汚い部分を持っている。それを隠すために嘘を吐くんだ。

それが、結果として自分を汚しているとも気づかずに。或いは、気づきながら。

負の連鎖は螺旋のように続いていく。出口のないトンネルみたいに。明けない夜みたいに。

わたしもそうだった。

だから、もしかしたら、それを否定して欲しくてこんなことを言っているのかもしれない。わたしだけは違うんだと、綺麗な誰かに言っただけだったのかもしれない。それこそ、幻想でしかないというのに。

「でもさ、ウソをついてまで好きになってほしいって気持ちが一番なら、そのウソも本当のことなんじゃないのかな」

「そんなのは都合のいい理屈です」

少しだけ、歳にそぐわない口調を試してみる。

「相手を欺いて、自分を偽るなんて、それこそ偽者の自分を押し付けてるだけ」

少年は首を横に振った。

それから困ったような顔になって、考え込む。その動作があまりにも歳相応過ぎて、どこか羨ましい。汚れを知らない、純粹無垢なその少年の瞳には確かに綺麗な理想が見えているだろうから。それがわたしには遠すぎて泣きたくなる。その感情は少年への憧憬でもわたし自身への嘲笑でもない。名前なんて無い、どんな定義も無い、戯言みたいな一片の感情。

「なんて言うか……わからないけど、それは違うよ。好きになってほしいから、ウソをついて……それで、結果が騙すことになってしまっても……ううん……えっと、それは」

言いたいことは解らないでもない。でも、正しいのはわたしだから、少年は反論できずにいる。

その姿が可笑しくて、羨ましい。

自分には無いものを見ている気がして、遠い。直ぐ隣にいる一人の何でもない平凡が、ずっと眩しい。やがてとおくを見ながら少年が言う。数秒、ともすれば実際は数瞬の刹那。そんな途方もない間を置いて、兄は、言った。

それはきつとわたしの原風景。遙瀬空のはじまりの物語。

……

固い感触が頬に触れている。それは少しひんやりとされていて、冬という季節なのにどこか心地好くもあった。

首を起こす。冴えない思考。瞬きをしてやっとはつきりする視界。腰の痛み……というよりもだるさ。足下の冷え。それから……体温が妙に高くて、それでいて外気との差が寒いくらいに感じる。

そうか。ぼんやりした意識でわたしは自分の状況及び状態を理解した。

ここは朔夜さんの私室、もと国語科の準備室で現在その主は不在。留守を預かるとは言えないけれど、現状この部屋の鍵はわたしが所有していて今後のことは任されている状態だ。

今が何時かは解らないけれど 多分わたしは眠ってしまったたんだろう。いや、多分というより確実に。体の状態と不自然に途切れた意識がそれを証明している。伸びをして、それから時間も確認するために上半身を立てる かさり。衣の擦れる音がした。

違和感がある。寝起き独特の妙な体の重みとは違う、まるで体重そのものが重くなったみたい違和感。そしてその違和感は比喩で

はなく実際に存在し、わたしの背中を滑るようにして、床へと落下した。

意識は完全と違っていい程に覚醒していたけれど、体は 頭の方が特に まだ本調子でないらしい。わたしは床に落ちた黒のコートを拾い上げて、眠くはないけどそうするのが寝起き人の社交辞令であるかのように目を擦りながら、言った。

当然、デスクに既知の人物が座席して煙草をふかしていると思いつながら。

「……すみません、眠ってみたいですよ。これ、コート、ありがとうございます」

「いえいえ。あまり気持ちが良さそうに眠っておられたので。ええ、本当に。悪戯でもしたくなるほどに。おっにご心配なく。飽くまで形容ですので。なにもしていませんよ。その程度のことです喜んで、感謝していただければそれは至極光栄に余りますよ。いやいや、ええ、まあ。人に感謝されるといのは実に気持ちがいい。むしろ私の方がお礼を言いたいくらいですよ」

……………

わたしは、まだ夢うつつでも見ているみたいな気分になった。それは間違いない、今が冬で来月が新年であるくらいに間違いない、わたしの知る朱空朔夜さんの口調と声ではなかった。

わたしは急いでこの部屋の中にいるその人物の姿に目の焦点を合わせ、同時に身構える。

その人物は、一言で言うなら黒かった。歳は二十代半ばといったところで、長い前髪が右目を隠している。服装は上下黒のスーツを着込み、加えるなら中のカッターシャツまで真っ黒。鋭利なようにけれど柔らかい目付きの奥にある瞳も。短髪ながら前髪の長い髪の色もまた。唯一真っ赤なネクタイが際立って鮮やかに見えてしまうくらい、彼を占める色の割合は圧倒して黒が多かった。

言うまでもなく、彼は朔夜さんではない。間違うはずなど無く。声や様相なんかを全部ナシにしても、常に高圧的な朔夜さんと彼で

は纏う空気が反対過ぎる。それでも一つだけ共通するのは、両者が共に他人を寄せ付けられないということ。高圧で立ち回り、他人を拒絶するように突き放す朔夜さん。対して、この男性は突き放すというよりも周囲が離れていく感じだった。

この場に朔夜さんはいない。そのことは目覚めてからかなり初期に自ら認識していたはず。なら、睡眠とはヒトの思考を簡単に狂わせてしまう行為だということか。それとも、そんな数秒前のことも忘れてしまうほどに寝起きのわたしは記憶力に乏しいのか。

後悔先にたたず。というかする必要なんて無い。だって、わたしは少し思い違いをしただけで何も失敗はしていないんだから。この程度のこと動揺してそれを悟られてしまう方が、よっぽど屈辱的で気に入らない。

さて。と、わたしは冷静に黒い男性を見据えて思考する。ここを訪れて不審の無い人物。該当、三名。朱空朔夜、遙瀬空、遙瀬橙弥。彼はその誰でもない。在校生？ 身長も服装も雰囲気も、何もかもがそれだけは有り得ないと言っている。教師でも然り。こっちは確信なんて無くて、雰囲気から判断した。

……………
だとしたら……………。

わたしは思考の末に辿り着く疑問を後少しで口にしてしまいそうになる。見覚えなし。思い当たる節なし。ならば必然、一つの疑問に行き至る。

フー、イズ、ヒイ。

彼は誰ですか。

……………こんなこと、本来なら真つ先に出てくる疑問のはずなのに。
「ええと」

何と言っただらいいだろう。こんな体験は初めてで対応に困る。と
いうかこんな体験をすること事態が生涯に於いて稀有ではないだろうか。例えば仮に、学校の普段なら誰も立ち入らないような部屋でうたた寝していて、目が覚めたら映画に出てきそうなマフィアか何

かみたいな黒づくめが人畜無害な微笑みを向けていたら　　って、これじゃ例えになつてないか。

半ば混乱する心中を気取られないように、表面上だけは冷静に努めて黒い男を見返す。それが、裏目だったかもしれない。次ぐ言葉を口に出れないわたしに、男は変わらぬ微笑で言った。

「ご心配なく。怪しい者ではありませんよ」

にこり、と怪しいまでに無害すぎる笑顔。男は右手を差し出して、はじめまして。棺木境介ツツキキョウケイと申します。以後、お見知り置きを」

求められた欧米風の挨拶に応えて、わたしは男、棺木境介の手を握る。何となくそのまま何度かハンドシェイクがあるのかと思つていたけど、それはなかった。結ばれた手は、ただそれだけで何のアクションもなくほどかれる。至極あっさり。それこそ数秒前に握られていた手が、幻だったみたいに。

「遙瀬、空です。こちらこそはじめまして……」

なんだか奇妙な光景だった。はて、ここはどこだっただろうと思つてしまうほどに。

互いに簡易の自己紹介を済ませて、さてここからどうするべきか行動に困る。一応お客さんのようなので、コーヒーくらいは出した方がいいのだろうか。と、ちよつと待った。

寝起きでかつ不思議体験をしてしまった為か、どうもわたしは根本的なところを気に掛けていなかった。知らない間に自己紹介まで持つていかれて、完全に場の主導権を握られていたことも作用しているだろう。学校内に在りながら殆ど無法地帯となつているこの部屋に、どうして客人がやってくるのか。もつと言うなら、学校への来訪者なら隠れ家的喫煙スペースみたいなこんな所に訪れること事態が間違っている。場違いも甚だしい　　で、だったら、それだからこそ逆説としてこの人、棺木境介の正体が解るんじゃないか。

頭の調子もやつと軌道を取り戻してきたみたいだ。ここに訪れる人物など、普通では有り得ない。故にその結果は偶然。だけどその逆も成立する。ここを訪れることが普通では有り得ないなら、つま

りそれは異常ということ。そしてこの主は、朱空朔夜さんは異常を好んで招き入れる性質を持つ。それはつまり、ここに在るのが必然なら、ここに在るモノは何らかの意味で異常である。そういうことが言える。

異常、異端、異形、破綻。

その言葉に敏感に成らざるを得ない話を、わたしは今日聞いたばかりだ。その為に思考などより先に記憶が告げる。

沸き上がる好奇心と、

狂乱する警告サイレン。

理性や衝動よりもずっと遠くにある何か。名前すら見当たらない、わたしという存在の起源。遙瀬空の世界が、告げる。

彼に関われ、と。

ソレに近付くな、と。

二つの感情が同時に頭の中を駆け巡って、何がなんだかわからなくなる。何が正しいのか。誰に従えばいいのか。逃げるのか。向き合うのか。問うのか。答えるのか。見るのか。見ないのか。純真か。邪か。清純か。汚濁か。世界か。自分か。

少しの、空白。

思考は止まって、何も考えられない。正常な判断ができない。わからない。どうするべきか。わからない。どうすればいいのか。わからない。また、自分が見えない。わからない。呼吸が出来ない。息の吸い方が。わからない。何も考えられない。考え方が。わからない。始められない。邂逅が。わからない。終わらせられない。終焉が。わからない。

世界が歪む。

見果てぬ夢を永遠に見ているような。現実感が削がれ、消失してしまったような感覚。ぼつかり明いた空白に別の何かが浸入し、満たしていく感覚。嫌悪。憎悪。怨念。怨嗟。呪詛。

視界が揺れる。吐き気がする。嘔吐感は吐き出すことも飲み込むことも許されない。光速で逆回転するメリーゴーランドに乗っかってい

る様な感覚だけが大きくなっていく。

やがて、音もなく、世界が崩れ始める。砂粒みたいに風に流されて、虚無が形を得ていく。遙か彼方の地平線が終わり始まりを告げていた。邂逅より先にある終焉が、すぐそこまで迫っていた。

けれど。

わたしがそれに気付いたとき。

何かが、確かに。

世界が、確かに。

わたしの意思とは別に、断ち切られた。

「……………っあ」

スイッチで切り替えたみたいに簡単に、意識は元の場所に戻ってきた。首を振って確認する。古い木造建築の一室。電気ストーブの発熱。蛍光灯の発光。窓を鳴らす風の音。黒いスーツの男。……背筋を伝う汗の冷たさ。

はあ、と息を吐き出す。それは安堵から無意識に吐き出された吐息。……もう少しで危ないところだった……かな。

「なるほど。そういうことでしたかー」

ずるずる、なんて緊張感のない間抜けな音が室内に響く。いつの間にか、棺木さんは湯気の上がる急須を手にしていた。至福のときを過ごしているような、緩んだ表情。変わらぬ微笑が薄い白のベールの向こうにあった。

急須を朔夜さんのデスクに置いて、棺木さんは初見から寸分違わぬ顔をわたしに向けた。

「いやー、お疲れだったんでしょね。すみません、どうやら安眠妨害をしてしまったようで。立ち眩み、それが貧血でしょう。しかしながら、大事に至らなくて安心しましたよ」

「……………貧血、ですか？」

にわかに信じがたい。有り得ないと言い切れるくらいだ。

この時期に、このタイミングで。そんなの、絶対に有り得ない。意識的にも無意識的にも、衝動に流されるのはどこまでも容易で

楽だった。空白だった脳の一部に確かな確信を得て、抑え切れずわたしはそれを口にする。

「わかるんですか？」

自分でも頭の悪い質問だとは思う。でも仕方無い。これ以上になんといつていいのか解らない。言語で伝達できない意思思想は、どうやったって言語以外の伝達手段でしか疎通することが出来ないのだから。

「さて、どうでしょうね」

肩を疎めるようにして棺木さんは言った。

「全ての現象は因果関係の上に成り立ちます。わかりますか？ 空さん」

「……………」

黒いスーツ姿が黒いコートを羽織る。先刻までわたしの背に掛けられていたそれは音静かに翻り、それ自体に意思があるみたいに狂いなく主の身を包んだ。

朔夜さんとは違う、無表情。

今なら解る。彼は、ソレは、根源から朔夜さんとは違う。

気づかないわけが無い。気づけないはずが無い。

だって、彼は。

だって、ソレは。

全人類全てと異なっていてそれで わたしに、近い存在だから。無情にして冷酷。孤独過ぎるソレの微笑が告げる。

「言い換えましょう。そうですね、よく言うでしょう？ 類は友を呼ぶと」

最高の冗談でもいい放つように高らかに。まるで無意味な戯言を溢すように儂げに。決して笑わない笑顔のソレは、言った。

「ではまた。近い内……明日にまた会いに来ますよ。もつとも、それは結果論ですけどね。今日がそうであったように、飽くまで私は朱空朔夜さんの客人として訪れますので」

「ちょっと待ってください！ 話はまだ、その……聞きたいことが

あるんです……！」

「ですから、それはまた明日です。今日は突然で驚かせてしまったようですし。そうですね。今の私に言えることは、『無理はせずにくらいですね』」

黒い背中が別れを告げる。わたしは引き止めたいはずなのにそうできず、扉が閉まっていくのを見送るしかなかった。

「朱空さんにはよろしく言っておいってください」

最後、思い出したように棺木境介という仮面が付け加えた。

再び取り残されたみたいにな一人になる。冬の冷気が一瞬浸入して、直ぐに消えた。

虚無感と、喪失感。

二つがわたしの頭の中で廻っている。

話はまた明日。お預けを喰らったみたいでいい気分にはならない。けれど同時に、何かしらの期待が生まれていたのも事実だった。

もしかしたら。と、そう思ってしまう。

……ふうん。

こんな気持ちはいつ以来だろうな。

わたしは、どうしようもなく明日が楽しみだった。

2 (後書き)

棺木鏡介。知る人ぞ知る人。詳しくは後日、ブログで報告します。

特に何かをして過ごしたというわけでもない時間が過ぎて、下校時間になる。

わたしは朔夜さんから預かった鍵で硬く扉に施錠し、帰宅の途に着いた。小さな鉄片がひんやりと冷たい。正直こんな部屋に鍵を掛けておく必要があるのか、わたしには甚だ疑問である。教師にしても生徒にしても、朱空朔夜印の謎スペースに侵入しようなんて思う愚人はいないだろう。何も知らないこそ泥が間違っただ足を踏み入れてしまうかもしれないけれど、それも間違いで、入ったからといって盗って得する物も盗られて困る物も無いから問題ない。

日が高い夏場なら、まだ廊下は茜色の夕日に染まっている頃。でもそれは飽くまで夏場の話。今日は冬真つ盛りで、おまけに天候も優れないときている。当然、廊下は深遠な闇に満ち溢れていた。廊下というよりも寧ろトンネルと言った方がしっくりくる。夜間制のない学校だけに夜用には作られていないのだ。当然、夜を照らす明かりは弱々しく頼りない。

はつきり言つて、不気味だ。

一歩外に出て最初に気づくことは、室内と廊下での気温の違いだった。

「……………やっぱり、寒いな」

声は不気味に夜の中で残響した。

……………。

認めたくないけど、わたしにもやっぱり年並みの情を持っているらしかった。胸の内を明かしてしまうなら。わたしの精神はこの状

況に少なからず非日常的な何かを感じ取って落ち着かない。心臓が脈を打つ速度がいつもより速いの気づく。寒いのは、どうも気温の所為だけじゃないみたいだ。

うん。早く帰ろう。

こんな所に長居するのは、嫌だ。

夜の学校と夜の病院。二大不気味スポット。厳密には今を夜と言うのはまだ早いかもしれないけれど、この暗さはこれ以上深くなったりしないだろうからそんな理屈は何の解決にもならない。加えてここは使われていない教室が集められている二棟の一階。人気は完全に、完全に、生命の気配など皆無。この上の二階ならホームルーム教室があるから、まだ残ってる生徒がいるかもしれないけど。頭上で点灯している蛍光灯が不気味さを増長させていて、明らかな逆効果だった。完全なブラックアウトよりも中途半端に明かりがある方がかえって気味が悪い。

早足に歩き始める。さて、今日の夕飯は何しようかな、なんて気を紛らわすために考えてみる。

たん、たん、と廊下に響き渡る自分の足音さえ耳に入れたくない。そう意識することは逆効果で、聴こえないようにと考えることで一層聴覚はその音を拾った。

早く明かりのある所に行きたい。こんな無機質な光じゃなくて、もっと人の温もりがある明るい場所に。

たん、たん。たん。

「……………ッ」

寸での所で声が出そうになった。

二階に続く階段があるのは五歩後の曲がり角。直ぐそこまで来て、わたしは足を止める。

人体に付属されている脚は全部で二本。右と左。左と右。交互にそれを前に出して移動することを、歩行という。なら、それによって発生する音は二つ。右足と、左足の分。それなら、三つ目の音は何だと言うのか……………？

「幻聴……幻聴……」

自分に言い聞かせる。病は気から。気が病んでいると、本来あるはずのないモノが視えたり、聴こえたりするものだ。だから気にしないでいよう。今のだって、きつと何かを聞き違えただけ。

一人頷いて、右足を上げる。その一步を踏み出す前に、
たん、たん。

わたしの足は、空中で静止していた。まだ、地に着いていない。
たん、たん、たん、たん。

お構いなしに続く足音。絶句して、わたしはそれを聴いていることしか出来ないでいた。……何でもない。なんでもない。怖くなくて、ないんだから。内心で強がってみるわたしを嘲笑うかのように足音は止まない。性質が悪いのは、その音が正面から聞こえてくるということ。

選択肢は二つ。

振り返って逃げ出すか、かぶりを振って前進するか。

落ち着いて思考しよう。ここは学校で、今は下校時刻を少し過ぎただけの時間。だったらまだ校舎の中には人が残っていても何にも可笑しくない。足音が在ったって不思議でもなんでもないんだ。……でも、わざわざ一階に下りてくる理由は？

何も考えないことが得策。無心のまま、わたしは後の選択肢を選んだ。

目を瞑って、前に踏み出す。視界を閉じることで鋭利になった聴覚が告げる。後少し。後少しで、足音と擦れ違う。ぐっ、と拳を握り締めて、わたしは運命の一步を踏み出した。

「ひゃ

」

体が運動方向を変える。片足を上げた状態で安定の悪い体が後方に反り返る。そこからの流れは極自然だった。安定を失ったわたしの上半身はどんどん反っていき、下半身がそれに耐えられなくなる。後は重力に従って……ようするに、尻餅をつく結果になった。

「いたた………」

勢いよく倒れこんだわけではないけど、未知との接触到に体は思っていたよりも強張っていたらしい。受身も何も無く、勢いのまま倒れたのはそれなりの衝撃だ。

正面から足音が迫っていることは解っていたけど、本当に正面……対面から向かってきているなんてことまでは解らなかった。明らかに、わたしの不注意に過失がある事故だった。

わたしは膝を立てて、倒れたまま腰をさすって目を開ける。ぶつかっただということは足音の主は確かな質量を持っていたということつまり、そこにいるのは少なくとも幽霊とか呼ばれる類の怪奇ではない。そのことに少しだけ安心。

「すいません……大丈夫ですか？」

ぶつかった相手に対して、わたしは必然的に見上げる形になる。

そして、それが、気に入らなかった。わたしは今ほどに数秒前の自分を愚かに思ったことは無い。むしろこれが解り易い畏怖の対象だったらどれだけ良かったことか。目を閉じるなんてこと、愚行にも程がある。

解き放たれた視界にいたのは、いつか見たことのある上級生だった。

「わたしは大丈夫だよ。……あれ？ 空さん、久しぶりだね」

思い出すのは、五月下旬の放課後。夕焼け色の廊下。

その上級生、御桜流深は微笑んで手を差し出した。

「……ええ。お久しぶりです」

差し伸べた手を拒むように、わたしはそれを視界にも入れずに自力で立ち上がる。

御桜流深。

その名前を聞いたのは五月の、梅雨を間近に控えた頃。暦と橙弥を交えて四人での邂逅だった。

「御桜、流深さんでしたよね」

御桜流深という先輩はにこやかに頷く。

「覚えててくれたんだ。ありがとう」

「人の顔と名前は忘れないようにしているだけです。次に会った時、覚えていないと失礼ですから」

「へえ、記憶力いいんだね。さすが、一年生首席。生徒代表さんは言うことが違うね」

「……………」

「やっぱり、この人は……………」

自分の中に在る感情を再度確認する。感情の無い笑顔。さっきまで見ていた黒い男の仮面染みたそれとは違う、まるで、張り付いてしまった故にどうすることも出来ないような。前者を意図的に付け外し可能な仮面に喩えるなら、後者は顔の形が勝手に変形していると喩えるのが正しい。…………つまり、それは。

感情の有無に関わらず、場合によりどうするべきか判断し、それが自動で行われるシステム。初めから設定された、或いは説明書通りに組み立てられた贗物。

自覚してはいた。初めてこの人を見たときから、ずっと。

わたし遙瀬空は、この人 御桜流深が苦手だった。

「……………それでは」

努めて冷静に。内心の独白などおくびにも出さず。彼女の横を逃げるように通り過ぎる。

そこで、

「好きなんだよね、お兄さんが」

びたり。と、わたしは歩みを止める。

というよりも正しくは、次の動作に移ることが出来なかった。

脳から伝達される運動神経が脊髄で滞っているような、否、そもそも体を動かすという方法を忘却してしまったような、それほどに、今のわたしの頭の中はガランドウ状態で何も思考出来ずにいた。突然、なにをいいだすんだ、この人は。

「どうやら彼女は、わたしのことが気に入らないらしい。」

「わたしが彼女に対してそうであるように。」

「ええ。その通りです」

嗚呼そうか。やっと解った。

わたしはこの相手が苦手だから、早く逃れようとしたんじゃない。

「家族、兄妹ですから。当然、兄には好意を抱いています」

ちらりと横目に窺う。黒髪が邪魔をして表情は窺えなかったけれど、彼女はきつと今、物凄く楽しそうに笑っているのだろう。それが心から笑っているのかはわたしの知りえるところではない。だからこれは予想になるけど、それもきつとプログラム通りなんだろう。「それだけですから」

決定的な一言みたいに言って、歩みを再開する。

言葉に、唯、明確な敵意だけを乗せて。

「自分に嘘を吐くのは良くないと思うよ。空さん。……ん？ あ、今のはわたしに嘘を吐いたことになるのかな。まあ、どっちにしても同じことだよ。この世界で唯一貴女を欺けるのは、貴女自身なんだから。だから、その嘘を明かせるのも自分だけ。それを拒絶してたら、一生自分を騙し続けることになるよ」

その言葉に不本意だけどわたしはもう一度立ち止まった。

数秒前と変わらぬ平坦な口調が糾弾してくる。それが不快だったから、無視して逃げるのは気に喰わなかった。まるで自分が劣勢に立たされているような、弱みを握られているみたいような、全てを見透かされているような。それが、その事が、その事実が、その態度が。瘡に障る。

きつ、と睨み付けるように振り向くと、相手もまたこちらを振り向いていた。

楽しげに、儂げに、全てを知っていながら達観しているように。

他の誰も隣に立たせず、他の誰一人として自分の同類は存在してないと言つように。

自分だけが世界中で唯一孤独で、罪深く、深い深い、救いようの無いほどの絶望を知っていると説くように。

こうして対峙しているわたしさえも無いものとするかのごとく。

無感動に、無感情に、無表情に、無慈悲に、無関係に、無二無双と。

気に喰わない。気に入らない。気に障る。癩に障る。

跳ね除けたくて、拒絶したくて、否定したくて、消し去りたくて

.....。

.....。

.....。

「嘘を吐いてるって言うなら、アンタの方だってそうでしょ」

半ば開き直って、わたしは今までの口調を改める。

さつきよりも威勢に、さつきよりも敵意を込めて。呪詛を撒き散らすように言い放つ。

御桜流深は、そんなわたしの態度を求めていたのか少しだけ楽しそうに笑う。それが欣喜から零れた感情表現でないことは今更思考する必要も無い。

何もかも見透かされているというなら、それは何もわたしに限定した話ではない。彼女の言った通り、この世界でわたしに嘘を吐ける存在なんて有り得ない。だから条件は同じ。わたしにだって、相手のことは解りきっている。

「へえ」

感心するように、シニカルにそう呟き、

「やっぱり、解るんだ」

御桜流深という上級生はそう言った。

知っていた。でも自覚していなかったんだ。わたしがこの人を苦手にしているのは本当のこと。だけどそれとは別に、苦手意識とは別にもう一つある。それは言葉では形容しきれない感情で、それでも無理矢理に言葉にするなら　そう、わたしは御桜流深という先輩が嫌いだ。

「でもわたしのことは今は関係ないでしょ？」

「そうですね。確かに、貴女がわたしに嘘を吐いてもわたしは何も

迷惑しません」

「そうだ。彼女がどれだけわたしを欺瞞しようとも、わたしは何も困らない。だから初見で彼女のことを看破したときに何も言わなかったし、今だつてそれを追及したり糾弾したりするつもりはなかった。それでも、わたしがそれを口にしたのは……なんていうか、言われっ放しが気に入らなかつたから。」

「嘘を吐きたければ好きにすればいい。わたしにとってそれが都合なら、いつでも化けの皮を剥がしてやるだけの自信はある。だから勝手にしていればいい。わたしには。けれど。でも。」

「でも、兄を騙しているのは話が違つてくるんじゃないですか、御桜先輩」

「騙す、か。うん。自己弁護する気は無いから認めるよ」

「あつけらんかんとして、御桜先輩は肯定した。見ているこちらが毒気を抜かれるほどに。」

「完全に付け入るところを間違つてしまったのか。否、そんなことはない。」

「自己弁護、と御桜先輩は言った。言い訳や詭弁ではなく、弁護とそれはつまり、彼女にはまだ救いようのある面が、無罪放免であると言える可能性が残されていると言っているのと同じこと。この期に及んで悪足掻きをしているわけでは、ないと思う。この相手に限つてはそんなことはないと言断言できる。」

「だったら、何が言いたいのか。」

「わたしが騙してるんじゃないかと、遙瀬くんが騙されてる、つて言うのかな」

「そんな戯言染みたことを、或いは解答を示すように御桜先輩は口にした。」

「主語を入れ替えただけで何も変わらないじゃないですか。言いかけて思い留まる。同じじゃない。文面と結果だけを見るならば同じことなのかもしれないけれど、それでも。そこには異なるニュアンスがある。」

因果の逆転、或いは発想の逆算。

本来なら全ての現象は原因が先に在り、その後結果が在る。けれど逆説的な考えで、結果が在るから必ずそこには何らかの原因が在る、とも言えるのだ。原因が原因足りえるのは何らかの結果が在ってこそ。なら、先に結果が在ったとしたら。必然的に原因が無ければ矛盾する。

御桜先輩が言いたいのは、つまりそういうことなんだろう。

自分が遙瀬橙弥を欺いているのはあくまで結果論だと。遙瀬橙弥が騙されているから、自分が彼を騙す形になっているんだと。そう言っているんだ。

「……なにを、バカな」

そんなのは根本から矛盾する。

「騙されてるといふのなら、性質上そのことに気づいているなんてことは有り得ません。それは唯の狂言でしかありません」

「正論だね。うん。間違っていないよ。百点満点。でもね、空さん。世界は不条理で満たされてるんだよ。理屈に合わないことも、筋の通らないことも幾らでもある。この世界にはね、破綻しているからこそ成り立つことだってあるんだよ」

「……………言いたいことが解りません」

「だからさ」

微笑むように、舞うように。ただ楽しげな口調が淡々と告げる。

「 遙瀬橙弥はとっくに壊れてるんだよ。ずっと前に」
理性が、音を立てて崩れ始める。

直ぐにでも手を振り上げて、この女を張り倒してやりたいと思っ
た けれど。

けれど、わたしにはそれが出来なかった。
だって。

それを口にした御桜流深の表情は泣いていたから。
涙も零さず。ただ表情だけが、確かに泣いていた。

「……………」

わたしは、何も言わない。

何も言えない。

これ以上待つていてもわたしからは何も言わない。そのことに気づいた御桜先輩は少しだけおどけたようにして、

「ごめんね。ちょっと意地悪だったかな」

「ええ、とても」

自分の中に在る感情を確認するように。

少しだけこの人を認めてしまった自分を、否定するように。わたしは言った。

「とても不愉快です、御桜先輩」

それを別れの言葉にして、わたしは今度こそ御桜先輩を通り過ぎる。本当はまだ、わたし自身の課題は結論に至っていない。この結果は少しだけわたしが誘導 逃避 した結果だけど、御桜先輩もそれには気づいているだろう。それでも彼女はわたしを引き止めることをせず、どこへ向かうのかわたしとは進路方向を逆に歩き始める。

自分に嘘を吐くのは か。

確かにそうかもしれない。……でも、本当なのだろうか。わたしは、わたしは遙瀬空を欺いているのだろうか。自分に嘘を吐いて どんな嘘を吐いているというのか。

話を逸らしたのは、答えたくなかったからじゃなかった。わたしはそれに答えることが出来ないから、話を逸らした。だってその答えは、今現在わたし自身が探し求めているモノだから。

去り際に一度だけ立ち止まる。こっそり窺った背後には闇に解けかける御桜先輩の後姿。何処へ向かうのか。或いは目的地など無いのか。わたしと同じ方向に向かうことを避けているだけのなのか。そんなことは解らない。

その闇に、消えていった先輩に、わたしは言った。

「覚えてますか、先輩」

思い出す。わたしははっきり覚えている。あの日、あの時。最初

の邂逅を。

夕焼け。登場人物は遙瀬橙弥、御巫曆、御桜流深、遙瀬空。わたしは最後に現れた。

最後に、どうでもいい、心の底から何でもないことを言ってみる。

「わたし、貴女に自己紹介してないんですよ」

けれど知る術なら幾らでもある。遙瀬橙弥とクラスメイトである御桜先輩が、遙瀬空のことを知ることなど容易い。

それは本来、わたしが御桜先輩に言われるべき科白だった。

幼い頃。世界はずっとどこまでも続いていて、幸せな時間は永遠だと思っていた。

世界は綺麗で。果てしない。空は澄んでいて。その向こうには理想郷があると信じた。

御伽噺みたいな楽園がどこかにあって、神さまはみんなを平等に愛しているのだと。そう思っていた。純真な理。努力は報われるし、救われない者はいない。いつでも世界は協力的で、困ったときには正義の味方が助けに来てくれる。

そんなの、夢だつて解つてた。誰もが思い浮かべて、そう在って欲しいと願う。けれどどこまでも現実と矛盾して、愚かな絶対に在り得ない酔狂。或いは理想。

どこにもないものを探し続けることが夢。在り得ないことを信じ続ける純真。

きつと子供の頃は唯一それが赦される時期。夢を見ることは罪ではないし、どんな理想を掲げたって断罪されない。でもそれは永遠じゃない。夢は須らく消えていつて、いつか本当に手の届かない嘲笑の『幻想』^{ユメ}に成り果てる。

大人になるということはそういうことで、綺麗な夢を汚い現実で汚していくということ。

だから、わたしに間違いが在ったとすれば幼少期。

まだずっと、大人になつてしまつたには早過ぎた。

でもどうすることも出来ない。知ってしまったら、気づいてしまつたら。後戻りは出来ない。汚いモノを無抵抗に受け入れられるの

は、それが汚いモノだと認識していないから。それを穢れと知ってしまったわたしには、手を伸ばすことが出来なかった。

遠くから見た借り物の知識。ずっと汚れることの無い、わたしの理想。

そうしてわたしは、少しずつ壊れていった。

時の流れで体は大きくなるのに、心はいつまでも子供のまま。

矛盾した在り方。憧憬も理想も空想も童心も。何もかもが穢れを知らぬまま、ただ知識だけが増えていった。

幼い頃に知ってしまったから。世界の全てを心に刻んでしまったから。

或いは、わたしは怖かっただけなのかもしれない。

全てを見透かすことが出来る故に　わたしは、何もかも跳ね除ける道しか選べなかった。

……

「どした、ぼーっとして」

「……………」

呼びかける声に意識が覚醒する。勿論、覚醒といっても今まで眠っていたわけではない。少しだけ考え事をしていたら、周りが見えなくなっていた。そういうのが正しいと思う。……まあ、考え事っていうのも違うんだけど。

「なんでもないですよ。昨日兄さんが作ってくれた夕飯が、あんまり美味しかったので。味を思い出していたんです」

「……そうかい。そいつは光栄だよ。誇っていいんだな？」

「ええ。ただしわたし意外に振舞っちゃいけませんよ。裁判になりかねません」

「……………」

沈黙する橙弥。さくつ、と話題を転回して終了させることに成功した。うん、これで解決。

からかうつもりで言ってみたけれど、兄は少なからず心に傷を負ってしまっただけでなく、「味付けが不味かったかな……」なんて呟いている。今後の為に今更になって昨晚の反省をしているらしい。

昨日色々あって帰宅が遅れたわたしを待っていたのは、無秩序に配列された和洋中の混沌的食卓と自信満々な表情の橙弥だった。状況こそカオスではあったけれど、普段とは違う兄の粹な計らいに、わたしも少し目頭が熱くなったことは否定できない。

……一口、それを食べてしまっただけ。

どうも兄、遙瀬橙弥には料理の才能が欠如しているらしかった。

これはもう、平均とか関係ナシに欠点モノ。まさか本当に、この世に塩と砂糖を間違える人がいたなんて。わたしだって知らなかった新事実だった。

気持ちだけ受け取って、今度からはちゃんとわたしが炊事は担当することを誓ったわたしだったとき。と、思考を切り上げる。

最近どうも安心してることが多い。それは周囲から見取れるほどらしく、今だって橙弥に指摘されてしまったというわけだ。

あまり気を遣われるのもいい気がしないので、この度を以って少し意識してみることにしよう。そうしたところで意味が無いということは、解っているけれど。

「ところで兄さん、昨日はすぐ家に帰っていたんですか？」

何気なく尋ねてみる。

本当はそんなことどうでも良かったけど、何も考えないで歩いてるとまた同じ轍を踏みかねない。こうして会話をしている分にはそちらに意識がいつて、途方も無い無意識の旅行に旅立つことも無い。

「ん？ いや、昨日は屋上に行ってたかな。まあ、寒かったし、行ってたとか言っても一時間くらいだったと思うけど」

「……屋上は立ち入り禁止区域だと、半年も前に言ったはずだと思

うんですけけどね」

「そうだったっけ？」

橙弥は悪びれる風も無く白い気を吐き出して、

「そういえばそんなことも言われたかな。気にすんなよ、お前に迷惑は掛けないし」

「気をつけてくださいよ。ただでさえ成績が芳しくないのですから、何か面倒事まで起こしてしまえば一巻の終わりです。……まあ、成績は少しずつ改善されてきていますけど」

今度はわたしが白い息を吐く。

「屋上なんかに行って、そもそも何をしているんですか？」

「別に何も。あるだろ、一人になりたいときって」

ダウト。あからさまに嘘を吐いていることがバレバレだ。とは看破していたけれど、口に出すことはしなかった。それを敢えてお咎め無しにしておくのは……なんていうか、橙弥にも言いたくないことがあるのだろうと思ったから。

人間誰しも言いたくないことはある。

例えば血を分けた兄妹であっても。

血を分けた兄妹であるからこそ。

わたし自身が、そうであるように。

短縮授業であることに加えて、さらに授業自体がすかすかになっているためか、遙瀬空的g午前における時間の経過は普段よりも三段階くらい早かった。四限目が終了して、既に形式だけみたいなのショートホームルームも終了。

帰り支度　といっても帰宅するわけではないので、鞆に荷物を詰め込んでいるだけだ　をしていると、暦がぱたぱたやってきて

はこんなことを言った。

「そ、空！ さ……はっ！？ あああ、えっと、空ひゃん、一緒に帰りませんか!?」

「暦、落ち着いて」

「ふあい！ です！」

「だから落ち着いて」

どうしてこの娘は、こう、同級生と会話するだけで神経をすり減らし続けるのだろうか。

御巫暦。家は代々神社の神主をしているらしい。そんな彼女はわたしの友人の一人で、入学してから確実に一番会話の累計時間が長い人物である。だというのに、暦は未だにわたしのことを敬称付けで呼称してくるのだ。一時期矯正しようとしてみたけれど、結果がついさっきの言動なのだから元の木阿弥もいいところ。

「……それも違うかな」

状態は一時的にもプラス方向に傾斜していないし、その後はさらに酷くなっている。同級生なのに敬語を使われる、というのは本来気にしなくていいようなことなのに。結果として突付いた藪から蛇が出てきたわけだ。

たまに暴走なしで呼び捨てしてくれるけど、その後の口調は改善（というべきかはイマイチ不明だけど）されていないものだから違和感がある。ちなみに今のは悪いときの症状だったりする。

ため息一つ。見ると、暦はまだばたばたしている。何がそんなに彼女を責め立てているのか、甚だ疑問だ。

「暦」

自分でも意図しない内に声が慈愛染みっていた。改める気も無く、そのままの口調でわたしは、

「貴女は部活でしょ」

「はわわ！」

「それに、このやり取りは昨日もしたじゃない」

「はわ！ はわわわわ、わわわ!!」

「……………」
「ごめんなさい、わたし、バカで、なんていうか、その、一回で覚えられない性格で……！ ええと、えつと、だからその、ごめんなさいです！ 本当に全知全能誠心誠意全身全霊のごめんなさい！」
「……もう、意味わからなくなってるし」

全知全能誠心誠意全身全霊のごめんなさい。ちなみにこの言葉、入学した四月以来どんどん進化を遂げていった言葉である。初めは『全身全霊のごめんなさい』だったけれど夏以降 あの事件が終わってから数週間後 に『誠心誠意』が加えられた。そして現在 曆的最上級の謝罪文句は『全知全能（以下略）』と落ち着いている。……まだ長くなるかもしれないけど。

暴走した、見方によっては発狂した曆を宥めて正常な会話が可能なレベルまで精神を安定させるのに数分。わたしも手馴れたものだ、と自分の順応能力に感心してみる。あるいは調教か。……それは、嫌だな。

「それじゃあ、空さんは弓道部に見学に来てくれるんですね」

「……わたし、そんなこと一言も言っていないけど」

こほん、と咳払いを一つ。御巫曆という少女はこれが地なんだ。彼女に悪気は皆無だし、わたしだって気を悪くしたりはしない。現代で類稀なる天然性 と過去に橙弥が称したことがあるけど、それが実に正しいことを日々わたしは実感している。

「まあ、わたしも直ぐには帰らないから、お昼はいつしよに食べられるわよ。って言ったつもりだったんだけどね」

「そうでしたね。はい」

曆は納得したように頷く。晴れやかで、理性的な目。こんな状態が長持ちすればいいのに。

一日一回程度の暴走なら、わたしも耐えられる。というより最近ではその一回の暴走で定期的に溜め込んでいるものを吐き出してもらわないと逆に不安になるくらいだった。御巫曆が本当の意味で発狂するとどうなるか、わたしは一度体験しているのだ。

昼食の場所はどちらが言い出すでもなく教室となった。

一つの机で食べる分には一向に構わないけれど、椅子は二つないと困る。なので曆には先に主が帰宅して空いていた後ろの席に座るよう促したんだけど、曆はそれを頑として否定した。曰く、

「人様の物を無断で使用するなんて、仏の道に反します」
だそうだ。

変なところで頑固なので、こうなってしまったら聞かない。立ち食いさせるわけにもいかないの、わたしが後ろの席に移動して椅子を明け渡した。そんなことから食事はわたしが後ろの空席、曆がわたしの席に座って食べるという奇妙な形になる。

扱いくいといえ、扱いくい。

何でもないことだけれど、曆のお弁当の中にはしっかりと肉料理が入っていた。

ぱくぱく。むしゃむしゃ。とかいう擬音が似合いそうな曆の食姿を何の気なしに見ながら、わたしは一人夏のことを回想していた。八月の暑い日。その日に橙弥と喧嘩になったとか、そんなことはすっぱり忘れたことにして。どうしても忘却しきれないある事件の記憶。

果たしてそれを事件などと称するのは間違っているのではないかと思うような、誰も知らないところで進み終わっていた。正しく夢のような話。その中心人物が御巫曆だった。詳細は再び一から吟味する必要がない。

わたしが現在思考の主題としているのはその後日談だ。といつても今こうしている事さえ理屈の上では後日談だけ。わたしが思い出すのはそんな屁理屈抜きの直後日談。

件の中心にいたのは曆で、その後遺症というかなんというかつまり精神上に残るだろう異常の処理を、わたし達（わたしと橙弥）は朔夜さんに任せることにした。橙弥曰く、六月にも似たようなことを朔夜さんはしていたらしいので一応信用はしていたけれど、不安だっただけだった。

結果からいうと。

わたしの不安は杞憂以外の何物でもなく、純度百パーセント間違っことなきそれだと思ひ知るようになる。

後遺症どころか、それ以後に初めて暦と顔を会わした時既に暦は今の調子だったのだ。わたしでさえ気負いしたというのに、あの暦が笑顔で『おはようございます、空さん！』なんて場違いにも近しいテンションで時頃の挨拶をしてくるなんて……どう考えても不自然極まりない。

そう。まるで全部忘れているみたいに。
事件の話は暦としていないし、これからするつもりもない。故に真相は永遠に闇の中だ。ヒントがあるとすれば昨夜さんに事後処理の方法を伺った際の会話で、

「事後処理？ 知らないよそんなの。あのな、私は傍観専門なんだよ。異常を持って余すなんて出来やしないよ。精々傍観者を決め込んで遠すぎ近すぎない距離で笑ってるさ、私は」

「……酷い話ですね。だったら、暦はどうしたんですか？ 確実になにかしたとしか思えないほど正常化してましたけど」

「お、巧いことを言うな」

「……はい？」

「正常と清浄だろ？」

「……知りませんよ、そんなこと。たまたま偶然です。それで、実際のところこの真相はどうなんですか。いい加減話してください」

「……なんだ随分狭量だな今日は。また遙瀬と喧嘩したのか？ ……」

「いや、すまん、冗談だよ」

悪びれる様子などなく、関心の色がまるで絶えた瞳を窓の外に向け、

「私は知らないよ。何度も言うけどね。事後処理は知り合いに任せただけ」

というものがある。どんな風に暦の精神を洗淨し、朔夜さんじゃないけど、浄化したのか。それら一切の方法についてはまるで解らないけど、それを行った人物には想像がつく。

朔夜さんが言うところの『知り合い』。そして興味を亡くした遠い視線。異常の処理。異端。破綻。

脳裏を過る黒い立ち姿。

棺木境介の存在が、確かな結論としてそこに在る。

「実はですね、わたし、空さんと食事中の会話をしながら弓道部へお誘いを掛けようと思ってました」

思考返還。わたしは虚ろだった焦点を暦に定める。彼女は……鮭の切り身をばらすのに悪戦苦闘していた。

「で、どうですか空さん！ 弓道部に来ませんか!？」

「……急よね。普通さ、もっとこう、その面白さを具体的かつ魅力的に説明してから勧誘つてするもんじゃないのかな」

突然の告白に淡々と応える。ところで食事中の会話は仏の教えに背くことはないのだろうか。それも今更だけれど。

あくまで一般論を述べたわたしに、暦は鳩が豆鉄砲を喰らったみたいな顔をして、

「え？ そうなんですか!？」

「うん、普通はさ」

ていうか基本でしょ。

暦はどうしてもわたしを弓道部に入れたいらしい。それが弓道部全体の意思であると以前橙弥に聞いたけれど、ちょっとしつこい。

まあ、わたしだってこんな時期は時間が余っているし、仲のいい友達がそこまで言うならと考えて行動するところだけど、前置きをして、

「でも今日はダメかな。ちょっと外せない用があつてね。ごめんね、暦」

自分でも驚くことがあるとするならば、この時遙瀬空の口調は例えようもなく嬉々として弾んでいた。

適当な会話を交えながらの昼食は時計を確認すると思いの外長い時間を経過させていた。もともと、合計時間の内三分の一ほどは先に食べ終わったわたしが暦を待つていた時間になるけれど。妙に人に気を遣う性格をしている割には、暦は自分が待たせているわたしに対して著よりも頻繁に口を動かしていた。その勢いはさながら積もる話も沢山な、十年來の友人 或いは夏休み明けに再会した中学生のようで……。無邪気といえば、聞こえはいいと思う。

そんなこななをしてやつと暦のランチボックスが空になり、わたし達は各々の目指す場所へと足を向かわせたのだった。

暦は部活動の為に弓道場に。

わたしは朔夜さんの待つ準備室 ではなく、二棟の屋上へと向かい、無言のまま足を急がせていた。

自分でも何がしたいのかよく解らない。きっと朝の登校時、橙弥が言ったことが関係している気がするんだけど……それも違う。それだつてやっぱ理由の一部なんだろうけど、決定打というには足りない気がしてなら無い。

衝動。或いは激情。

予感。或いは予知。

目的。或いは破綻。

希望。或いは絶望。

何かに背中を押されていると錯覚するほど無感動にして無感情のまま感情に流されていく。階段を一段ずつ昇つていく足に迷いは微塵もなく、その先に求めた答えがあると確信しているみたいに次の一步を急ぐ。

答え。そんなもの、どこにもないというのに。

そんなもの、どこにでもあるというのに。

程なくして十二段の階段を昇りきる。数えてはなかったけど、増えたりはしてないだろうから恐らく十二段で間違いない。

踊り場で鉄扉の前に立ち、わたしは一度盛大にため息を吐いた。

この後の展開を予想する。

一、遙瀬橙弥に遭遇する。

二、そこには誰も居ない。

三

「……………やっぱり、そうなる、か」

他の第三者と遭遇する。

開かれた扉。穿たれた世界。

わたしの視界は先の答えが明確に三つ目であることを示していた。

「こんにちは、空ちゃん」

今日もまた不機嫌な空模様。

厚い雲が覆い隠す空の下。

蒼天穿たれることなき灰色の平面の下で。

御桜流深という先輩は、にっこりと無感動に無表情に　そして

絶望的に微笑んだ。

一人の少女の物語。

運命や宿命なんていう言葉で片付けるには不釣合いな、一つの物語。

誰が物語るべくでもなく、誰に物語られるべきでもない。それは既に終わったことなのか、これから先に在ることなのか、或いは今まさに進行していくものなのか。誰にも解らない。

けれどそれが物語である以上語るべき者も語られるべき者もない世界の中でさえ、語り部は存在する。世界の心理を物語り、世界の果てを見据える語り部。

もしもその物語が物語として成立し、認められ、或る一つの結末を持って大団円を描くことに成功したとして。

その物語の前書きにはきつと、次の文章が綴られることだろう。

「この物語は現実であり、非現実であり、正常であり、非常であり、日常であり、超常であり、純真であり、邪であり、果てなく、須らく、この世界の全ての穢れを収束し、渦中となり、絶望となり、色褪せ、終焉さえも終演し、開幕から閉幕まで永遠の間を刹那の時と共に過ぎ行き 果たして、これはどこにでもあるようなくならぬい、戯言のような喜劇。救いではなく断罪ではなく。登場人物は全て道化。世界の上で滑稽に転げ回る醜い道化。とても美しく。美麗。三千世界で燦然と輝く もっとも忌み嫌われた、穢れた物語である」

わたしは言った。
加えて、

「尚、この物語はノンフィクションです。この物語に登場する個人、団体は現実の物と連結し、平行して存在する唯一無二です。ご注意ください」

自虐的に、笑ってみる。

小さい頃に考え付いたとびっきりの冗談だった。

小さい頃。わたしがこんなことになってしまつて間もない頃。世界の穢れを知つてそれでも尚、まだそこに救いが在ると信じていた頃。誰かに聞かされたわけでもなく、気づけば脳裏に焼きついていた世界の標語。

その言葉を人前で口にしたのは初めてだったので、正直噛まずに最後まで言えたことには驚きだった。そして言っているわたしでさえ意味不明なそれを、御桜先輩は実に楽しげに聞いていたというのは驚きのようで不快。気に喰わなかった。

「で、終わったかな、空ちゃん？」

「はい。ご静聴、ありがとうございます」

拍手喝采こそ送られはしなかったけれど。

拍手喝采など送られるべきでないけれど。

ここ、二棟の屋上で彼女と遭遇することはわたしに取つてある意味で予想道理であり、予想外だった。単純に考えて、橙弥は昨日ここに来ていたというし普段からよく足を運んでいる。ならば今日ここで橙弥と会うことは何ら不自然でも不思議でもない。第三者がないという確立も排除しきれないけれど、兼ねてから橙弥に注意しているようにここは生徒立ち入り禁止区域。可能性はかなり低いと考えていい。

なら、単純な三択で言うならば。

遙瀬橙弥に会う。七十パーセント。

誰とも会わない。二十五パーセント。

第三者と会う。五パーセント。

といった具合だろう。橙弥が足繁く屋上に通う理由を、ここには人が寄り付かず静かだからと語っていたことも踏まえて凡そ現実的な数字と見ていい。

それでも尚。

単純な確率論では明らかに劣勢な立場でありながら蓋を開けてみれば答えは五パーセント。

運命さえも捻じ曲げて。道理など突き破って。

彼女に問いかければ即答するだろう。

決まっている。だって、貴女はわたしに会いに来たんでしょ？

それ故に、この結果が在る。

と、そう、彼女は、御桜流深は答えるだろう。さも当然のように。さも当然で在るが故に。

だというのならば、初めから確立なんて関係なかったのか。元より百分率ですらない。会うか、会わないか。それだけの二択。ほんの気まぐれでわたしがここまで足を運ばなければ、結果は後者だっただろう。そして、そうしなかったからこそ、この結果が在る。

踊らされているんじゃない。踊ってやってるんだから。

「それで、わたしに何か話があるんだよね？」

「ええ。だからこそ、校則を破ってまで屋上なんか立ち入ったんですから」

「え？ ここつて立ち入り禁止なの？」

「はい。……ご存知、ありませんでしたか？」

「……………よく、そんなこと知ってたね」

どうやら本当に知らなかったらしい。人が格好よく独白を決めていたのに、なんだこの空気。

「まあ、わたしも一応優等生をやっていますからね」

軽口を利く。

……やっぱり、疲れるな。

この人の前で『遙瀬空』を演じるのは。

「面倒なら止めてくれていいよ。本音で話し合おうよ、空ちゃん」

「……………」

何もかもお見通しというわけだ。この先輩は。

だからこそ、わたしは彼女が苦手だし。だからこそ、わたしは彼女が気に入ってしまった。

好敵手。叩き潰すべき、明確な敵。

「そう それじゃあ遠慮なく」

語勢を改める。これ以上自分を偽り必要など無い。わたしはわたしとして、『世界の代弁者』である遙瀬空として応じることが出来る。

「話というなら」

わざとそこで言葉を区切る、一度だけ必要ではないと解っていないから屋上がわたし達を除いて無人であると確認した。答えは言うまでも無い。屋上は世界から隔絶されたように、閉じていた。

風に流される髪を押さえつけようともせず、わたしは続きを発する。

「昨日の話の続きです」

その為わたしはここに来た。今なら断言できる。

橙弥がいるかもしれないから だから何だというのか。そんなのは偽物の理由でしかない。建前にさえなりえない。自分で自分に言い訳をしているだけ。

本当は わたしは御桜流深に会いたかった。

会って話したかった。話して、はっきりさせておかなければならないのだ。

わたしがわたしとして、わたしの物語をわたしの世界で進行させるために。そのために、一度こうして御桜先輩とは正面から向き合っておく必要があると判断した。幸運にも布石は昨日、向こうから打ってくれていたし。迷う理由なんて無い。

長い間探していた答えに、やっと辿り着けそうなのだ。

遙瀬空という物語の結末に。

例えばそれは黒い男の登場であったり。変人教師との出会いであったり。遙瀬澄弥が兄であったり。わたしが、世界の全てを知ったりしたあの瞬間から 遙瀬空は終演に向かい始めた。

「隠す必要なんてないし、きつと気づいていると思いますけどわたしは普通じゃありません」

「ふうん。もしかして人造人間だったり、サイボーグだったり？」

「……真面目な話をしてるんだけど」

唐突な告白も一蹴された。シリアスな空気が断片たりとも存在しない。

穏やかな、話にそぐわない空気の中でわたしは構わず続ける。

「普通じゃない というよりも狂っている。端的に言うなら、『世界の全てが視える』とでもいうのかな」

合いの手も無い。

御桜流深は無感動の笑みを肯定して、聞き手を忠実に演じていた。

「未来予知。過去視。読心術。超感覚的にして『何かを知る』という能力に特化した異常、それがわたしです。もつとも、それを超能力とか便利な言葉で片付けるのは違うけれど。わたしのこれには、制御が利かない。否応に全てのことを知ってしまう。そんなところ。今では少しくらいなら抑えることも出来ないことも無いけれど。

そんなところです。蓋を開ければ、わたしなんてこんなもんなんですよ、先輩」

誰にも言ったことの無いことだった。朔夜さんは不確定的にも何か普通でないものは感じていたようだけど、ここまで常軌を逸した真相には行き着いていないだろう。

どういふ訳かは解らない。わたしがこのことに気づいたのは幼い頃で、今日まで原因は全くの不明。時折意識が変なものを拾ってきても、知らない間に全てが終わって全てを知っている。とでもいうのか。そんなことが子供の頃からあった所為で、年齢が二桁に満た

ない頃からわたしは世界の全てを知っていた。綺麗なことも、汚いことも。純真も邪も。

それが遙瀬空。それが、遙瀬空という異端。異端であり、破綻であり、異常だ。

どこからか、意識が知識を拾ってくる。それは即ち、わたし自身は一つの場所に立ち止まっていてまるで進歩していないということ。つまりわたしは今でも十年前後昔のわたしと変わらない。歩き出すこともせず立ち止まったまま。そうして時間が過ぎるのを眺めていた。

全部知っていたから。知る必要はなかった。

全部知っていたから。触れることを恐れた。

遙瀬空は停止した存在。一つの場所に留まり続ける、異端。

わたしが話し終えて口を閉ざした後も、御桜先輩はまだ聞き手に徹していた。これ以上こちらから言うことなんて無いというのに、まるでそれに気付いてないかのよう。言うべきことをわたしが口にしていないと糾弾する。自分はまだ聞くべきことを聞いていないと訴える無言。

僅かな沈黙が肌寒い空気を漂った。

ややあつて、

「それが、どうかしたの？」

御桜先輩は怪訝そうな表情でわたしに問いかけた。

「そんなこと。昨日の話の続きって言うんなら、そんなのはわたしが聞くべきことでもないし、貴女が話すべきことでもないよ。そんなの、どうだっていい。些細なことなんだから」

きよとんと首を傾げて、初めて、御桜先輩は不満そうに表情を変化させる。その仕草が茶化す風でなく、純粹に真実を突きつけているだけだということを確認に示していた。

昨日の話。昨日の話の続き。確かに、そう前置きしたのはわたしだった。ならば今の話は昨日の延長線ではなく、唯の自己満足な蛇足でしかないというのか。……そう考えれば、そう思えないことも

無いけれど。それでも、昨日わたしが御桜先輩の前で自覚的にぼかしたことと言えばこのことだし　わたしが詳らかにするべきはこの部分ではないのか。

でも確かに。昨日廊下で話したことの主題はこんなことではなかった。だから御桜先輩が違うというのなら、違うのだろう。わたしが口走ったことは全部彼女にしてみればどうでもいいことで、わたしがわざわざ屋上まで足を運んだのはもっと別の話があると彼女は思っていたのだ。

つまるところ、御桜流深は

「御桜先輩、今日ここでこれまでわたしが話したこと、少しでも覚えていますか？」

「ぜんぜん」

……悪びれる風も無く、一切の罪は自分にないと言わんばかりに御桜先輩は語調を弾ませる。なるほど、素晴らしい忘却速度だ。わたしの話に対して大人しい聞き手を演じていたのも、単に興味が無かっただけということらしい。

「そういえばここ、立ち入り禁止なんだってね」

「……それはわたしが言いました」
ていうか、そこは覚えてるんだ。

少しだけ、わたしは少しだけこの人の常人的な部分を見た気がした。

仕切り直しに。わたしは小さく、こほん、と咳払いをして御桜先輩を見返す。人畜無害の笑顔を湛えて、御桜先輩はやはり自分の発言権を放棄しているようだった。やはり、わたしが何か言うべき状況らしい。

しかし一体何を言えばいいというのか。御桜先輩はわたしに何を求めているのか。

それが解らない。……解ら、ない。

昨日のこと。

久しぶりだね。

ここじゃない。

覚えててくれたんだ。

ここじゃない。

へえ、記憶力。さすが、生首席。

ここじゃない。

好きなんだよね、が。

……ここ、だ。

初めから御桜流深はそこにしか興味が無かった。その後の話なんて全て蛇足でしかなくて、もしかしたら何もかも彼女の記憶として残っていないのかもしれない。御桜先輩が最初からずっと気に掛けていたことは、その一つだけだったんだ。

「で、答えは聞かせてもらえるのかな、空ちゃん？」

「……………」

問答の命題にわたしが辿り着くのと同時に、そのタイミングを圖ったかのように御桜先輩が問いかける。

昨日の問い。わたしが意図的に忌避した、その質疑。解っていた。かわし切れないことなんて初めか解っていた。堂々巡りのように、いつかまた同じ質問を投げかけられるだろう事くらい容易に推測できていたはずなのに。それが、こんなに早いとは思ってなかった。願わくば、その巡り合わせはわたしが明確に提示できる回答を見つけてからやって来て欲しいと思っていたのだけれど。……こればかりはどうしようもないことで、それが今ならば、わたしはわたしの持てる解答をここで明らかにする必要がある。

灰色の曇り空。曇天なる壁面。蒼天穿たれること無き、我が心象の具現。

まったく。

今日も今日とて、あっちの空は遙瀬空と心象を共有しているらしい。

ため息一つ。見上げた視線を下ろしてくる。視界の中心に御桜流深という敵を見据えて、轟然としてわたしは言い放った。

「わかりません」

それが、解答。

威風堂々として言うには足りない解答だけれど、それが今のわたしに出来る精一杯。

その答えに、御桜先輩は 心底怪訝な面持ちで首を傾げてしまった。

「わかりませんよ、先輩」

再度わたしは繰り返す。それが素直な気持ち。

「わたしはですね、先輩。誰のことでも知ってるし、世界の理の上にいるものなら何だって知ることが出来ます。けれどそれだけは自分の気持ち、遙瀬空の中身だけはどうしても解らないんです。

誰が言ったか知りませんが、空は人を映す鏡だそうです。でも鏡で解るのは自分の表面だけ。わたしが知りたいのは外じゃなく中ですが、あまつさえ、今日だって空は曇っていて鏡として機能さえしていない。遙瀬空という『空』は ずっと、ずっと曇り続けているんです」

「……………」

御桜先輩は何も言わない。今度の沈黙は本当に聞き役に入っているということのようだけれど、彼女の表情を形容するならむしろ聞き入るよりも驚いているといった方が正しい。まさかわたしの解答がイエスでもノーでもない、曖昧なその場凌ぎでありながら、それでいて完膚無いまでの本心だとは予想も付かなかったんだろう。

「…………わたしは、わたしのことが解らないんです。だからずっと探しています。何でも知っているのに自分だけが曖昧な靄を帯びているようにはつきりしない。言うならば…………わたしは自分の『色』が解らないんです」

そこで一息置いて、

「もしかしたら、本当はそんなの、初めから無いのかもしれない」

ずっと解らなかつたこと。

世界の心理。

人間の真理。

因果の審理。

そんなことは全部知っているのに、どうして、わたしは自分が解からない。

確かにここに在るのに。確かに実在している筈なのに。迷子のように彷徨い続け、一生見つからない何かを探し続ける。確かに世界に在るのに、そうと実感できない亡霊のような存在。

それが、わたし。

それが、遙瀬空。

御桜先輩はわたしに訊いた。兄　　遙瀬澄弥のことが好きなのかと。

けれどその質問は今更他人にされるまでも無く、何度も自身で繰り返してきた。何度も何度も。始まりは思い出せないくらい遠いところに置き去りにして　　停止しているはずなのに　　今では面影さえ見当たらない。

どうなのだろう。

遙瀬空は、遙瀬澄弥をどう思っているのだろう。

幾らわたしだって社会的なルールくらい心得ている。わたし達は近親である。兄妹である。そんなことは解っている。小説や漫画じゃないのだから、妹が兄を好きになるなんて事は無い。ある筈が無い。それは禁忌だし、それ以前に倫理的に有り得ない。けれど近親だとか、倫理も道徳も何もかも無視してしまったなら、わたしは兄をどんな風に認識するのか。

解らない。解らないから、怖い。解らないことは、怖い。

だって、解らないから。

わたしは、知らない間に大切な何かを零してしまいそうだから。

「　　違つよ、空ちゃん」

唐突に、御桜先輩は言った。

違う。わたしの言葉を、否定した。

「いつだったかな、これ話をするのは二回目なんだけどね たった一人だけで存在してる人間なんていないんだよ。人間はね、みんな世界で繋がってる。わたしたちがいる世界は誰か一人だけの物じゃない。無数のそれが重なり合い、影響し合って存在している。

ずっと遠い、世界の起源。全ての現象の根源としての中枢で人間は繋がってる。どれだけ派生しても、元を質せば一つの原因に行き着く。だから世界に孤独はない、孤立だって無い」

語る御桜先輩の表情は酷く哀しそうだった。

何か、思い出したくない過去を思い出しているような。そんな表情。

その表情の裏側を、わたしは知ることが出来ない。

このわたしが、世界の代弁者たる遙瀬空が知りえない。

だって、初めから、この人だけは

「だからね、空ちゃん」

言葉を区切って、御桜先輩は言った。

「貴女は破綻してなんていないよ。 貴女はまだ、世界と繋がってるんだから」

きつと、自分の色だって見付かるよ。その言葉が、静かに遙瀬空に浸透した。

満面の笑み。哀しそうな笑顔。

途方も無く遠い、誰に向けるでもなくスイッチで展開した空っぽの、無表情の笑顔。

それを初めて、わたしは、

「でもさ、近親相姦は違法だよ」

「うるさいですよ！」

尊く……なんてコンマ数瞬間でも思ってしまった自分が赦せない。何を血迷っていたのか。

「あれ？ 好きじゃないんだよね。だったら関係無いよね」

「いや、まあ……そうですね。ていうか、貴女にそんなことを言

われる筋合いはありません」

「ってことはさ、好きなの？」

「何でそうなるんですか！」

「だーかーらー、好きなんだよね」

「いや、ですから、ですね　その……」

「近親相姦は違法だよ」

「ええい、しつこい！」

掛け合いが掛け値なしに稚拙だった。というか高校生同士の、しかも先輩後輩の交わすような会話ではない。しかし結果として、それまでの重苦しい空気はどこかへ行ってしまったのも事実だ。場面的にも、わたしの内情的にも。

これが御桜先輩の手腕だというのなら素直に感嘆するしかない。

「と、とにかく」

短めに言って咳払い。わたしは自分でも驚くくらいに慌てた声を出していた。

気づけば普段よりも早い心臓の鼓動が収まるのを無心で待って、

「……わたしは橙弥のことをどう思っているのか、解らないんです」
会話は不毛なやり取りの末に、こうして最初に提示した結論へと
回帰を果たした。

近親。兄妹。御桜先輩じゃないけれど、倫理的には、絶対に恋仲
なんてありえない。

「うん。解ったよ。それが正直な返事なんだからわたしもこれ以上
は追及しないよ」

「ご期待に添えなかつたのなら、謝りますよ、先輩」

「うん。酷くご期待を裏切られたかな」

「……そこ、素直に言うところじゃないです」

ファーストコンタクトから半年。

その間に話をしていなかったとはいえ、実質それだけの期間が経過していることには変わらない。わたしはそれだけの長期間を有して、やっと御桜流深という人間を理解した。

そつだ。やっと気付いた。この人は……変人だ。

「では、この回答は保留ということ。いつか、わたしが確かな答えを出せたらその時に」

御桜先輩は、楽しみにしてるよ、と微笑む。

その屈託無い笑顔のまま、御桜先輩は続ける。

「ところで空ちゃん、これはわたしの個人的な疑問なんだけどね、答えてもらえるかな？」

興味はなくても目の前に占い師がいたら自分の運勢を尋ねてしまふ、そんな程度の心境なのだろうか。無駄な考察を少しだけして、わたしは首肯する。ただしそれは、答えるべきことが今のわたしに答えられる事柄ならば、という前提を暗黙の了解とした上での了承だった。

御桜先輩は笑顔を崩さずに、その詰問を口にする。

「わたしの中、視える？」

「……………」

それは。それだけは。

「いいえ。……何故だかは解りませんが、わたし、御桜先輩だけは……理解できません」

だって、初めから、この人だけは　わたしでさえ、看破出来なかったから。

理解できない、の部分にささやかな侮蔑の意思を込めて、わたしは正直に返答する。

忘れてはいけない。遙瀬空にとって御桜流深は明確に敵だということ。

とはいっても、彼女がわたしにとってどんな敵で、何をめぐって争い、どのようにして対立しているのかなんてことはわたし自身にも解らない。御桜先輩からしてみれば、わたしの苦手意識や敵対意識なんかは一方通行でしかないのだろうし。直感的に、わたしが判断しただけなのだ。この相手だけは未来永劫和解すること無き『敵』なんだと。

理解できない、と答えたわたしに御桜先輩は肩を竦める。その動作も相まって彼女の笑顔が苦笑に見えてしまったりしたけれど、それほど残念そうにも見えない。御桜先輩は別にわたしの悪意が読み取れたから、ではなく元より返事は解っていた、という意味でそれをしたようだった。

「そっか、ありがとね」

お礼を言われることはしていないけれど、感謝の言葉を貰っておく。

そしてこれを以って わたし達が語ることは無くなった。全部、終わった。

後はわたしが先の問いに答えるだけの解答を導き出すまでの、保留。いつになるかは解らないし、そんな時はいつまで経っても来ないかもしれない。完全終結という訳じゃないけど、昨日から続いたこの対立関係（そう思ってるのはわたしだけだけど）は一先ず終戦を迎えた。

お互いにこれ以上言葉を交わす必要は無くなって、御桜先輩は金網のフェンスへ歩いていく。転落防止のフェンスに指を絡めながらグラウンドを俯瞰する御桜先輩の姿は、妙に絵になっていた。なまじ美人なだけに仕方が無いのだけれど……それが、なんだか気に食わない。

別れ際に一言何か言うべきかとも思ったけれど、わたしは結局何も言わないことにした。

無言のまま振り返って、鉄の扉に手を掛ける。心なし入って来るときほどの重量を感じない。暗闇ばかりの踊り場を開放して、わたしが一步足を踏み出したのと同時のことだった。

「わたしはね、空ちゃん」

既に語ることなど残っていない、そう思っていた御桜先輩がわたしに言った。

足を止めて、振り返る。

御桜先輩は依然として外の世界を俯瞰しつつ、わたしを見ないま

ま、

「 二年前に、遙瀬くんを壊したんだ」

寒さが張り詰めた空気の中。御桜先輩の言葉はよく響いた。

終わってみると御桜先輩との会談に、わたしは予測の二倍近く時間を費やしたことになる。

午後から授業が無く部活にも所属していないとはいえ、わたしにだって放課後の用というものはある。例えばそれは準備室の名目で学び舎の空き部屋を占領している変人教師に会いに行くとか、その程度のことだけれど。つまり、何が言いたいかというと。

わたしにだって、タイムテーブルというものはあるのだ。

予想よりも遅れた分の時間は、どうしたって取り戻すことは出来ない。時間とは永劫じゃないんだから。とはいえ、ここ、屋上踊り場から国語科準備室まで走って行くのも気が引ける。そんなのが大した時間短縮になるというわけでもないし、逸る気持ちを抑えきれない子供みたいに思われるのも嫌だ。

けれど、確かに。

確かにわたしは、この後の邂逅を楽しみにしてはいるんだけど。

「はあ 今日寒いな」

屋外から校舎内に入ったところで、冷えた体は直ぐには温まらない。

そもそもこんな所、外とほとんど気温差なんて無いんだから、わたしの体温は奪われるばかりだ。だから だから、とつと暖房の設備されている場所へ行こう。どうせなら少しでも早く体温を取り戻せるように。

……走って、行くことにしようかな。

そんな訳でわたしは結局駆け足を選択し、階段を下りていく。廊

下を走っていて教師に見付かるのも上手くない。人目のありそうな場所ではペースを落として。もっとも、今時そんなことを厳格に取り締まっている高校でもないのだが。

色々あるのだ、わたしにだって。優等生としての体裁とか、そんなのが。

そうして目的地に到着する頃にはわたしの思惑通り、体はすっかり温まっていた。

……少し、熱すぎるくらい。

気づけば息が上がっていた。肩が小さく上下しているのが解る。胸に手を当てて深呼吸し、心臓の鼓動が緩やかになるのを待つ。

よし、これでオッケー。

こんこん、と形式だけみたいなのツクを済ませる。いつものことながら、返事は無い。

「失礼します」

平静を装う声色で告げて、わたしは扉を開いた。

「……………」

一番、朔夜さんの姿が目に入る。部屋の中央に設置されたデスクに、いつもみために煙草を銜えて座す彼女の表情は　　なんだか、とつても不機嫌だった。

不機嫌。そう、不機嫌だ。

機嫌が良くないとか、表情に起伏が無いとかじゃない。明らかに機嫌が悪い。世界全てが忌々しいと呪うかのような、仏頂面とかそんなのを超越した表情。

よく言う例えを持ち出すなら、今の朔夜さんの視線はそれだけで人を殺せるみたいだ。中空を睨め付ける視線が……怖い。氷点下二百八十度くらいに冷えた視線に、わたしの暖かくなった体も瞬時に冷めてしまった。

なんだろう、朔夜さん。どうしてこんな、不快を前面に押し出しているんだろう……？

心当たりが在るとするならば今朝のこと。

昨日鍵を預けられた手前、教室に行くよりもまず準備室へやってきたわたしはそこで膝を抱えてしゃがみ込む朔夜さんを発見したのだ。職員室に行けばいいのに、と思いつながらこれぞというほど非日常的な彼女の姿に声を掛けあぐねていると、

「迂闊だった……」

「……………何がですか？」

「お前に準備室の鍵を預けるということは、即ち、お前が来るまでこの扉が開かないということだ」

朔夜さんは閉ざされた準備室の扉を指差す。

傍らには鞆が無造作に置かれている。鼻は赤く、コートをモーフみたいに羽織っている姿はなんというか、とにかく慈悲を刺激して遠慮が無い。うわあ……朔夜さん、もしかして涙目になってるんじゃないか……？

何が彼女をそこまで貶めているのか、甚だしく疑問だ。

「その……なんていうか、すみません。なんだかもう、ごめんなさい」

普段は威厳高く気丈な麗人である朔夜さんも、こうなってしまうとマツチ売りの少女みたいで見るに耐えない。わたしは急いで駆け寄ると何故だか謝ってしまい、急いで鞆の中から施錠開錠を司る鉄片を取り出した。

「ああ……いや、お前に責任は無い。私が愚かだったまでだ」

息が……息が白い。どれだけの間ここで座り込んでいたのか。

ほんとうに、どうして職員室に行かないんだろう。この人は。

いつまでも朔夜さんは鍵を受け取るうとしないので、準備室の開錠を行ったのはわたしだった。それと同時に始業の鐘が鳴り、場を後にする口実を得たわたしは、

「それじゃあ、失礼します……朔夜さん」

「ああ……すまないな」

何がすまないというのか、朔夜さんの言語回路は間違いないのもと別の形で機能している。始業の鐘から、担任が教室に入ってくる

るまで十分。わたしはその間に教室へと入らなければならなくなり、この日はランニングから始まったのでしたとき。

「……………」
なんてことが、あった。今朝、あった。

もしかしたら朔夜さん、今になってそのことで気分を害したというのだろうか。今になって、わたしに因縁を覚えたとも言おうのだろうか。いや、でもそれは、お門違いというもので、朔夜さん自身も自分の責任だと今朝方言っていたし

「なにしてる？ さっさと閉める、暖房が逃げるだろ。私は寒いのは嫌いなんだ」

「あ、はい。入ります。ていうか、なんかもう申し訳ありません」
謝ってしまう。

今の朔夜さんを前にしては、条件反射みたいに謝ってしまう。

部屋の空気は異常なまでに重たかった。原因は問うまでも無く朔夜さんその人であって間違いないだろう。

「それにしても遅かったな、空。遙瀬は一時間も前にやってきたというのに」

「ええ、少し私用がありました。すいません、先に言っておくべきでした」

「ふん。まあいい。別に私はここに来ることを強制はしていないからな」

曆じゃないけれど、今日のわたしは自分でも謝罪の数が多すぎる。しかも朱空朔夜さん個人に対しての回数が一日のほぼ百パーセントを占めていると思うと、余計に気が滅入った。

朔夜さんの存在が強烈過ぎて気づかなかったけれど、橙弥は既に登場済みだったらしい。扉を開放して初めに視界が捉えたのが朔夜さんでなければ気が付いていたのだろうけど。一度あの冷酷な眼に魅入られては他に気を回す余裕など皆無だというもの。

室内の空気に行き詰っているのか、橙弥もまたかなり沈んでいた。存在が、かなり希薄に感じる。

わたしはそんな橙弥の隣に腰を下ろし

「それで、だ。こんな所に、お前は何をしに来たんだ」

同時に出た朔夜さんの言葉は、おそらくわたしに向けられたものじゃない。

侮蔑、軽蔑、忌諱　　憚りなく呪詛を撒き散らすように発せられた一言は、

「いやあ、こんな所とはあんまりだと思えますよ？　ここは貴女の所有する空間であり、貴女が一日の大部分を過ごしている場所ではないですか。卑下する理由はどこにもありません。客人たる私にしてみれば、ここは邸宅として非常に身を小さくしていたのですけどね」

軽薄な微笑を満面に浮かべた、棺木鏡介がそこにいた。

「……お前は。……私は何も、この部屋を非難したわけじゃない。それとも、そうか。お前からしてみればここは犬小屋も同然の薄汚い廃部屋でしかないというのだな？　なら無理は言わない、そんな所に客人を招きいれたとなると私も気が引ける。迅速にお引取り願おう」

朔夜さんは、何もそこまで言うてないだろう、と突っ込みを入れたくなるようなことを言った。さつきからの不機嫌は、確実に棺木さんが原因ということだろう。昨日の会話からも窺えた通り、やはり朔夜さんは彼を心底嫌っているみたいだ。

悪辣極まりない朔夜さんの発言に対して、けれど棺木さんは笑顔のままて応える。

「いえいえ。客人としてこれだけの待遇を受けているのです。私には何の不満もありませんよ」

「私は、一度たりともお前を客人として扱ったつもりは無い」

いや、でもさつき確かに自分で『客人を招き入れる』とか言っていたのでは……。

「そうですか？　ですが、ご覧の通り私はコーヒーまで振舞われています。これに勝る対人礼儀としての客人の扱いは無いのではない

でしょうか？ ウェルカムドリンク、という言葉もあります」

「それは、その少年が勝手にしたことだ」

「……………」

朔夜さんの殺人的冷視線が橙弥を射抜く。

ただでさえ希薄だった橙弥の存在感が、さらに弱くなって気がする。

少しずつではあるけれど、わたしも状況を理解しつつあった。つまりは、朔夜さんがいつものように食堂へ昼食を取りに行っていた間に棺木さんが訪れ、入れ違いになってしまったところに橙弥がやってきたと。

コーヒーフツ出ただけで、こんなに人間は責められてしまうのか。

「あ、コーヒーフツをおかりをお願いします、朱空さんのお知り合いの方」

「……………え、あ、はい、解りました」

……………。

橙弥は、棺木さんの笑顔と朔夜さんの静かなる激情に挟まれながらコーヒーフツを淹れに行く。立ち上がる一瞬、彼の瞳がわたしに助けを求めていたけれど、この状況わたしにはどうしようもない。うん、ドンマイ、橙弥。

朱空さんのお知り合いの方、と橙弥は呼称されたけれど、その呼び名はどういう経緯で決定されたのだろうか。……………まあ、橙弥の性格から考えると、

「朱空さんの知り合いの者です。貴方は？」

「じゃあ俺も、そんなところですよ」

てなやり取りがあったのだろう。それで、その呼称。

棺木さんは、割と適当な人らしい。

ことん、とマグカップが置かれる。

「……………で、だ。初めの質問に答える棺木」

「おや？ 空さん、いらしていたのですか」

「……………」

……わたしは、一瞬どう対応するべきか思案して結局適当に挨拶をした。

無視を喰らった朔夜さんは不機嫌を二乗している。臨界点は、すぐそこかもしれない。

もしかしたらこの空気を意図的に作り出しているのではないかと、わたしは棺木さんを疑い始めてしまうほどだ。もし本当にそうだとしたら、彼は心の底から意地が悪い。何がしたいのだろう。

「ご心配なく。私の目的は既に果たしましたよ。旧友との楽しい会話は充分に楽しみましたし。ええ、はい。これ以上私がここにいる理由はありません。名残惜しくはありますが、そろそろ退散させていただきますよ」

新たに注がれたコーヒーを優雅に啜りながら、まるでそんな風でないようなことを棺木さんは言う。口では退散すると言ったけれどこの人、間違いなく帰る気など無い。少なくともカップが空になるまでは。

「……なあ、空」

地の底から這い出てきたみたいな声が聞こえた。

わたしの隣で必死に我関せずとばかり存在を殺していた橙弥である。場を憚り、というよりも単に他の二人に聞かれたくないだけか、かなり潜めた声は凶らずとも彼の現状を悲痛に演出していた。

「何ですか、兄さん？ ああ、よかつたらわたしの分もお願ひします。出来ればコーヒーでなく日本茶を」

「自分で淹れるよ……！ ……じゃなくて、あのさ」

後半は思い出したみたいに声のトーンが落ちていた。けれど、一声の音量的に十分朔夜さんと棺木さんに会話は気付かれているので今更感はない。それ以前にこの二人を相手に密談なんて出来なだらうけど。

「朱空さん、申し訳ありませんが煙草は控えていただけませんか？ 私はどうも紫煙が苦手ですね。凄惨な過去を思い出すようで」

と、カップ片手に棺木さんが意見する。不可解なのは最後、凄惨な過去がどうという部分だけれど。煙草に何か嫌な思い出でもあるのだろうか。

「知らん。ここは私の私室だ」

その懇願を、朔夜さんは一蹴する。遂にここは準備室ではなく正式に朱空朔夜個人の私室となつてしまった。オフィシャル決定を下した朔夜さんは紫煙を吹き出すついでのように、

「紫煙と私怨か。解りづらい上にくだらないな」

棺木さんの言葉を説明してくれた。紫煙と私怨。確かに解りにくい。

と、もしかしたら朔夜さんは反撃のつもりで言葉遊びに乗じたのだろうか。『上に』『下らない』……漢字にしなければ解らないのだから、難解度は棺木さん同じくらい。

仮にわたしの推測が正しかつたとして、果たして、そこに指摘を入れる者は無かつた。

それよりも帰るんじゃないのかお前は、と朔夜さんはさらに続ける。本当に棺木さんのことを嫌っている。

てつきりわたしは 曆を預けたり、橙弥の話だと六月の事件にも協力を仰いだりしたらしいから 口では散々言つても実際はそれほど嫌っていないんじゃないかと思つてただけだ。

「ええ、先程も申し上げましたが、私の用は既に済んでいますから。そちらのお話が済めば直ぐに退散致します」

流し目がわたし達に向けられる。やはり、密談など出来ようものではなかつた。それとも、単純に先の橙弥の声が大きすぎたのだろうか。

「どうぞ続けてください。ああ、私のことでしたらお気遣い無く。兄妹水入らずをお楽しみください」

両掌をこちらに向けて微笑む。橙弥には彼の笑顔が畏怖の対象となつているのか、小さく表情が引き攣つたのが窺えた。何だか面白い。

「……いや、やっぱいいよ。忘れてくれ」

心底疲れた風に橙弥は前言を撤回、というより元から無かったことにした。

確かに、橙弥の判断は正しい。きっと橙弥はわたしに、この人は何者だ、と棺木さんを指す質問をしようとしたのだろう。小声とはいえ、本人の前でそんな質問をするのは気が引けるだろうし今の状況では尚更。兄妹水入らずも何もない。

「そうですか」

室内で喜色満面なのは棺木さんだけだった。

橙弥は病人か、吸血鬼にでも襲われて血を全部抜かれたみたいに顔色が悪い。朔夜さんは相変わらずの不快感押し出しのしかめ面。わたしはというと、鏡が無いから解らないけれどきつと中立的無表情をしているだろう。

立ち上がった棺木さんはそのまま大人しく帰っていくのかと思えば、

「では、行きましょうか、空さん」

「はい？」

思わず肯定してしまいそうになったところを、寸でのところで疑問系に発音した。

……この人は、なにを言ったのか。

今から考えれば棺木さんの言動には可笑しな点があった。朔夜さんに出て行けと言われた時、そちらの話が済めば、と彼は言ったのだ。それはつまり、元よりわたしを連れ出そうと考えていたということにならないか。

「おや？ どうしました、空さん」

「あの、えっと、わたし……は、ですね」

拳動不審。それは鏡が無くても解る。

あたふたしながら横目に朔夜さんを見て色々と訴えてみるけれど、彼女は漂う紫煙の向こうで、

「なんだ、お前の目当ては空か。本人の了承があるのなら構わん。

ただし、それは私の生徒だからな、妙な真似は許さんぞ」

なんてことをあつさりと言ってしまった。

ちよつと待てよ。

もしかするとわたし、厄介払いに利用されているのかもしれない。「ちよつど私も遙瀬に話があつたところだ。空には席を外してもらった方がいいと思つていたところだね。無論、お前には早く消えてもらいたいと願つていたがね、棺木」

悪意しかない朔夜さんの暴言にもかかわらず、棺木さんは笑顔で応える。

「そういうことですから、行きましようか、空さん」

「わたしはまだ何も……」

言いつつ朔夜さんを窺うけれど、彼女は何の反応も見せない。いや、何の反応もというのは間違いだ。彼女の目はわたしに、さつさと行つてしまえ、と告げていた。

「……解りました」

状況に流されてしまうのも、構わない。どうにでもなれだ。

そもそもわたしは、今日、この人と話をすることを楽しみにしていたじゃないか。

自分に言い聞かせるみたいに心中呟いて、わたしも立ち上がる。

座っていた時間がほんの数分程度の椅子を引いて、既に扉を開けて待つている棺木さんの元へ向かった。

「空」

再度、橙弥が呼びかけてくる。

「なんですか？」

「ん……いや、気を付けてな」

「はい。兄さんは家で夕飯でも作って待つていてください。今日は塩と砂糖を間違えるような真似は、しないでくださいね。後、シナモンシュガーはどう扱つてもお味噌汁にだけは入れないでください」

「……………気を付けます」

そんな会話を最後にして、わたしは準備室を後にした。

その後のことを簡略的に説明する前に現在の状況を端的に述べるのなら、喫茶店である。

かなり普通の、別にこだわりがあるわけでもなく目に付いたから入った喫茶店。当然のようにわたしは初の来店である。喫茶店というわたし個人の見解では二種類のイメージがあつて、一方は木造建築の小高い緑の丘にでもありそうな店と、石造りの何だか渋い雰囲気のとちらかというバーみたいな店。わたし達が落ち着いたのは前者だった。

今に至るまでの経緯は語るまでもなく、棺木さんと朔夜さんによる呉越同舟が解除されて穏やかな空気の散歩が展開されたただけだ。会話というほどの会話はなく、棺木さんなりに気を遣ったのか道中見つけた喫茶店に入店し今に至る。気を遣うというなら、寒さよりもさつきまでいた部屋の空気の重さをどうにかして欲しかったけれど。

コーヒー（当然ホット）を二人分注文し、二つのカップがテーブルに置かれてるまで会話は無かった。

やがて何の前振りも無く唐突に、

「いいお兄さんですね、朱空さんのお知り合いの方は」

「え……ええ、はい。ありがとうございます」

この期に及んでまだその呼称をし続けるのは、彼なりの意地なのだろうか。

先にカップに口を付けた棺木さんが言ったのはそんなことだった。取り立てて、話題があるというわけではないらしい。

「て、いや、そんなことは、ないですよ。兄は、いろいろと面倒な人ですから。わたしとしてはもう少ししっかりしてもらいたいと思

っています」

脈絡の無い唐突な言葉だったために肯定してしまっただけだ。

どちらかと言うならこっちが本音で、事実、わたしは橙弥には少し自重して欲しいと思っている。

彼は六月の事件にも能動的に関わっていて、本人はそんなこと一切口にはしていないけれど、朔夜さん曰く死んでいても可笑しくない状況だったらしい。朔夜さんの言うことだったし、勿論鵜呑みにはしないけれど。しかしわたし自身夏のことがあった、橙弥が妙なことに首を突っ込みやすいことは理解している。多少の誇張はあったにせよ、朔夜さんの言っていることは丸々笑い飛ばせるようなことではない。

だからといって、わたしはそんなことなど一切橙弥には言っていないのだが。兄妹故に彼の強情さは知っているので、わたしがなんと言おうと無意味なのだ。

それこそ泣きながら懇願でもしない限りはふと思った。

橙弥は、わたしが泣けばその理由を問うだろうか。

わたしが泣けば、言うことを聞いてくれるだろうか。

わたしが泣けば 心配、してくれるのかな。

「いえいえ、彼はなかなかどうして立派な兄ですよ。貴女を放任しているわけでもなければ、異常なまでに固執してもいない。私のような者に妹が連れ出されるとしても、一言で送り出す。過保護でもなければ、無関心でもない。理想的な信頼関係ではないですか」

「いえ、そこまでは……」

さすがに過大評価というものだろう。棺木さんには橙弥が理想の兄像となっているようだが、それなら名前くらい覚えていればいいのに。いや、そもそも名乗ってすらいないのか。

「謙遜ですよ。貴女達は羨ましいくらい、素晴らしい関係ですよ、兄妹として」

「……………」

一体何を評価基準としてそのようなことを言っているのが、わたしにはまるで解らない。

とは言え、棺木さんは妹を目の前にして兄の存在を散々なまでに否定するような人ではない。というか、普通の神経をした人間ならばまずそんなことはしないだろう。ならば軽口程度の誉め言葉として受けとるのが常識的な対応か。

「棺木さんにも、妹がいらっしやるんですか……？」

発言の内からそんなニュアンスを感じ取り、わたしは自制を掛けることなく疑問を口にした。

別段、興味があつた訳ではなかつたので、訊いておきながらわたしの中では返答に期待などしていなかつた。失礼ながら。社交辞令的反射といって差し支えない。

「はい」

と、棺木さんはあっさり肯定し、

「目に入れても痛くない妹でした。ええ、断言しましょう。私は自らの妹のためならば、全人類を一人残さず消し去ることさえいとわないと」

表情一つ変えずに言い放ち、カップを傾ける。

顔色に変化がないから本気としか受け取れないのですが……

喫茶店。

遙瀬空というわたしの前には　とんでもないシスコンがいた。

「……………」

なんと言っているのか、解らない。少しだけ、怖かつたりもする。

改めてわたしは目の前のソレが理解不能な存在だと悟つた。

「しかし、私は失敗作でした。大切な妹でさえ助けることができなかつたところか、私の行動がさらに妹を絶望させる結果になつたのですから。結局、私が救いたかつたのも、結果として救つたのも自分ではない。そして自己の救済さえも半端な　穴だらけの欠陥製品でした」

「……………棺木さん……………？」

「いえ、ちょっとした余談です。聞き流してください」
本人はそういうけれど。

わたしには、彼の表情が忘れられそうになかった。

初めて、ほんの少しだけだったけれど、確かに変化した彼の悲しげな貌カオを。

「それでは、本題に移りましょうか」

積極的にカップを傾けているかと思ったら、さっきまで一杯だった褐色の液体が消失している。準備室でも最低二杯は飲み干していたというのに、この人は相当なコーヒー好きかなにかなのだろうか。本題、と棺木さんは言っただけれど、やはりその本題というのは、「貴女の悩みを、解決致しましょう」

インチキ宗教団体の勧誘みたいに、棺木さんは言った。

大仰な動作でお辞儀をしてくる。本当にどこかの新興宗教団体みたいだ。

当然、何かの神を信仰しろだとか入会金を支払えだとか、そんなことは言ってこない。あくまで形容でしかないのだ。彼は宣教師なんかではない。

不思議とわたしは、この底が知れない男を信用していた。

初めに会ったその時から 常識で計り知れないなにかを感じていて。それこそ宗教染みてると笑ってしまいたくなるくらいに。

棺木鏡介。

彼は少なくともわたしにとっては、在る意味で信仰してしまっても構わない気がしていた。

「わたしの……悩み」

なんだろう。

なんだろう。

確かにわたしは、ずっともやもやとしてはつきりしない何かを抱えていた。

心の中にいつも濃厚な霧が立ち込めているような、自分のことが自分で理解できない。

だというのに。

だというのに、他人のこと 世界のこと知らないことは無い。わたしが否定しても、否応に知れてしまう世界の理。気が付けばいつからか身に付いていた、読心術。常識から外れてしまった、破綻でもそんなことはどうでも良かったはずだ。

わたしはわたしのことを受け入れている。

受け入れて、受け止めてきたつもりだ。

少なくとも現状に嫌気が差しているというわけではない。読心術も、異常なまでに膨れ上がった叡智も、何もかも。それが遙瀬空だと受け入れていた。

だとしたら、何が。

何が、わたしの心を隠しているのか。

深い深い霧の向こうにずっと見えない遙か遠くに。幼い頃から触れることが出来なかった場所。帰り道も、行き先も。全てがぼやけて。霧は、道を隠して。ずっと遠くに。わたしという存在の起源が在って。破綻する以前の。或いは破綻した後の。

唯、一つだけ、確かな本物の想いが

“ どうして ”

思い出す。ずっと昔の自分の言葉を。

大切な、始まりの一言を。

“ どうしてセカイは ”

ちっぽけだけど、確かにそこに在って輝いていた。

遙瀬空が、大切にしてきた想いを。

その輝きを、永遠にしたいから

“ どうしてセカイは汚いのかな ”

遙瀬空は言った。

「わたしは……わたしは、自分が解りません。世界のことは何でも知っているのに。自分のことだけはどうしても解らない。昔、止ま

ってしまったわたしを、いつか遠い本当のわたしを思い出せないんです」

始まりのあの日。いつかの記憶。

それはもう思い出せなくらいに色褪せて、僅かな輪郭だけをぼんやりと残した思い出。

「わたしは　わたしは、兄のことが好きなんです。だけど、それもどうしてか解らない。解らないんじゃないかと、そのことが信じられない……わたしは偽物だらけだから、借り物の知識しか無いから　その気持ちだって、偽物かもしれない」

遙瀬橙弥と遙瀬空。

兄と妹。

いけないことだから。禁忌だったから。いけないことは、穢いから。

だからわたしは　その想いを心の深いところに隠した。忘れてしまえば楽だったのに。忘れることなんて出来なくて。

遙瀬空に残ったのは、曖昧な、忘却の果ての微かな記憶の輪郭。

「だから　」

取り戻したい。

いつか自分で沈めてしまった、遠い想いを。

「　わたしは、知りたいんです。自分のことを」

「解りました」

果たして、棺木さんは頷いた。

わたしのことなど、初めから知っていたように。否、知っていたんだろう。

彼には最初から、全てが視えていた。

自らを欠陥製品と、失敗作と言ったソレ。朔夜さんが異端と、哀しい存在と言ったソレ。

常軌を逸し、破綻となった

遙瀬空と同じ存在定義を持つ、

ソレは。

あの時、あの瞬間からずっと、棺木鏡介には遙瀬空の全てが視え

ていた。

「そうですね……それでしたら明日、場所を改めましょう」

言うが早いか、スーツの内ポケットからメモ帳を取り出しペンを走らせる。

綴られたのは文字と地図。棺木さんはそのページを切り取って、

「ではまた。ああ、勿論ここは私がお支払いします」

伝票を手に取り、引き換えにメモを置く。

人畜無害な笑顔を最後に、後は振り返らずに出口へ向かっていく黒い背中を、わたしは晴れない心境で見送る。硝子の向こう側。見上げた空模様は朝と変わらぬ灰色。それが今は、何故か今朝に増して陰鬱に見えた。

古風な日本屋敷。武家屋敷といえば尚しっくりくる。

電車二本とバスを經由して遙々やってきたわたしを出迎えたのは、
莊厳といって指し差し支えないそんな家屋。木造の巨大な門を前に
して、わたしは自らの矮小さを思い知るように立ち尽くしていた。
それにしても、何だろう、これは。

日を改めた話し合いの場に棺木さんが指定した場所こそがこの武
家屋敷の住所で、午前の授業が終わって直ぐに飛び出したわたしは、
さらに半日ほどの時間を掛けてここにやって来た。

夜の帳はもう随分降りて来て、辺りは薄暗く烏色の空が場を不気
味に盛り上げる。

この分では帰りには夜間バスか何かを使用しなければならぬ。
それだって、こんな辺境の地にバスが出ていればの話だけれど。

有り体な表現を使うならば、既に終わった後の村。昔は人が住ん
でいただろう痕跡が残っているけれど、屋根に穴が開いた木造家屋、
荒れ果てた田畑が今は既に人の生活など成り立っていないことの証
明だった。

小さな村。今でも專業農家の家庭があつて可笑しくない、そんな
場所。

荒れ果てた空間の象徴のように佇む武家屋敷は、さすがに他の家
屋のように荒廃してはいなかったが。今でこそ化け物屋敷みたいだ
けど、全盛期はきつと芸術作品のごとく人の目を惹いたに違いない。
盛者必衰の理を表す。

祇園精舎の鐘でなくとも、驕れる者がいつか滅ぶ運命を表す存在

は日本中に転々としている。

この武家屋敷こそが、まさにその一つだ。
さて、と……。

指定の場所はここで合っているはずだけど、棺木さんの姿はどこにも見当たらない。

もしかしたらこの夕暮れ、日も落ちてきた暗闇に擬態でもしてるんじゃないかと思って辺りを散策してみたけれど、無駄骨だったことは言うまでも無い。

「ほんとう……どうしたもんかな……」

武家屋敷。

夕暮れ。

夜の闇。

廃れた田舎町。

……人を脅かすのに、これほどに相応しい状況はきつと無い。都会の夜は人の怖さがあるけれど、こういう場所には人外の怖さがそこら中に潜んでいる。別に、わたしが今の状況を怖いと思っているだとか、そんなことを言っているわけではないけど。

なんて考えながら息を吐き、自然と視線は足元へ向けられる。そこで。

ふと、門の前に落ちた板に目が留まった。

分厚い、周囲と同様に変色し腐敗が進んだ木の板。

わたしはその板を、不意に裏返してみる。

「……………棺、継？」

これが屋敷の主を示す標札だとしたら けれど、この名前は。

棺木。

棺継。

棺桶を引き継ぐ。或いは受け継ぐ。

そんな不気味な言葉を宿した名前。こんな名前、聞いたことも無かったら見たことも無い。

棺木だって聞いたことのある名前ではなかったけれど、棺継の方

は初見で有り得ないと思つてしまった。文字から伝わる微妙なニュアンスというものもあるんだろうけど、これはそんな程度の次元でなく、もっと。

似て非なる二つの姓。かばねここを指定したのは、棺木鏡介。

偶然ではないと言い切れる。解らないことがあるとしたら、どうして、彼はここを指定したのか。わたしに棺木と名乗ったのが嘘だとしたら、でもそれならわざわざ本当の名前を明かす必要なんて無い。昨日の喫茶店から場所を移す必要が無いのだ。それに、彼には偽名なんて使う理由が無い。

「……棺継、鏡介」

呟く声。

烏色の空。

わたしは黒い姿の男を思い出しながら、知らぬ間に屋敷の中へと脚を進めた。

ぎしり、と床の軋む音。

当然というより自然というか、むしろ見たとおりと言うべきか、屋敷内には電気など通っていないかった。必然、わたしは真つ暗な廊下を歩く羽目になる。視界は大分慣れてきたけれど、精神の方が全然慣れない。

一歩踏み出すことに軋む床。

風の音に虫の声。

どれもこれも、必要以上に不気味で仕方ない。肝試しをしている気分だ。今にも廊下の曲がり角から蒟蒻じゆじやくが飛び出してきそうな気がする。いや、それなら本当に肝試し。作り物の恐怖だが。

「……………」

自分の考えたことが、実は冗談にならないことに思い至る。

外はとつくに日が落ちて、世界は夜の中に沈んでいるだろう。それは建物の中とはいえ、灯りの無いここでは変わらぬこと。濃厚な暗闇に閉ざされた視界と、冬の冷気に満ちた人気の無い冷たい空間。勢いで這入ってしまったけれど、本当にその選択は間違っていたのか。

或いは外で待っていていれば、やーやー遅くなりましたー申し訳ありません、とか言ってお棺木さんが現れたかもしれないのだ。今頃は外でわたしを探しているかもしれない。だとしたら戻った方がいいのだろうか。さつさと出て行った方が、いいのかな。

「……………そういつてもなあ……………」

自分でもバカなことをしたとは思っ。

当てがある訳でもないのに、未踏の地それも暗闇の中で動き回った所為で戻り方が解らない。来た道を辿ろうにも振り返ればやっぱり前方に見えている襖やら壁やらと同じ景色で、正確に辿っていく自信が無い。

……………残念ながら。わたしの異能だって、建物の構造を把握するなんて便利な機能は備えていないし。

さてどうしたものか。

このまま朝まで他人様のお屋敷を徘徊するのも良くないし、わたし自身そんなのは嫌だ。取り合えず外に出ること。そうすれば今よりは状況もましになる。なら、どうやって外に出るかだけでも思い至るのは簡単だった。

ここは日本屋敷　武家屋敷だと自ら評価を下したのだ。

ならば、外に出ることは容易い。現代住宅と違って、この形式の屋敷には縁側とかそんな、外と直接通じている部分がある。現代の常識に囚われないのなら、玄関以外にも屋内を出入りする方法は存在するのだ。

気が付けば実行するまでのタイムラグはコンマほどの数秒。わたしは直ぐ隣の襖をスライドさせた。触れた指に埃が付く感覚。屋敷

の外見どおり長い間人が出入りしていないのは明確。立て付けの悪さなど、そういう先天的な理由ではなく、ぎしぎし音を立てながら襖が動く。

そして。

開かれた広い畳床の間。

その向こう。

左右に開かれた障子に挟まれるようにして。

そこに。

月を見上げるように、一人の少女がいた。

「……………」

沈黙が、声にならないはずの沈黙がこの時ばかりは台詞になってしまうのも頷ける。わたしはそんな心境になって絶句した。ともすれば呼吸することさえも忘れていたかもしれない。

神々しく輝く天上の月を見上げる小さな少女に、わたしは恐怖することとはなかった。

絶句したのは、見蕩れてしまったから。

魅入ってしまった。魅せられてしまった。

暗い闇の中で、まるで自らが光を放っているように美しく姿が映える 純粹な、白い少女。

身に纏う着物は純白。その白い着物の袖から出ている左右の手も、首元で分かれる黒髪の隙間から窺えるうなじもまた その存在を象徴する色が、澱みなく穢れなく、魂に色があるとするならばきつと 白。

純粹にして純真。

儂い小さな背中。

わたしは、自分よりもずっと年下と断言できる少女を、美しいと思ってしまった。

“ ”

少女は何かを呟くように、天空を見上げていた。

傍らに投げ出された長い包帯。

気付けばわたしは少女の直ぐ傍まで来ていて、同じように月を見上げる。

金色の孔。世間の黒き壁面に穿たれし、神域への門。大袈裟な形容だけど、わたしには今宵の月がこの世のものと思えないほど幻想的に思えた。まるで初めて、生まれて初めて月を見上げたみたいに、純粹な気持ちで。

この世界を、綺麗だと思ってしまった。

“ ”
歌。

近づいてみて解ったのは、少女の眩きが韻を踏んだ歌だったといふこと。

直ぐ近くにいるのに上手く聞き取れない。綺麗な声が紡ぐ歌が聞き取れない。そのことが、わたしにはやけに哀しく思えてしまってそれだけのことかどうしても、心苦しくて。

縁側から投げ出された両足は、ぱたぱたと二つの振り子のように左右対称に揺れている。その仕草が妖麗な雰囲気にもぐわす幼い。歳相応の少女の幼さが現れていた。

白い肌。生まれてから一度も陽を浴びたことがないのではないかと思うほどに、病的なまでの白。相対するように黒い長髪。表情のない貌は、何故かはじめて見る少女の筈なのに、どこか見覚えがある気がしてならない。

異彩を放っていたのは、けれどそんな肌の色ではなかった。

後姿では決して解らない。少女の異常さは、その瞳にある。

右と左とで色の違う瞳。儂く虚ろな二つの瞳は、右が群青、左が灰。空を見上げる双色の瞳。それらが共に極上の宝石のような美しさを持っていて、わたしが魅入ってしまったのも 見せられたのも少女の瞳だったのだ。

けれど。

白い少女の瞳も表情も、ただ哀しみだけを湛えていて。

それが、何故か自分に近いもののように思えてしまって、わたし

は。

この、感覚は、いつかの。

そう、まるで。

あの日、二日前。

棺木鏡介と向き合ったあの瞬間の感覚が

“ 月の夜はこうして、目を開いているの ”

果たして、歌うことを止めた少女が、月に謳うように言った。

涼やかな声と対照的に、少女の声から感じ取れるのは底知れない

絶望の感情。

少女は月を見上げながら、依然として脚を振りながら、

“ ほんとうは、外しちゃいけないんだけど。でもね、こんなに綺麗な月があるんだから少しくらい ”

すっかりとした口調は、やはり幼い容姿に反していた。

これほどに幼い少女なのに、なにかに絶望を覚えてしまったように沈んだ、現実に嫌気が差したような話し方をするなんて。これではまるで。

“ 冬の夜は星が綺麗。世界はこんなにも薄汚れているのに、穢れの中にある星は綺麗 ”

いつか、わたしも同じことを思ったことがある。

世界は汚い。世界には、穢れた思想が満ち溢れている。望まわずして手にした叡智は、触れてはいけない禁忌だった。世界の理は

決して開けてはいけない、禁忌の詰まったパンドラの箱。

同じことを、少女も思っているのだろうか。

月を見上げながら呟く少女には、世界の理が見えているのだろうか。

だとしたら、この少女はまるで。

“ 静かになりましたね。今宵は、普段にもまして騒がしかったのに ”
締めくくるように、呟く。

白い少女は依然として月を見上げたまま、

“貴方は、わたしの味方ですか？”

そう、問いかけた。

はっとして振り返る。これまで白い少女に集中していた意識を背後の闇へと振り向かせれば、そこに闇に紛れて黒い立ち姿があった。知っている。わたしをここに向かわせた張本人だ。

棺木鏡介。 否。棺継鏡介。

今なら、それが断言できる。

“さあ 私は、唯の破綻した失敗作ですよ”

知っている。その声を、わたしは知っている。

畳の上を歩いて、部屋の中央まで歩を進める。けれど、彼の移動はそこまでだった。縁側に出て月を見上げる白い少女と、一定の距離を置いているように。棺継鏡介はそれ以上少女に近寄ろうとしない。

“屋敷が静かになったのは、貴方の仕業ですね？”

“ええ”

“どうして、静かになったのですか？”

表情は微笑。黒い男は相変わらず、愛想笑いのような空っぽの微笑を貼り付けたまま、

“私が 全て、殺してしまったからです”

知らず、身が竦んだ。

感情なんて無い、形だけの仮面みたいな笑顔を。

わたしは初めて、恐ろしいと感じた。

錯覚ではない。確かに今の瞬間、彼の表情には明確な殺意と敵意
憎悪、呪詛、怨嗟、あらゆる負の感情が浮かんだから。本能的に逃げ出したい衝動が生じる。胃の中にあるものを全て吐き出したくなる。

“そうですか”

あつけらかんと、白い少女はそう言った。

全て、と男は言った。大きな武家屋敷。今宵この屋根の下にいた人間はきつと一人や二人ではない。多ければ数十人。もしかしたら棺継という名の血族が集結していたかもしれない。

自分がいる場所と同じ屋根の下で、そんな惨劇が起こったと告げられたのに。

白い少女は、表情一つ変えずにただの一言で返したのだ。

“どうしてですか？”

哀しみも、恐れも、憎しみも、何もかも。

一切の感情が感じられない、少女の問いかけ。それはきつと、どうして人を殺したのか、とその行為が信じられないと言っている風ではない。まして、その罪を糾弾している風でもない。文面の通り、本当に純粹に、どうして殺したの？ と興味無さ気に、社交辞令のように訊いたのだ。

“貴女を”

黒い男は、逡巡するように言葉に詰まって、

“ 貴女を、自由にするために”

“ そうですね”

それも他人事だと、言っているように。

両者の会話には、その端々から一切人間らしい感情が読み取れない。必要だから言葉を交わしているのではなく、必要でもないのに言葉を交わしている。他愛も無い雑談と同じ。する必要なんて無い、戯言の掛け合い。一つだけ、一般的な雑談と違うことがあるなら、二人はそれを望んでいないこと。

望んでいないのに、互い雑言を口にしてている。

顔をあわせることもせず、向き合うことなどなく。交わすのは言葉だけの、感情の伴わない会話。互いに何かを探り合うわけでもなければ、互いの感情を交えることもない。そもそもそんなこと、両者が望んでいない。

本当に形だけの、空っぽの会話。

白い少女と黒い男。

“どうしてですか？”

白い少女が同じ疑問を繰り返す。抑揚のない、感情の無い声で。変わらぬ少女の脚は揺れる。

月を見上げる儂い横顔が、再度問いかけた。

“どうして、わたしなんかの為に人を殺したんですか？”

問いかける声。感情の伴わなかった少女の声に初めて、本当の意味で、黒い男が起こした行動の真意を問いかけていた。それだけは答えて欲しいと。答えるべきだと。

懇願するように、希うように。

白い少女が黒い男に訊く。

“……目、痛いですか？”

答えない男に、少女は別の質問を投げかける。

……暗闇で、わたしは気付かなかった。というよりも、わたしは彼の姿を一目振り返っただけで、後はずっと少女を見ていたから気付けなかった。依然として月を見上げる白い少女は、わたしと違って一度も振り向いていないのに。どうして。

どうして、男が 棺継鏡介が泣いていると、解ったのだろう。

泣いている。違う。彼の涙は、赤かった。

右目から頬へと流れる朱色の涙。表情は笑っていても、それは泣いているように見えた。

男は右目を庇うこともせず、流血を拭おうともせず、無関心のまま放置している。既に何をしても意味がないと、何をしても手遅れだと言うように。微笑むように瞼を下ろして、瞳を隠して。

この時、わたしは思わずにはいらなかった。

欠陥製品。誰かを 妹を救うと言い訳して、結局救いたかったのは自分だと言った彼。その、自らの救済さえも中途半端にしか出来なかったと言った黒い男。

たった一人の、妹を救おうとした、世界の傍観者。

“どうして”

もう一度、目を開けようとした。

「……………もう……………少し……………」

もう少しだから。

後少しだけ、さっきの景色を見ていたかった。

自分の姿をそこに投影することで、辿り着けそうだったんだ。

わたしが、心のどこかに閉じ込めた遙瀬空のところに。いつか、見失ってしまった遠い禁忌を。誰かを好きになった記憶。亡くして否定して、掻き消そうとして。それでも消しきれなかった大切な想いを。

我侭だけど、今更だけど、取り戻さないと。

止まってしまったわたしはもう一度、遙瀬空として進まないといけないから。

そして。

わたしがそう思った瞬間。

不意に、これまでわたしを支配していた非現実感が、現実の喪失した感覚が、唐突に消失した。

「お疲れ様です」

……………体が、重い。

爪先が床についていない。なのに体は何かを支えられているみたいに、絶妙なバランスを保って立っている。支えられているように。事実、支えられながら。

「……………棺木さん」

「ええ、どうもこんばんは」

変わらず微笑する黒い男の姿が、そこにはあった。

右目は髪で隠れて見えない。血も流れていない。そこにいたのは、昨日、一昨日わたしが会って話をした棺木鏡介だった。

辺りを見回してみる。場所はそれまでと変わらず畳の上。障子の開いた縁側。差し込む月明かり。変わらぬ景色の中に、ただ一つだけ、白い少女の姿が欠如していた。

それだけの変化が大きい。あんなにも輝いて見えた月は呆気ない

ほどこに色褪せて見えて、綺麗に思えた世界はまた穢れた禁忌に満たされていた。一人の、純白の少女がいなくなっただけでこんなにもでもまあ、そんなの当然か。

だって今のは、わたしの世界じゃない。夢のようで夢でしかない、夢の果てなんだ。

「……今のは、なんですか」

「私の記憶……というよりも十年前にここで起きた出来事の記録です。貴女ならきつと、辿り着くだろうと思っていました。ここは特別、私の思いが強く出ていましたから。貴女はそれを拾ってしまうのではないかと」

「あれを見せるために、場所をここにしましたんですか……？」

棺木さんは頷く。

既にわたしの体は正常な感覚を取り戻していた。力の入らなかつた手や足はしつかりと自分の意思で動く。わたしは自分を支えている棺木さんの腕から逃れ、反動で三步ほど前進。いつか、白い少女がいた場所に立った。

「あの子は、棺木さん、貴方の妹ですか」

わたしの問いに、けれど棺木さんは答えない。

無言のままわたしの隣に並んで、月を見上げる。

ややあつてから。

「御解かりでしょうが、私の苗字は『棺継』。棺を受け継ぐと書いて、棺継です。この家系は、少し変わってしまっていて、そうですね

世界の中心を追い求めていたんです」

「世界の、中心？」

「世の理。全ての因果関係が収束し、全てが始まり全てが終わる、始発点にして終着点。現象の最果てで、そこには全てがあつて全てがない。そういう場所です。棺継の家系は永い年月を費やして、そんな途方もない、在るか無いかも不明瞭な場所を求めてきました。そうして、何代もの時を経て私の代に行き着いた。純血だったんです。何度も何度も、同族間で子孫を作り、私が生まれた。ならば、

私は一族の悲願の結晶だったんでしょ。永きに渡る研究の成果と、血に刻まれた呪い。そして、中心と繋がったこの目」

棺木さんは自分の右目を指して、

「こちらの目は、既に機能していません。十年前に失明して、世界との繋がりも途絶えました。残った左目も、失明こそしていませんが、色の識別も出来ないほどに劣化しています。こちらはまだ中心に通じていますが。いつか反動で潰れるでしょうね」

まるで他人事のように語る姿は　白い少女のそれに酷く似ていた。

感情など一切表に出さず、月を見上げて語る。

棺木鏡介とわたしに名乗った男。

その、黒い男。棺継鏡介という、同族殺しの異端。異端であり、破綻。

「お察しの通り、彼女は私の妹です。もともと、私も彼女もそうは思っていませんが。というよりも、そんなこと、思っではいけないんですよ」

思っではいけない。思えないのではなく。

禁忌。血の繋がりを信じるその行為が禁忌であると、黒い男は語る。

「純血、だと誰もが信じていました。　違っただんですよ。いつからかは解りませんが、棺継の一族は混血になっていたんです。一つの家系では完成されなかつた世界との経路が、そうすることでようやく完成した。ですが、それが間違いだっただんです。私の目は不完全な発現でした。恐らく、十年前のことがなくてもいずれ両目共に潰れることになっていたでしょう。」

しかし、妹は違っていたんです。私の妹は、完全な形で棺継の悲願を達していました。貴女もご覧になったとおり、妹の目は左右で瞳の色が異なります。右に棺継の異能。左に混血の異能。二つの異能を宿していました。故に異能は異能として扱われず、一族の中では異端　破綻として扱われていました」

わたしは思い出す。少女の傍らにあった白い包帯を。その意味をようやくにして理解する。棺継の家系が求めた異能がその瞳に宿るものだとしたら、あの包帯の使い道を察することは難しくない。直感的でいて、絶対的根拠のない推測だけれど、同時にそれ以上の解答がないと思える答え。

「光を見たことがなかったんです。私の妹は。棺継はいつの間にか世界の中心に到達するという目的を忘れて、いつしか純血であることを誇るようになっていました。それ故に、その為に、彼女の世からは一切の光が奪われた。永い年月を暗闇の中で過ごしていたんです。あんな、小さな少女が」

変わらぬ平静。変わらぬ無表情。

なのにどうして、彼は。

棺継鏡介というソレは、どうしてこんなにも辛そうに言葉を紡いでいるのだろうか。

この瞬間が、錯覚かもしれないけれどこの瞬間こそが。棺木鏡介がわたしに初めて本物の感情を見せた瞬間だった。どうしようもない苦痛を堪えているように、耐えられない激痛に歯を食いしばるように。悲痛に歪んだ、歪な微笑が月光に映える。

「それが、赦せなかつたんです。……いえ、違いますね。私は彼女に同情したわけでも、棺継を恨んだわけでもなかつた。そうです。私は、自分のことしか考えていなかった」

そのことが最大の罪であると、語る。

ここまで聞いて、ようやくわたしは理解に至った。彼が憎んでいたものは誰でもなく、彼を苦しめているものは何でもないのだと。

棺木鏡介の抱く怨嗟の苦しみも、棺木鏡介を締め付ける束縛も全ては彼自身、棺継鏡介という彼自身なのだ。

「私は唯、自分に嫌気が差していたんです。罪悪感、などと高尚なものではない。優越感でも、劣等感でもない。どこから生じたのかも解らない、自己を永遠に締め付ける感情。私が救いたかったのは自分自身でしかなかった。そう 同じ血を持って生まれ、同じ目

を持つて生まれたのに。ほんの些細な違い、唯瞳に発現した異端の違いだけで 私だけが持て囃されることに負い目を感じた」

異能、異端、そして破綻。

「私は、私は正統な棺継の者ではない。悲願を達したのは妹だった。……だと、いうのに。どうして私だけがヒトとして扱われ、どうして彼女だけが破綻と扱われているのか。気付いていた。気付かないフリをしていた。私は知らず負い目を感じていたのだと。知っているのに知らないフリをして。彼女を救う。棺継の支配が彼女を破綻とするのなら、私はその支配を取り払う。光を与える。そうすることでやっと、私はこの感情から開放されるのだから。その為に、多くを殺し、多くを滅ぼし、一つの家系を終わらせた」

はじめから誰かを救いたかったわけではない。

ただ、自己の心の救済を求めて、他人を救うと口にして禁忌を犯した。

棺継の家系。気付いていないはずなどない。棺継という家系は、彼にとって掛け替えの無い家族だったというのに。なのに、自らを解放するために滅ぼした。

あろうことかその禁忌を、妹の為だと銘打って。

誰に罪が在ったのだろう。

知らぬ間に混血となっていた棺継の家系。世界の中心という悲願を忘れ、いつしか純血という血の潔白、一族の繋がりを大切にしていた家系。その為に光を奪われた少女。異能は異端として扱われ、最後には破綻として忌避された。彼はそれが赦せなかった。求めていた場所に辿り着いたはずの少女が、なぜ蔑ろにされなければならぬのか。なぜ、失敗作である自分だけがのうのうと生きていられるのか。

答えられない疑問に自我を押し潰されそうになったから 壊れる前に壊した。

彼が生まれた、彼が繋がっていた 家族という名の世界を、破壊した。

「……思えば、初めはちつぽけな感情だったんですよ。妹に負い目を感じていただけ、瞳を隠され、視界を、世界を閉ざされた彼女を見るたびに疼くように痛む感情。それを嫌悪するあまり、大切なものを多く失った。……失った、ではなく、切り捨てた、ですか。ただの一言でも、助けて欲しいだなんて言われていない。それなのに私は」

月を見上げる瞳が、細く閉じていた世界との繋がりが、

「彼女にとって大切な家族セカイを壊した」

涙を滲ませて、心の底から後悔して、泣いていた。

「だけど、貴方は救われなかった。自分を優先して、多くのものを犠牲にしたのに。なのに、本当に救いたかった自分自身でさえ救済することが出来なかった。それが貴方の後悔ですか？ 棺木さん」

彼の言葉を継ぐ。

棺木さんが失った世界。家族、繋がり、妹。残ったものは後悔だけ。自己嫌悪と罪悪感。目的は達せられず、失ったものは多大。

静かな動作で棺木さんが頷く。過去を回想するように、ゆっくりと瞳を閉じて。

月明かりが屋敷を照らす。星空は遠く、いつか夢見た理想郷がそこに在るみたいだ。

「結局、一度でも彼女には自分が兄であると言えませんでした。言う必要など無く、知っていたでしょうが。世界との繋がりを持つ目は、否応にも全ての真実を告げます。貴女の異能も同じですよ。世界の中心と繋がっているんです。世界の始まりから終わり、全てが

記録された中心。そこに触れることは即ち、望まぬ叡智を得ることと同義です。嗚呼、そう考えるなら、やはり私は間違っていたのですね。彼女なら、その気になれば世界さえ変えることが出来たというのに。彼女はそれをしなかった。救済など、望んでいなかったんですね」

「……………」

朔夜さんは言った、異端ではなく破綻だと。

嘗て自らのセカイを壊してしまった誰か。異端として生まれ、異端として生き、破綻として終わった。世界にある以上、世界に背くことは出来ない。彼はその理に反して、世界を壊した。故に破綻。存在意義も、存在定義もなにもかもを否定して、空っぽになった存在。

後悔のシガラミだけが彼を縛り付け、今尚も心を苛む罪悪感として在り続ける。道を踏み外したわけではなく、選択を誤ったわけでもない。彼は、壊したのだ。自分の世界を。自らと世界との繋がりを。

破綻。その言葉が脳裏を巡る。

黒い男は言った。自分は兄であってはならないと。自分にその資格はないと。救いたかったものを見失い、救うべき対象を見誤り、護るべき世界を壊した。望まれぬ救いを建前にして、妹を救う兄の姿を言い訳にして。自分のことしか考えていなかった。大切なモノがなにもであるか忘れてしまうほどに、追い込まれていた。

わたしには解る。棺木境介が背負ってきた孤独も罪も、犯した禁忌も。彼の記憶。破綻の記録を直視した故に否応にでも伝わる感情。

彼はやり遂げた。すべきことを果たした。あの夜、自らを縛るシガラミを断ち切った。結果としてそれが彼の妹を救うことになったはずなのに。破綻した世界の最果てに彼が見たのは、途方もない後悔だった。

白い少女、妹は救いなど求めていなかった。或いは現状を受け入

れていたかもしれない。ならば、そんな少女の世界を奪ったのは自分ということになる。与えたのは救いではなく、より深い絶望。救済など、どこにもない。自己満足にすらなりきれない結果。残された孤独と罪悪感。

言えるはずかない。思っていないはずがない。月光の下で儂く輝く白い少女、その尊い世界を奪った自分が彼女の兄であるなど、どうして思えるだろう。

わたしには、解る。歪な形ではあるけれど、それでもこの想いはきつと同じものだから。

例え、棺継境介が犯した禁忌が間違いであったとしても

「それでも、きつと彼女は貴方を兄だと思っています」

全てが間違いで、世界さえも欺瞞だったとしても。

それだけは間違いない。

……嗚呼、やっと見付かった。どうして今まで見えなかったんだろう。わたしの探していた答えは、ずっと前からここにあったんだ。胸の奥の歪な想い。埃を被って、破綻寸前まで摩耗したそれは、けれど、きつとあの白い少女と同じ感情なのだから。だから、わたしは言わなければならぬ。この破綻した世界の代行者として、言わなければならぬ。

「貴方は破綻なんてしていません」

遙瀬空を導いてくれた彼が、これ以上迷わないように。これ以上大切な何かを溢してしまわぬように。わたしは、最後に世界の代行者を勤めなければならぬ。

「世界を壊しても、自身が空っぽだとしても。それでも　貴方が妹を想う気持ちは陰りなく本物なんですから」

もしも本当に、彼が破綻していたら。自己の救済のみを望んでいたのなら。だとしたら、後悔も罪悪感もない。少女から世界を奪ったことに罪悪感を感じることもなく、なかった。

……ほんとう、大切なものは近すぎて見失ってしまう。だけど、近いからこそまた修復出来るんだ。初めから傍にあった存在は、最後まで手放してはいけないものだから。見失ってはいけないものだから。

「棺木さん。わたしに勝手なことは言えませんが、彼女はきつと貴方を憎んでなんていません」

遙瀬澄弥。

遙瀬空。

「自分の兄が嫌いな妹なんて、きつと、どこにもいません」

わたし自身が、そうであるように。あの白い少女もきつと、自らの兄を憎んでなんかいない。

例え世界が壊れていても、互いが互いの居場所になれる。共鳴し、支えあう世界。それが、兄妹なんだと、わたしは思いたい。

静かな夜の月。冬の夜は冷え込んでいて、ついさつきまで異常な熱に浮かされていたわたしの体も冷めてしまった。棺木さんは夜の冷風を一身に浴びて、果てなく遠い金色の孔を見上げる。いつか、双色の瞳が見上げたその輝きを。

「ありがとうございます」

やがて、振り返らない黒い影のような姿が言った。

「少しだけ、楽になりました。錯覚かもしれませんが、確かに。貴女のお陰です、空さん」

「こんなこと、根拠なんてないんですけどね。……それに、本当に救われたのはわたしの方です」

ようやく取り戻せた気がする。まだ不確かな形ではあるけれど、それでも確かに本物の想い。直ぐ傍にあって見失った、始まりの記憶。

夢のように、醒めてしまえばなんでもない幻想かもしれない。

それでもわたしはこの幻想に縋っていたい。わたしが停滞したあの日を、忘れてしまった想いを見失わないように。今は、埃を被った過去の記憶を大切にしていこうと思う。そうすることでやっと、

わたしは遙瀬空として、歩き始められるから。

わたしの言葉で、想いを伝えられるから。

もっと早く気付くべきだった。

穢れを知らないものが綺麗なんじゃない。穢れを知っているから、なにか綺麗なものが知っている。だからわたしは間違っていた。触れなければいいと、遠ざければいいと思ってしまったから。穢れに触れなかったわたしは同時に　綺麗なものにだって触れたことがないんだ。

だから、そのことに気づかないまま、ずっと遠ざけてきた想いを、今度こそ形にしよう。

時間は掛かってしまったけど、置き去りにしてきた遙瀬空の想いは風化していなかったから。もう一度大切なこの気持ちを抱き締めたい。自分に嘘を吐かないように。もう二度と大切な禁忌キモテを見失わないように。

ふと思い出す、いつかの疑問。

世界は、どうしてこんなにも汚いのか。

それは。

そんなのは。

世界の穢れを、わたしが拒絶していたから。なにも知らないで、なにもかもを否定していたから。ただ、それだけの理由。

わたしはもう一度、縁側に立つ黒い姿に視線を送る。彼は、棺木境介は、既に語るべきことはないと告げるように月を見上げている。「ここをまつすぐに行けば外に出られます」

と、思い出したように棺木さんは言った。月明かりの照らす廊下。今、棺木さんが月を見上げ、かつて白い少女が世界を眺めていた場所。

「送っていきましようか？」

親切にもそう言ってくれる棺木さんはしかし、やはりわたしを見ようとはしない。今はただ思い出の回想をするように立ち尽くすのみ。

「ありがとうございます。でも、大丈夫です」
大丈夫。自分の言葉が少しだけ誇らしい。うん、そうだ。わたしはもう大丈夫なんだ。

道は示してもらった。スタート地点までは導いてもらった。ならば後は一人で歩き始めなくちゃ。

「そうですか。では、これでお別れですね」

別段名残惜しそうもなく、棺木さんは別れを告げる。

「お気を付けて」

黒い長身が頭を下げる。礼儀正しすぎる模範的なお辞儀に応えて、わたしは帰り道を歩き始める。暗い廊下。頼りは月明かりだけ。それでも、今は不思議と落ち着いていられた。

さあ、帰ろう。

大切な想いを抱いて、いつかおいてけぼりにした自分に会いに行かなきゃ。

深遠な闇の中、瞬く星は絶望的に遠い。手を伸ばしても届かない輝きが夢のようで儂い。

燦然の輝き。金色の月光は、いつか見た遠い夢の景色によく似ていた。

月が遠く朧に滲み、星が黒い夜空を彩るように燦然と輝いていた。そんな夜。黒いスーツの男は一人闇に立ち、月を見上げる。それまで彼の後ろにいた少女のことさえも今は遙かに昔のことのよう。棺木境介にとっては、今だけがまさに生きた時間だった。こうして、こんな心境で月を見上げたのはいつ以来のことだろうか。と、意味のないことを考える。

棺木にしてみれば、それはある意味で清算だったのかもしれない。ずっと昔、十年前。誰かにとっては短く、誰かにとっては長い期間。その間のことを、彼は清算していた。思い返せば、十年の歳月に自分は何をしてきただろう。

破綻した世界から抜け出し、ただひたすらに自らを否定してきただけではなかっただろうか。……そんなことは、解らない。一つだけ確かなことがあるとするなら、己の十年間を苛み続けた戒めは過去の禁忌と自らの後悔であるという、それだけの事実。

一体なにがしたかったのかと問われれば、自分はなんと答えただろう。その疑問に思い到って、彼は苦笑した。

至極簡単な解答。己の十年間は、なんでもない、自身からの逃避でしかないのだ。棺継の名を持つ自分に背を向け続けるだけの時間。痛いほどに理解していたつもりだった罪の重さも、それでさえ自ら

を縛るシガラミには含まれていない。

「結局、私はなんなのでしょね」

自嘲するように言った声は誰かに問いかけているようだが、彼の視線は天上の月。呟きは誰にでもなく、答える声になど期待していない。或いはそれは、滑稽な自らへの嘲笑でしかないのかもしれない。

だというのに。

「さあな。お前はなんでもない、ただの破綻した失敗作だよ」

彼の言葉に、応える声があった。

「つたく、私の生徒をこんな場所に呼び出して。もしものことがあれば裁判なしで、私はお前に制裁を下すつもりだったんだが……残念ながらその必要はないみたいだな」

「ご期待に添えなくて申し訳ありません。もともと、貴女は空さんの貞操を心配してやってきたようですが、それではむしろ彼女の身になにかあつて欲しかったように聞こえますよ」

驚きもせず、棺木は応える。いつものように軽口を交えながら、旧友との会話に意識を割く。

「空さんのお迎えですか、朱空さん？」

別段、興味があるというわけではなかった。自分の質問に意味などないことにも気付いていた。朱空朔夜がこの場所をどのように知り得たかは理解の及ばぬところではあったが、相手が彼女ならば幾らでも理屈は付けられる。

確信しきつた質問にしかし、朔夜は首を振ってそれを否定した。

「いいや」

と、短く言つて歩みを進める。憚らぬ足取りで家主である棺木の隣に並び、同じように夜空に目を向けた。お互いに向き合つて話をする気などなく、そんな風に話をしたのがどれくらい前になるかも覚えていない。

「ま、半分はそれもあるんだけどな。あくまで空のことはついでだ。十六にもなつて放課後の行動にいちいち教師が出るのは、ちょっと

過保護が過ぎるだろ。私はあいつの担任でもないしな」

ポケットから煙草を取り出し、一本を口に銜える。慣れた手つきで点火の動作に移った朔夜は、けれどすぐには紫煙を燻らせず、思い出したようにマッチをコートのポケットに戻した。火の点いていない煙草を物足りなさそうに銜えているが、その半面で無関心に放置しているともいえる。

「門の前に車を止めて、張り紙をしてきた。空ならそれを見て、今は車の中だろう」

「いいんですか。この辺り、駐車違反の取締り厳しいですよ。車上荒らしなども被害を拡大していますね」

「そうかい。夜は随分人気が増すんだな、この廃れた田舎村は」

互いに意味のない会話だとは解っていた。軽口にしても誰が笑うではなく、苦笑さえも起きない。沈黙のみを生む会話を、そうと解って二人は続けていた。特に、その行為が無駄であるとも思わず。

「私はね、棺木。普通という現象が何よりも嫌いなんだよ。どんなことよりも嫌いだ。異常や怪奇とよばれる類いのものを嗜好してしまっ、という困った性格をしているらしい」

口火は何の予兆もなく切られた。朔夜は思い出すように遠くを見ながら、自身を語る。

眠たそうに虚ろな瞳は、やはり自分達が繰り広げる会話に意味が見出だせないと言っている風であり、自身が提示した話題にさえも興味がないと明確に示す。

火の点いていない煙草を口に挟んで、朔夜が淡々と続ける。

「けれどね、棺木。私は自分自身が異常に触れることを望んではないんだよ」

当たり前のように口にするそれは、言葉の前後で明らかな矛盾を作り出していた。

棺木はなにも言わない。口を閉ざして月を見るだけ。相槌は打たないし、本当に聞いているのかも解らないような某とした立ち姿。まるで、意識が別のところにあるような、脱け殻みたいな存在感。

空っぽの黒い男を、朔夜は横目にも一瞥さえせず言葉を続ける。
「どういうわけか、私は一線を越えられなくてね。怖いんだろう。未知の部分に自らを浸してしまふのは。知らないからこそ不安になり、不安は恐怖になるんだ。それに、私は今の日常を気に入ってしまったってね。手放したくないと、思っている。後戻りできないかもしれない不安が、私を臆病にさせているんだよ。だからね、私は異常を求めはしても触れようとはしなかった。誰かが異常に関わるのを傍観していることを選んだんだ」

日常。平穩。あるいはそこにある異常から目を背けているだけの、仮初の平静なのかもしれない。故に、日常なんてものはどこにもなく、異常という概念は存在しない。元より世界に存在している異常から目を背け、人は認識上の日常を生きる。その在り方こそが、既に異常。

朱空朔夜は、その異常を見つけ出し、けれど傍観に徹する生き方を選んできた。

「だけどね、一つだけ例外があるとするとするなら、それはお前なんだよ。お前にだけは、私は自ら関わっていた。お前の存在を異常と認めておきながら、異端だと知っていながら触れた。自らを律する理を破り、禁忌を犯したんだ」

淡々と、吐き捨てるような事実の告白が続く。

火の点いていない煙草を一度口から離し、あたかも紫煙を吐き出すように息を吐き出す。

「それも、もう終わったことだがね。お前との直接的な関わりを絶つてから、私は事後処理に徹するようになってきた。異常があれば首を突っ込むが、決して当事者にはならない。私は私の世界にいながら、外界の異常を傍観してきた。そして既に終わった異常の痕跡に触れるんだ」

「事後処理、ですか」

「ここでようやく、意識を取り戻したように棺木が呟いた。

「では、今夜ここに来たのもまた、事後処理ですか」

全てを悟った風に黒い男は呟き、隣の女はなにも言わなかった。

もはや語るまでもない、と。今更互いに確認しなくとも、この邂逅の意味は通じているはずだから。共に視線を交わす必要も無く、それは必然の理として二人の間を埋める。異端、破綻としてそこにある異常と、日常の枠を抜け出さない傍観者。

「事後処理　私は、既に終わっているのですか？」

「お前が終わったのは、十年も前のことだよ。今日まで生きた実感なんてなかっただろ」

辛辣な言葉で返され、流石の棺木も苦笑する。相変わらず手厳しい言動。けれど、それも間違っていないのだから否定できない。自分は今日まで生きてきたのではなく、ただ世界に在っただけなのだから。

それは大団円を迎えた後の、既に語られる術もない物語。

エピソードは終わっていた。

けれど、棺継鏡介という物語は未だピリオドを打たれず続いている。終わった後にもなお、新たな展開などなく無意味に時間を消費しながら続いているだけの物語。酷く醜く、ある種滑稽な喜劇に似た悲劇。

「終わり続ける物語。お前は終わりに辿り着いていながら、それでも在り続けた。自らを磨耗させながら、破綻しながら続いていた。なあ、棺木。そんなことになんの意味がある？　なにを求めてお前は、世界に在り続けているんだ？」

その質問には、答えられない。

彼自身の中にもまた、確固とした回答が用意されていないから。

自分の存在意義を見失った。解らないのではない。見失ったのだ。かつて一つの信念に基づき行動した。例え禁忌であろうと、結果が破綻していようと、それだけは本当の自分から零れ出た存在だったはず。なら、その本物を否定した自分には何が残るのだろう。何も残るはずがない。だから、棺木鏡介は空っぽだった。

黒い男は答えない。ただ月を見上げて瞳を閉じる。

「妹を救う。お前は殺人の定義を肉親の救済に定めた。その為に、同じ肉親を殺す禁忌を犯した。一つの命を救うために、何十もの命を殺して。そんなことになんの意味がある。お前の妹は確かに不遇な世界に在ったかも知れない、だが彼女の世界を壊していい権利は、お前にはないんだ。それだって、解っていたんだらう？ 解っていたから、お前は自らの殺人定義を否定したんだ。否定して、破綻した。ここからは私の推測だけだね、それはお前が自らに行った断罪なんじゃないのか？ 妹の世界を壊してしまった自らに、同じ破綻を以って贖罪するという断罪だ。もっとも、それだって自己満足に過ぎないが」

十年間、思ってきたことがある。果たして自分は何かを為し得たのだろうか。

幾つもの命を殺して、自分さえも救えず全てを失った男は、何を為し得たのだろうか。

救いたかったものがある。尊く憐い、小さな小さな想い。自分はそれさえ失って、壊れてしまったのではないだろうか。不遇な妹を救う。それは欺瞞。本心は自己の救済。自らを縛る罪悪感からの開放。だが、それすらも。

「お前はさ、最後まで気付いていなかったんだよ。可笑しいだろ？ 妹を救う、それは建前で、自らを救うことが目的だった？ なら、どうして殺す必要があった。なぜ、自分や妹の世界を破綻させる必要があったんだ。結局のところ、お前は誰かを救いたかったわけじゃない。妹に負い目を感じていたわけでもない。お前はただ、寂しかっただけなんだよ、棺継鏡介」

有り得ない、塵気楼を見ている気分だった。朔夜の話聞きながら、棺木はそう思った。

空に浮かんだ月が、いつかの惨劇を想起させる。初めて言葉を交わした妹。目を合わせることなく、自分は小さな背中に向かって言葉を紡ぎ、妹は月に向かって歌うように話した。その瞬間こそが、彼にとっての終わりの瞬間。目的が、成就した瞬間だった。

「棺木、現象というのは成立することなく破綻することはない。初めから壊れている存在なんてないんだよ。皆、なんらかの形で存在の意味を果たして終わっていく。この世に在る意味を為し得てから消えていくんだ。困ったことにね、ヒトという霊長はその存在意義がなんだか解らないんだ。だから、全員が不安を抱えて生きている。闇の大手探りで、自らの意義を探している。それを見つけないことが、終わりの証だから。生まれたときから完璧な人間なんていないだろう？ 誰しも欠けている何かがある。それを見つけないで果たすまでの期間を、人間は人生と呼んでいる。」

では、可笑しいじゃないか。お前は どうして破綻したんだ、棺木？ お前が破綻している、既に終わった存在である。それはいい。そのこと自体は間違ってるなどいない。寸分の違いなく、お前は壊れている。けどね、それでは矛盾するんだよ。お前は妹を救いたかった。けれど救えなかった。でもそれは欺瞞で、本当は自分を救いたかったが……それさえも不可能だった。だとしたら、お前はまたなにも為していないんだ。結末に辿り着いていないはずだ。終わるわけがないんだ。そんな中途半端な存在は破綻しない。破綻という結末にさえ、辿り着けるはずがないんだからな」

棺木は否定しない。自分に思い当たるところはなかったが、言われてみれば確かにそんな気がしないでもない、と思ってしまう。ならば、自分は どうして壊れてしまったのか。新たな疑問が生まれる。

深層心理、意識の最も深いところまで沈みこんで、それでも思い出せない。

自分が真に求めていたものがなにであったのか、答えはきつと自身の中に在るはずなのに。否、自身の中に在るからこそ、自分では見つけることが出来ないのだ。自分の色を見つけ出せるのは、他人なのだから。

自らが為し得た結論に思い至るといふことは、即ち自らの色を知ること。

「話を変えようか。棺木、お前はどのようにして棺継の一族が本来の目的を忘れて、血の繋がりに執着するようになったと思う？」

その疑問は、自らも共通して抱いた疑問だ。その疑問があったからこそ、男は棺継を終わらせた。本来の目的を見失い、悲願の結晶を蔑ろにした一族にはそれ以上の意味がないと思っただから。

棺継の家系は世界の中心を目指した。

何代も研究を引き継ぎ、その成果を後の子孫に受け継ぐ。そうして繰り返される永い永い継承の螺旋。棺の中より受け継がれる叡智の結晶。世界の中心とは全てがあり、始まりで終わりの場所。そこを目指した。

ふと、これまでまるで思い至らなかった疑問に棺木は眉を顰める。棺継が世界の中心を求めるとは知っていた。生まれたときから体の中に流れる棺継の血が知っていたから。当然自分も同じ場所を目指す責務を負っていると、そう思っていたのだ。だからこそ、こんな疑問には思い至るはずがない。

自分達は、どうしてそんな場所を目指していたのか。

全ての始まりにして、全ての終わり。

全ての原因であり、全ての結末。

そこにはないものなどなく、なにかがあるはずもない。

……どうして、そんなところを求めたのか。人類全ての叡智の結晶。完成された人類の終着点。これからと、これまでの記録。アカシックレコードと呼ばれる概念に触れるということは、即ちそれら全てを継承するということ。だが何故。膨大過ぎる情報全てを求めていたわけではない。なんのために、自分達は中心に魅せられ取り憑かれたのか。

「言っただろ。不安は恐怖になるんだよ、棺木」

黒い男の思考を裂いて、朔夜の言葉が響く。

「お前達はただ、不安だっただけなんだよ。元より異端の一族だったお前達には、寄り添って生きていく他人がいなかった。解り合える存在がなかった。全ての存在は皆、一つだけでは安定しない。光

には影、希望には絶望、生には死。万物は対となる存在と共に支え合っている。お前達にはそれがなかった。不安は恐怖になる。ようするにね、お前達が求めたのは自分達の存在意義だったんだ。中心に至れば全てがある、だから」

「だから、私達は中心を目指した。不安を払拭し、自らが何者であるかを知る為に、ですか」

文末を横取りされて、朔夜は非難するように棺木を流し見る。

「棺継が同族の繋がりを頑なに守ってきたのも、自分達を純血と誇ってきたのも、突き詰めればその一点に収束する。寂しいから寄り添っていた。唯一自分と同じ、家族という存在同士」となると、やはり私は間違っていたのですね。解り合える唯一の存在を、自ら撥ね退けてしまったのですから」

確信を持った棺木の言葉を、しかし朔夜は首を振って否定した。

「お前にとって棺継は、既に同じものではなかっただろう。その目が何よりの証拠だ」

言われて、棺木は思い出す。

この屋敷の中を、まだ純血の棺継が闊歩していた頃のことを。あの頃の自分は、孤独を感じていたのではないか。解り合える存在が、支え合える存在がない自分は、孤立していたのではなかったか。元より、繋がってなどいなかった。

自分と同じ存在など、この屋敷にはいなかったのだから。

嗚呼そうか。と、静かに棺木は認められた。

自分はどうして棺継を滅ぼそうなどと思ったのか。妹を救う、自らを救う。そのどちらも間違いであって間違いではない。そして自らの願いは叶わなかった願いなどではなく、十年前に叶えられていた。

互いに支え合う世界。

そうだ。棺木鏡介に取つての繋がりは、同じ世界を持っていたのは

「お前にとって、本当に繋がっていたのは妹だけだったんだ。棺継

という異端の中でも、さらなる異端。お前は完全な形でなくても、存在意義は妹と同じだった。人間は不安を恐怖に置換する生き物だ。お前は怖かったんだよ、家系の中に於いて自分だけが異端であるのが」

月は、煌々と世界を照らす。

覚えている。あの夜のことを。

初めて妹と言葉を交わした。兄としてではないけれど、同じものとして。そのことは、自己の救済に他ならなかったのではないか。都合のいい考え方をすれば、自分と同じ立場であった妹の救済も果たされていたのではないか。

やっと気がついた。

棺継鏡介は救われている。見失っていたのは、その事実だった。「実に人間らしいじゃないか。寂しさを隠すために人は集団を作る。自分と同じ者を見て、自分は一人ではないと実感する。くだらないことだけだね、それが大切なことなんだよ。孤独は確かに、人を殺すのだから」

朔夜は口を閉じ、棺木も何も言わなかった。

必要なことは全て語った。既に終わった会話に未練はなく、終わりは当然のように受け入れられる。

棺木鏡介の救済は十年前に行われていた。

空っぽの男が唯一為し得た一つの結末。自己の救済。そして唯一人の妹の救済。果たしてそれが偽善や欺瞞であっても、彼自身にとっては全てだった。なにかを完成させて、結末に至った一つの物語。終わり続けた黒い男は、今、ようやくその物語にピリオドを打つ。長く、無意味な時間だったように思う。自分が求めてきた答えは、こんなにも簡単なことなのだから。簡単なのに気がつかない。簡単故に気がつかない。近過ぎるものは見失ってしまう、近過ぎるから見失ってしまう。

十年間、棺木鏡介はそのことを体現していた。

空っぽになった彼の中には、ずっと、あの夜の邂逅が残留していたのだから。

不覚にも苦笑してしまう。普段から仮面のように貼り付けている微笑とは別の、棺木自身の感情の表れ。

くすり、と零れた小さな声に朔夜が反応して振り向く。

「貴女には敵いませんね。これが、貴女の描いていた大団円なのでしょう？」

「大団円、か。違うな。お前にはバッドエンド以外用意されちゃいないよ」

努めて、二人は普段通りに言葉を交わした。

今、棺木鏡介は完全に終わったのだ。終わり続けることさえ終わり、真の終焉が彼を満たしていく中で、それでも日常を装う。看破するのは容易く、朔夜もすぐに異常に気付く。だが彼女もまた日常を装うのだ。

異常を傍観し、当事者にならざる存在。それが朱空朔夜。

棺木の異常に気付いても、敢えてそんなことを指摘する理由など、朔夜にはない。

だから彼女もまた、日常の言葉を返すのだ。そのことが、旧友への彼女なりの思い遣りだから。

「空さんと私を引き合わせたのは、この為ですか？」

「さあな。空のこともお前のことも、お前達が勝手に動き回っただけだよ」

言つて、今度こそ朔夜は煙草に火を点けた。

紫煙が夜空へ昇り、消えていく。

一度だけ肺に溜まった煙を吐き出して、それが最後。朔夜は棺木の前を横切るように屋敷の廊下を歩き始めた。その視界に僅かも旧友を入れることなく。干渉を避けるように、去っていく。

長い夜ももうじき明ける。

闇と朝日が混沌とする朱けの空が直ぐ近くまでできていた。

「朱空さん」

去つていく背中を見ず、輝きが薄れてきた月を未だ見上げながら、棺木鏡介が最後の問いを投げかける。

「世界は、どうしてこんなにも美しいのでしょうかね」

銜えた煙草を指に挟み、振り返りはしないものの立ち止まり、

「お前が汚れているからだよ。お前は、禁忌を犯しすぎた」

冷淡に、変わらぬ平坦な口調で糾弾するように朱空朔夜は言った。その罪を、これから償わなければならない。世界を壊した黒い男に、そうを告げるように。

そうしてそれが本当に最後だった。女は完全な無関心をして屋敷を離れ、男は見送りもしない。別れの言葉も、再会の約束もなく、至極当然の如く終幕を受け入れる。

多くのことを語り合った。自分の知らぬことも、自分の知ること。互いが互いに無意味な時間だと思つてはいた。けれどそれを、その瞬間に交わされる言葉の一片片でさえ、無価値だとは思つたことがない。それは未来永劫、時を越えて永遠に、互いを繋ぐ絆となりえるから。

今宵、闇の中で交わされた新たな言葉も全て、彼らにとっては何物にも変えられないのだから。綺麗なものはいつか汚れ、芸術品は時を経て風化していく。だからこそ、その一瞬の輝きを焼き付けるのだ。自らが尊んだ美しさを忘れぬように。

遠い遠い時の果て。輪廻の下に再び邂逅が赦されるのなら、次回と同じものとして、破綻する前に彼女に会いたいと思う。彼にとつてその思考は、紛れも無く本物だった。

朝焼けがもうじき空を染める。

消えてしまふような淡い月の下、いつまでも黒い男は立ち尽くした。

遠い夢を見守るように、自分の中に残った大切なものを抱き締めるように。終わりは速やかに彼の中を浸透し、一層清々しいほどに全てを溶かしていく。自分の中には何も無い。そう思っていた割に

は、消えていくものは多い。

それが、棺木鏡介だった。

長い時間の中で忘れていたことも多くある。失くしたものは数知れず。

多くの物を失くしてきた。その中に、自分自身でさえ含まれていたかもしれない。だが、不思議と悔いはない。失くした物も、壊した物も、今ではどれほどの数が解らない。解らなくとも、けれど彼が、棺木鏡介として得た物の数には遠く及ばないことは確信できた。今、散り逝く一瞬の命に誉れがあるならば、棺木鏡介にとってそれは自らが過ごした時間。

そうして。

最後に、これまで彼を支えていた原風景が　　白い少女の姿が消失した。

……

月が綺麗な晩だった。

ともすれば眩し過ぎて目を細めてしまいそうなくらい、燦然と輝く月だった。

男は何ともなしに縁側に出、その眩し過ぎる月を見上げる。

心の中は晴れ渡り、心象の空色はどこまでも青い。

穢れない夜の中には先客がいた。

不思議な雰囲気少女だった。消え入りそうな儂い姿で、夜の中
白く輝いている。

少女は男を見上げた。

男も、少女を見た。

“はじめまして”

男は微笑みながら、口にする。

十年間、言いたかったことがある。

赦されぬことだとは解っているけれど、それでも胸に抱いていた想いがある。

最期の夢の中、自身が抱えた罪もこの一瞬だけは忘れて、

“貴女の兄です”

男は口にした。

それだけで満足だというように、ゆっくりと男は目を閉じる。

もう少しだけ、白い少女を瞳に映していたいと思っただが、どうやら限界らしい。

消えそうな意識の中で、不意に誰かに触れられる。

今一度、重い瞼を開けてみれば　少女の白い手が、自分の手を握っていた。

“はじめまして”

オウム返しのように、少女が男の言葉を反復する。

左右で色の違う瞳は、惜し気もなく喜びの感情を湛えていた。

“貴方の妹です”

その言葉が、胸の中に溜まった澱みを消していく。

幻想の中で最期の時を過ごす男に、少女は晴れやかな笑顔を向ける。

“お疲れ様、お兄ちゃん”

ずっと忘れていた。

言葉では理解していながら、実感できずにいた事実。

男は少女の手を握り返す。最期の力を籠めて。

“ありがとう、来旋^{ラセン}”

自分は少女の兄であると、誇るようにその名を呼んだ。

嗚呼……本当に、本当に自分は彼女の兄でよかった。

長過ぎる旅の終わり、棺継鏡介は欣喜^{キンキ}を抱いて眠りに就いた。

……

小さい頃の、夢を見た。

凍えた月の夜。

見上げた蒼穹は翳り無く煌びやかで。

三千世界を満たす理は綺羅星の様。

小さな頃の夢は溢れんばかりの禁忌に犯されて。

いつしか何もない空白ばかりを求めていた。

見えてるものは世界の理。ずっと遠くの開闢。

見えないものは自分の心。ずっと近くの終焉。

手にした叡智は色褪せた世界。

鏡写しの心象。

幻想にも似たいつかの理想、見失ったいつかの純真。

わたしは陽が暮れてからも家に帰らず、近所の公園にいた。ぼろぼろで、酷く廃れた公園だった。遊具はどれもこれも錆付いているし、昼間だって人は寄り付かない。公園には何もなかった。否、この公園には生きているものがなかったのだ。

既に使われることがなくなった鉄の遊具たちも、空間の中央に屹立する一本の木も　ここにいるわたしでさえも。何もかも生きていない。生きた、心地がしない。

こんな世界にほとほと嫌気が差していた。

みんなが自分を偽って、薄汚れた世界に。

学校で会う同年代の子供達は割合綺麗なものだった。けれど、学校という社会の縮図は、どんな綺麗な子供達でも時を経て汚れていくという証明でもあった。わたしの周りにいる、まだ汚れていない彼ら彼女らも、いつかあんな風に汚れてしまう。

でもそれは仕方のないことなんだ。

綺麗なものはいつか汚れる。永遠の輝きなんてない。いずれは色褪せ、風化して崩れていくのだから。それが大人になるということ。それが、人として完成するということ。大切な幻想と引き換えに、夢の欠片もない現実を手に入れていくこと、それを受け入れるということが成長。

ならば、わたしは大人になりたくなかったのだろうか。

大人になって、汚れてしまうのが嫌だったのだろうか。

それも違う。

唯寂しかっただけなのかもしれない。誰かに手をとって欲しかったのかもしれない。

でもわたしには、自分と変わらないはずの友人達が穢れに見えてしまつて 自分から、触れることを拒絶していた。こんな言い方をすれば正しいと思う。わたしは、怖かつたんだ。知らないものに触るのが。その知らないものが自分を汚すのが。

だからわたしは、いつまで経つても子供のまま。

大人になる為の知識は沢山持っているのに、知識よりも大切なものを手に入れられなくて。遙瀬空は、ずっとあの日のままなんだ。

そう思うと、何だか家に帰るのがバカらしくなった。

そんなことには必要性がないみたいに思えてきた。

家に帰れば、父と母と兄がいる。

みんな、わたしのことを解っていない。わたしが抱えてる思いなんて、知りもしない。

学校の帰り道、ふと立ち寄った公園でわたしはぼんやり時間を過ごした。

錆付いたブランコに乗ってみたり、錆付いた滑り台を滑ってみたり、錆付いたシーソーを一人で揺らしてみたり。公園の前を歩いていく学生や大人や親子や恋人や 兄弟や姉妹を見送って。泣きそうになる自分にも気付かずに、黙って空を見上げた。

そして今に至る。別に何がしたかったとか、そういうのではない。思いついたからこうしていただけ。家にも帰らず、ぼんやりと世界を眺めていた。夜空には星が瞬いて、月が輝く。今頃は、みんながわたしを探しているかもしれない。でも、いい。

家への帰り道は、思い出そうとしても思い出せない。思い出しても、きつと辿ろうと思わない。そうと解って、気が付いた。わたしは帰り道を思い出せないんじゃない。思い出したくないんだ。

誰もいない公園。一人きりの世界。まるで時間が止まったみたいだった。勿論錯覚だけど。でも、本当に。

自分だけが世界から取り残されて、置いて行かれているように思えた。

思っていたのに、

“ やつと見つけた ”

そんな風に、話し掛ける声があった。

わたしは声の方を見る。そこにはわたしより一つ年上の兄がいて、白い息を吐いていた。

“ なにしてるんだよ、ほら、帰ろう ”

そういつて兄は手を差し出す。わたしはそれを一瞥し、拒絶した。人との係わり合いは避けていた。理由なんてなくて、無意識の内に。寄ってくるものは傷付けてでもはね退けた。他人と馴れ合うのに意味を見出せなかったから。それに、みんな今はわたしと変わらなくてもいつか大人になる。わたしを取り残して、違うものになる。だから先にはね退けた。

いずれみんながわたしを拒絶するのなら、先にわたしがそうして

しまえば傷付かない。彼らは、わたし一人に拒絶されても孤独じゃないから。自身の存在自体を否定されてしまうことは、ないのだから。

わたしの拒絶は兄にまで至っていた。兄だけじゃない。母親も父親も。大好きだから遠ざけた。

だって、わたしは可笑しい子供だから。

破綻して、停滞した偽者だから。

それがばれたら嫌われる。嫌われて、拒絶される。

遙瀬空は、そうやって自分の居場所を失くしていった。

わたしは世界に一人だけ。

世界にわたしは一人だけ。

ずっと変われない、変化することのない永遠の時間。

孤独なだけの、破綻した時間。

“空……？”

兄が首を傾げている。差し出した手は今もなお、わたしの手に握り返されるのを待っていた。

ぎい、と錆びた鉄の擦れる嫌な音。

見れば、空白だったわたしの隣のブランコに兄は座っていた。

それから、会話のない時間が流れる。

兄は無理矢理わたしを連れて帰ろうとしないうし、説得しようとする気配もない。呆れ果てて途方に暮れている風でもないし、何か善後策を講じている風でもない。兄は無表情に鎖を握り、時折吐き出す息を曇らせながら果てしない暗闇を眺めている。

早く帰ればいいのに、そう思うとわたしは知らず口を開いていた。

“どうして”

と。弱々しい声だった。

“どうして、帰らないの？”

じっ、と観察するように兄の横顔を見る。

ぎいぎい、ブランコの揺れる音だけがこの世の全て。冷たい風。

凍えた月。夜の世界は悉く体温を奪っていく。容赦などなく、慈悲

などなく。兄の顔を見れば、寒さを堪えているのは明らかだ。だから早く帰ればいいのに。なのに、兄は帰ろうとしない。身を裂く痛みも同じ寒さに耐えて、わたしの隣にいてくれる。

兄は　　橙弥は、いった。

“だって、空はまだ帰らないんだろ？”

当然のようにいつて、無邪気に微笑む。

橙弥の笑顔が、わたしには信じられないくらい暖かくて。その温もりがわたしに向けられているのだと解って。心の奥が、ぎゅっ、と痛む。こんな優しい温もりをわたしは拒絶していたのかと思うと、大切な物をネコソギ切り捨てていたことがとても哀しかった。

“先に、帰らないの？”

“うん。空を連れて帰らなくちゃいけないから。だから待つてるよ”

“わたし……わたし、は……”

なんとはいえいいのか解らなかった。

心を知らないゼンマイ仕掛けの人形。中身は空っぽで、空っぽなのに世界の全てが入っている。その全ての中に、遙瀬空は含まれていなくて。忘れてしまった自分自身を思い出せなくて。

人であることを忘れていた。

わたしは世界の全てを、『穢れ』と『そうでないもの』に分けて隔たりを作っていたから。万物は総じて枠の外。そうして作り上げた自分だけの世界は、空っぽで一人ぼっちの綺麗な世界。空に輝くのは綺麗星の如き禁忌。触れようと願っても届かない、尊い想い。

触れてみたい。関わってみたい。

初めてわたしはそう願った。自分が遠ざけたもの、切り捨てたものの、零してきたもの、傷つけてきたもの、壊してしまったもの、破り捨てたもの、拒絶したものの、忘却したものの、目を背けたもの、遙瀬空という存在、遙瀬橙弥という兄に、触れてみたい。

でも出来ない。

だって遠ざけたのはわたし自身だから。手を伸ばしても星には届かない。水面に映る月を救い上げても、それは余計に二つの距離を

広げるだけ。わたしが自ら離れていったものに、今はもう届かない。どうして拒絶してしまったのか。

どうしてもっと、大切な物を残しておかなかったのか。

そう思った瞬間。

“ねえ、どうしてセカイは汚いのかな”

涙と一緒に、その言葉は溢れ出した。

“……さあね。そんなこと、わからないよ”

声は質問に答えられないというよりも、そもそもお前は何を言っているのかわからない、と言っているみたいだった。それが気に入らなくて、わたしは少し口調を強くして問いかける。

“みんな、ウソツキばかり。本当のことなんて一つもないの。ねえ、どうして?”

“ううん……。ウソツキばかりとは思わないけど、でも、それは仕方ないことじゃないかな”

“どうして仕方ないの?”

“だってみんな、人には嫌われたくないから”

“違うよ”

わたしは首を振った。

ムキになって、さっきまで自分が泣いていたことなんてすっかり忘れて。

“そんなの、絶対に違う。だって、嫌われたくないからウソなんて言わないんでしょう?”

わたしの反論に、う、と痛い所を疲れたように少年は口ごもる。

本当は、少しだけ意地悪してみたくなっただけだった。

だって、わたしの言ってることはそもそも矛盾してるんだから。

でも、彼にはそんなこと解らない。

人に嫌われたくないから、嘘を吐かない。それが出来るなんて、理想だ。嘘無き平和な仲なんて幻想に過ぎない。だって、人間はみんな汚い世界に生きているんだから。それとも、汚い人間ばかりだから世界が汚いのか。誰だって心のどこかに汚い部分を持って

いる。それを隠すために嘘を吐くんだ。

それが、結果として自分を汚しているとも気づかずに。或いは、気づきながら。

負の連鎖は螺旋のように続いていく。出口のないトンネルみたいに。明けない夜みたいに。

わたしもそうだった。

だから、もしかしたら、それを否定して欲しくてこんなことを言っているのかもしれない。わたしだけは違うんだと、綺麗な誰かに言うて欲しかったのかもしれない。それこそ、幻想でしかないというのに。

それを言ってもらえれば、わたしもいつかのように、あの星達と同じ場所に帰られる気がして。

“でもさ、ウソをついてまで好きになってほしいって気持ちが一番なら、そのウソも本当のことなんじゃないのかな”

“そんなのは都合のいい理屈です”

少しだけ、歳にそぐわない口調を試してみる。

“相手を欺いて、自分を偽るなんて、それこそ偽者の自分を押し付けてるだけ”

わたし、みたいに。

橙弥は首を横に振った。

それから困ったような顔になって、考え込む。その動作があまりにも歳相応過ぎて、どこか羨ましい。汚れを知らない、純粹無垢なその瞳には確かに綺麗な理想が見えているだろうから。それがわたしには遠すぎて泣きたくなる。その感情は兄への憧憬でも、わたし自身への嘲笑でもない。名前なんて無い、どんな定義も無い、戯言みたいな一片の感情。

“なんて言うか……わからないけど、それは違うよ。好きになってほしいから、ウソをついて……それで、結果が騙すことになってしまっても……ううん……えっと、それは”

言いたいことは解らないでもない。でも、正しいのはわたしだけ

ら、橙弥は反論できずにいる。

その姿が可笑しくて、羨ましい。

自分には無いものを見ている気がして、遠い。直ぐ隣にいる一人の何でもない平凡が、ずっと眩しい。やがてとおくを見ながら橙弥が言う。数秒、ともすれば実際は数瞬の刹那。そんな途方もない間を置いて、兄は、言った。

“空はきつとキレイだから、このセカイは汚く見えるんだよ”

どうして、少年の、兄の、橙弥の言葉は。

“わたし、は……だけど”

遙瀬橙弥の言葉は、寸分狂いなく遙瀬空の心に突き刺さる。

“空は難しく考え過ぎなんだよ。だからもつと楽に考えればいい。ほら、例えばさ、星がキレイだからって、どうしてそう思うのかなんて考えないだろう？”

話が脱線してる気がしたけれど、少年にしてみれば百点満点の回答だったのだろう。

誇らし気に笑って、わたしを見る。

……そうか、このときなんだ。

橙弥は兄としてわたしに接してくれている。兄だから、妹に優しくしてくれる。彼にとってそれは当たり前のこと、その考えはこの先汚れてしまうことはない。……だからわたしは、兄を尊んだ。その、何か汚されない在り方に心を奪われた。

やっと思い出した。

遙瀬空は、兄である遙瀬橙弥が好きだった。

だけどそれはいけないこと。汚れてしまうことだったから。

そのことを……ずっと忘れていた。

綺麗なモノに汚れて欲しくなかったから、

ずっと大切にしていたい思いが在ったから、

敢えてそれを口にはせずに、箱に仕舞って鍵をした。

その箱も心の奥のずっと深いところに隠して忘却の彼方。

どこにあるかも解らないのに、

わたしは大切なそれを禁忌にして、ずっと遠くから眺めていた。

それはきつと、ずっと見えなかった心の奥。

それがきつと、探し続けた大切な宝物。

亡くしてしまった、あの日の恋慕。

それはきつとわたしの原風景。遙瀬空のはじまりの物語。おとぎ

……

「結局は、全部逃避だったんですよ」

今日も午前の授業が終わってから、わたしは屋上に来ていた。

暦がお弁当を食べようと言い出すから、それに付き合ってから。

予定よりも一時間近く遅い到着だったのだけれど、予想通り先客はそこにいてわたしを迎え入れてくれた。

「兄のことが好きだなんて、イケナイことです。わたしは遙瀬空を正当化するために、そんな大事なことを忘れて逃げていたんです」

わたしをキレイだと言ってくれた兄の言葉が、今更嘘になっしまわれないように。大好きな人の言葉を真実として保つためには、わたしにとってその感情は邪魔だったのだ。

だけどそんなの、ちよつと考えれば気が付く簡単な矛盾だ。

綺麗なモノが汚れてしまわないように、けどどうして。どうして汚れないようにしたのか。それは兄が言ってくれたから。大好きな兄が言ってくれたことだから。でもわたしにとって、綺麗であるために兄が好きだという事実はイケナイ思考で　ほら、行動が目

的を否定してる。

つまり、遙瀬空は長い間破綻していた。

「家を離れたのも、橙弥から逃げていたんですね。あのまま一緒に暮らしてたら、わたしの方がどうかしてしまうと思ったから。臆病なわたしの、身勝手な逃走でした」

「でもさ、空ちゃんは帰ってきたでしょ？」

向かい側のフェンスに凭れる、御桜先輩はにこにこ笑顔で言うてる。

なんだか、悔しいな。この人は全部初めから知ってたみたいになわたしの話を聞いて、知った風に相槌を入れてくるのだ。そんな風に対応されてしまうと、わたしが無意味に一人相撲してバカを見てたみたいじゃないか。

……そう、本当に悔しいのは、それが比喩でなくて事実だということなのだ。

御桜先輩はわたしの考えなんてお見通し、と言わんばかりの笑顔。いつも、底知れない無表情の笑みを湛えている。彼女自身が意識してそれをしているのか、或いは無意識の産物なのか。どちらにしろ、他人を惹き付ける彼女の笑顔は羨ましくあつた。わたしは、気を抜けば他人を遠ざけてしまうから。

だけどわたしだつて知ってる。

御桜先輩の笑顔は人を寄せ付けるけど、決して自分の中には踏み込ませない境界的役割をしているのだと。

「帰ってきた……か。ええ、そうですね。だけどそれだつて中途半端なんですよ。自分の気持ちをお忘れたい為に家を出たのに、他人行儀にして、これなら少しくらい兄妹らしくないかな。なんて思ってたんですから。ほんとう、バカみたいですよ」

中学三年間、実家を離れて過ごした。それがわたしの逃避の最たる行為だったのだけれど、一緒にいれば壊れてしまう、と思つてたはずがいつしか逆になつていたのだ。一緒にいないと壊れてしまう。長い間……三年間別の家で生活してただけで、わたしの中から兄

の姿が消えていく気がして、それが耐えられなかった。

近くにいれば遠ざけるのに、離れれば近くにあることを望む。

破綻した在り方を続けてきたわたしは、受け入れるのか突き放すのかを選択出来ずにいただけ。自分の心が見えない、なんていうのも自分への言い訳に過ぎないと気付いた。

御桜先輩はそのことを知っていた。わたしでさえ気付いていない、わたしの虚言を看破していた。

だから廊下で会ったときに、あんなことを言ってきたんだ。本当、悔しいけど全部正しい。わたしが自身を騙しているということは、兄を騙していることと同義だから。遙瀬空が遙瀬橙弥を好きであるという事実は間違いないんだから。

「御桜先輩は……わたしが嘘を吐いてるっていつてましたよね」
冬の風が吹いていく。

厚い雲が張り詰めた灰色の空は、だけど今日ばかりはわたしと心を共有していないらしい。

御桜先輩は笑顔で頷く。そんなこと、今更答えるまでもないというように。

「でも、それって悪いことなんですか？」

自分でもどうかしてると思うけど、わたしは彼女にそれを訊かすにはいられなかった。

昔のことを思い出したからか、自分の中で答えを出した疑問なのに他人の意見を求めたくなつて。こんなことは初めてだけどわたしは自分の回答が正しいかどうか、自信がなかったのだ。

「うーん……悪いことだね。なんにしても、人に嘘を吐くのはいけないよ」

「そうですね」

閻魔様に舌を抜かれるよー、なんて軽口を御桜先輩は返してくる。閻魔様は別として、わたしも同じ意見だ。やはり嘘はよくない。今度のことでわたしは痛感した。誰に対しても、勿論自分に対しても嘘を吐くということはその存在を否定することだから。

「だからね」

御桜先輩は空を見上げている。わたしではなく、曇っている方の空。

風に流される髪を押さえながら、憂愁の色を帯びた横顔が遠くを見詰めていた。この人にしては珍しく、言葉に区切りを作って焦らすように間を置く。心なし、次の句が口に出しにくいみたいに見えるた。

或いは。

彼女本人が、それを望んでいないように。

吹き始めた風が大人しくなってから、御桜先輩は言った。

「だからね、空ちゃん。一番悪いのはわたしなんだよ」

「御桜、先輩？」

それは、憂いを含んだ笑顔だった。

……憂いを含んだ、笑顔の形をした無表情だった。

泣きそうな瞳を無理矢理笑わせて、自身の内に秘めた感情を塞ぎこむように。御桜先輩は努めて平静に、いつもの笑顔を崩すことはなかった。それが、自分を騙すということなのに。彼女は、それを知っているはずなのに……。

「えっと……」

なんていうか、その、どうしていいか解らない。

御桜先輩が黙り込んでしまっただけ、わたしはどうフォローしているものか解らないのだ。こんな苦しいだけの重たい空気、背負いたくない。というか、わたしでは手に負えない。

それでも、

わたしは言った。

これから先、揺ぎ無い誓いを宣言するように。

いつかのように、もう二度と見失ってしまわないように。

遙瀬空が大切に秘めながら否定し続けた、その想いを。

「わたしは、負けませんよ、先輩」

わたしの言葉は、告白に似た、宣戦布告。

御桜流深はわたしにとって、最大の恋敵になったのだから。

「橙弥は渡しませんよ。わたし、もう自分に嘘を吐くのは止めたんだから」

御桜先輩は、わたしの宣戦布告にいつもの笑みで返事をしてきた。うん、知ってるよ。彼女の笑顔は、そう語っているようで。

同時に、わたしには絶対に負けないという確信みたいな自信みたいなものがあって、ああ、もう……癪に障る。

改めて認識するのだ。遙瀬空にとって、御桜流深は明確な敵だと憎らしい、恨めしい、腹立たしい、恋敵。

きつ、とわたしは御桜先輩を睨み返す。自分の言葉を撤回する気は全くない。

何度でもいう。わたしは絶対に負けない。

遙瀬橙弥が、遙瀬空の兄だったからこそ、わたしは橙弥が好きだった。その気持ちは禁忌だとも、わたしが否定してきたものだとも理解した上で受け止める。だってそれは、どんなに否定しても逃げても、紛れもない真実だから。

そんな意志を籠めて わたしも、御桜先輩に微笑み返す。

「それでは失礼します、御桜先輩」
ぺこり、と一礼する。

どうしてだろう。忌々しい仇敵に宣戦布告をしたはずなのに、わたしの頬は緩みっぱなしだ。それを隠すためにお辞儀してみたけれど、後十分は顔を上げられそうにない。

治まり切らない頬の緩みをいつまでも隠しているわけにはいかず、仕方ないので顔を上げる。御桜先輩は、それを察しているのかフェンスの向こう側を眺めていた。

広い空。灰色の雲。

彼女が見ているのはどこか解らないし、それはわたしには関係のないことだ。

突き詰めれば遙瀬空と御桜流深が初めて言葉を交わしてから、まだ二日しか経過していない。そんな短い時間の間で築かれた関係な

んで高が知れているだろう。これから先、わたし達がまた会話をすることがあるかは解らない。

解らないけれど、わたしはその背中に再会を密かに誓う。

今度会うときは、この関係に決着が着いた時。わたしが橙弥を我が物にしてからだ。

泣き出しそうな空模様の下、やっぱりわたしは笑っていた。本当に、自分でも何がそんなに嬉しいのかまるで解らない。だけど確かなことは、今までわたしを縛っていたシガラミはもうない。自分が禁忌にしていた想いだって、今なら胸を張って間違っていないといえる。

どれだけ歪な形でも、わたしは兄である橙弥が好きだ。

さてと。と息を吐く。

背を向けた屋上を一度も振り返らず、立ち止まらずに階段を下りていく。足取りはだんだん早くなっていった、気がつけばわたしは走り出していた。

さあ今日も、国語科準備室に行こう。

大好きな人たちに会う為に。

(禁忌破綻の空色ノ了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3943f/>

ガールズカルテット

2010年10月8日11時55分発行